

珍談と獵奇の型破リ雑誌

奇譚クラブ

艶姿五人女

淫雨夜譚

五人の売笑婦
唄祭次郎吉囃子

奇譚クラブ

八月號

奇譚クラブ 八月號

定價 九十円

昭和二十五年十月五日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十六年一月廿四日日本国有鉄道特約掛承認第一八八七号
昭和二十六年六月三十日印刷 昭和二十六年七月一日発行 (第五卷第七号)

全裸の女はかくし
官能をくすぐる
裸女の群像 !!



「悩ましきものか!」

★大阪・どうとんぼり★

道 劇

怪奇探偵小説 獣獄 (三重子の手記) 杉山清詩 32

現代 妖奇犯罪 五人の賣笑婦 月屋静史 36

世相諷刺 わが名はイカレボンチ 能登一三 40

艶色 ムア金さん 悠情す 島勝久 44

義賊奇譚 唄祭次郎吉囃子 早乙女 兄 48

讀者挑戦 私とお相撲をとらないか 北海千珠子 58

變態奇譚 山莊の處女妻 愛山久 60

濃艶小説 月のいたづら 春山燦子 64

海上奇談 密輸船を襲う女海賊 北川春男 68

淫靡流轉夢を追う女 有澤亞郎 76

愛慾實話 エデンの開 水流舟二郎 79

女心の愛情のトリック 矢代文世 82

秘 艶姿五人女 淫雨夜譚 乙宮多己雄 志乃田よしろう画 86

(夜之助好色旅日記) 第一話 處女航海 (陰氣な女) 90

第二話 處女人形 (暢氣な女) 92

第三話 半處女假裝 (勝氣な女) 94

女小説 聞わが繪姿を妬く女 土俵四股平 97

變態小説 秘めたる炎 松井領子 100

新傑作 男性ストリップ 中村米蔵 明石三平画 106

動物朝鮮に咲いた國際愛物語 日本人と朝鮮人 木之下白蘭 美濃村見画 108

不慮症の女が通つた愛慾の半生 この病氣の名は言えない 大西三枝子 113

獣獄



杉山清詩

オフセツト 裸にされた娘たち (獣 獄)
色刷口繪 セリ賣りされる裸女 (唄祭次郎吉 子)
オフセツト 海に投げ込まれる女 (密輸船を襲 う女海賊)
色刷口繪 裸婦競艶 ヌード・アラベスク
グラビヤ 女護島ハダカ天國の巻 (柔肌の熱き血汐)
色刷娛樂室 エロニヤ人生同人合作
艶笑百貨店
遊閑奇譚新聞
眠閑奇譚放送

裸にされた、お美乃の姿が、
間もなく女賣りの台の上に乗せら
れた。一瞬、場内は喧ましくなつて、
太り肉のお美乃の美しい裸形に

男達の視線が吸い寄せられた
様に集まつた。「三十兩。」

先づひと聲が、何處からか飛んだ。

「三十五兩！」老達の博勢が、
片手を上げる。「四十兩！」

甲府の貸元が、背伸びをして叫んだ。
「四十五兩だッ！」「五十兩！」

「六十兩！」「七十兩！」お美乃は、
ぐつたりとして動かない。

輝くばかりの裸身が男の情慾を
そゝつて、我こそ此の天女を

せり落さんものと、淫らな眼が
ギラ／＼と血走しつてゐるのだつた。

「美乃お美乃の運命は、
さてどうなるか!!」
「喉祭次郎吉噺子」(四十六頁)
をお読み下さい

喉祭次郎吉噺子

早乙女晃 作
しゆん 画



密輸船を龍衣う
女海賊

女海賊上海マキはひらりと、ベストをすりぬけて
すばやくテーブルに駆け寄り、ピストルをしつ
かりにぎりしめていた。

「水手、いゝ、貴様おし。」

はつと我に歸つた甚吉の顔は無念と顔額にみに
く、ゆがんだ。

「ち、畜生！ またやられたか」

たつた今まで自分の思い通りになる者たつたマ
キの肉体が甚吉の眼前で勝ち誇つたようにあざ
笑っているのだ。



ヌード・アラベスク

柔肌の熱き血汐





脱ぎすて、闇に
まようびー

わが肌
の
狂ってあわれ
君を恋いつい



君を
想
いて



すくなく髪を
さすれば
ことごとく

もしも
いかに
あな
を
待つ
夜は



昨夜の
夢にあら
ひとりうつと
きにもの



山のやま
みづうみの
岸ににすむ
花の精

銀の
うろこは
水のなま
こせの夢
みづのなま



身を焼くま
のきもなま
さかたの
神に
さけよ
と





玉の
 しづくは
 きさく
 銀のうろこも
 ささく
 と



おたの
 願いかたえ
 と
 こせの唄う
 恋の
 うた

どれたさかなは
 ちいさくも
 こせの唄うは
 かぎり
 あり



やさしい声に
 みさくやれ
 水面に浮かぶ
 影ひとつ





本誌字真部特写

存在しないページ

※落丁や切抜きらしき痕跡が無い為、
占領軍の検閲により削除された可能性も



艶色竹矢百貨店

夏期大売出し



五階催物會場

こゝは五階各種催物會場でございます。本日は特に夏期納涼をかねまして、一見肌を露わにします水中裸女の競泳を御覧に入れます。お買物にお疲れの皆さま、どうぞドシ／＼とおいで下さいませ、只今、現地そのまゝの岩を取り入れました周囲百米の大水槽の中に、裸女競泳の興演でございます。

食堂

強精料理週間

献立

- 若夫婦用 若夫婦三度のおかずも生卵
- 老いらくの恋用 老いらくの恋用 牛と豚の臓物、特に生殖器のゴタ煮
- 倦怠期の夫婦用 倦怠期の夫婦用 箱の酢漬け。ビリリとして眼がさめます
- 恋人のアベック用 恋人のアベック用 栗のキントン。甘くて困ります

ピヤホール

「イヤー旨いね 暑い時に冷えたビールをキユーツといくのは、たまらない味だヨ ごちそうさま」
「いや／＼こちらこそ 御馳走様キミが払つて呉れるんだろ」
「アレツ ボクは キミが払つて呉れるんだと思つていたんだぜ」
「オイ／＼ボクは 財布を持つて来なかつたんだヨ……」
「ウヘーッ ボクも金は一文も持つてないんだ キミをあてにしてたんだヨ ギョギョッ！」

エレベーター・ガール

ミナサマ、お待たせいたしました。こゝは三階でございます。興服洋服洋品紳士用品売場でございます。只今、特に芸術的脱衣術と題しまして、美人マネキン嬢出演の上、お買求め頂きました当店製の洋服による脱衣術の興演を行つております。

マネキン・ガール

皆さん！(アラ、そんなに押しちや、駄目よ／＼) 芸術的脱衣術という事は、苟くも女性である限り、必ず或る程度の研究と修練を積み重ねねばならぬと存じます。
(拍手。パチ／＼／＼／＼)
女が一旦ハダカになつた以上は女王になるか、奴隷になるかのセト際であります。従つて女性にとりまして脱衣といふことは、極めて大切なことであります。
所で今此処にお集りの紳士淑女方の前で、特に今回だけ、芸術的脱衣術宣伝のため、これから私があらゆるポーズにつきまして、一々詳しく興演してござんにいます。ア、皆様、そんなに押しちや駄目です。アッ、静かに、舞台がこわれますッ。

薬品化粧品

- ◎自費用膏酸カリ……一瓶百円 (一人用、二人用、一家心中用 各種)
- ◎男イラズ……一瓶二百円 (瓶の内容は何も入つて居りません。容器の型がちよつと何かに似ているだけで……瓶の中へはぬるま湯を入れて観くことになつています)
- ◎隆鼻おしろい……一個百円 (白色の粉末でございます。これを熱い湯で練つて敷きまして低い鼻の上へ塗つて下さい鼻が高くなることうけあい。石膏が混ざっておりますから……その上ヘドーラン化粧を致します)
- ◎バタフライ絆創膏……十円 (三角型になつて居りまして、貞操保全にも役立ちます)
- ◎私生児堂クリーム……五十円 (春情催淫に快適、えへへ……)
- ◎否膠薬 シラーム……百円 (ヒニン薬にも種類がございます。本品は男性用です。愛人の腹がふくれて来た時に本品を御使用下さい)

御入口



エロニヤ人生同人啓白

毎度お引立てにあずかりまして有難う御座います。
エロニヤ艶笑百貨店の夏期大売出しでございます。珍妙奇妙な皆様お好みの品をとりそろえて、お買上げをお待ち申して居りますから、どうか御遠慮なく店内にお入り下さいませ。
ひやかし、万引き大歓迎でございます。尚皆様お好みの品がございます。何卒エロニヤ同人へ御教示下さいませれば次回お越しの折までにとりそろえて御満足のいく様に致すつもりでございます。

夏の用品

夏は招く海へ山へ。ハイキングスポーツ、家庭用品等夏の用品を取揃えてお待ち申しております。

◎ハダカパンツ

透明ナイロン製、御婦人の海岸散歩用として最適。腰線美、股線美をクマなく露出し、脚方を誘惑すること確実。最新刺繍品

◎寝室スダレ

夏の夜は蒸し暑くて寝苦しいものですが、このスダレをかけて寝れば外から絶対に暖れることなしに風がよく通ります。特大ダブルベット用一組二百円。



◎冷蔵庫（氷不用）

夏といえば冷蔵庫がつきものですが、今年は特に氷が高いようです。今年から氷不用のこの代用冷蔵庫をおすすめ致します。紐と出包丁の組合せでございます。紐から、この包丁を紐で頭の上に釣つて下さい。

放送室

御用は遠慮なくお申付け下さい

お呼び出しを申し上げます。色町の両手に花夫さん。奥さまと二号さんのお待ちですから、屋上の入口までおいで下さい。

写真室

お写しのお方は正面受付へお申込下さい。

◎アベック・ポートレート
アベックのお相手のない方には当室に備え付けの美男美女がお待ちしております。

二人三枚一組 六百円

◎ヌード写真を記念に！

お嬢さん方の若い時代の思い出の記念にどうぞ裸な裸身をカメラに映し出して下さい。特に無料サービス致します。

洋家具賣場

未亡人用ダブルベット

お買い求めになりました御方様には宣伝中当店専門係員が毎夜夢上致しまして、ベットの具合を調べさせて戴く事になつております。

顔面矯正鏡台

如何なる不美人、如何なるミニクマ顔御でも、此の鏡を見られる時は、イトモ美しき美男美女に矯正されて見ると云う嬉しい鏡でございます。

アベック用腰椅子

紐を引けばカーテンが下る様になつております。寝台にも併用出来る什丹に作られています。



おもちゃはおもちゃでも大人のおもちゃですから、お子達は御遠慮致します。
◎ゴムサック風船……一個十円
伸縮自由でございまして、風船

だからと云つて何も空気ばかりを入れなければならぬ訳ではございせん、お父ちゃんやお兄ちゃんも夜お遊びになるのに好適でございます



◎姉妹用（ショウギベン）……一晩千円
二人だけで遊ぶゲームでございます

◎ゴム製裸女人形……三百円より
屈伸自在でございまして、如何なる姿態でも思うがままになると思ふようになります。少しお高くなりますが等身大のものもございます。各部分は本物そつくりに出てまいりますから、独身の御方様には特に大評判でございます。

◎小型花電車……百円より種々
おなじみの花電車でございます

◎腹太鼓……二百円
朝な午なには、特によく鳴るので喜ばれております。太鼓のバチは四方各自が一本宛お持ちになつて居りますので販売致して居りません。

家庭用品賣場

◎夜鍋……五十円より
（新婚家庭には是非一つお求め下さいませ）

◎膝まくら……二百円

（むつちりとした弾力のある柔らかなさは腰方用として最適でございます）

◎手まくら……二十円より

（此の枕は夏の暑簾用によろしゆうございます。至極軽便）

◎かわかけ……十円より

（素焼のかわかけはいかがですか、人に密り好き嫌いはありませんが……）

◎茶臼……五百円より

（餅つきにはなくてはならぬものでございまして、お正月に限らず、常にお用いになる様おすめ致します……）

榮林本特売所

「四疊半裏の上張り」
下張りは省略せられたので今度は上の方を張ろうと云うエロ小説

「肉ふとん」
柔らかなさとあたふかさは之に勝るものが無い事を証明してある

「女體むべからず夜の物語」
女性に親むと夜になつてお化けにうなされる程コワイ小説

「秘蔵指南」
まあちやんのインチキは二本の指でかくの如く行へしと教えてある得難き迷本

「チャタレイ夫人の恋人」
評判のチャタレイ夫人はとてめ変人であつたと云う事が書かれてある

「女の一生」
慾深い女が計つた一ショウの米はこんなにも量が少なかったと云う話

「エロさんげおたゞ行状記」
有迷な一代女の手記で、切り取つたお手をハトロ紙に包み、持ち歩いて警官に見つかつた時のスリルに満ちたものがたり。

「ヨクバリイ夫人」
慾腹りのマダムが養子である夫を離縁して、モツペラ、ソーセージばかりを可愛がる愛慾奇譚で、究切れそうですからお早くお求め下さい

「赤と白」
源氏と家のおはなし、義経と源氏を旗印にして戦争したと云う昔々の歴史小説

「あらず、あまとりあす」
あらつ、のみとつてえ、の姉妹篇で、人參探検と共に最近なかなか売れ出した本

「におえるその」
一分一話物語、だから良きところまで直ぐおしまいとなる笑い絵が入つたマンガ本。

「カアラストオラ」
印度の神様が御相撲を取る話が四十八手にわけて説明してある

「あながらんが」
これは前記と同じく印度の仏様の四十八手のものがたり、以上の本は定価の十倍となつて居りますから御承知願います。

委託品賣場

○老嬢、正真正銘の処女、年齢四十才迄の男子に委託いたしましたし
○老妻、茶舌友達の老いらくの恋を語るに過ぎた年齢六十才迄の男子に委託いたしましたし。

生鮮食料品

新鮮と珍味で鳴っております当店自慢の生鮮食料品売場でございませう。どうか御買求めの程を
 ◎生鮮（いきはまぐり）一合 五拾円
 当店独特のイキのよい又派手な生鮮で他店では真似の出来ない生きた動く蛤です。夜食に適します。殿方は特に指を鳴まれないように御注意下さい。



◎へその甘煮
 カミナリ屋の美人のへその甘煮でございませう。精力旺盛剤として珍重されます。

◎章魚の足（たこのあし）一本 六拾円
 吸盤の強いものばかりを選んであります。章魚ッポといつて男子専用食品でございませう。

◎まぐろのサシミ 一皿 二百円
 今夜の夕食用として真赤な血の色をしたまぐろのサシミをおすめいたします。

古書籍即賣會

珍書 艶本

本日は好事家の皆さま方の度求めによりまして、江戸時代の艶本珍本を網羅して全室を飾りました。戦災により散失いたしました鳥只今陳列致してありますものは皆珍重なるものばかりであります。

左記にその目録を披露します。

◎蘭中談書毛 吾妻男一丁作

一九の東海道腰栗毛に模した艶本で表紙本文共そっくりである。

◎現胆色遊懷男 枕本五冊

好色本として内容のひどいもの

◎好色玉手箱 半紙本三冊

十二曲色合戦 小判十二枚錦絵

◎色道取組十二番 湖龍齋画

◎春情指人形 半紙彩色三冊

◎四十八手後朝草紙 四漢淫乱

著 説、圖共に拙劣なれど画は細密なり

◎清少納言犬枕 一名ふでかくし

◎長枕褥合戦 半紙本一冊

◎檀の浦夜戦志 仮名交り文

◎男色染衣 四冊 鳥居形兵衛画

御婦人雑誌

◎ミルクバンド
 ストリップパーが舞合に当てゝ出てくるヤツです。おカマさんなんかにも必需品です。一個 百円

◎カミナリバンド
 夏の夕方おへそをとられないために当てるヤツです。一個八十円

◎ピクトリヤバンド
 これは皆さま先刻御承知の月一回用いるアレです。一個二百円

お菓子売場

本デパート特製お菓子売場でございませう。他の百貨店には絶対に売って居りません品ですから是非本店でお買い上げの程を！
 ◎洋菓子……（御贈答品として便利でございます）
 ◎高利菓子……（喰べ過ぎると腹を下しますから、程々がよろしい）

◎パンパン……（おいしいパンでございませう。一級品から四級品まで取りそろえてございませう）

◎公金煎餅……（つまみ喰いによろしゅうございませう）

◎饅頭……（色よくこんがり焼けて居りますから、饅頭や傷ぐすりの用意は不要です）

◎尻餅……（娘さん用、年増用、奥様用等、いろいろおいしいのを取そろえてございませう、ズロースは必ず併用のこと、バナナの皮との喰い合わせの結果は責任は持てません）

◎おやじのすね……（全国的に有名な当地方の逸集でございませう。道楽息子様方に御ひいき願ひて居ります）



◎其の他、不ケーキ、金ヘンケーキ、ヤラズのアメ等もございませう。

強力美顔水販賣所

これは此の度ベルシヤより渡来致しましたベルシヤ猫のおシツから特殊の化学操作によりまして抽出いたしました貴重な強力美顔液でございませう。

これをこのように、ホンのチョッピリ手のヒラへたらしまして、おデコからお鼻、頬から顎へかけてマンペンなくスリ込んで頂きま

すと、どんなアバタ面の醜いお方でも忽ちミチガエル様に美人になるのでございませう。



今迄この美顔水を用いまして美人にならなかつたお方は只の一人もございませう。論より証提、どうか御遠慮なく、この段の上へお立ち下さい。私が早速、立ち処に美人にして差し上げます。

只此の液の欠点は少々臭気が強

いこととございませうが、これも美人になるためには御率抱下さつて

あとは十分水でお洗ひ下させば結構でございませう。

一瓶はたゞの五千円、美人になるためには至つてお安いものでございませう。

御休憩室傳言板

◎いくら待つても、お母ちゃん戻つて来ないから、先に帰る。迷児にならぬ様にしなさい。坊や
 ◎A子さん、ボク、もう待てない先にゆく……あゝ B助

◎五階で女のハダカを見てゐる内に、はぐれてしまつた。僕を探すのなら五階へ来ておくれ

オバアサンへ 僕より

◎好男さん、もう便所から出て来るかと思つて待つてゐるのに一時間にもなるから、あたしつま

んない。帰るワ、あたしより便所の方が好きなんでシヨ、ブン

マイ子

W. C.

便所のらくがき

◎ボクト ナカコク タイムスメサン コンパ

ン コーエンデマテイル カラキテクレ

◎皆さん こんな所へらくがきしてはいけません

◎私の変人はどうしてゐるのか知らいづも持つ

てゐるのにも来てくれない、あたしひとりですまないワ

◎この絵を描いた奴は誰だ、あるべきところにあるべきものが描いてないぞよ、気をつけろ

◎×××××したら×××××で×××××が×××××だ。

◎×××××したら×××××で×××××が×××××だ。

◎×××××したら×××××で×××××が×××××だ。

◎×××××したら×××××で×××××が×××××だ。

◎×××××したら×××××で×××××が×××××だ。

◎×××××したら×××××で×××××が×××××だ。

全裸でたわむれる

十数名の男女の群

某海水浴場の珍事件

各地に海水浴場が開設される頃ともなるとワイセツ犯がチヨウリヨウするので国警ではその取締りに大忙しなつてゐたところ、去る一日関西某海水浴場に於て、全裸体の男女十数名が公衆の面前でたわむれているのを発見した。即刻公然ワイセツ罪容で引致し取調べたところ、彼女等は透明ナイロン製品株式会社は宣伝部員で同社製品の宣伝を兼ねて海水浴に来ていたものと判明した、係官がよくよく見るとなるほど、透明ナイロン海水着を各自が着けでいる事が判つたので釈放された。

ナイロン製品

大流行か？

ストリップ以上の評判

ナイロン海水着が流行しはじめて当局の頭痛の種になつてゐる矢先、大阪心斎橋筋をナイルンで仕立てた洋装で漫歩する女性が目立つて増えて来たので通行人の目を引いてゐる、シユミーズは勿論ブラジヤア、ズロースまでナイロン製品なので見た眼にも涼しく男性側から見れば下手なス

トリップ以上だと大評判になつてゐる。市内のストリップ常設館では此の種の製品が流行すれば營業上大問題なので頭をひねつ



ているが今のところ対抗策は浮ばない模様である。

世論調査

講和会議を目前に控えて、国民全体の、あなたは何党を支持し愛しますか？との世論調査を本社世論調査部で行つた結果次の如き表が得られたこれはとりもなおさず、現内閣を支持するか否かの答になるわけである。ところが意外なる結果が現れて当局を驚かせてゐる、即ち

- 一、砂党(糖) 六三%
 - 二、血党(統) 一〇%
 - 三、地下運党(動) 一三%
 - 四、五重の党(塔) 二%
 - 五、チヨコレー党 二%
- 以上の如き結果であるが其の他の二〇%の中にはチヨイトチヨイ党やカリン党を支持する者もあり、供米党(塔)や慰霊党(塔)は全然支持する者が影をひそめているのは注目される。

街で拾つたニュース

(1) 最近市場から竹製品が全部姿を消してしまつて、日常の生活に異変を来しているの、業者代表のK氏に尋ねた所、来るべき竹ヘン景氣に備えて一部資本家が原料の竹を大量買占めてゐるのだそうである

とゆゑのが、講和会議終了後日本再武装が許され、ば、再び日本人一人々々に竹ヤリが必要となつてくる為、莫大

なる利益を見越しての買占めである由。

(2)

A区Y町では毎夜ラジオの音楽の時間になると、各家庭で異様な賑かさに湧きたつ氣配があるのだ、探訪した所、揃いも揃つて主人が鼻下長氏であり、毎日毎夜ストリップショウやらナイトクラブ、さくは秘密映画全ストショウとあくなき獵奇を追つて、その

費用の為破産に瀕している家庭ばかりで、何とか主人を家に引止める策をと協議した夫人達が、自分達は勿論娘子供達に至るまで毎夜全ストを行つて旦那様を慰めてゐるのであるとわかつた。



(3) 本年度の所得税日本一になつた金野成男氏の職業が、ゴム印刷製造業であるのに第六感のピンとが合わなかつた記者は、早速探訪と出かけた。「所得税日本一おめでとうございます。失礼ですがゴムの印刷製造つてそんなに儲かるものでですか？」

「矢張り頭ですね、戦後の犯罪の統計が物凄く上つてゐるでしょう、其処へ目をつけました」「ほう、何かピンと来ましたか」「来ましたとも、ゴム印でニセの指紋を作つて犯罪者に高く売付けたんですよ、ワッハッハハ」

(4)

熱海の某料亭で時ならぬ一大仏式供養会が開催された。各寺院の僧侶五十名が招聘されていとも厳かに、しめやかにとゆゑ形容は全く当散らぬ位の華美な喧嘩を極めた。一体何事ならんと記者は真相を極むべく急遽その料亭へ駆けつけて様子を伺うと、何と有名文士のめんくが神妙に念仏を唱えてゐるではないか暫くして行事が終ると後は飲めや歌えの大乱舞騒ぎ、そのうち文士のめんく着物を脱ぎシャツを脱ぎ、最後のものでストリップショウ、狂気の沙汰としか思えず、その中の親しい一人に聞いてみると、之なん肉作家連盟の肉体供養会と判明した。肉体もので備けた作家ばかりで女性の肉体の露に感謝の供養をし、亦自らも真裸体となつて今後の繁栄を祈念する会であつた

(5)

素人天狗俳句川柳会といつた会が何処の町にも一つや二つは有るとまで言われ、このように俳句や川柳が我々の日常生活に潤いを与えてゐることは結構なことである。N町の天狗連の例会に連つた記者は、当日の傑作を二三御披露するの無駄ではなからうと思ふ。

バスコンペン

奥さまは
夜お使い
こゝろよい書味

國鐵週末サービス
アベック列車

(土曜日午後5時ヨリ)
(日曜日午後11時マデ)

車中のキツス抱擁大歓迎
最も濃厚なるシーンを展開した組には賞金贈呈いたします。

二人連れの方へ限り
無料にて運搬します

ストリップミン

登録 商標

アメリカへ行く特級指定品

局放送大奇眼

エロニヤ人生同々合作

風流太郎 明石三平
根来孝太郎 伊勢みどり

【七・〇〇】朝のニュース

朝のニュースを申し上げます。
桜木町事件以後国鉄で鋭意研究中
であつた不燃焼客車がこのほど出
来上りました。

これは関係各大臣特別設計にな
る国鉄御自慢のもので、該客車は
四方セメント製タイル張りを見る
からにスマートなものであります
当局談として、コンクリート製で
あるから絶対火災無焦げ事件は起
りませんが重量が約五倍になりま
すので、脱線、転覆、スピード等
の点に於ては保証の限りではあり
ませんとの事であります。次のニ
ュース、地方議会に当選した新職
員諸氏のその後の動向をお伝え致
します。諸氏は今度の選挙に費消
した私財を取り返さんものと取
引等により大わらわとなつてい
るので地方議会は空席ばかり、そ
のため風通しがよく涼しくスミ
スに議事が進行して居ります。こ
れでニュースを終わります。

【七・四五】朝の訪問

今朝は東京名物、銀座センターは
東京温泉に働くミス・トル子さんを
訪問致しました。

「もう、大分お馴れになつたでしょ
う。お客様は大抵男の方ですか」
「え、百人中九十五人までは男の方
よ」

「すると後の五人の女の方は？」
「旦那様の浮気を監視に来られる方
ですわ」

「なるほどね。それで男の人の中に
はあなたのその白魚のような指で、
全身マッサージをされつゝ思わず変
な気持ちになる人もあるでしょうね」
「そうね……ウアフ……まあね」



「じらさないで具体的な現象を、思
いきつて言つて下さい」
「あら、フッフ……」

「肉体の一部に何か、変化の起るこ
とを見ることもあるでしょうね」
「そりやありますわ。だつて欲情
(浴場)ですもの！」

【八・〇〇】聴取者文藝

短歌入選作品
たわむれと思ふ数字のそのあまり
重きに泣きぬ更正決定

東京の宮城広場の青芝に

われ抱き濡れて男とたわむる
やわ肌の厚き乳房を放り出し
ストリッパと荒蕪く君

俳句入選作品

夏草やつはものどもの後のゴム
古池や金へん漁る泥の音
午睡時夢はやわ肌かけめぐる

川柳入選作品

アベックで
行くとも見えるスリ婦警
高いものエンバイヤより税の額
陣痛にオ、ミステイク八人目

【一〇・〇〇】料理の時間

「本日はコープン性愛情促進料理の
家庭料理法について申し上げます。先
づ結婚適齢期の娘、或は豊満なる戦
争未亡人の八百屋さんで、松茸五本
と人参三本をお買いになり、海産問
屋で大きな蛤五個もついでに求めま
す。松茸と蛤はそのまゝ、人参は小
さく切刻んで、ミルク一合と共に、
砂糖の代りには塊糖の或は旦那様の



恋愛時代のラヴレターを、こまかく
切つて大鍋に入れ、情熱の火で約三
十分煮ます。ラヴレターは非常に甘
味が出ますから、配給の砂糖はヤミ
屋さんへお預りになるのが、家庭経

済のヤリクリ夫人のA級選手でござ
います。さて味がついて煮えました
ら、松茸は奥様、蛤は旦那様がお食
べになることです。これは非常なホ
ルモン料理でございます、高橋お
でん、小平製菓さんの常に愛食致し
ましたものでございます。料理の時
間を終ります」

カンカンカン、カーン！(鐘にウ
ラミが数々ござるののど自慢ではあ
りません。正午の時報でした。)

【一二・〇〇】ニュース

講和会議を間近に控えて、政府で
は色々祝賀プランがたつておりま
すが、その中の二三を申し上げます
先づトツプ超特大ニュースとして、
講和会議当日より向う一か年間、凡
ゆる税金と名のつくものは全部免除
することになります。但し翌年三倍
の徴税を行うと目下考慮中だそうで
す。その二は、全国の各家庭へ経済
状態に応じて、千円札を十枚単位で
無償贈呈される由です。但しこの千
円札の肖像は昭和太子か、或は吉田
首相のかは懸念されました。その三
は、宮城前広場に於て首相をはじめ
全閣僚、衆参議員全員が家族同伴で
一大豪華版の野外ダンスパーティーを
行います。この莫大なる費用捻出の
ため、只今より税金滞納家庭には即
刻差し押えを強行することです。
次のニュース、結婚適齢期の男女
の比率は一对十で、結婚難の世相か
ら凡ゆる性犯罪が生れた責任の追究
と、解決策を政府に申請中であつた
全国婦人連盟の要求が入られ、男
性は一度に十人までの女性と自由に
結婚し、幸福を分かち合うことが出来
るよう政令で定められました。

次、全国紙芝居連合会では、子供遊びばかり相手が能でない、大人のための紙芝居を七月一日より行こう



とになりました。夫婦の性生活離れからヒントを得た性劇を、十八才未満観覧料で全国を廻ることにしました。ニュースを終わります。

【二・〇〇】婦人の時間

「今日は夫婦喧嘩の武器についてお話ししましょう。先づ物を言う度に旦那様の顔へツバを吐きかけるのも一方法です。あなたツバツ、今頃までベツ、一体何処でベツ、遊んでいたのベツ、どうせ色女とベツ、いちやついていたんでしよるベツ、とゆう具合です。旦那様に物を言う際を与えずガリ／＼と引張いてやるのが



貴女に勝利をもたらす秘訣でございます。又野球用のバットなどは、常に身辺から離してはいけない、常備武器の優たるものです。この頃は男でなくともバットを振廻す女子プロ

とです。ワンシツクスが買収、ミツワイクがお湯屋、カワスベールはバナナ、タダキケールが民間放送です。では今日はこれまで、グット・ナイマナー」

【五・〇〇】天気予報

「暴風特報を申し上げます。高気圧は朝鮮半島の北部から満洲、中国の全土を覆っておりまして。この高気圧の特長と致しましては赤い雲が密着となつて、雨朝鮮、あわよくば日本全土を一呑みにせんと、ぐん／＼押し寄せてくる気配が見えますから、各家庭では雨雲陣を張つて備える必要があります。風雨の激しさが思いやられますから、つつかい棒を頑固にして堅固な家庭陣を張つて下さい」

【六・〇〇】英語の時間

「カムカム、チニーインガム、ノバシテフクラマース……それでは今晩は新しい単語の勉強を致しましょう皆さんはもう大いに熟達されたんですから、珍しい今日の単語をよく覚えて大いに活用して下さい。テキストの八〇〇頁を開いて。ヨムトステール、新聞のことですね。アシデタール、これ競輪選手、又は輪タク屋さんのことですよ。ハイルスグデル



お金のことですね。以下色々ありますよ、ホヰミデネー、チュツと聞えるが鼻ではないんです。接吻のこ

【七・四五】漫才

「君は海が好きかい」
「僕の敬愛惜しまるるところだね」
「え？ 君は海を敬うのか」
「有難いね。ウミの親は！」
「僕の言つてゐるのは塩辛い水が一杯充満している海のことだ」
「就だつて年取ると塩辛くなる。梅干ババア——」
「なるほど……、しかし君は海に限るね」
「僕はアイスクリームに限るよ」
「イヤシイな。男らしく裸一貫で」
「ちよい待ち、一貫て君、片手だけか」



「いや金体のことだ」
「なーんだ、たつた一貫しかないんか、僕は九貫あるぞ！」
「そんなこと自慢にならないよ。まるで鳥みたいに軽いわね」
「それで月給トリの仲間が僕のこと、月給トリみたいじゃねえ、つて

「何鳥だつて？」
「九貫鳥！」

【九・〇〇】とんち教室

「私はとんち教室の青井先生です。出席をとります。石白亭七さん（ハイ）ペンペン留吉さん（ハイ）一番の傑作さん（ハイ）徳多急一さん（ハイ）——では最初になぞ／＼水中撮影とかけて何と解く。映画の撮影ですね。中々むづかしいですよ。お徳多さんもう出来たのですか、早いですね、では徳多さん」
「多「ハイ、水中撮影とかけて共産党追放令と解く」
「思想関係ですな、そんなに、赤い顔しなくつてもいいです。その心は？」



徳多「心は、もぐらねばならぬ」
「なるほどね。お互いに水と、地下とへもぐるわけですね。ハイ留吉さん」
留吉「四疊半の爪弾きと解きます」
「妙な三味線の爪弾き……、その心は？」
留吉「しつとりと濡れる」

「辞やかな解き心ですね。次ぎ石白さん」
石白「病後の栄養と解く」
「その心は？」
石白「海草が大切です」

「最後の言葉にも海草が大切ですねはい次ぎ徳多さん」
徳多「それはですね。インチキ宗教の祭壇の供物と解きますな」
「徳多さんらしいですね。その心は？」
徳多「魚も添える」
「カラシコロン、コロンカラシ」
「あゝ鐘が鳴りました。今日の勉強はこれまで、明日は月謝を忘れぬように……」

【九・四五】尋ね人の時間

「以前満洲国の山岳地帯で匪賊をしておられた青龍馬之介さん、第八号の奥さんが鳩の町で待つていられますから至急御連絡下さい。それから戦時中朝鮮京城市の刑務所に入つていられた古賀三三さん、足を洗つて尋ねて行つて下さい。それから軍慰安婦人をしていた春野せい子さん。恋人の比田利雄夫さんが復員して来られて探していますから、ノガミの男婦組合の方へ至急御連絡下さい。本日の尋ね人の時間を終了致します。これで、本日の放送全部終了致します。どなた様も、御気遣よう。さようなら——A H K」

（音楽）

ツンツン寝口寝口ツンツン寝口
ツンツン寝口寝口ツンツン寝口
ツレモイチドヨミナオセ——

三重子の手記

燃えさかる火の中より奪いさられた無垢の處女がその豊満な裸身を投じて、身も心も溶ろけさす性愛の牢獄。蛇に魅せられた女の獸獄

非戦災都市という事は、ぼつぼつ焼ける都市の事らしいが、金閣寺が焼けて京都駅が焼け、今度は何所か焼けないかと待つてゐる奴は、新聞屋ばかりぢやないらしい——というお話。

恐ろしい事です。最近頻発するヘンな放火事件。

その最初は、左京区聖護院西町の田村義夫さん方。出火は深夜で、パーツと塀から玄關口が燃え出したのを、折よく通行人が発見して、寝入りバナの家人を叩き起してくれたので、大事には至りませんでした。煙卷のまゝ飛出した、一人娘の嘉代子さんが、その火事騒ぎのうちに、居なくなつて

しまつたのです。こんなボヤの親玉くらい大して新聞にも出なかつたし、世人はすぐ忘れてしまつた事でしようが、嘉代子さんは、二日経つても三日経つても帰つて来ないので、とうとう警察の方へ、捜査願が出されました。

嘉代子さんは今年二十一、聖護院小町として、近所でも評判の美人だったので、親御さん達にしてみれば、大変な心配でした。家出にしては全く理由がなく、ズバ抜けた手段に訴えた、強制誘拐とより考えられなからです。

その第二は、下鴨宮河町のタバコ屋さんでした。やはり歴然たる放火で、出火は夜半、そしてその火事場の大混乱に乗じて、

ミス煙草姫と謳われたその美貌娘、河野清子さんが、忽然と姿を消してしまつたのです。

美女誘拐！

警察当局では、漸く事の重大さに狼狽して警邏隊を強化し、市内の火災事件には万全の注意を拂つたのですが、それにも拘わらずその第三の犠牲者が、かく云う私だつたのです。

私——名前は矢村三重子といつて、京都の西南部、西九条大國町に住んでいます。まだ満十九ですが、女学校に居た頃から、バレエや音楽を勉強し、現在は家で遊んでいます。ある新聞社の京小町探訪記事では面映ゆい程賞めていたといひ、今年のミ

青空晴子手柄話の内

獸獄

画・京乙

杉山清詩

ス京都に応募してはどうかと、熱心に勧めて下さる方もあつた程でした。七夕も過ぎ、京の年中行事、祇園祭も近付いて来ると、連日カンカン照りの暑い日が続きます。事件は、その盛夏七月十日、宵の口の事でした。久しぶりに映画を見に行つて、家へ戻つて来たのは、六時頃だつたでし

この身体をふんだんに見せてやつて、へちまの下でバチヤ／＼やつていると……その裏の板塀の節穴が、バチツと瞬いたのです。私はハツとして、錯覚ぢやないかと、もう一度見直しました。生きてゐる節穴！何と気味の悪い事でしょう。うつかり行水していた私の素肌を、その眼玉はみんな見てしまつたのです。私は十九ですが、この身体は、もうどこもすつかり大人になつています。いや、普通の十九の女の人よりは、私が早熟だつたセイか完成してゐる筈です。私は、羞しきより、急に無気味さを感じて塀の方へ背を向けると、すぐ立上つて、急いで身体を拭き、お湯から出ました。そろそろ日も暮れる頃、私は浴衣をひつかけて、表へ椅子を持出し、夕の涼風を愉しんでいた時でした。すぐ近所にある化学工場から、全く突然に大音響が起り、真赤な火柱が天に沖したかと思ふと、続いて数回小爆発が起つて、もう火竜と濃煙は、完全に全工場をなめ尽してしまつた。彌次馬や近所の人々が右往左往し、忽ち大混乱が襲つて来ました。私も飛散する火の粉を浴びて、思わず人の波に流されながら、火勢と風向に注意を奪われている時、突然濡れハツとした時はもう遅く、いくらしつかりしなくてはと頭張つてみても、頭のシンはジン／＼と痛み出し、痺れるような眩暈が襲つて来て、私の意識は、段々遠い所へ



「気が付かはつたのね、まだ頭痛い？」

その人は、優しく私をいたわってくれましたが、私にはまだ何が何やら、全然前後の關係もつかないの、警戒を解くわけにはゆきません。

「さ、このお薬一服飲まはつたらスツとするわ」

言われるまゝにその薬を服むと暫くして悪心や頭痛がスツと去つて行くのを覚えました。

「一体此処は何処なの？そして貴女は誰？」

「私の名前？河野清子——貴女の教育係よ」

河野清子。どこかで聞いた名前しかし、私にはどうしても思い出せないのです。

「つい先日、火事騒ぎで行方不明になつた下鴨のタバコ屋の娘——」

「あゝそりや！どうしてあんたがこんな所に？」

「私、もう家へなんか帰りたい事ない、こゝの方がよっぽどえゝわもう一人、第一の失踪者田村嘉代子さんも、こゝに居やはるのよ。」

逃げてゆくのです。

それからどれ位の時間が経つたのか、又その間にどんな事があつたのか、私は全然意識していません。とにかく、今度眼が覚めたら私は何処かの日本間に寝かされていたのです。その枕頭には、和装の娘さんが一人坐つていて、心配そりに私を見守つていました。

こゝは私達の天国、こゝの御主人は、今度は貴女をも招いて、今日から貴女も可愛がつてくれはるわ、そして屹度貴女も、暫く居るうちに、お家へ帰るのが嫌になるに決つてゐるわ、さ、気分が落着いたら、私と一緒に風呂行きましよ、香水風呂よ」

分らない、分らない、何から何まで分らない。私はまだ夢でも見てゐるような氣持でした。

「一体これから私はどうしたらえゝの？」

「どうもせんかて、唯こゝの御主人の言う通りにさえしてはつたら、それだけで幸福になれるわ」

私は清子さんに連れられてその部屋を出ました。私はまださつきの浴衣のまゝの姿です。そこを出て、何か薄暗い、陰気なコングリートの廊下を抜けると、そこが、衣籠が三つ程ある、小じんまりした脱衣室です。その玻璃の戸の向うは、温い湯氣が立っています。

「さ、お湯に入りましよ。私が肩流したげるわ」

そう言つてもう清子さんは、着物を脱いでいます。私もたゞ不思議な魔力に惹かれるまゝに、浴衣を脱ぎました。清子さんはもう裸になつて手拭で一寸前を隠しながら私を待つています。私もシュミイズを外し思い切つて裸になると、湯殿へ入りました。まるで牛乳を溶かしたような、甘つたるい感觸の湯ざわり、快く血の香を播がせる温かさ。そして、しびれるような官能を刺激して来る香料の香、まるで女王様のような、こんな素晴らしいお湯に入るのは、本当に生れて始めてでした。温まつてゐるうちに、身体中が夢の中へ溶けて行くような氣持です。

それに、清子さんがまるで侍女のように私の世話をしてくれ、身体の隅々まで、香の高い糠袋で洗つてくれました。くすぐつたいとはしやぎ廻る私を面白がつて、胸もお乳も、腰も、お腹も——。

「三重子さんえゝ身体してはるのね、ほんまに羨ましいわ」

清子さんはお湯の縁に坐つて、私の身体と較べながら、幾度もそう言いました。清

子さんだつて、随分均整のとれた美しい肉体をしてられるけれど、やつぱり私の方が、お乳も大きいし、筋肉や弾力が豊かだし、腰の隅も濃いです。

楽しいお湯から上ると、立派なお召の着物や、肌着まで全部新しいものが、ちゃんと整えられていて、それを私に着せてくれました。どうしてこんなにまで私は歓待されるのか、全く訳が分りません。

それから、私は寢室へ案内されました。薄い桃色のカーテンが揺らめく、まるで最高級ホテルのような室。そこには、立派な三面鏡や、広いベッド、至れり尽せりの化粧台、贅沢な調度、まるでフランス映画にでも出て来るような、この豪華なお部屋が私の寢室で、そこは私だけが自由に使つてもいゝと言われた時、本当に私は、世界一の幸福者のように喜びました。

「貴女はまだ経験がないかも知れませんがそのダブルベッドを見たら、もう全てはお分りどすやろ、後はこゝの御主人の仰言る通りにさえしていれば、この幸運はいつまでも続くのです」

艶かしいカーテンに囲まれた、立派なベッドに、ふんわりした絹の衾、純白のシーツ、そして二つの枕。私は確かにそれを見た時、胸を刺されるような氣がしました。

でも、——でも、この身体を任すだけでこの私の夢が醒めないのなら、構わないと決心したのです。

本当に私は、まだ処女なんです。大学生の恋人もあります。何度か屏を重ねた事もあります。性の神秘に大いに好奇心を動かして今迄に何度か、禁断の垣を越えてみたといと考へ、猥らがましい事を予想した事もありました。男性の肉体に興味を持つて、あ

の人に頼んで、その未知の扉を開いた事も、この女性の謎をヴェールを剥がせて見せた事もありましたし、独りひそかに愉悅を求める方法も女学生仲間から教つて、経験もしています。私は深窓の淑女じやありませんが、その最後の花園だけはまだ男性に荒らされた事はないのです。

でも、いよいよその花を摘まれる時には唯身体中の血が燃え、全身が硬直してしまつて、真裸にされ、全てを見られてしまつてゐるのに、まだ顔ばかり隠して、身体が小刻みに顫えるのを、どうにも出来ませんでした。

そして、激しい衝撃を受け、強い疲労に喘いで、ところろと紅夢に眠る頃、何故ともない涙が流れましたが、一夜開けると、棄てた処女には何の未練もなく、それに対して、我れながら呆氣ない程、何の感情も起りませんでした。

とにかく、そうして私は、この桃色の獄に捉われ、妖しい花粉霧の囚人として、この世界に起居するようになりました。

この奇怪な国の御主人は、まだ若い貴公子然とした、立派な紳士でした。そして嘉代子さんと清子さんと私は、毎日交互に、閨宮殿の甘夢を結びました。唯日曜日だけは、主人は何処かへ出て行き、その時は必ず私達の逃亡を恐れて、別の若い青年が、私室を監視に来ました。いや、その留守の皿を舐りに、室を廻つて来るといつた方が本当かも知れません。

日曜日は、こゝの主人は、次の美姫を求めて、街を歩くのだそうです。そしてある日、又立派な調度類が運び込まれて来ました。吃度又最近に、新しい娘さんが、こ

の人外の宮殿へ迎えられるのでしよう。

私がこゝへ来て、もう二週間になります最初に清子さんが言つたように、私は今すぐこゝを飛出して、家へ帰りたいとは思つていません。私はそろそろ性の欲びを知つて、その甘美な呪縛に溺れ、男性のない淋しさに耐えられなくなつていたのかも知れません。

事実私は、他の人達の室へ主人が行く夜ほど、淋しい独身の物足りない悶えを、感じてゐる程ですもの。

そうした心が、態度にまで現れ出したのか、私の日になると、主人は特に喜んで、靈間から室へ来たり、一緒に香水風呂へ入つたり、恐らく世の群婦達も知らないような激情に溺没したりします。

ところが、幸か不幸か、突然嘉代子さんが、或日激しい腹痛を起して、吐瀉と下痢に苦悩した揚句の果てに、可哀想に脳症状を起して、その夜に亡くなつてしまいました。

次の朝、主人は嘉代子さんの身体に油をかけ、火を点じて茶毘に付してしまふと、その頭蓋を骨箱に納めて、嘉代子さんの家へ、嚮留小包で送つてしまいました。

その親切な心は分りますが、平気で死体を焼く惨忍さに、私はふと恐ろしいものを感じたのです。

その時から、あの恐ろしい破局はやつて来たのでした。

今日は若い監視者も現れません。

着さの加減ばかりじやなく、この頃では清子さんも私も、殆ど終日裸体のまゝで居ましたし、主人も裸体のまゝで室へ来る事が多いようでした。私達だけのエデンの園

なら、その方がお互に親しめるように思うからです。今日は誰も居ないし、私と清子さんは、二人でお湯に入りながら、何かと話し合つていました。

「三重子さん、貴女、こゝの生活に満足してはる？」

「えゝまア……貴女は？」

「そら、うちかて喜んでるけど、慙々今度がうちの番かと思ふと、もう生きてる氣せえへんわ」

「今度つて……何の番？」

「貴女はまだ何にも知らはらへんかつたのね。今日は誰も留守やから、何もかも教え上げるわ」

「……」

やはりこの天国も、常軌を逸しているだけに、何か大きな秘密があつたのだ！

さつき私が獄獄という言葉を使つたけれどもこの動物的な情痴の地獄は、やはり遂に獄獄だけの、真ッ暗な世界だつたのです。

「今度殺されるのはうちです。嘉代子さんはもう不要になつたさかい、何の未練も躊躇もなく、殺されてしまはつたんやわ」

おゝ、恐ろしい獄獄の秘密！

「うちが最初こゝへ来た時、田村さんの他にもう一人、柳田和子という美しい人が居ました。でもその人は、もう主人に飽きられていたので、ある夜、まるで屠殺される牛みたい、鉄棒で眉間を横られて、血へドを吐いて悶絶すると、そのまゝ火をかけられて、見る見る骨になつてしまいました」

主人の愛を失つた女は、もう一顧の憐愍もなく、人形のように手足をもがれ、空俵でも焼くように、その肉体を葬られてしまふのです。そしてその後へ貴女が来まし

「そんなら、もう私にも飽きが来て、主人は又次の愛人を探しに、町へ出やはつたという訳ね」

「——それで嘉代さんが毒殺されたんやわ今度来た娘さんの教育係が貴女。そしてその貴女が見放された時、うちは殺されるのやわ」

「そしてその次が私ね、そんなら何故貴女こゝを逃げ出さへんの？」

「逃げようとする氣配でも見付かつたら、すぐ殺されてしまふわ。それに、こんな身体になつて、今更婆婆へ帰つても、もう青春の敗残者。それよりこゝで、せめて短い余生でも、やはり若い欲喜に浸つて暮した方がえゝと諦めてるさかい、かも知れんわ」

「悲しい肉体の呪縛ね。女にされたばつかりに、もう逃げられない性の迷宮へ、私達も踏み迷つてしまふた訳ね」

桃色に温まつた身体。もうこの身体は、男を忘れられないものになつてゐる。それだけに、自ら陥ちた性愛の牢獄。それがこの獄獄なんです

「——でも、私やつたら、やつぱり生命を賭けても逃げるわ」

「三重子さん。そんな事、唆にも出したらあかん。こゝの各室には盗聴器があるし、この浴室は有機ガラスの仕掛けで、中からは見えへんけど、外から見える事も知つてはる筈。若しどんなひよりしで——」

「嚙へん！清子さん。私が逃げたら、あんたも逃げてくれる？」

恐ろしい表情。苦しい呼吸——私はこゝの真相を知つて、真剣に脱走を考えていたのです。象牙の下の榮耀榮華より、やはり貧しくても、お母さんとの生活に、帰り

たいと思い出したのです。

私はもうあの人を愛せない、こんな女になつてしまつたけれど、それでも坐して死を待つより、何とかこゝを脱出したいと願う心の方が、急にむらむらと増して来ました。

「こゝは一体何処なの？」

「三重子さん、早まつた事したらあかんよ」

「え、おゝきに、何とか慎重に考えて、警察と連絡取るわ」

「此処は吉祥院八反田町。元の下水処理場跡からすぐ近い、路工場の地下室なの。近くには日本カーボンや日本製箔などの、工場はあるけれども、この広大なる路地は、誰も気付かず、誰にも忘れられて、そのまゝ残つてゐるのやわ。この主人というのは元のその工場の重役が何かで、陸軍の将校やつたとかいう吉成正孝という人。うちもそれだけより知らんけど、これはこゝの大秘密よ」

「シッ！誰か来たらしいわ！」

ハッとして身体をすくめ、人の気配に驚いて、先づ私が浴室から飛出してみると、若い男の人が、コンクリートの廊下を歩いて来る処に、ぼつたり出会してしまいました。

「アッ！」

と思わず片手で、身体を隠すようにして私は物陰に隠れてしまいましたが、何と美しい人。まるで歌劇のプロマイドから抜け出した男装の麗人ではないかと思ふ程、優美な貴公子のような青年です。

見知らぬ人でしたが、新しい監視員なのでしよう。全裸の私の姿に余程驚いたらしく、すぐ又どこかへ見えなくなつてしまいました。

今までの監視員は、みんな監視に事寄せて主人の留守を幸いに、私達に挑みかかり、とても満足して帰つて行くのが常でしたが、今のあの人なら、私室へやつて来て、獸牙を見せて迫つて来ても、構わないと思ひました。

まるで淫乱女みたいな多情心も、一月前までは夢想もしなかつたのに、これもやはり肉体呪縛の、一つの副産物なのでしょう。

その夜、一人の新入生が入つて来ました。今夜も又屹度何処かで放火事件が起きて、警察当局は、美貌娘の失踪に、地固太踏んで口惜しがつてゐる事でしょう。

その人が意識を恢復した時、私はその人に気付かぬ隙を服ませて、香水風呂へ連れて行きました。

松田泰子さん。まだ十六の女学生です。

洋服一つ脱ぐのも、いかにも少女らしく、とても羞しがつていました。それでも身体はかなり大柄の方で、その未完成の処女の肉体は、とても水々しい香を放つています。

もうお乳もかなり膨れて、春の息吹きに悶えているようですし、女性の象徴は、やつと僅かな若草に蔽われて、神秘の窓を開いています。本当に未完成な早乙女。こんな純真な肉体が、やがて今宵から男性を知り、悲しい獣獄の囚人になるのかと思ふと私は可哀想でなりません。



出来る事なら、此処から逃がしてあげたいと考えました。でも、こうして二人が入浴している姿は、主人に監視されています。

主人は新しい娘を香水風呂に入れて、その間にその身体を隅々まで盗視して愉しんでいるのです。だから、どうする事も出来ません。

私は始めて此所へ来た時、清子さんからされたように、柔い腰袋で、舐めるように、泰子さんの全身を洗つてあげました。そしてお風呂から出ると、やはり美しい新しい着物に、泰子さんはとても喜んでいました。

薄幸な中産以下の家庭で育つた娘には、この豪華なプレゼントは、確かに最大の魅力なのです。

泰子さんを寝室へ案内して行く時、廊下の隅に、屋間の美青年を発見しました。

寝室——乙女の肉体を処理される桃色のプロチン台。泰子さんはその華麗に眼を見瞞つて、夢かと喜んでいましたが、さすがにダブルベッドには、十六娘らしい恐怖を隠し切れないようでした。

「お姉さま、うち……うち、男の人と、まだそんな事したことないし、かなんわア」
「私かて、こゝへ来た時は、何にも知らな

んだわ、始めはコワイと思うたわ、そやけどなア、どないもせんかてえゝのや、たゞ男の人が言わはる通りに、男の人がしやはる通りに、黙つて身体を委せてたらえゝのや」

「うち……そんな事羞しいわア」
何度か恐れ、何度か躊躇していたけれどやつと泰子さんを説伏して、私は自分の私室へ戻りました。今、主人が泰子さんの室へ入つて行きます。独り残されたあの人は

屹度身体を硬くして、顫えている事でしよ

う。
主人はもう泰子さんを手中にして、未経験の処女には、とても耐えられない程羞しい事を要求し、吃驚する程激しい愛情を示

す事でしよ。
私は、始めて来た夜の事を想像してしました。その時、私室のドアがスツツと開いて、霊間の美青年が覗き込みました。声を立てようとする私を、唇に指を当て、制止此所へ来いと魔くのです。

脱出！

私はハツとしました。そこには清子さんも居ます。その美青年は二人を表へ追いやるのです。主人は新しい餌に魂を奪われ紅夢に酔いしれている事でしよ。正に好機は今。私達は地下室の階段へ走りました。その時、ドーンとぶつかつた美青年の胸柔かい豊かな弾力。むつちりと盛上つてゐる乳房――。

「貴方、女ね、一体誰なの？」

「とにかく早くお逃げなさい！」

叱るように言つて、その人は私達を追出しました。

と――

この廃工場の周囲に、警官と消防自動車が取巻いていました。吃驚している私達を巡査が優しく導いて、車に乗せてくれました。それから間もなく、その廃工場に放火事件が起つたのです。火を放つたのは、今度は獄の主人ではなく、私達を誘導してくれた乙女探偵の青空晴子さんでした。

不意の出火と爆発に仰天した主人は、正に蹂躪しようとした泰子さんを、そのまゝ放り出して、裸のまゝその室を飛出し、火を消そうとしました。その大混乱の中に、真裸にされていた泰子さんが、紛失してしまつたのです。その誘拐犯人は、やはり晴子さんでした。

その後へポンプを手にした消防隊が、地下室へ雪崩れ込んで来たので、主人は暫く



脱獄囚

男は、地下鉄の上野広小路で降りると、黒つぽい背廣の襟を立て、電車道を渡つて松坂屋の前まで、急ぎ足で歩いてきた。

十一時を少し過ぎていたが、よろい戸を下ろした大きな建物は、魔物のように静まりかえつてゐる。街灯が少ないので、この辺りは、亮春婦の集るところだ。

案の定、暗闇から、女が出てきて、男を掴まえた。

「駄目だ！」

鋭くいつて男は速足で行き過ぎた。女は舌打ちして、また闇に消えてしまつた。

「ちよいとお」

また、暗い物陰から女が現れた。男は険しい顔をして行き過ぎようとした。女が追駈けて

「お待ちよ、ちよいとお！」

女は、強引に男の手にしがみついた。

現代女子の犯罪非難

史静月
竹中英一郎 画

「駄目だつたらよ」

「まあ！怖い顔」

しかし女は、いきなり前に立ち塞がり、男の顔を覗きこんだ。

淡い街燈の光を受けて蒼白い男の顔が浮かび出た。まだ三十位で、整つた眼鼻立ちをしていたが神経質に寄せた眉と、何かにおびえたような眼の光に陰険なものを含んでいた。

「あら！」

女が、低く叫んで、一瞬色眼鏡の奥で眸を隠つた男は

「退け！」と乱暴に振り切つて行こうとした。

「光公！」

女が叫ぶと、また、暗闇から、ひとりの女が出てきて、男の前に立塞がつた。

「男前だよ、迷がしちや駄目よ」

「あいよ」

答えた光公という女は、米俵のような太つちよで、青いワンピースがはち切れそうな恰好で両足を踏んぱり

「ちよいとお、ハムサムちゃん」

太い声で男に抱きついてきた。この女も

色眼鏡をかけている。

「退け！うるさい！」

男は、顔をそむけ、女の太い腕をもぎ放そうとする。

「いいじゃないのよう」

と、先刻の女が、うしろから抱きついてきた。すると、また暗闇から、どこか三人も女が出てきた。みんな揃いも揃って眼鏡をかけている。

「ああら！男前だよ」

「おや、いいカモ揃えたわね」

がや／＼いいながら男を覗きこんで取り巻いた。男は、遂に悲鳴をあげた。

「助けてくれよ、金もつてないんだ」

「そんなこと承知の助さ、あぶれてるからタダにしたげるさ」

「チエツ、あとから出てきてなんだね、あたいのものだよ、ねえ、にいちやん」

「馬鹿におしじやない！あたいじやないか最初に揃えたのは」

男は、やかましい、五人もの白粉臭い女にからみつかれたせいか、ちよつと、眸を好色的に輝やかしたが、すぐ、陰険な眼つきになり

「勘忍してくれ、追われてるんだ！」

早口にいつて、前のめりに女達を突き退けようとした。

「駄目々々」

女達は、どつと肉体の垣を造つた。

「ほんとなんだ！デカに追われてるんだ」

「分つてらい、今日、新聞に出てた脱獄因だろう」

「ち、違う、悪い奴に、引つかかつて喧嘩をしたんだ」

「いいんだよ、罪人はあたい達の味方だからね」

「そうよ／＼、みんなでかくまつたげようじやないか」

「賛成！あたいがかくまつてあげる。兄ちゃん、安心しな」

「チエツ、あたいだよ」

「あたいだつたら、ねえ、にいちやん」

黄色い声で騒ぎだてるので、男は、気が気でなく、おびえた眼で、闇の彼方を見すかしたりしていたが

「じゃ、かくまつてくれるか」

「OK、安心しな、おい、行こうぜ」

最初、男を揃えた女がそういつて、男の腕を抱えこんだ。他の女達はさつと、魔物のように暗闇に散つてしまった。

「たんと、サービスしたげるよ、明日は、眼先がみえなくなつても、いいだろう？」

女は、小路に入ると、クスクス笑つて男の腰をぎゅうと抱いた。二十一才だろう洋装で、肩から鞆をかけているが、顔立ちも悪くなく、スタイルも五人のうちで一等よかつた。男は、そんな印象を脳裏に描きながら、しつかり女の胸を抱いて暗い小路を歩いた。二年も獄舎で抑圧されていた感情が、どつと燃えさかつてきたようであつた。

淫獣の虜

暗がり、を、だいぶ引つ張り廻された男はどの辺なのか見当もつかなくつたが、野中の板葺小屋に連れ込まれた。

闇夜だつたが、戦災の跡にボツソリ建つた一軒家だといふことは分つた。それも、終戦直後建てた本人は既に引越しているらしく、荒廃し人の住めるような所でなかつた。

入ると、先刻の女達が、蠟燭の灯を囲み立膝したり、あられもない姿態で待ち構えていた。

「遅かつたじやないか、途中でキスでもしてたんだね」

男のうしろに頬骨の出た大柄な女がいつた太股丸出しで膝座を組んでいる。

「察しいがいいわね」

女は、男と腕を組んだまま席の上へよろけるように踞み、男の頸にかじりついて

「今度は、眼先がみえなくなるまで可愛がるつて約束したんだよ、ねえ、お兄ちゃん」といつて女は、朋輩達を振りかえつて微笑した。どつと女達が笑つた。

男は、もうおびえたふうもなく、好色な眼付で女達をみつめ、にやにやしていた。

「おい、どこで寝るんだい」

「おや、もう寝たのか、あきれたね、お隣りだよ」

「厚つかましいね、先刻、勘忍してくれつていつたのは誰だつたかわ」

「おい／＼、俺や金持つてるんだぞ」

「大きなこといつてらあ、いらないよ、今夜は大盤振舞いさ、みんなで交替に虐めてやるから覚悟しといで」

「おう、よし／＼、何人でもこい、さあ、隣りへ行こう」

男は、女の胸を抱いて立ち上つた。

「チエツ、気の早い男だね」

「その次は、あたいだから、早やいこと仕上げなよ」

女は、そんな声を後にして、男ともつれながら、板仕切りの別室へ入つた。入ると、男の肩に腕をかけたまま振りかえり、何か合図した、朋輩達は、さつと緊張して頷いた。

は果然としていたそうです。

狙われた娘はみんな美貌、そして中流下の家庭の娘——その娘達を誘惑し呪縛しているのは、屹度金の力だろう、晴子さんはそう考えて、最近に女用の衣類や調度で高級なものが買われた先から、洗い出したのでした。

所が、十条千本附近の民家から、まるで火葬場へ行つたような、嫌な臭いがしたという聞込みと、田村嘉代子さんのお骨が送達されたという事とで、あの地下室の発覚という事になつたのです。

主人は、田村さんを毒殺したのは、自分ではない。誰かの仕業に違いない。だからあの地下室の秘密がバレるのを恐れて、新しい愛人を獲得出来たら、私と晴子さんは、すぐに殺すつもりだつた。と自供しています。晴子さんが来られるのが、もう一日でも遅れたら、私は殺されていたかも知れないのです。

主人は女極道で恋女房に棄てられ、愛妾にも去られたので、あんな変態的な色魔になつてしまつたのだそうです。

私も男極道かも知れませんが。早くあの人と結婚したくて、とても悶えています。それにう一つ、あの魔窟で、主人の愛を少しでも多く得ようとして、田村さんの血に毒を盛つたのは、実は私だつたのです。しかしその為に、魔窟の謎は解けていつたのです。

怪奇探偵シリーズ

第一話

(終り)

二人の姿が別室に消えると、互いに顔を見交し、硬ばった表情でにやりとした。

やがて、そおつと、ひとりが立上り、板仕切りに耳を当て、内部の様子を窺うと、次々と女達は立上り、同じように聞き耳をたてた。

別室も席敷で、それも、三枚重ねてあるだけだった。

女は、汚らしい毛布をその上に敷いてシュミーズひとつになった。

男が、せかせかとシャツ一枚になつて横たわると、

「待つてよ、眼鏡がこわれるじゃないの」女は、肘で、男の胸を支え、眼鏡をとつた。

「おお！」

男が、突然、眼を腫つた。喰い入るようにみて

「き、きみは？——」

と叫んだ。

「驚かなくつたつていいわ——春江の、なれの果てよ」

男は、驚愕に口もきけぬふらだった。

「そ、そらだつたのか——」

男は、腕をゆるめ、蒼白になつていつた。

「あなたの、脱獄、知っているわ、でも、いくら騙されても、最初の男は忘れられないの」

「——」

「懲んだわ、あの当時、殺してもあき足らぬと思つたわ、でも惚れた弱身ねえ、恋しくて、恋しくて、こんなに墮ちても、いつか会つたら、こうやつて、昔のように、あなたの胸にしつかり抱かれないと——そればつかりを希望に生きてきた——」

「すまなかつた。赦してくれ、じつは、俺も、お前のことが、忘れられなくて——」

「ほんと？」

「ほ、ほんとだとも、お前がカフェにいたとき、なんとかしてまともな女

に戻してやりたくて、あんな所と知らずほんとだよ、ほんとの女中だと思つて世話した

んだよ、誤解しないでくれ」

「でも、あれから、いちども会つてくれなかつたじゃないか」

「そ、それは、あの頃、俺も金がなくて、それに、忙しくて——」

「何人だましたの？」

「いや、そ、それや、少しだよ、それも、あの旅館の内情を知つて、すぐやめた。後悔

した。お前を救い出そうとしたが、あそこの親方が、寄せ

つけないし——そのうち、人身売買なんて、濡れ衣を着せ

られて拘引せられるし」

「分つたわ、でもねえ、あたしたち、地獄の苦しみをした

のよ、あの家へ押込まれてから一年、一歩も外へ出られなかつた。そして、月五万円

稼がないと、鞭で叩いたり、棒で殴つたり——いまでも、背中に跡がある、みせまし

ようか」

「き、まつてくれ、そ、そんなもの——」

「それでも、その鞭に叩かれて、月五万円稼いだわ、それでも、身には、一文も入らない。衣裳代に一万、食費に一万五千円、それに化粧品代がいくら、部屋代がいくら

ちよつと病氣すると、もう借金——この世の地獄そのまゝ一晩に十人をつたときもあるわ、病氣であらうと、嫌な顔をすれば叩かれる。そんなときに限つて狼みたいな男

「赦らなくつたつていいのよ、今晚、思いきり可愛がつてくれればさあ」

「ほう、ほんとに、赦してくれるか」

「は」

「ひつこいわね、さあ、」

男は、女の氣持を図りかねて顔色を窺つたが、薄暗い蠟燭の灯を背にしているの、さ

だかでなかつた。

「まさか、殺しやしないだらう」

「そう思いかえすと、急に、女の温い肉感が、むせるような脂粉の匂いを伴つて男の官能を刺激してきた。三年前、この女がまだ処女だつた頃、

甘言もつて、犯したときのこととがまざざと思ひ出された。

そのとき

「おや？まだぐづついているんだね」

という声がかして、太つちよ

の光公が入つてくるなり中腰になつている男の腰を背後から抱きしめた。

地獄の復讐

「な、なにをするんだ！」

男は蹴飛ばそうと足をばつかせたが、光公は、太い腕でしつかり男の腰を抱いているし、春江が、

「くそ！」

男は手を合わせた。春江は皮肉に笑つて、



男は、

「うう！」

と唸つてもがいた。

すると、また、脚に抱きついた奴がいる。

「し、しまった！」

男は急に、恐怖を覚え、蒼白になつた。

今こそ、恐ろしい身の危険をさつたのである。物凄い力で、春江の腕をもぎ放そうとしたが、たちまち別の女に腕を掴まれた。仰向けにされたと思うと、また、頭を強い力で抑えられていた。

「ううーうぬ！」

真紅になつて力んだが、いつの間にか五人の女が全身をがんにがらめにしていった。

男は、大きく胸を波打たせた。唇まで蒼白になつた。

「ど、どうするんだ！おい！」

女達は返事もしなかつた。

「さあ、やつちまおうか」

頭を抑えている頬骨の出た女がいつた。

「だめだよ、もつと苦しめなくちや」

春江が、男の頸に爪を立てて締めつけながらいつた。

「そうよく、こいつのために、地獄の苦しみをなめさせられたんだよ、顔の上へ小便でもしたげな」

「あいよ」

頬骨の出た女は、ベツと男の上へ唾を吐き、スカートをまくつて、男の顔へ、掀けた内股の風をバタバタと送つた。そして、

「こいつ！こいつ奴！殺しても、あきたらん！この顔で、あたいらを騙したんだ、あたいらの一生を、台なしにしやがつた！」

悲痛に唇を歪め、嗚咽しながら叫んだ。

「あたいもだ！」

「畜生奴！」

「畜生！」

女達は、口々に叫び、互いに、地獄の苦しみを思い出したのであろう、男の、手に足に、腕に、噛りついて嗚咽した。

男は、痛みに、悲鳴をあげた。断頭台に立たされたように、すつかりおびえ、度を失い

「わしが悪かつた、赦してくれ！殺さないでくれ、なあ、お前達の、気の済むように、どんなことでもするから、殺さないでくれ」

「この手で騙しやがつたんだよ、この畜生め！殺しやしないよ、これから、うんと、眼先がみえなくなるまで可愛がつてやるのさ、楽しみにしてな」

春江は、男の腕の上に膝を揃えて座り、頸を締めつけながら叫んだ。

「ど、どんなにしてもいいから、殺すことは、殺すことは、勘忍してくれよ」

「頼んだつて殺しやしないよ、心配しなさんな、ねえ、あたい達だつて殺されやしなかつたじやないか」

「そうだ、よくいつてくれた」

男は、ほつとしたように、いつた。

「へん！よろこんでるよ、こいつは」

「よつく聞きな、殺しやしないかわり、あたいらが、苦しんだ分だけ苦しめてやるからな」

「ええッ！ど、どうするんだ、どうするんだよ」

「どうもしやしないよ、待つてな」

頭を抑えている女がいつた。

「ゆつくりやりなよ」

男の脚の上に、でんと乗つて抑えつけている光公がいつた。

男は、かあつと眼を見開いた。急に、女

達が不気味に息をひそめて静まりかえつたからだ。

「ど、どうするんだよ——ちよつとでいいから、手をゆるめてくれ」

「どうなることかと、男は、戦きながらいつた。」

「くそ！ゆるめりや暴れるからさ」

突然、殺氣立つた女の声の頭の上でし

た。男は、ぎよつと震え上つた。

「そら！みてな！」

男の頭を抑えた女が、片手で、薬瓶をと

つて、男の鼻先に突きつけた。

「な、なんだ！それは！」

「塩酸だよ」

男は、突然、猛獣のように吠えたてた。

「顔を真紅にした按摩」

盲人にエロティックな話はつきものであ

る。

京都の或る郊外に一人の女が唄れてい

た。或る主人の来ない日、気保養を兼ねて、

一人の盲目の按摩を抱いた。

すると、その按摩君は中々解りのいゝ男

と見えて、だん／＼眠くなるように指先の

秘術を尽すのである。

といつて、決して人に見せて恥しいよう

なことをやつた眼ではない。たゞ上手にも

んだけに過ぎないのである。

さて女はだん／＼眠くなつて来た。もう

やてもたても堪らなくなつた。そして夢の

如くうつつの如くとりとなつた。

——と思うと、按摩の眼がギロリと光る。

と見るや否や、その指先がする／＼妙な処

へ延びて来たのである。

勿論、変なことをする奴だな、と女は思

つた。しかし、黙つていた。

すると、次ぎの日も、又その次の日もそ

うするのである。少しムツとしてきた二号

夫人は遂に一策を案じ出した。

その日も盲人氏は指先きの秘術を尽して

いる。と一匹の蚊がブーンと飛んで按摩氏

の顔にとまる。彼は忽ち片手でパチリパチ

「た、たすけてくれえッ！」

女達は、男の脚を、必死になつて抑えつ

けた。それでも、男は、むくつ、むくつと

そりかえつて暴れた。

女は、瓶の詰めを、歯でもつて抜きとる

と、男の頸に、鼻に、一滴、一滴と塩酸を

たらした。男は

「ううわあ！ぎやあ！」

と、凄じい呻きをあげて死にもの狂いに

もがいた。

「それ！」

女達が、さつと身を退いた。

男は、顔から、咽喉一面に塩酸を浴び、

真つ赤なボロぎれのようになり、狂つた獸

のように室内をのたうち廻つた。(終)

顔を真紅にした按摩

盲人にエロティックな話はつきものであ

る。

京都の或る郊外に一人の女が唄れてい

た。或る主人の来ない日、気保養を兼ねて、

一人の盲目の按摩を抱いた。

すると、その按摩君は中々解りのいゝ男

と見えて、だん／＼眠くなるように指先の

秘術を尽すのである。

といつて、決して人に見せて恥しいよう

なことをやつた眼ではない。たゞ上手にも

んだけに過ぎないのである。

さて女はだん／＼眠くなつて来た。もう

やてもたても堪らなくなつた。そして夢の

如くうつつの如くとりとなつた。

——と思うと、按摩の眼がギロリと光る。

と見るや否や、その指先がする／＼妙な処

へ延びて来たのである。

勿論、変なことをする奴だな、と女は思

つた。しかし、黙つていた。

すると、次ぎの日も、又その次の日もそ

うするのである。少しムツとしてきた二号

夫人は遂に一策を案じ出した。

その日も盲人氏は指先きの秘術を尽して

いる。と一匹の蚊がブーンと飛んで按摩氏

の顔にとまる。彼は忽ち片手でパチリパチ

リと顔を叩く。又一匹飛んでくる。

秘術を尽しながら、次々ど飛んでくるも

のに対する防戦にもこれ努めたわけであ

る。

二号夫人は笑い出したのをじつと耐え

て見ていた。見よ盲人氏の顔はさながら火

事見舞に行つた猿みたいになり真紅になつて

るではないか。

わが名はイカレボンチ

ユ一モア 談

能登一三

曾根 三太郎 画



選挙でさわぐのもいいが、あとで始末に
こまるのは、むやみに方々の塀や電柱に貼
ったポスターやビラを剥がすことだけでは
ない。僕の方の社長大山三平氏もよせばい
ゝのにこんどの市議員候補にうつて出

た。人間というやつは、金が出来て精力が
あまると、政治とかいううるさいものにチ
ョツカイを出したがるものらしい。
「わしなら大丈夫やがな、うちのボンカン
化粧品の小売店は、わしの選挙区だけでも
五十軒はあるさかいにな、一軒あたりお客
さんが百人あるとしてみい、五千票ぐらい
尻のかつばや、まあ最悪で三割としても一
千五百票、これならまあ最高点当選うたが

会社のトラックで社長の写真入りビラを雪
のようにまき散らしてまわつた。これなら
選挙違反にひつかゝらない。
ところがさてフタをあげたら、みごとに
落選、それも尻から三番目、得票数百五十
票というさんたんたる惨敗ぶりだつたから
目もあてられない。
ブルドックがボンセンペイのように膨れ
あがつて会社中に入つあたりにあたりちら
しはじめたから、上は重役から下小使のお

いなしや、おほ
ん」

社長は自由党の
吉田さんのファン
である。

ファンだから、

吉田さんのまねを
して、葉巻を唇か
ら離さない。ブル
ドックのようなつ
らがまえも生き写
しなら、鼻つ柱の
強いワンマンぶり
もよく似ている。

ボンカン化粧品の
取引店がみんなそ
ろつて社長に肩入
れしてくれたら文
句はないが、社長
はとらぬ狸の皮を
大いに確信してい
る。立候補の腰を
きめたとたんに、
ボンカンの景品付
大特売を花々しく
宣伝して、市内を、

ばあさんまで、逆鱗にふれんように一日中
仕事はそつちのけでびく／＼と社長の顔色
をみて暮している。

チンチン、チーンと社長室のベルがやけ
くそになつた。大将、落選の余憤がまださ
めないらしい。めいわくなのは、壁一重お
隣の庶務課で、課長の僕はそのたびに、
おつかなびつくり、靴音をしのぼせて参上
せねばならんからつらい。

おそろ／＼ドアをあけて、釘を吞んだ武

者人形みたい

に「ハッなにか御用で？」

ブルドックはあつちむいて、葉巻の煙を
噴火山のようにあげている。窓からさす日
光で、みごとに禿頭がハレーションを起し
て眩しいことつたらない。この恰好のとき
がいちばんあぶない。はたして、ギリリつ
と回転椅子をきしまして、僕の方をむくと
デボチンにみ／＼ずみたいな青筋が立つてい
た。

「このアホンダラめが／＼」

怒髪天を突きたいが、あいにく毛がない
から、ぼつぼつと湯気が立ちのぼり、この
ごろのアベツク宿の象徴みたいな偉観であ
る。

「ハッ、いやはや、なんとも」

大将がなんでおこつてゐるのか、皆目僕
には見当もつかないが、とにかく、こんな
ときには二の句をつがず詫まつておくに限
る。

「あれはいつたいたこのだれだす？、け、

けしからんやつや！」

社長は窓硝子ごしに、廊下でふざけてい
る連中を指さした。

「ついそ見ん顔ばかりやな」
「ハッ、……実は新入社員でございまし

て

「なんや？、うちへ入つた若いもんか」

選挙運動に走りまわつていた社長は、二月の間に、ろくに社長室にも腰の据わつたことがない。春に採用した学校出の連中を挨拶につれてゆくのは僕の役だが、社長に暇がないから、まだそのチャンスがない。だから社長の顔を知らないのも無理はない。

「なにかいたしましたんで？」

「なにかどころかいな、さつきわしが廊下で出逢うたら、お辞儀一つするところかいポケットに両手つとこんで、社内厳禁のくわえ煙草やがな！」

「ハッ、それはどうも、実は……」

「いゝわけは要らんわい、わしとすれちうてお辞儀せんどころか、二三間行つてから、今の禿はどこのおつさんや、ブルドックかて逃げよるで、あんなものすごいッラ見たん生れてはじめてや、とぬかして、ワッ」と大きな声で笑いよる」

「……」

「すぐクビにしなければ、えゝか、あんなもの一日もうちの会社においとかれへん、ぶぶれいなやつらや」

落選して気が立つてゐるし、言い出して後へ一足も引かないのは、十年勤めた経験で、僕は身に沁みて知つてゐる。君子あやふきに近よらずだ。

「ハッ、いづれ総務部長と相談しまして」と、ぺこんと頭を下げて社長室を飛び出した。

狭い廊下の、道路に面した窓に十人ほどの若い男女社員が鈴鳴りになつて、きやあきやあさわいでゐる。この間採用したばかりの連中である。新制高校を卒出たんだか

ら、満十八才ばかり。男の方はまだ金ボタンの学生服のまゝだが、三人の女の方は、ちやんとニールツクに身をかためてゐる。共学制で育つたもんだから、若い人同志はなれてゐるんだらうが、アバンのこつちは、年頃の女の子が七人の若い男仲間とわりこんで押しあいへしあい大きなお尻をならべてゐるのには顔が赤くなる。

「おい、君達、こまるやないかいな」

さわいでゐる男の肩をぽんと叩いてもまだ僕に気がつかぬ。げら／＼、きやあ／＼のさわががます／＼ひどくなるんで、僕も連中の後から、首を出してみると、あれま

あ／

荷車を引いてゐる雄馬が、もう一匹の荷車の雌にえげつないモーションをかけてゐる最中だつた。どつちの馬方も死ぬものぐりで手綱をひっぱり棍棒で尻をなぐつてゐるんだが、口のまわりに白い泡をふいた雄馬の奴が、すごいハリキリ方で、馬方の榎棒よりふといのが、ぶらんぶらんと道路の土にさわるほど伸びてゐるんだ。馬の恋つてのは見てられんというが、なるほどこいつはこつちの春情も相催しそになる。

「アホかいな、棒で尻を叩いたらもつといきりよるがな、水や水や」

うちの会社の守衛は元陸軍騎兵伍長だから心得たもんで、ホースを水道栓につなぐと、ジャッ／＼と奔り出した水を、いきつて雄馬の下腹めがけて、瀑のようにぶつかけはじめた。あれあれ、これはしたり、さすがの雄大な一物がみるみる細く縮んで、元の寸法に下腰へ納つてゆく。

「しやうもないことしよる、もうちよつとおもしろいとこ見られたのになあ」
「ほんまにそうやわ」

名残りおしげに窓から首をひつこめた連中の前に、僕はせんぶりをのんだようなむづかしい顔をして立つてゐた。どうも僕は若い連中に説教や訓辭のできる柄じやない。

「君達はやなあ」

それだけ云つたらあとがつづかなかつた。

はてな？僕もどうやら、ホースの水で縮かんだ馬の一物に見とれてゐたらしい。これじや万年課長で月給の上らんのもむりはない。

二

コン／＼と総務部長の部屋の扉を叩いたら妙にしゝんとしている。いつもなら

「能登はんか？、OK」

と元気のいい返事がとび出すのに、さてはまたなんとかかとか社長をこまかして、鳳間からダンスホールへでも行きよつたんかな？。

こまつた総務部長もあつたもんだ。文句をつけたいのは山々だが、実は総務部長は社長の御曹子大山三太郎君。今年二十六才になるが、えゝとこのボンボンは蝶よ花よと大事にされてボーッと大きくなつたせいで一向仕事には役に立たない。三太郎君の味方はオヤジの社長だけで、受付の女の子までニッネームをつけて笑つてゐる。曰く

「イカレボンチ」

「能登はん、こない難しい書類を山のようにつけてきたら、頭が痛うてかなわんさかい、えゝかげんにあんたが僕のハンコを押しといてんか、なあ頼んまつさ」

とこの間もハン箱と金庫のカギを僕に押しつけた。社長は落選でくさりきつてゐるし、イカレボンチはダンスと競馬とマージャンと野球に遊ぶのに一日が四十八時間要るほ

どいそがしい。

親子そろつてお留守なんだからボンカン化粧品はさつぱり売れない。営業部の連中は集金をチョロマカしよるし、工場では原料を横流ししよるし、アチャコの口ぐせじやないが、いやもうめちやくちやでござりまする、という次第。イカレボンチどこへふらつきに出よつたんかいな、たしか三十分ほど前、宿直室へ入つて呑気な鼻歌まじりで、ひげを剃つとつたはずだがな、と僕が念のために扉の鍵穴からのぞいたら……

イカレボンチめ、社長の女秘書のユリ枝さんを膝の上にだつこして、接吻の猛練習中だとはおどろいた。書類は机から下へみんな落ちとるし、カストリ雑誌の裸写真のところか机の上にひろげてある。

それにしても、あのユリ枝さんも凄う女だなあ、たしか二三日前の夜は、ヤケ酒でペロン／＼に酔つてた社長を戸屋の邸まで送りよけるとかで、自動車と一緒に乗り翌日は社長も彼女も一日中顔を見せなんだし、今日は又御曹子のイカレボンチの膝の上にお尻をのせて首つ玉にかじりついてゐる。

どうも昭和生れの若い女なんてものは、娘だかパンパンだか上べだけじや見当もつかん。おや／＼、イカレボンチめ、ユリ枝さんになんやら耳許でさゝやかれると、ニヤ／＼と嬉しそうに笑つて机の引出しに手をつゝこみよつたぞ。あれ、千円札の束を出しよつた、一枚、二枚、三枚と下手な手付きで数えらるとおもつたら二十枚だけ抜いてユリ枝さんに渡しよつた。あれ／＼、ユリ枝さんがスカートをまくつたぞ、はゝあ長靴下のガーターを外してお札を靴下の

中へかくしとるぞ！あれじやへソクリやなくて、モモクリかいな。

たしかあの金は、今日、化粧品工場に渡さんならん代金やがな、イカレボンチめ、むちややがな、僕はユリ枝さんが、七千三百円の月給に似あわない派手なニューヨークを装っている秘密のナゾがとけて嘔然とした。こんちくしょうめが、僕の二ヶ月分のサラリーをかるくイカレボンチからまきあげるとはなんたらこつちや。彼女こそ断然クビにすべきじや。

ドン／＼、コン／＼、僕は憤然と扉を叩いた。どうやらやつとこんどは聞えたらしい。なんやらどさくさとした音が一しきりすむと

「誰や？」

「僕だすがな、部長はん居やはりまんのか」

「その声は能登はんやな？、ちよつと待つてや、すぐあけるさかい」

ガチャ／＼、ピンと扉の鍵を外すと、

「なんだんね、急な用だつか、僕いまもつても忙しいんねんけどなあ」

「なにしてはるんだす、また競馬の予想表だつしやろ」

わざと白ぼつてくれてカマをかけたなら

「シート、大きな声出したら、オヤジに聞こえるがな、まあ入つてんか、ちようどユリ枝ちゃんもオヤジの書類をもつて来てるさかい」

入つてみたら、鍵穴から見えたエロ雑誌はどこつかへかくしてあり、机の上には、社長のハンコを押した販売計画表がのせてあつた。

「あら、庶務課長ですの、お忙しいですわねオホホ、部長さん、じやあいまの書類お

願いますわよ」

僕と入れちがいにユリ枝さんはすつと出て行つてしまつた。煮ても焼いても、アブレ娘は僕の手にはおえない。

「……なんやねん、能登はん、えらいむつかしい顔してはるやないか」

「かくさんでもよろしおます、みな見ましたさかいな、えらいえゝことしてはりましたな」

「うーん、しろうがない、ほんならあんたも一杯呑みなはれ、オヤジに見られたらうるさいさかい、酔うたらあきまへんで」

なにを感じがいしているのか、イカレボンチが机の下からしぶ／＼ひつぱり出したのは、本物のジョニーオーカーの四合瓶だつた。三平社長は厳格なクリスチャンを売物にしている。但し、風間だけの禁煙禁酒禁慾だが、化粧品業界では、あつぱれの人格者として有名だ。社長室には灰皿もおかない方針だから、宣伝もすぎるときゆうくつになる。その社長の御曹子が真風間から会社でウイスキーを傾けるとはおどろいた。

湯呑茶碗にドク／＼注いでくれたのをちよつと口に含むと、僕はハテナ、と首をひねつた。どうもおなじみの一杯四十円也の芋酎とそつくりの味とにおいがする。

「このウイスキーなんぼでした？」

「三千円やつた、どや、安いやろ、いまだきに本物のジョニーオーカーはめつたに手に入らへん」

「どこで買わりましたんや？」

「ほら、あんたも知つてるやろ、神戸の三宮の××人の店やがな」

「なに言うてなはんねん、むこうはインチキ物の専門屋だつせ、ようこんなアホな……」

……」

「へえ、能登はん、これ本物とちがうのんか」

「情けないなあ、飲んでてわかりまへんかこれはあんだ、焼酎にちよいと茶色のエッセンスをほりこんだ立派なインチキ物だつせ」

「うーん、しもた！……能登はんも殺生や」

「なにが殺生だんのや」

「あんだがう教えへんだら、このウイスキーはいつまでも本物のはずやつたんやがな」

なるほど、このイカレボンチなら、ユリ枝さんが膝にのつたら二万円ぐらいすぐ出すわけだ。

「まだかくしてはるんことがおまつしやろ、白状しなはれ、社長にはぜつたい言わへんさかいに……」

「ほんならこれかいな？」

こんどは泣きつづらで机の上にぞろ／＼並べた写真は、僕の胸を思わずドキンとさせた。

「えらい写真をようけ集めましたな、こりや男も女も外国人だつしやろ、日本人のモデルやつたら、こないえげつないポーズを撮らしまへんで、……ハハア、ハルビンか上海で撮つたやつだすな」

「こんどはウイスキーとちごうてバリ／＼の本物だつしやろ、能登はん？」

「なんぼとられなはつた？」

「一枚五百円」

「うーん、五十枚より多いようだすなあ」

「七十三枚あるねんで、あんだの好きなんがあつたら、四五枚あげまつさ」

イカレボンチは自慢そりに、ひくい鼻をうごめかした。こんなのがやがて第二代社長となるんだからボンカン化粧品会社の将来はたよりないことおびたどしいはずだ。

「部長、実はねえ、こんど入いれた若連中のことだすが、さつき、社長にお辞儀したとかせんとかで、社長がクビにするとかせんとか、かん／＼におこつてはりますすがねえ、どうしたもんだつしやろ？」

「オヤジのかんしやく持ちは昔からのクセやがな、あしたになつたらケロッと忘れてるさかい、なんにも心配要らへんがな」

「うけおうてくれはりますか、せつかく入れて三日目にクビにもでけしまへんしなあ」

「オヤジがまだひつこりいゝよつたら、僕が話をつけにゆくさかい、能登はんは知らん顔してて大丈夫やがな」

「それなら安心だすがなあ……」

「さつきえらいにぎやかに笑つてたなあ、なんやつたんや？」

僕が馬の一件を話したら、イカレボンチめ、急にそわ／＼と尻をあげかけた。

「能登はん、もうそれ見られへんやろか？」

「あきまへんわ、守衛がホースで水をかけたら一べんに縮みよりましたで……」

「ふーん、守衛がホースでホースのホースに水をかけたんか、僕かて見たかつたのになあ」

御曹子はざんねんそりにチエツと舌打をした。これだから、会社の誰でも社長を煽たがつて、イカレボンチに親愛を感じる。人間の頭のたらんのに相手になつていゝと肩が凝らないでいゝ。

三

そよ風が窓から流れてくる。

「金魚、金魚、金魚はいらんけえ」

「金魚、金魚、金魚はいらんけえ」

「金魚、金魚、金魚はいらんけえ」

「金魚、金魚、金魚はいらんけえ」

「金魚、金魚、金魚はいらんけえ」

「金魚、金魚、金魚はいらんけえ」

「金魚、金魚、金魚はいらんけえ」

「金魚、金魚、金魚はいらんけえ」



と眼の下の道路を派してくる金魚売りの声
もうとくと気持のいい眠りをさそう。風
弁当を食った僕は、社長の留守なのをさ
わい、靴をぬぐと両足を机へあげた。椅子

つつた。さあ鉄砲でも矢でも持つてこい。
とつぜん！耳元でガチャン、バリ／＼と
いう物凄いい音がしたとおもつたら、寝てい
る僕のデボチンに、ボカーンと猛烈にあた

に頭をもたらせ

朝刊を顔の上へ
掀けるといつの
間にか、ぐう

／＼眠りこんで
しまった。課の
若い連中にはそ

れ／＼適当に外
出の用事をこし
らえて出してや

つた。男連中は
この間から大阪
スタンドのプロ

野球の話ばかり
しているし、タ
イピストの女の

子二人は、大劇
の春の踊の噂に
夢中だから、課

長たるもの大い
に粋を利かした
つもりだった。

ついでに扉の
外に「会議中面
会謝絶」の札を

ぶらさけて、内
側から鍵をかけ
て、覗かれんよ

うにハンドルか
らハンカチを吊
て鍵穴をかくし

つたものがある。

あれ／＼、いよ／＼第三次世界大戦のは

じまりか、大阪の上空で水素爆弾でも爆発

したんかいな、とびつくりして眼をさまし

たら、机の上にボールが転がり、窓硝子が

こなみじんにわれていた。

「こらつ、誰や、気をつけんかい」

僕はヨダレをふくと、窓から首を出して

どたと、安ぶしんのバラツク会社中に靴音

ひびかせて社長が帰つてきた。僕の顔を見

るなり

「お、能登君、せがれは居るかい、三太

郎、ちよつとわしとこへ来てんかい！」

株式会社といつたつて、税金のがれの資

本金十九万五千円、社長以下同勢五十八人

しかいないんだから、社長がドラ声を張り

あげる方が歩いてよびに行くより手つとり

早い。

「なんだすねん、お父さん」

僕は板壁一重となりの社長室の話し声に

聞き耳を立てた。社長がイカレポンチを呼

ぶときはたいがい風雲急を告げている。又

クビキリさわぎかいな、それとも給料値下

げかいな、とにかくあんまり景気のえ／＼話

ではなさそうだ。

「えらいこつちや、三太郎、ほら、こない

だの市会議員選挙のときの費用なあ、ごま

かしたんがバレたんや！それに、わしを担

いどつた奴がどえらい違反やつとつた、今

日の風警察にとろ／＼あげられたちゆう噂

やがな」

「どないするつもりだんねん、お父さん」

「そない落ちついてたらかなわんがな、お

前になんぞえ／＼知恵ないか」

「弁護士が飲み友達になんぼでも居てます

がな、電話一本ですぐ飛んできますわ」

「た、たのむわ、三太郎、なんとか助けて

くれ」

「その前に約束しなはるか、これにこりて

もう二度とつまらん選挙みたいなものに手

出しせんときなはれ、化粧品屋はやつぱり

商売に精を出してたらそんないらん心配せ

んでもよろしおますのや」

「うん」

僕が腕組みして考えこんでいたら、ドタ

「五十万も百万も、提灯屋やら印刷屋やら自動車屋にバラまく金があつたら、うちの社員に月給をもうちよつと上げることだす」

「うん」

「月給が安いさかい、事務所でも工場でも誰も本気で働く気がおまへんわ、ボンカン香水もボンカンクリームもこのごろちよつとも売れてやしまへんで」

「うん」

「僕の部屋へは誰でも気安う遊びにきてしやべるさかい、儲からんことがみんな筒抜けだすわ、しつかりしなはれや」

「うん、わしがまちごとつた」

「それから一つ、お父さんのワンマン政治にみんな愛想つかしてゐることを知つては

りますか」

「こらつ、わしに向つて何ぬかすねん！」

「さあ、それがいきまへん、お父さんは、製造でも販売でも広告でも、その調子で、一つも人の言葉を聞かんと、自分の思う通りにしてなはる、なにを言うても、わしの会社はわしの思う通り切りまわすとはねつけるさかい、みんなアホらしなつて、せつかくえゝ計画があつてもお父さんに相談しまへんがな」

「うん、これからは氣をつける、しかし三太郎、お前かて、ずいぶんアホな金使うてしようもないダンスやの、マージャンやの、競馬やのに走りまわるのはやめとけ、お前の月給で遊ぶのやから文句はいゝとらないが」

「あつははは、お父さんが秘書のユリ枝ちゃんに禿頭撫でさせて目尻下げてはるのはどないだすかいな、おとといの晩、曾根崎のホテルへ入つて行つたおつさんは、後姿はお父さんにより似てましたで」

「知つてゐるのか」

「蛇の道はへびだつせ、ヒステリーのお母さんに知らたら納まらんさかい、僕がうまいことユリ枝ちゃんをやめさしましたで、手切金の意味で二万円ほどやりましたけどな」

「うーん」

「どうだす、お父さんも孫娘みたいな女の子とホテルへ行つたりするのはもうえゝかげんにやめて、世間なみに俳句でもひねりなはれ、若いときに苦勞かけたお母さんを

つれて、金婚式のお祝に九州の阿蘇山でも見に行つたらどうです、それぐらいの金なら僕が不自由させませんかな」

「そんなら、三太郎こんどこそわしに代つてボンカン化粧品会社を切りまわしてくれるか」

「やりまひよう、イカレボンチの芝居をうつのもずいぶん苦勞しましたで」

「そらそうやろ、わしの好きな浪花ぶしの大石内藏之助かて、鳳アンドンといわれて祇園の一方であそんでた時分が一番つらかつたのやさかいになあ、あつははは」

僕はボカンと口をあけたまゝ、窓の外のコバルト色の青空をながめた。どうやら、イカレボンチの本家本元は、僕の方だつたようである！
(終)

艶色ユーモアものかたり

金さん欲心持す

嶋勝久



あらかじめ御諒承願いた

さて、先にも云つた様に金さんは六十になつて八人目の妻を嫁取つたと云う位いの精力家で、今は私の会社の守衛長だが、以前は、つまりこの話のあつた頃はもう二十年も前の昭和初期、金さんが精力的にも最も爛熟していた消防手時代のことである。

初夏——金さんはその日の勤めで、夕方から監哨台に登つて火の見をしていた。

四度目の妻を急性肺炎で亡くして間もない頃でもある。「蒸し暑いなア」金さんは独りつぶやき乍ら額の汗を拭つた。

どんより朝から曇つていた鉛色の空は、

水蒸氣を飽和点近くまで吸つて重々しく垂れている。蒸し暑く、そして妙になまめかしい黄昏だつた。

金さんはそんな時、ふと亡妻のことを思つてぶるつと駄をふるわした。燈明あけにはまだ大分間があつたので、実の処、今までじつとこらえていたのだが、何しろ人一倍の絶倫家では、三日も女に接しないと鼻血が出ると云う程の金さんだから、一ト月も禁慾生活が続けて来たと言ふのは、金さんとしては、よくよく四度目の妻君に参つてゐた証左と云える。

「あア」金さんは変にやるせない溜息を何度もつくと、四度目の妻君の面影を臉の底に描くのだった。トミ江。トミ江……あゝいゝ駄をした女だつたがなア、と金さんは思ひ出すのである。

あたりは次第に暮れ出して、こゝろなしか、妙に艶めいた微風が頬をなでる。金

さんはいよいよたまらない気持ちだつた。
「おやッ……」

その時金さんは、監哨台の下を通る女の姿に何気なく眼を止めた。女は同町内の生花の師匠で、酒井寿賀と云う美人で評判の若後家だつた。寿賀はこれから銭湯へ行くらしく、真鍮の金盥を胸に抱えるようにして通り過ぎて行つた。

「うーむ」

寿賀の後姿を高い処から見送つて、金さんは小鼻を掻き乍ら唸つた。

酒井寿賀——それは金さんが、かねてからホッホッ浮気心を湧かしていた女である。年は二十八、後家になつてまだ一年と一寸、浮世絵から抜け出したとは寿賀のような女のことだ。歩きたびになよなよと揺れる腰の線が、好事家にとつては致命的な程の魅力である。「うーむ」金さんは二度唸りを上げた。

「お寿賀師匠の姿が横町に消えると、代つて若いアベツク者がやつて来た。もう薄闇ではつきりとは見えないが、女は色物の短いスカートをはいて、そこから二本の素足が夜眼にも白くぼんやり浮いている。」

「畜生！」

そこで金さんは思わず怒鳴つた。アベツク者がいきなり抱き合つて接吻したからだ薄闇だからと云つても舗道の真中である。何んて心臓野郎だ。と考えるよりイマイマしさが先だつた。

燃え木にガソリンと云うのもこのことだろう。罪なアベツク者である。

三十分もすると、街燈の仄明りに寿賀が風呂から帰つて来るのが見えた。金さんはいよいよ決心した。

「おーい」

交替時間には間があつたが、金さんは下へ声を掛けた。

「何んだ？どうかしたのか」

下の溜り部屋からノコノコ出て来たのは同僚の牧と云う男。

「一寸替つて呉れ、腹が痛たんでやりきれないんだ」

出鱈目を云つて金さんは梯子から降り立つた。

「そりや悪いなア、その辺で寝転ンどれよ」

牧は氣さくに云つて金さんと交替した。

× × ×

十分の後——荒々しい勢で酒井寿賀の家に飛び込んで来た金さん。

「師匠ノ師匠は居ないか」

「あらッ、驚くじやないの、どうしたのよ金さん」

もう床に這入ろうとしていたのか、お寿

賀師匠は解きかけていた帯をいそいで締め直し乍ら奥から出て来た。

「これから表戸を下して寝ようとしていたのよ。困るじやないの、夜分女世帯の家に来るなんて……」

そう云い乍らも寿賀は、茶ぶ台の土瓶を取つて茶を入れた。金さんはそんな女の白いうなじを上から見下していたが、いきなり柔い肩を掴んで自分の胸の中に引寄せた。

「あれッ！何をするのよ金さん」

お寿賀師匠は不意の出来事に驚いて身悶えたが、金さんは突嗟に、女の抵抗の微弱なことを見抜いていた。

無理もない。お寿賀布匠も三十前の女体を持て余していたのだ。

「師匠。師匠おれは師匠が好きなんだ。だから師匠……」

「それ本当？金さん！」

寿賀の瞳がきらりと光つたかと思うと、

タマシイさいれんの音。
「火事だア。火事だア」

ギョッ！哀れなるかな。途端に金さんは職業意識を取戻してリッ然とした。

「しまッた！」

金さんは側に脱ぎ放して置いたズボンを片手にひつ掴むと、まだ夢心地から醒め切らない半裸の壽賀を残して表通りに飛出した。

「火事は何処だ！」

何時の間に集つたのか弾次馬の群を掻き分けて、ホウホウの態で漸やく署の玄関迄駆けつけた。

消防車は次から次へと出動している。こりや余程大きな建物が燃えたに違いない。

「安岡！何んだ！そのザマは」

金さんが車の間にはさまつてマゴマゴしている、突然後方から一喝が来た。

「はッ！」

金さんは初めてわれに返つたように、直立不動をしてから自分の身装に気がついて驚いた。

「あッ！」

何んと云うことだ。周章狼狽の余り、金さんは恥かしくも下半身を裸にしていたのだつた。

しかも、ズボンだとばかり思い込んでしつかり掴んでいたのは、お寿賀師匠の真赤なゆもじだつた。

翌日、金さんが署を懲戒免職になつたのは云うまでもなからう。ついでに断つて置くが、その後お寿賀師匠は、金さんの五人目の妻になつて五年目に心臓病で亡くなつたそうだ。

(おわり)



三太郎と

どつと其の揚に崩れるようにうち倒れた。瞬間。寿賀の雪よりも白い内股の豊かな肉が、痛い程金さんの眼を刺激した。折も折一ブウ！ブウ！突如！眠りを醒すケタ

鬼女乙早
きゆし磨須絵



唄次郎吉囃子

庭樹の方へ、惹きつけられていった。
「新七、これほど命がけで想うて居るのに、お前には、妾の気持が判らないのかえ」
そう言う声は、確かに主萬兵衛の一人娘、お美乃の可憐な囁きである。

「何故黙つて居るのです。真柄様との祝言は此の間結納を頂戴した時、日取も定められているのですよ。夫婦の盃を取交わしてしまえば、妾は京之進様の妻、二度と再びお前と逢うことは叶いませぬ。それを承知でお前は厭じやとお言いな？意気地なし！何故、何故妾を今の中に連れて、一緒に逃げてはくれないのです！」

「お嬢様！新七は勿体のう御座います。多寡の知れた手代風情の私奴を、それ程御寵愛なすつて下さるお氣持を思ふと、新七は死んでも本望で御座います。いえ、私とて譬え手鍋提げてもと、思わぬ目とて御座いせんが、海山にもまさる旦那様の御恩をふみにじつて、義理に背いた駆け落ちなど……私にはとても……」

「判つたわ！お前は妾よりか、他に言い交わした、馴染みの女があるのでしょうか。それでなければ、妾がこんなに苦しんで、心に染まぬ祝言まで擧げようとしているのに、無情い素振りは見せぬ筈です」

「め、滅相な！それはあんまりなお嬢様の邪推。新七は決してそのような……」

「覚えは無いとお言いな？だつて婢達の噂によると柳橋の桔梗屋のお由加さんは、新七に首ツたけだと言つています」

「嘘です！お嬢様。新七は花街の界限には、お店の御用で二三度参つただけでございます。お由加さんなど名前も知りません」

「ほんと、新七……？」

「なんで嘘を申しあげましょう。卯の月を迎えて二十五歳の新七が、生れて始めて恋知りしたのは、お嬢様たゞひとりでございます」

「新七、羨ましい！」

胸の辺りまで生茂つた紫陽花が、声より大きく薄闇の中に揺れて、手繰り寄せられたように、しつぽりと胸を

カチ……と析の音。

「四ツで御ざア……」

屏越しに聞える、番太の眠そうな声が、次第に夜の静寂に吸い込まれて行く頃。仄かな春の、星明りを頼り

にして、主人の言付けで、真木戸の樞を確かめに來た丁稚の次郎吉は、白い土蔵の物蔭まで來て、ふと、草履の蹠音を忍ばせた。

「……………」

若い男女の逢曳であらうか、人目を憚かるひそやかな囁きに、次郎吉は、はやる息をこらえ乍ら、周の聴える

合せる男女の影。夜目にも白いお美乃の顔が、新七の頬に触れたかと思うと、すぐに形のよい鬘を、男の頸筋に埋めていつた。

次郎吉は其の濡れ場に、蜘蛛のように土蔵の壁に軀を着けた儘、凝つと夢見る心地で魅せられて居た。

人眼を忍んだ、主従の恋！……

何となく動悸の亢まる、十七才の次郎吉の軀に、言ひようのない熱い血潮が湧きさかつて来て、眼は、恍惚とした男女の抱擁に焼き付いた。

「ねえ新七、妾は覚悟を定めました。こんなに深く馴れ染めて居乍らも、因果に添い遂げられない妾達。いつその事、真柄様のものにならない中に……妾は此のからだを……お前にあげようと思うのです」

「え……」

「そうすれば、妾も嫁いで行つても幾分なりと諦めがつきます。幸い、お店の者も皆寝就いた様子。……さ、新七、土蔵の鍵を渡して置きます」

四辺を見廻したお美乃は、躊躇いがちな新七の手を取り、ふたりの軀を結び付ける、重い鍵束をそつと手渡した。

「お嬢様！それほどまでに、この新七を……」

戦く手のひらに鍵束を握りしめて、新七が固い唇を呑み込むのへ、

「もう何も言わないで……たつた今妾の魂はお前のものの女の貞操は命というけれど、愛しいお前にやるのなら、妾は未練はありません」

お美乃の咽喉を突いて出る、恋情をこめた炎の言葉を新七は皆まで訊かないで、ふら／＼と土蔵の中へよろめいて行つた。

幾十種類の鍵の中から、土蔵の合鍵を探し出す間、小手先の類える新七の影が、白い壁際に対照的に映えて、其の狼狽の焦立しさが、たて／＼はならぬ鍵の音を、母屋の方へ響かせて行く。

「新七！静かに……」

傍から眼配せして、落着きも無く、男の手許を覗き見るお美乃が、待つ程もなく、やがて彼女の表情に、安

堵の歡びが閃めいた。

扉が開いたのである。

真ッ黒く口を開けた、穢臭い陰気な土蔵の中へ、お美乃と新七がもつれ合つて姿を消した後、其処まで目撃を續けて来た次郎吉は、ふた／＼閉じられた扉の音に、ガツカリと失望の溜息を膝に落した。

と、其の時、微かに暖きの聞える、母屋の臥所の方から、

「新七、新七はおらぬか！……」

急しく吐月峰を敲く、煙管の音と同時に、伊勢屋の主萬兵衛の腹れた声。其の声に次郎吉はハツと身を翻えして、物陰へ向つて馳の走る救急さで逃げた。

土蔵の扉が開いたからだ。

新七は、雪駄の音を殺して、暫く母屋の気配を窺つて一寸、屑物の乱れを気にしている様子。お美乃は其の後姿へ、怨しそうな興醒めた声で、

「新七、妾は此処で待つていますよ」

生娘の囁きは未練いづばいのひびきがあつた。

「はい、手間どらぬ御用事と思います。用事さえ済ませば、新七は、すぐに……」

参りますと、返辭を切無い語尾に消して、孟宗竹の植込のある、萬兵衛の臥所へそ／＼と去つた。

——四辺がふた／＼びひつそりとなつた。

が、次郎吉は物陰に蹲つた姿勢を除々に伸して、白いお美乃の襟肌を呑んだ、土蔵の隙間へ熱い眼を投げた。

頬が火照つてきた。

（今だ！新七さんには悪いけれど……）

ムラムラツと、淫らな想いがむらがり湧いて、四肢に残忍な獣血が叫んだ。

次郎吉は、素早く草履を脱ぎ捨てると、顔に掛つた蜘蛛の糞をはらい。ベツと大膽な唾を吐き、其の儘、にくに飢えた山犬のように、土蔵の中へ狙い寄つた。すると

「新七かえ……」

甘い囁附の匂いがして、胸を暖がせるお美乃の聲が、人口の氣配を聞き答める。

「早かつたのね。妾、お父様叱られて居たのかと思つ

て……」

そんな声の弾み方には、愛しい手代をふた／＼び迎えてこれから軀を与えようとする、一途な処女の炎が燃えていた。

次郎吉は、爪先に力を入れて、闇の中に大理石の肌を擦して行く。纖弱い女体との距離が迫つてきた。……手の届きそうなお美乃の喘ぎは、女をじらす術を知らない、男の堅氣を知り尽して居るだけに、初心な心根をもどかしく思い、膚に触れた固い手首を、遺漏無く、胸のふくらみに当てがつてみて、

「あッ……」

と、本能的に、しなやかな脚許を纏にした。

「だ、誰です！お前は……」

お美乃は、扱帯を掴んだ手を打ち振り、そり苛立つて叫び乍らも、片手では、逃げ場を急しくまさぐりつゝ、及び腰で闇を見据えた。

（新七ではない！忍び者だ！）

咀嚼に感じた恐怖と愕きで、お美乃は後へしざつて行つたが、相手の凌辱を早くも察して、壁を小橋に、屹ツとなつて身を構えた時、次郎吉は、肉体を喰う悪魔となつて、お美乃の軀に襲い掛つて行つた。

「あッ！誰か来てえッ……」

叫ぼうとしたお美乃の喉輪を、次郎吉は強が締めあげて、手荒く柔肌を組み敷いた。

——汗の香、黒髪の香、無慈悲に貪られてゆく、無垢な軀のふりしぼる泪が、土蔵の床を濡らすのだつた。

星空には羽薄きの底い夜鳥が、不快な啼声を掠めていた。

二

土蔵の中では次郎吉が、力ずくの非道を揮つてお美乃の玉の肌を自由にしている時、虫が知らせるとでも言うのか、新七は、主人の前に膝間つき乍らも、浮かぬ顔で淡い行燈の灯を浴びて居た。

「判つたな、新七？」

「はい」



とゆほ

て、苦々しい胸で臥所を引き退ろうとする、
「新七」と萬兵衛は、呼び止めて
「夜風は冷えよう、さ、これで熱い蕎麦でもナ」

「ぼん……畳に小粒を包んだひねり饅頭をありがたく頂戴いたします」

新七は、敷居際に畏まつて、萬兵衛にお礼の頭を低く下げたが、一步臥所の外に出ると、すぐに、土蔵のお美乃の姿が脳裏に浮かんだ。
(お嬢様！ 済みませぬ。待草臥れたことでしよう)

そう思うと、孟宗竹の植込を廻る新七の足許は疾くなつた。
飛ばせば造作はあるまい流し按摩の遠い音色に、咄嗟に辻鴛籠を想い出し、主命の道中を、譬え半刻なりとも疾くして、其の間を、お美乃と二人で楽しむ心算だつた。いや、今の新七にとっては、主命より、恋の方が大切であつた。

ととととツと、小走りになつて、あわや土蔵の踏石に新七の足が掛かろうとした時、中から忍び寄るのももどかしげに、高髻も乱れた軋やかなお美乃の軀が、どツとばかり崩れ掛つて来た。
「新七！」

「ど、どうなすつたんです、お嬢様！」
「と胸許を受け止めたものゝ、急き込む声は戦っている。」

「遅かつた、遅かつたわ、新七！ 何故もつと早く……妾口惜しい！」

「そ、それでは誰か、土蔵へ？」
打つて変つたその様子から、尋常でないと思つた新七思わずドキツと、胸を打たれて、扱帯の解けた、お美乃の姿をまじくんと視る。と、俄かに華奢な項が慟哭に顫えて、力無く、新七から抜けて行くと、二三歩歩んだ後姿で、

「新七、妾の軀に触れないで。後生！……藏されたの……妾はもう生娘ではありません」

「えッ……」
「……お前と入れ違ひに、次郎吉が……」
「えッそれでは、あの丁稚の次郎吉奴が！」

鴛籠返しにそうめいて、其の場に立ちすくんだ新七は無念の拳しに、憤怒の血潮を逆流させた。失敗つた！ 遅かつた！……

新七は、ぎり／＼と齒の根を鳴らした。やつと、手の届いた垣根の花を、不意に横合から手折れたような、諦めきれぬ、深い悔恨が突き上げてきた。

三

お美乃を手籠にした、丁稚の次郎吉は七年間のお店奉公を棒にふつて、其の儘木戸の櫓を開けて、何処となく姿を晦してしまつた。

何しろお店衆の間でも、「鳳」と渾名をされていただけに、常日頃から、敏捷で然かも小賢しい次郎吉であつた。が、一方お美乃にしてみれば、八丁堀の同心、真柄京之進との祝言は、後、旬日に迫つていゝというのに、不淨の軀を、千代重ねの白無垢に秘めて、三々九度のおさめの盃を、果して、取り交わしてよいものであらうか。

新七は、鴛籠に乗つても、そうしたお美乃の事が頭に一杯で、片刻も心の安まる暇はなかつた。間もなく、
「お客さん、柳橋で御座す」と言う鴛籠舁の声に、我れに還つた新七。

吻ツとして、垂れを掲げて見ると、夜は何時の間にか狭霧に濡れて、更け、漸く名代の花街も御蟲の大尽を送つたらしく、粋な爪弾きの三味線の音歌声もやんで、何

「桔梗屋のお内儀に、それを渡してくれ、ば、仔細はちやんと認めてある故、委細返事はしてくる筈。それでは御苦労じやが、これからすぐに行つてくれるか」
萬兵衛は、新七が、結び文を懷中にと、何故かほツとした様子で、枕許の煙草盆を引き寄せると、ボンと一ツ雁首を叩く。
「老たとは言え、娘ほども歳の違ふ、柳橋の売れッ妓のお由加を、黄金の力で困い者にしよと、血道を擧げるだけのことはあつて、美食に塊つた萬兵衛の皮膚は、旺盛な情事を偲ばせる、花街の鬚げが泌み付いて居る。それも、三歳越しの桔梗屋通いで、由加とおの艶聞は、もう口さがない小婢達の耳にまで入つて居る様子。」
今夜の使いも、多分お由加を口説落す、因果を含めたお内儀宛の、手懷けを企んだ結び文だらうと思ひ乍らも行けば必ず流眸を送る、艶治なお由加に、ふと眉を寄せ

処かのお座敷帰りらしい、若い芸者や雛妓達が、賑やかな嬌声を残して行く。

「鴛籠屋さん、急がして済まなかつたね。これは少いけど、ほんの酒代」

そう言つて、新七は、鴛籠屋に志の鳥目はずみ、辻の祠に点つてゐる常夜燈を額で促した。

「へい、そいつアどうも……じやア遠慮無く旦那」

鴛籠屋はニタリと、舌舐ずりをして相棒と見交わす常

夜燈の下。其処には、油障子に「おでん燗酒」お馴染み

相手の屋台店は、既に暖簾の中に人影も見えて、頻りに

七輪の下を煽ぐ団扇の音。

新七は、其の前を通り掛つて、ふと、小急ぎの足許を緩めた。

暖簾の中には、地廻りらしい遊人二人、一人は頬冠りやぞりを造つて四辺り憚らぬ女の噂。

「こり、爺つあん！お前えはそう言うけれど、柳橋でも

桔梗屋のお由加と言やア、ちつたア羽振りの利いた芸者だぜ。それアとんだ眼鏡違えだ！」

「ところが、本当も本当、お由加姐さんの方から首ッだ

けなで、今にも、押掛け女房になりかねない様子。それに噂によれば、何ンでも其の情人と言うのが、伊勢萬

の旦那が使つて居なさる、生ッ白い手代だというから、

愈々話は面白いじやア御座んせんか」

「すると、伊勢萬の身請話しア、一体え何うなるンだ？」

「其処で御座んすよ。啼かない驚を啼かしてみたい色恋の道。幾らお由加姐さんが、良い返事をしなくても、相

手ア金に糸目は付けない身分。手代とできて居る事を、薄々と感じた伊勢萬の旦那は、今度はお内儀から口説落

そうと、白髪頭を下げて居なさるとか、まア此処暫くが見物ですわい。は、は」

新七は、はッとなつて、屋台店の噂から逃れるようにに

和な花街の軒下へ走つた。身に覚えの無い事を斯うまで大袈裟に吹聴される世間の五月蠅い眼の中では、今夜の使いが、又どんな風評を立てるかもしれないと、往来交

「今晚は」と、土間に佇んで声を掛けると、奥で燗番をして居た大年増の女将が

「おや、新七つあんじや御座んせんか。まあ、おめずらしい！」

不意に訪れた伊勢萬の手代に、お女将は、如才なく愛想のいゝ鉄漿を見せて、朱羅宇の長煙管を膝許に置く

と、

「さあ、どうぞ、上つておくんなさいな」

腰を浮かして、すぐに絹座布団を進め、襟を合せて座り直した。

「ほんとに、暫くだつたじや御座んせんか。偶にはお由加さんに、顔を見せてやつて下さいよ。ほ、ほ、今晩

わね、頭痛がすると言ふもんだから、御座敷の方は断つてあるんですよ」

と、苦勞人の女将は心得え顔で、茶道具を揃える手も

怠めず、そつと二階の芸者部屋を仰ぎ見る。凶星を差した心算なのだが、新七は、そんなことには無関心で、早く用件を片付けたい

と、切り出す機会を窺つて居る。

其処へ、二階の階段がミシ／＼と鳴つて、誰かが降りて来た様子。途端に、

「あら、新七つあん！」

と、お由加は、虫色玉に紅をさした口

許を綻ばせて、にっ

と華奢な新七を見守る。派手な寝間着の

上に、襟附の黄八丈

の温袍を羽織つて、

持病に臥つて居たとはいえ其の蒼白く凄艶に冴えた容色は、

さすがに柳橋の売れッ妓と謳れた、押しも押されぬ貴婦があつた。

お由加は、固くなつて座つて居る、長火鉢の前の新七の傍らに、鬘の遅れ毛を掻き上げ乍らにじり寄つて来て

「女将さん、何故妾にちよつと知らせておくれでないの……」

精一杯の不満の眼差しへ、

「恨むかい？」

「知りませんよ！」

お由加は、故意とそつぽ向く。

「ほ、ほ、だつてあの病氣に、男氣は禁物だと言ふじやないか。折角おさまりかけたのに、又、癪を起させちや悪いからさ」

「まあ、に、く、ら、し、いッ！」

「あ……いッ！痛いじやないか、ホラ、斯んな爪の跡がついた。ひどい猿公だよ」

「え、え、なんとでも……」



と、婀娜な猿公が身をすねるのへ、女将は、緋くたつた新七を、口をすぼめて見返り乍ら、小腰をかがめて、二人に、

「では、ごゆつくりと、お楽しみ」

女将は、流石を眼配せにしてお由加に、頼みましたよと潮が退くように微笑つて起つ――。

後には新七とお由加の二人が、長火鉢を前にして、沸騰立つた鉄瓶の湯の音を他事のように、暫く、互いに

しゆき



遺瀾無い情思を育むのである。新七は、主人の結び文を出そうと思ひ乍らも、氣の利き過ぎた女将に去られて、所在無げに顔を上げると、ふと其処に、有明行燈の幽艶な灯影に映えた、熱つばいお由加の柳の眉を覗た。と、

「新七あつん。……」

忍び声に愛しく叫んで、お由加は、身も世も無げに新七にもたれ掛る。沈丁花の鬘附が霞郁として匂い、肌に移つた優雅な麝香が、妖しく堅氣に煩悩を呼ぶ。

「今夜は遅くなつても、いゝんでしうね」

お由加の胸には、氣懸りな男の本音が知りたかつた。辻の練馬に「新七、お由加」と相合傘の戯画までされた、腹のたふない界限の評判に対しても、意地でも相手の新七を、むざむざとお美乃に渡されはしない。

「ねえ訊きたいことがあるんですよ」

と、陰影の深い眸許を翳ませて新七の手に、白い攫やかな指を絡ませるだが新七は冷酷なくらいに膝を畏つて

「何んな事でしよう？ 私にはお店の御用があるんですが」

「その御用なら察して居ますよ。旦那は旦那、妾は……妾。えい、じれつたい！」

と、お由加は仇に背肌をすり付けて簪の脚で邪慳に髪を掻いた。戸外は霧で包まれているのか更けた街には人の聲音も絶えて微かに犬の遠吠えが、物寂しく夜氣に余韻を曳く。

其の時お由加は、何かの氣配を感付いた様子で、懐越しに聴耳をたてた。誰か格子戸を開けたらしい！……と思ふ間も無く、二人が軀を離すのと同時に、眼の前の襖が手荒く開け放たれて、意外や万兵衛が、天から降つて湧いたように、

「新七！」と喚めいて這入つて来た。

「あッ！だ、旦那様！何うしてこれへ」

咄嗟に虚を衝かれた驚愕で、おろろろとなつて間諷附く新七を、嫉妬で眼窩を引き吊らせた万兵衛は、憎々しげに見下して、

「何うしてこれへもあるまい。大方こんな態だろうと睨んでは居たが、よくも今日まで、忠義面の手代に化けて居たな！此の人非人奴！」

「旦那様！それはとんでもない露衣で御座います。私は今しがた参つたばかりで、それに女将さんもたつた今まで……」

と、身の証しをたてようとするのへ、

「えゝ！そんな世迷いごとは今更訊きたくはない。律義者と心を許した僕が莫迦、騙されたことより、騙つたお前が役者は上手。伊勢屋の暖簾に疵痕を付け乍ら、まだ図々しく白を切りおる！したが新七、お前のような手代には、ほとゝ僕も愛想が尽きた。二度と再び伊勢屋の敷居は股いで貰うまい」

蒼褪めた新七を見据え乍ら、傍のお由加に当付がまし、一人新七ばかりを面罵する。そうすれば、屹度お由加が氣を揉むものと、万兵衛らしい、狡猾な意趣返しに心算であつたが、突然、お由加が後を引き取るように「伊勢屋の旦那！いゝお歳をして野暮な格氣は物喰いの種で御座んすよ。一体何を証拠に、妾と新七つあんがちゝくり合つて居たと仰言るんです」

と、屹ッとなつて、開き直る。

「む！、そう言えばお由加、お前にもちよつと言いたい事がある。僕は桔梗屋に通い詰めて三歳越し、沸々大尽と嘲けられ乍らも、惚れたこちらが身の因果、色香に迷うて捨てた小判は、悪い嵩でもあるまいに、よくもお由加、僕に赤恥をかゝせてくれたな！」



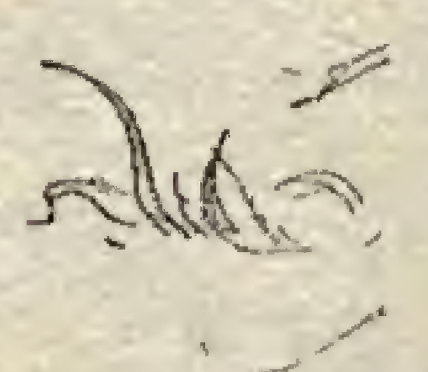
「おや！聞捨てならぬ事を仰言いますね。妾ア旦那に言寄られはしても、手練手管の不見転の真似なんか、拷問に掛けられても為はしませんよ。賤しい稼業はして居てもこれでも妾ア、柳橋じや少しばかりは素性の通つた芸者辰巳や深川辺りの、羽織芸者じや御座んせん。芸は売つても身は売らぬ、廓の評判を百も承知で、通い詰めた旦那じや御座んせんか。それを今になつて、何を妾に、罪料があると言言るんです！」

と、勝気なお由加は悪戯れもせず、啖呵を切る。さすがに万兵衛もグツと詰つて、
「よく言つたな、お由加！その合詞を忘れまいぞ」
「え、え、何んで忘れるのですか、一分の虫にも五分の魂。理不尽な言掛りに意地を曲たんじや、柳橋の芸者の名が廢りますよ」

四

チチチと、風の無い巖から、電音を聞いて驚いて飛立つ沢日雀の行方には、浮雲を背にして、重畳たる尾根の起伏を遙かに見せた、大菩薩峠が連つてゐる。石和から塩山に向つて、ジリムと照りつける初夏の甲州街道の旅人にとつて、岩魚の躍る笛吹川の溪流の瀬音は、旅情を慰めることよない憩の誘いである。

次郎吉は、襦袢に透つた道中の汗を、蟻に抜けて乾す間を、軀の汗も拭おうとして、諸肌を脱いで溪流まで来たが、ふと其処に、沢日雀の飛立つた巖の根方にピカツと輝く異様な落し物を見た。
「おやこんな所に簪が……？」



拾い上げて凝つて細工を確かめて見ると、脚は長く、桔梗の花を金銀で簪込んだ、玄人好みの派手な簪！
多分此の溪流で汗を拭つた女が、何かの拍子で髪から落して行つたのであろう。が次郎吉は簪を握り締めた儘其の桔梗の花の追憶から、遠い悪夢を慚愧の胸に蘇えらせていつた。

（あれから、五年……お嬢はんは何うなすつて居なさるだらう……？）
懐しい江戸の宵々、桔梗屋のお由加、万兵衛、新七——
「そして、夢裏にも忘れる事の出来ない、お美乃を手籠にした、土蔵の中の醜い姿が、生々しく臉に迫つて来た！」
（チツ、罪な真似を……）

舌を鳴らしたが、次郎吉の蔭いた因果な悪戯は、五年の間に、呪わしき過失の芽を萌していた。風の子息に聴けば、其の後お美乃は懷妊つて、縁談は破綻となり、頑固な万兵衛の折檻に堪えかねて、間もなく伊勢屋を逃げ出たと言ひ隠す。

（可哀想うに……生れておりやあ、今年は五歳だらうが……）

不憫な幼児に、ふと、名乗りをあげたい愛着が湧く。が、すぐに「詮無え事を……俺ア天下のお尋ね者だ！」と自嘲的に呟いて、次郎吉は、笛吹川の清い流れを手拭いに含ませて、月代の伸びた額を拭うのである。
其の有様を、先刻から巖に隠れて、凝つと注意深く窺つて居た商人風の男があつた。

紺の風呂敷包を背負い、唐様の単衣に粋な角帯を締め赤銅の墨斗を差し込んで居るところは、何う見ても宿場廻りの行商人である。

ところが、次郎吉が莞つ前の一服に、紫の煙を流して居ると、馴々しく近付いて来て、
「旅人さん、恐れ入りますが、ちよつと煙草の火を……」
と、商人は丁寧な物腰しで、火を貰い乍ら道中笠を真

深かに冠つた、次郎吉の面体を素早く確めた。
不可ねえ！……

次郎吉が感付いた瞬間、商人の風呂敷包は宙に抛られて、隠し持つた朱房の十手が、矢筈に眉間に飛んで来た！

「鼠！御用だッ！」
声と諸共に振り降ろす十手を、間一髪に次郎吉はかわして、

「しやら臭えッ！うぬア甲府からつけて来た、八丁堀の眼明しだナ！」
叫ぶや否や、次郎吉は搦つた煙管を、発止とばかり、町方の顔に投げ付けた。

「あッ！畜生！」
不意の反撃に眼明しはよろめいて、鮮血の迸り出る顔を押え乍ら、ギラリと抜いた七首の肉薄に、必死となつて十手を構え、

「だ、旦那！真柄の旦那！」
と、巖の伏勢へ合図の喚声！
（失敗つた！……）
切齒した次郎吉の白刃が、電光影裡！颯ツと一条の稲妻を描いて、視力を喪つた眼明しの頭上へ、あわや振り降ろされんとした刹那！びゅーんと凄じく風を剪つて、七首に搦んだ手練の投げ縄！

「父上、お見事！」
「ウム、京之進、それッ！」
勸声一番。息継ぐ間もなく眞首を握えば、第二の投げ縄は長蛇と躍り、小鬘を掠めて次郎吉の頸根へ！

「次郎吉、神妙に御縄頂戴せい！」
十手を懸して捕縄を手繰る、真柄伊織、京之進の父子の包囲へ、後から疵付いたむさびの源次も、躍り捕らうと隙を窺う。二条の捕縄が葛葛と絡んで、溪流を背にした次郎吉の軀を縛と捕えた。其の審手へ、血路を拓くと必殺の白刃を真向に構えた時、何処から放たれたか、非凡の吹き矢！

ブツツと次郎吉の右手に刺した。
（奈無三！……失敗）つた！と取り落した七首を、拾い

取ろうとする隙を眼掛けて、どどと襲い来る捕史の雪崩れ！

「それッ、源次！怯むでないぞ！」

伊織は部下に叱咤をくれて、老驢自ら次郎吉の脾腹に獅噛附く。折重つてどと倒れた。其の頸根を京之進が脚をむささびの源次が押え、足掻く次郎吉に縄目が掛けられた時である。

「やい、次郎吉！手前え此の顔に覚えがあらうが……」

罵倒を浴びせて忽然と養から現われた男に、次郎吉はハッと胸を打たれて、

「あ、そを言うお前へは、新七つあん」……

と、御繩の軀を起そうとするのへ、新七は矢庭に足蹴をくれて、

「ふん、其の新七ア此の通り、手前えの為に堅氣のお店をふいにしたんだ。こう、次郎吉！忘れもしめえがあの五年前。手前えがお美乃さんをきずものにしたばかりに、其の濡衣をこつちに被せられて、俺アお店はお掛い箱。それから先と言うものは、食うや食わずの生計に追われて、白浪渡世にまで零落た俺だが、原因はと言えば手前えが仕業。其の恨みを晴してえばつかり、習い覚えた吹き矢を以つて、真柄の旦那に御協力したんだが、手前えも今度という今度ア、どうやら年貢の納め時、江戸護送になりやア、伝馬町と木塚ヶ原のお磔刑場が、首を長くして待つとらうぜ！」

「何！それじやア新七、手前えは此の俺を捕える心算で」次郎吉は、無念の齒ぎりしりをキリツと噛んで、詰寄りうとして、身を藻掻いたが、京之進の十手が、颯ツと降りた。

「次郎吉！天下の義賊が見苦しかろうぞ！」

冷徹にそう言つて、次郎吉の胸をグツと押した、若い同心の十手の先には、許婚のお美乃を疵付けられた、五年前の破綻の恨みがこもつていた。

其の翌日。

五

江戸護送となつた次郎吉の唐丸籠は、小佛の関所に警護を求めて、大月の旅籠「いさみ屋」に一泊する事となつた。

何しろ、江戸八百八町を騒がせた鼠小僧次郎吉が召捕えられたと言うので、いさみ屋の前は時ならぬ見物人の山。

それを追い振るのに、源次は一人で汗だくとなつて、怒鳴り立てゝいた。

「チツ！うるせえ野郎共だ。見世物じやアねえやいッ、そんなに顔が見たけりやア、江戸のお引廻しに一緒にしてやろう！」

腰の十手を引き抜いて、今にも見物人を追いつけようとする、

「源次！騒々しいではないか」

と、鷹揚に制止して、二階から伊織が降りて来た。

「あ、こりや旦那で……。実は、あんまり見物人がうるせえもんで御座ンすから、ヘエ……」

源次は小腰を屈めて、傷付いた右の眼を、痛そうにして仰ぎ見る。

「よいではないか。日が暮れゝば、其の中に退散しようそれより源次、次郎吉の見張りを怠たるまいぞ。小仏の関所からは、特に、番頭、定番、足輕の警護の手を、明朝早く差向けるとの事。疲れておろうが、今宵ひと晩の責任のある軀。万事遺漏はあるまいが、殊更、夜半は気を付けてくれよ」

「ヘエ！其の御心配えなら、大丈夫で御座ンす。あつし



も次郎吉の後を跟けだしてから丸二年。烏滸しい言方では御座ンすが、二年の苦勞を、此処で水の泡にする程、むさゝびの源次ア馳け出しじやア御座ンせん」
「うむ、それを聞いて僕も安堵した。それでは源次、しかと頼んで置くぞ」
「へい」
源次は、小賢に霜の混つた、伊織の後姿を凝ツと見守つた。
（随分お年を取りなすつた。これも皆んな、鼠のせいなんだ！）

共に辛酸を嘗めて来た源次には、頭だつ伊織の心勞が
想い遣られて、さすがに源次も咽喉元をつまらせた。不
覚に眼頭に湧きあがつてくる熱いものをやつと舐えて、
汗を拭り恰好として、途端に、
「いッ！痛て、て……！」

指先が眼の傷に触れたのか、頓狂に声を上げて顔をし
かめるおどけ者の源次。其の素振りに
「は、は、は」と艶な笑声で、旅籠の樞から腰を浮かせた
鳥追姿の女があつた。

「むさ、びの親分。だから妾が言つたじやないの、創疵
にや伏龍肝がいちばん良く効つて……！」

阿都つばい眼差を、鳥追笠の蔭に輝かせて、粹に三味
線の調を抱えた女は、江戸からはるばると新七の後を追
つて来た、柳橋の芸者お由加であつた。

其のお由加と、源次は何か約束事があるらしく、旅籠
の小婢達の眼が遠ざかると、

「瘦我慢をしたつて、誰も褒めりやしませんよ。親分さ
んの為に、妾アわざ／＼塩山の宿で、伏龍肝を手に入れ
て来たんですよ」

お由加はそう言つて、創疵の妙薬伏龍肝の小さな包み
紙を、無理やりに源次の懷中にねじ込んだ。

「ねえ親分さん。これッぽちの貼薬一ツで、恩に着せる
心算じやないけど、石和の旅籠でお願いした事、新七つ
あんと言つてくれたんでしやうね？」

「それがお由加さん実は、言うには言つたんだが、次郎
吉に御纏が掛けられてしまつと、どうしても、入王寺の
お美乃さんを探し出すと言つて、俺の言う事は肯ねえン
だ」

「え！それじや矢ッ張り、お美乃さんを……畜生ッ！ど
うするか、今に見ておいで！」

お由加は蒼靄めて、口惜しそりに声を頼らせて叫んだ
其の夜——四ツ近い静まり返つた旅籠の隅で、源次は
妙にはしやぎつたお由加を相手に、チビリ／＼と茶碗
酒を呷つて居た

「お由加さん、もうこれ以上飲まさねえでくんな。俺ア

今晩ひとりで、次郎吉の見張りをしなきゃならねえ、大
事な軀なんだ」

源次は、いさ／＼か酔いが廻つて来たのか、でか／＼と
光つた鼻を撫で廻して、注ぐ手を休めぬお由加の前に片
手を挙げた。

「は、は、は、源次親分！お前さんも案外臆病なんだね？
多寡が雀の泪ほどのお酒を飲んで、怖がつて居たンじや
さつき真柄の旦那の前で大見得を切つた、男の啖呵が泣
きますよ」

せ／＼ら嘖つて、頻りに納屋の唐丸籠を氣にして居る、
源次の茶碗に又も満した。

「いけねえよ、お由加さん！本当にこれ以上注がねえで
くん。真柄の旦那にかたがたも言われて居るンだ」

「そりや判つて居るけどさ、い／＼じやないの。次郎吉を喫
ぎ付けて来た親分さんが、祝いのお酒の御相伴に預かる
のは、当り前じや御座んせんか。それに相手は高小手に
縛り上げられた、牙を抜かれた山猫同然の軀。少しは入
丁堀の度胸のいゝところを、見せてやつてくださいな」

と、お由加はとろけるような媚の眸で、浮腰の源次
の袖を、そつとしなを造つて指先に掴む。源次は狼狽し
た。が、四辺を見廻して人影の無いのを感じると、

「お由加さん。お前はどろしてそんなにまで俺を……？」
熱柿臭い囁きを寄せて、源次は、お由加の手首を握つ
た。

「は、は、は、野暮なことを訊くもんじやありませんよ。ど
うせ甲州街道に捨てられた妾。ひどい仕打に、女が意地
も張りも無くなつてしまえば、自棄のやんばちであだ花
さ！」

「……？」

「ねえ、親分！妾が不憫だと思ひなすつたら、もう一度
江戸へ連れて帰つて、可愛がつてやつてくださいな……」

と、お由加は遺溺無げに溜息をついて、汗臭い源次の
顔を擦り寄せたが、驚りたまつた疲労の軀に、強たか
酒が効いたと見ると、機敏に油断を見澄して、目明の腰
に覗いている、納屋の鍵を素早く抜き取つた。

「判つてくだすつたんでしやうね？ねえ親分……。おや
もう眠つて居るんですの？は、は、は、他愛無いひと」

お由加は誰言うとなく、そう呟き乍ら、醜態な恰好で
寝息をたてゝ居る、源次の傍から立上つた。土間に降り
ると、裏手の簾から、鈴虫の啼声が一面に聴えていたが
お由加の蹙音で、呼吸を詰めたようにびたツとやんだ。

(今の中に！……)

お由加の魂膽は、次郎吉を逃してやる事だつた。鼠小
僧を再び巷に放てば、新七の五年間の苦勞と、報復の悦
びが水の泡に帰してしまふ。其の驚愕と落膽こそ、翻い
られぬお由加の恋の意趣返しなのである。

鍵を開けると、お由加は用意していた手燭を點して、
唐丸籠の綱目を透した。

次郎吉は端座した儘、物静かに瞑目して居た。

「次郎吉さん……」

お由加は、表の氣配に怯え乍ら、小声で唐丸籠へ呼び
掛けた。

「妾だよ。判るか？」

「そりや、お前さんは……？」

「桔梗屋のお由加だよ！」

「何ッ！桔梗屋のお由加さん？」

次郎吉は縛られた軀を、思わず手燭の方ににじり寄せ
た。其の愕ろきを「しッ！」とお由加は手真似で制し
て、

「次郎吉さん。源次が眼を醒ましたら大変！早く、早く
今の中に逃げておくれ！」

「え！そりや又、どうして。……？」

「どうしても、こうしても、そんな眼を語つて居る場合じ
やないよ！お前さんが江戸驢送になつたら、一体誰がお
美乃さんを救つてあげるンだい。可愛い／＼子供の為に金
に窮して、明日にでも宿場女郎となつて、身を沈めかね
ないお美乃さん親子が、入王寺で泣き暮れて居るのに、
次郎吉さんお前は見殺しにするのかい！」

「何ッ！お美乃さんが入王寺で……」

次郎吉は愕然となつた。

と同時にムラ／＼と生への執着が湧きあがつた。

唐丸籠が、お由加の隠し持った懐剣で、縦に真ッ二つに切り裂かれた。

次郎吉が籠の中から、すつくと起ちあがつた。

「お由加さん。この情は仇にやアしねえぜ！」

莞爾とした次郎吉の姿が、大きな影を壁に映して、すつと守宮のように外の闇に吸い込まれた時、突然、旅籠の土間の辺りで、

「や！失敗つたッ！」

寝呆けた源次の囁れ声が、忽ち裏木戸に馳けて来たが黒く口を開けた納屋を見た瞬間、目明しは酒の酔いも吹き飛んで、

「あ！」と魂の抜けたような叫び声を上げた。

六

盆踊りで賑あり、八王寺の夏祭りは、宵の口から鎮守の森に囃子の笛や、鉦太鼓が鳴り渡つて、浴衣がけの若い男女の群が、浅い鼈りのある音頭の櫓を中心にして、円い大きな踊りの輪を渦巻いている。

神社の境内は、献燈の高張提灯が風を欺いて灯の海をつくり、参道から鳥居にかけて、ずらりと並んだ屋合店がひけもきらぬ参詣人に口上巧みに呼び掛けている。

其の雑沓の中を慌だしく縫つて行く、むさゝびの源次は、眼を血走らせて、次郎吉の姿を探していた。

「チッ！此の調子じゃア風どころか、新七つあんも判りやアしねえ！」

忌々しそりに、独語を呟いた途端に、ドンと誰かと行き当つた。相手の女は後へよろめいて、面竄れした遅毛げの顔で凝つと源次を見送つた。

（新七つあん？確かにあの人はそう言つたが！……）

お美乃の顔に、一瞬生き返つたような悦びの色が閃めいたが、傍から女衞の仙藏が、手荒くお美乃の帯を掴んだ。

「オイ！いゝ加減にしねえか。もうおつゝけ半刻にもなるンだぜ！それ程堅え約束がしてあるんなら、とつくの昔来て居る筈じゃアねえか。……お前え、まさかそんな事を言つて、遁る腹じゃアあるめえな？」

仙藏は、胡散臭そうにお美乃を見据えて、氣懸り氣に神社の横の松林を振返つた。

其処には松火が赤々と焚かれて、籠掛けの小屋の中から、時々喚声が湧き上がつて居る。

八王寺の名物、女売り場である。

恒例行事の一ツとして、広く関東の諸国に聞えた馬市は、遠く信濃路辺りの博勢を集めて、夏祭りと同前倣しで開帳せられるのだが、それに付き物の女売りは、高値で懷中のあたゝまつた博勢衆や、賭博場で芽の出た親分顔役に売れて、一生なぐさみものとなつて行く流転者の莫連女達を小判で張り合ひ、年に一度の人間市なのだ。

お美乃は江戸から流浪して来て、新七と此処で落ち合ひ筈だつたが、女衞とも知らずに金を借りた慶味屋の仙藏は、お美乃の纏腰に眼を付けて、法外な利子を吹かけた上、今宵の女売り場でひと儲けする魂膽であつた。

其の女売りは、既にお美乃の番が迫つていて、にくに飢えた博勢達の競合ひ声が、華やかな盆踊りの手拍子の間に、ドツと汐騒の如く四辺を揺がせていた。

仙藏は焦立つてきた。

二十五両の金子を調達すると約束して、もう刻限を過ぎて居る新七を、あてもなくお美乃に付いて探し廻つては居られなかつた。

「お美乃。一体えお前えは何うする心算なんだ？新七は何処にも見当らねえじゃねえか」

「でも、あれ程堅く約束してくれたんですもの、間違ひはないと思います。後生ですから、もう暫くの間待つて戴けませんか」

「冗談じゃねえ！金を貸す時にや二ツ返事で融通したのに、此の場になつて二枚舌を使うア、あんまり虫が良すぎるぜ！」

「いゝえ、嘘は決して申しません。それが証憑に市松を人質にまで置いて来たではありませんか。市松は妾がお腹を痛めて生んだ子です。苦勞して育てゝ来た子供なんです」

お美乃は泪を泛べて言つた。
「チッ！きつく言やア泣き癖で来るか！然しなアお美乃

断つて置くが、二十五両の金はお前えの軀に貸してあるンだぜ？愈々、金を返せるめどがなけりやア、其の時の覚悟は出来てるだらうな？」

「……」

「俺ア道楽や人助けで、お前えに金を貸したンじゃアねえ、あともう少し待つて見て、新七が返つて来なきやア氣の毒だがお前え、女売りの競り場に立つて貰うぜ！……」

仙藏は情容赦なく、女衞の根性を曝け出して、力無く項垂れたお美乃の肩を、邪慳に拳で強く小突いた。

——丁度其の頃。土地の貸元で、お神樂伝六の綱張りである、祭礼賭博場を覗いた新七は、二十五両の金子欲しさから、益ごさの勝負に手を出したが、思惑は外れてもう虎の子の十五両も、僅か五両足らずにまで敗けていた。

「お客人、どうも芽が出ねえようで御座ンすが、勝負は時の運、焦らずにもう一丁ゆきなさるか……」

籠の真中で、囊の目を決める壺振りは、片肌躍る鱗蛇の刺青に汗を光らせて、血の色を喪つた新七を見返り、其の眼ですぐに調元の伝六に眼配せをした。

（ウム！……）乾分の合図に領返す伝六は、有封に入つた満足の眼を細めて傍の用心棒の浪人に何事か囁く。然し、今宵の勝敗のさなかには、誰もそれを知る者はなく、四十数人の殺氣を孕んだ静寂裡に、たゞ灯りのみが音も無く長い蠟涙を溜らせている。

新七は、残りの有金をそつくりと張つた。もうこうなれば、乗り掛つた船、運賦天賦の最後の勝負！

いや、これで勝たねば、お美乃を苦界から救ふ事は出来ないので！

壺振りが、ガラ／＼と囊を振つて、巧みに壺をバツと伏せた。

「丁！」

「半だッ！」

乱れ飛ぶ声に入混つて、
「勝負！」と鷹揚に壺振りに叫んだ、お神樂の伝六。其の刹那！今將に囊の目が現われようとした壺振りの手首

「先生、殺つておくんなせえ！」と醜惡な合図を用心棒の浪人に送つた。

七

賭博場の外は、墨色の蚊帳を呆したように、夜の帖が四辺を包んで、小屋を蔽う、露蒼とした梢を渡る松籟が祭囃子のさんざめきを身近かに運んで、それが丁度、幹の樹蔭から新七を狙う用心棒の、卑怯な殺人剣の鯉口を切らせた。

それとは知らぬ新七は、お神楽一味の乾児達に誘い出されて、賭博場から洩れる明りをたよりに、件の賽を突き出された。

「おう、若えの、よく眼を開けて凝つと見ろ。何処に怪しい細工があるんだ！」

数人の乾児達は、言葉巧みに新七の背後に隙をつくつて、暗がりから不意に、有無を言わずバツサリと斬る企みなのだ。

用心棒の浪人は、刀の柄に潤りをくれて、ジリ／＼と新七の後へ詰寄つて行つた。

時よし！用心棒は大刀を振り翳して、颯／＼と袈裟掛に斬り下ろそうと、胸に烈帛の気合を呑んだ刹那！

突如、通り魔のような黒い影が、老松の根方から躍り出たかと思ふと、

「卑怯者！」

と叫んで、用心棒に当身を喰わし、怯む顔に白刃を奪取つた。

乾児達は吃驚して、

「だ、誰だ！うぬア？」

闇の中を遠巻き見廻して、手に手に脇差の鞘をはらつた。が、顔冠りの男は落着いて、

「誰でもねえ、通り掛りの渡り鳥だが、お神楽ほどの貸元が、素人相手にいかさま變たア、ちよつと、阿漕が過ぎやアしねえか！」

「何、何ンだとツ！訊いた風な口をたゞきやがると、祭囃子を念仏に、お神楽一家が引導を渡してやらア！」

血の気の疾い乾児の一人が、叫ぶや否や、斬付けて来



を、矢庭に新七がしつかと押えた。

「待つておくんなせえ！あつしやア此の勝負は不服で御座ンす！」

「何ツもう一度言つてみろツ！」

壺振りは屹ツとなつて、鋭い眼付で新七を睨んだ。伝六を始め、居並ぶ乾児達は総立となつて、土色に着替へた新七を周囲から取囲んだ。

「オイッ、若えの、手前え此の賭博場に客ちを付けに来やがつたのか！それとも又、負けた口惜しさに、氣でも違つたんじやねえのか！」

「いえ、氣は此の通り確かで御座ンす。たゞ一度だけ、其の賽を改めさして観きたいンで。……」

「何ンだとツ！それじゃ手前え何か、此の賽に怪しい細工でも施してあるとでも言うんだな！よしッ、改めさしてやろう。が其の代り、若し此の賽に間違えが無かつたら、手前え生身じやア帰えされねえぜ！」

簡ろしい見幕で猛立つ乾児の一人へ、伝六は顎をしやくつて、

「辰！話合えなら外でしろ、他のお方が御迷惑じやアねえか！」

たが、それより疾く、つと身を一步ぬきん出るなり、見事に決つた唐竹割！

「ウッッ！」

蝦のように背を反らせて、どツ凄惨に驚れる音。其の早業に度胸を抜かれたのか、淫足立つた乾児達。

「氣を付けろ！、相手アたゞの旅人じやアねえ、劍術遣いで！」

口々に勢めき合つて、包圍の陣形を徐々に纏める。白刃の勢が鋒鋭を揃えた。と見る間、脇差を拾つた用心棒が、ツ、と進んで必殺の劍！得意の大上段を真向に構えて、一閃！銀蛇の尾を曳いた！が、それをガシツと鎧際に受止めて、刀は十字に激しく咬み合う。とムと煙霧の男は押し返えされたが、勢を与えて虚を衝く戦法か、咄嗟に飛鳥の如く身をかわして、泳ぐ相手の右腕へ「エイッ！」と、斬り込む果敢な肉迫！抛つように右腕が飛んだ。

「あッ、先生が断られなすつたゾ！」

「いけねえ！引きあげろッ！」

氣を呑れたお神楽の身内の者は、敵に、劍法の心得ありと見て取つたのか、俄かに怖気づいて、ばらばらッと賭博場の中へ逃げ込んで行く。

其の有様を、松の樹蔭から、はら／＼とし乍ら見て居た新七は、ようやく我れに還つて、

「もし、旅人さん！」

と、立去りかける男の後から、追い縮つた。

「危いところを、お助けくださつて……何んと御礼申上げてよいやら。せめて、お名前だけでも……」

「何、名前を……」

男は立止つて、ふと仔細ありげに、頬冠りの顔を解いて見せ、

「今更、名乗るのも馬鹿しいが、俺だよ、新七つあん」

「あッ！お前さんは、次郎吉……」

體を潰して、思はずたじ／＼となる新七へ

「しッッ！大きな声を出すンじやねえ！詳しい経緯は後で判るが、俺ア、大月の旅籠から、源次郎の野郎に跟けられてるんだ。こう言つてる中にも、真柄の父子が踏込んで

で来ねえとも限らねえ、網の目に這入つたお尋ね者だが、警え、此の場を十重二十重に、十手と刺又が取巻こうとも、殊勝に御繩は受けられねえ。いや、鼠小僧次郎吉ア此の儘死んでは死にきれねえ、命を賭けた罪滅しが、たつた一ツ残つてるんだ」

「え？それじやアこれから、何処かへ……」

「声が高え！黙つて俺の言う通りにしねえ、場所は、宿場外れの庚申塚。ちつたア淋しいが、夜が明けりやア、上々吉の夫婦草鞋。可愛がつてやりねえよ。お美乃さんは、お前えに、お店の時からホの字だつたんだ。は、は……」

低く笑つた次郎吉が、ボンと新七の肩を敲いたかと思ふと、恰ら異名の鼠の捷さ！

精悍な義賊は聲音もたてずに、掻き消すように闇に吸われた。

八

一方、仙藏に引つたてられて帰つて来た、お美乃は、界限の暴れ者で、女衞の元締、三河屋勘五郎の縁先で、先程から、火の出るような責め折檻を受けていた。

「やイツ、お美乃！それじやア手前えは、どうしても裸になるなア、厭だと言ふんだな！」

「……はい」

「よしッ、厭なら厭で、ウンと言ふようにしてやろう。

後ではえ面をするンじやねえぞ！」

憎々しげにお美乃を見据えて、仙藏は懷中から手拭を出すと、後手に縛られたお美乃の口へ、手荒く猿轡をかけた上に、繩の結び目に火吹竹を通して、きりツと絞るやうにねじあげる。

「あ！ウ、ハ、ハ、……。」

白い手首に繩目が喰込んで、みる／＼中に爪の色が変つて行く。

「どうだ、ちつたア痛えか！あれ、まだかぶりを振つてやがる。糞ッ、強情な阿蘭奴！」

仙藏は、忌々しそりに半ば呆れ、健氣に我慢の呻吟声

をあげるお美乃を、今度は骨も折れよとばかり、情容赦なく締めあげる。

「オイ、お美乃さん……。」

仙藏は四辺を見廻わして、火吹竹をそツと緩めた。

「もう痛えのもこたえたろうが、あんまり手を緩かせるもんじやねえぜ。魚心あれば水心……物は相談だが、お前も満更生娘でもあるめえ？何も好きこのんで痛え目を

しなくとも、俺が上手く智慧を付けりやア、此処は何ンとか納るんだがどうだ？厭か？」

返事次第によつては、仏にもなれば鬼にもなる仙藏。打つて交つたものの優しさで、お美乃の膚に触れた時、

「仙藏！その態は何ンだい！」

いつの間に来たのか、勘五郎の女房お蝶はアツと愕く仙藏の顔を、持つた団扇で劇しく打つた。

「ふん、猫に鷹節たアお前のことだよ。最前から、どうも様子が面妖いと思つたら、案に違わずこの有様。どうせお前のにとだから一人でたのしむ魂膽だつたのだから、そらは問屋が卸さないよ！大事な女売りを眼の前にして、お前なんぞに毒味をされたンじや、二十五両が台無しだよ」

「そ、そりや姐御あんまりな……」

「何があんまりだよ！お前にそんな下心があるからこそ此の阿蘭ッちよが言うことをきかないんだ。たぶん責める真似だけして、手先で加減をしていたのだから、三河屋の折檻を一度掛けりや、たいがいの女は音を上げるのが普通さ！それとも仙藏。お前がどうしても手に負えぬと言ふのなら、妾が代つて思い知らせてやる！さ、蛇倉の鍵をお貸し」

言い出した後へ退かないお蝶は、毒性な点でも決して勘五郎にひけをとらない。仙藏の手から鍵をひつたると、お美乃を突き起して土蔵の中へ引つ張つていつた（蛇倉だ！……）」

お美乃は全身から戦いた。怖しい拷問部屋が有るとは訊いていたが、頑丈な座敷牢の格子の中には、まだ生々しい血の匂いさえ残つて呪いのこもつた女の足掻きが、凄惨な鬼氣を醸している。

お美乃は、襟巻と袴を解かれて生地獄の敷居を股がされた。

「よく見てお置き、此処が三河屋の蛇倉だよ。泣こうと喚めにと、お前の勝手だが、あと半刻の女売りまで、色良い返事をしなかつたら、妾ア此の引き綱を、片ツ端から引いてしまふよ！」

お蝶の握つた引き綱は、数の中の本一本だが、此の引き綱を引いたが最後、天井に開いた八ツの穴から、座敷牢の生簀を目掛けて、無数に蛇が狙い寄るのだ。

「どうだい、お美乃！それとも今の中に利口に出て、素直に妾の言ふ事を聞いてくれるか。二ツに一ツ。こゝが思案が瀬戸際だよ。」

苛々しく叫んだお蝶の右手が、引き綱の指に力を加えた。

お美乃が弾かれたように、牢格子に取縮つた

「お内儀さん！どんな辛いことも忍びますから、そればかりは許してください！」

「何ンだつて！……」

お蝶の声が闇を引き裂いた。

引き綱が颯ツと滑車を廻して、天井が俄かに騒がしくなつた。と思ふ刹那！八ツの穴の一ツから、はやスル／＼と餘音が聴いた。

「あッ！蛇！……」

霧登に照らされたお美乃の眼が、天井を睨めて呼吸を呑んだ。蛇ほどたりと床に落ちた。

爛々と光る眼、炎の舌！それが女の匂いを知つて、徐々にお美乃に襲い掛る。

一匹、二匹、三匹、四匹——お蝶の手によつて引かれた蛇窟は、八ツの穴に皆首を覗かせて、床に落ち、這い廻り、そしてやがてはお美乃の軀を狙い寄る。

「キヤッ！ た、助けてえ！」

悲鳴をあげる足許へ、既に一匹が巻きついてゐる。いやもう一匹が、上から首に巻きついて来た。

「お内儀さん！ 裸になります、肌を見せます。許してください！」



首に蛇、足にも蛇、そして今將に二の腕にも纏もうとする蛇の群に、お美乃は、半ば失神しそうになり乍らも手は死物狂いで帯を解く。

雪の肌が波打つて、現われた。

後には湯文字がたゞひとつ。が、其の湯文字の中にさえ、蛇淫の精は這い寄つていた。

「あッ！……」

お美乃の恐怖は断末魔に呻吟いた。虚空を掴んでよろ／＼と倒れた。

九

もうかれこれ四ツに近い、今を盛りの女売場では、莫連女の競りが一応終つて、あとは上玉が五人。馬市で儲

うけた博労衆の財布が、底を叩いて空になるのも、競う次の女売場なのだ。

其処へ仙蔵に負われた半裸のお美乃が、氣を喪つた儘のしどけない姿で、勘五郎の許へ運ばれて来た。

「親分、申訳御座せん。ついくすりが効き過ぎやしたので……」

仙蔵は頭を掻いて、おず／＼として言う。勘五郎は舌打ちをした。

「莫迦野郎！何ンてえ恰好で連れて来るンだ。だからあれ程手加減しろと言つたじゃアねえか！早く梅酔でも飲ませて、氣を付けさせるンだ！」

「ヘエ！」仙蔵は頭から怒鳴り散らされて、転手古舞いで裏口に走つた。

（仕方のねえ野郎だ。たぶん蛇倉に叩き込んだンだろうが、此のぶんじやア元値の二十五両も危ねえこつた！）
勘五郎は思惑が外れて苦々しそりに後を見送つた。折角手に入れた上玉の江戸女を、下手な折檻で氣を喪わせてしまえば、女売りの呼び値は水の泡に帰してしまふ。如何に稀れな繰繰であらうと、見事に熱れた肉付であらうと、端の消えた氣絶の女に、誰が莫迦な二十五両を抛う女売り場では、慥々最後の上玉がかけられて出たらしく、中呼人の競り始めた声が溜り勘五郎を苛立たせて聞えた。

「三河屋さん、次の番で御座ンすで……」

帳方の若い男が、お美乃の競りを報らせに來た。

「ウム、仕方がねえ」

讀者挑戰女圖隨筆

私とお相撲取らないかな

北海千珠子

私メトマーズの八重桜こと北海千珠子でございます。本誌の読者方なら「メトマーズ」と申せばお分り下さいませわね。

君はお転婆だらうつて、そうね、否ともいえませんが、私もそんなに見えるかしら、何ッまだ会わないつて、乱暴ね、私の実態も知らないで失礼でござりますよ。誌上で知つてゐるつて、小説をそのまゝ私にスツボリはめるおつもり、勿論モデル小説ですから、根も葉もない話じやありませんけど、だからお転婆だとおつしやるの、えゝ面倒ですからそうしておきましようよ。

勘五郎は、遅い仙藏に業を煮やして、お美乃の脇を抱きあげた。もう斯うなつた上は、捨値で女売りにかけねばならない。

湯文字一枚のお美乃の姿が、間もなく女売りの台上に乗せられた。と、一瞬場内は喧ましくなつて、太り肉のお美乃の艶麗さは観衆の眼を奪つていつた。

中呼人が、声を枯らして観衆を鎮めた。

「お静かにお願いします。これに出しましたのは、花はお江戸のおぼこ育ち、蝶も見紛う濡れ羽の髪は、聊か乱れて仇情。立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿が百合の花とは、譬えに背かぬ此の女。事情あつて幼児付きでは御座ンすが、当年とつて二十と三歳。さア、二十五両を言い出しに、江戸の柔肌に張込んでください！」

弁舌巧みな中呼人が、大福帳を開いて叫んだ。観衆がわーッとざわめいた。

「三十両！」

先づひと声が、何処からか飛んだ。

「三十五両！」

老害の博勞が、片手を上げた。

「四十両！」

甲府の貸元が背伸びをして叫んだ。

「四十五両だッ！」「五十両！」「六十五両！」「七十両！」

勘五郎は北髪笑んだ。

と、其の時である！

「百両！」

桁の外れた天井突（高値）が、喉と響いて観衆の耳朶を鳴かせた。中呼人が手を打つた。競りを終つた合図のしるしなのだ。

場内は再び騒然となつた。法外な呼び値に度膽を抜かれて、声の主を見廻す観衆。

だが姿は既に消え失せていた。

「お美乃さん、氣が付きなすつたか……」

神社の裏の櫓のかけで、お美乃は活を入れられて陣を開けた。頬冠りの男が、しつかりと胸を抱き締めてゐるはッとなつて身を起したが男の面影に見覚えが無かつた「お忘れで御座ンすか？……あつしやア五年前に不心得をしでかした、伊勢萬の丁稚、次郎吉で御座んす」

「えッッ！」

お美乃は思はずたじろいだ。

蛇倉で倒れた時までの記憶はあつたが、此処で恩讐の次郎吉に逢おうとは――

「愕きなざるのは、無理はねえ。恩を仇で返した此の次郎吉が、年貢納めの罪滅しに、危ねえ綱渡りの心を決めて、すんでのところで女術の喰いものになるお前さんを、救い出したあつしで御座ンす。見ておくんせえ背中

中の幼児を。これがお美乃さんの命懸りと、イの一番に貰い受けては來たんだが、因果に其の親は兎状持ち。」

「え！……」

「お美乃さん！聞きなせえ、あの祭り唄を……江戸はお

八重桜！そんなに頭から相撲取扱いにしちやいやよ、でもお相撲は大好き

なの、えッ？誰と取るかつて、今のところ女の相手がないので、本当に困つ

ちまうわ、読者の中で誰かいませんか？男は駄目々々、女でなくちゃ、一人位

は女のメトミフアンがあつていい管なのよ、意氣地なしね。

私がどうしてメトマーズになつたかつて、そうね、矢張り最初は何でもなかつたの、それがふとしたことからメ

トミの生みの親で育ての親のA先生にビックアップされたの、ふとしたこと

つて、それはいえなわ、其処はダー

クチエンジにしておきましようよ。

メトマーズの使命つて？あるわよ、自分の肉体を研究財として、女闘美の演出が如何にあるべきかをひたむきに

研究すること、そうね、先ず表情から始つて足の指先まで、一挙手一投足す

べてメトミなの。

A先生はおつしやつてよ、君の顔は「メトミフエース」だつて、おかしい

ニューワードね、眼に負けん氣が溢れ

口に片意地なアクセントがあるのがいゝんですつて、それからアウトラインがズンぐりして、腰がよく発達して

るので、どこから押しても力士型です

つて、チヨット悲しいみたいよ、先生の坊ちゃん「オイ横綱！」つていうのですもの。

締込の色は黒が大好き、外の色はいやです。日本婦人の黒髪にバランスする色はやはり黒色の袴ですわ、キリリッとした感じで、ハッシハッシと四股を踏むと、我ながら美しいなと思えますわ。

どうして自分の美しさが分るつて、勿論大姿見のお蔭よ、でも最初ね、四股を踏むなんて恥しかったわ、チヨコッ／＼踏んで「おい君の四股の踏み方は、おシッコしてるようで駄目だ！」と先生に叱られたの。

先生つて本当に憎らしい方よ、メンスの時など、とうに知つてくるくせに「おい千珠子四股踏んでごらん」ですつてホホ……いやね、私ボーズとしては中段の端が一番好きなの、黒い取巻をキリリと締めて、といつても男力士のそれじやありませんわ、私自身にビタ来る愛用のソレなのよ、それを腰に三つ廻してキツと締めると、バレエのように跳躍したい気分になるの

その反面、芝草を踏みしめて、素足で芝草を踏む気持ちで本当にスバラシイものね、朝露にシットリとぬれたそれは初夏から初秋にかけて、実に魅力的な存在だと思ふわ、その朝の芝草を踏んで、全身のあらゆる筋肉を、音がするほど緩めたり締めたりすると、若さの泉から生命の泡沫がブクブクと盛

上るような快感を覚えます。

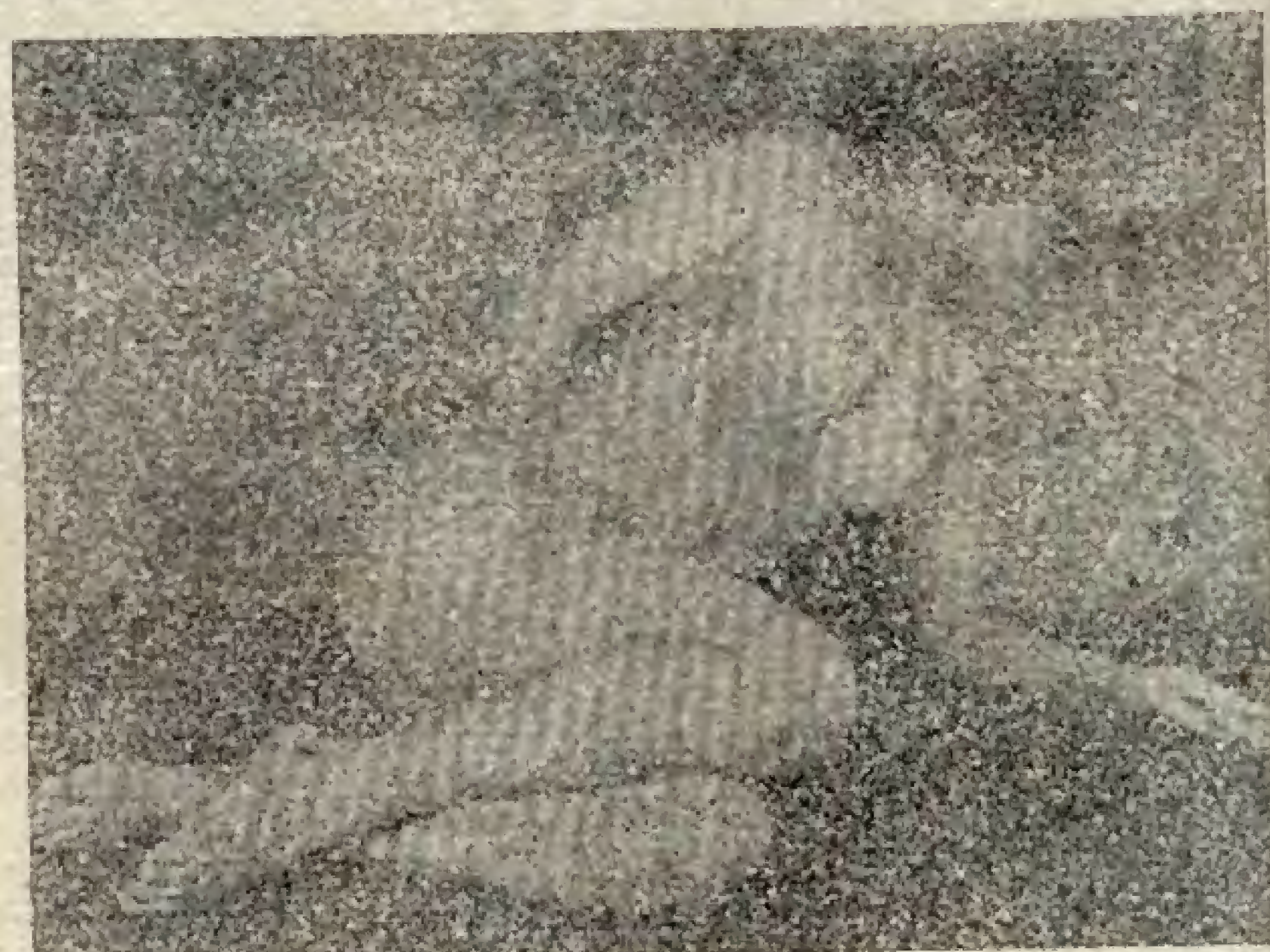
黒い袴の上に、腹がゆつたり乗つて其上に乳房の隆起が頃からゆるい溪谷

をつくつて、ほのかに鳩首へ消えるあたり、姿見にうつるそれに惚れ／＼して自慰的な満足にひたりながら、乳房をいじくり廻して先生に叱られた日もありました。

ストリップショーも先生のお供でよく見に行きましたが先生の御主張のように、均整のとれた女性が、必ずしもメトマーズとして優秀だといえないことが、この頃になつてやつと分りかけました。最初

は自分の肉体と比較して、私もモット瘦せたいなアとも思いましたが、今ではスツカリ宗旨替えしましたの、四股を踏んだあとで、塵を切る型でしやがんで、両手をバット開いて膝頭へ置き、ピンと胸を張つた姿は、ほんとに錦絵をつくりだと思ひますの、自画自讃で恐入りますが美しいものは美しい、いゝものはいゝ申すより外に言葉はありませんもの

読者の諸姉の中にも、私の向うを張つて一番取ろるか？とおつしやるお方はございせんかしら、勝負は時の運として、何時でも千珠子はお相手になる覚悟はしております。



上でのことにいたしましたし、芸人でもなければ、モデル稼業でもありませんものね、

「我が独自の芸道を我歩む」といった心境なので、

「私とお相模取らないかな」誰か私のパートナーになつて下さる御婦人はありません？その出現を鶴首して、千珠子は京の地で四股を踏んでおりますわ

【急告】作者、北海千珠子さんに挑戦される読者の方々のお便りをお待ち申します。御遠慮なくドシ／＼お寄せ下さい。訪上に公開の上、作者に連絡の御便宜をはからいます。但し御婦人に限ります。編集部

ろか此の土地にまで、三ツ子の口にさえ言ひ贈された、お尋ね者の鼠小僧は、実は此の次郎吉のなれの果

「えッそれではお前が鼠小僧！」お美乃は愕然として、声を頼りた。

「シッ！大きな声を立てるンじやアねえ。笛吹川の捕物で、鼠は捕つたと噂ア立つてるンだ。あの時俺ア、新七つあんの吹き矢に射られて、恨みは骨身に沁こんで居たが、よく考えてみりや五分と五分。これでどつちも恨みはねえ。いや、ちつたア功德もして置かねえと、闇魔の序が危えと言ふもの。なア、お美乃さん。鼠の橋渡じやア気にも入るめえが、これからすぐに、宿場外れの庚申塚に急ぎなせえ。きつと、果報が待つてゐるぜ……。」

次郎吉は闇に低く笑つて、市松を降ろして立ち上つた

「あ、待つて次郎吉さん！」お美乃は次郎吉の袖を掴んだ。其の拍子に市松がわつと泣き声をたてた。

「何処へ行くの！待つて、此の市松はお前さんの子供です。可哀想だとは思ひませんか。連れて行つて妾も一緒に……。」

「飛んでもねえ！天下を騒がせたお尋ね者の落着先は、伝馬町か木塚ヶ原だ！お前さん達の来る所じやアねえ」

「いゝえ、譬えお白州の詮議を受けようと、お腹を痛めて生んだ子の父親を、どうして見殺しに出来るのです。妾は決して離れません」

屹ッとなつて取巻るお美乃は、襟袖を涙で濡らしていた。次郎吉は闇に胸を打たれて佇んだ。が、突如！其の手を振り解いてばッ／＼と敏腕に身を跳躍した。

「あ、待つて次郎吉さん！……あッ！」お美乃は必死に後を追おうとして、声を呑んで立ちすくんだ。

（お役人！……）一ッ、二ッ、三ッ——木立の闇に、御用提燈と足音が走つた。

「源次！今度こそは逃がすでないぞッ！」

（完）



野猿や猪の横行する山中の別荘に住む斜陽貴族
獵銃に苦惱を託す初老の元伯爵と、處女を守る
美しい夫人と。計らずも訪ねて行つた男に、夫
人が與えたものは何であつたろうか。夏鶯の囀
る深山に展開する慕情の切なさど苦しさ……

ぽんと銀行渡り小切手で金五十万円也、
それをたいせつに折り畳むと上着の内ポケット
に納めた白井は、からりと晴れた初夏
の御堂筋へ出て地下鉄に乗りこんだ。

梅田から阪急宝塚線で石橋の二つ次の能
勢口駅へ。こんどは単線の能勢電鉄、終点
から二つ手前のなんとかという寂しい停留
所で降りるまでは、坂田さんが書いてくれ
たメモの図面通りであつたが、そのあとの
予定は全く狂つてしまつた。

「うん、駅前から三十分置きに歌垣村行の
バスが出るそうだよ、それに乗れば四五十
分でかんたんに着くとか印刷屋が言うとい
つた」

坂田さんの言葉では煙草一本喫う間に來
るはずのバスが、十本の憩を喫いつくして
もまだ影も見えなかつた。腕時計を見ると
もう二時間以上も待ち呆けを食つていた。
白井はいつの間にか空模様が怪しくなつて
きたので、なおいら／＼したが、寂しい能
勢山裾の駅には駅員一人居るはずもなく、
ときたまやつてくるがらあきの電車は、降
りる客も待つ客もないと見ると、そのまゝ
通過してしまふのだつた。

蛙があ／＼青田で啼きはじめた。雨の
気配はいよ／＼近いらしい。やつと何台目
かの電車からぽつんと一人降りたのは、見
るからに愚鈍そうな百姓のおばあさんだつ

た。白井は地獄で仏に逢つたように喜ん
だ。

「おばあさんはどちらへ帰るんですか」

「歌垣村じやがのう、なんか用かいな」

「今日はバスは故障ですか、三時間近く待
つてゐるがまだ一台も來ない」

「おばあさんはぽかんと齒のない口をあけた。

「バスちゆうようなもんはありやせんが
な」

「へえ、だつて」

「なんぞ聞きまぢがいなさつとる、バスの
あつたんは六年前までじやがな、歌垣村の
近くになんやらいう陸軍の工場ができてな
あ、大勢の工員さんを運ぶのに臨時にバス
が通うとつたがのう、いまは工場も潰れた
し」

白井の落膽が氣の毒になつたのか、

「あんなさんはどこまで行きなさるのけ」

「芝木さんの別荘、ほら、元の伯爵の」

「あゝあの愛人の華族さんのけ、そりやえ
らいこつちや、こつから五里も山奥じやけ
ん、なんぼ足が早うても、今から歩きなす
つちや日が暮れてしまふぞな」

「……ありがとう」

不審そうに何遍もふりかえりながら、お
ばあさんが行つてしまふと、白井は上衣をぬ
ぎ、ネクタイを外し、ズボンの裾を靴下の
中へ畳みこんだ、仕方がない、とにかく歩

あらゆる悲喜劇はいつも單なる偶然から
芽生える。

この事の起りも、会社へ出入している印
刷所の番頭が、集金に來たついでに、

「わしらの商売はさつぱり儲かりまへんけ
れど、戦争が終つてから、旧華族の人達が
暮しにこまつてなさるのはもつとひどうお
まつせ、なんでも能勢の山の中にある元伯
爵はんの別荘が、なんとたゞの三百万円で
売物に出てるそうだがな、ほんまに氣の
毒な話だす」

と総務部長の坂田さんに、ひよいと洩ら
したことが発端であつた。

「ふうん、そりや耳寄りな話だな、会社で
はその値頃の社員厚生寮向の別荘を血眼で
探してゐるんだがわ、なんという伯爵かい
その売主は」

と坂田さんは回転椅子から肥つた体を乗
り出した。

翌日。厚生課主任の白井は出社早々坂田
さんに呼びつけられた。

「……というよりなわけなんだが、君一つ実
地に下検分して來てくれないかね、先方と
相談して話がまとまりそうなら、とりあえ
ず、手付金を打つて他に取られないように
頼むよ」

こう。いくつも峠を登つたり降つたりしてゆくと、丹波の篠山へつきぬけるという山道を、白井は情ない表情で見つめた。前も後も、右も左も、高く低く青葉の山が重なりあふ大阪府豊能郡能勢。ぼつりぼつりと降り出す雨。

「大阪府の北海道で、猿と猪の本場か、こんなくしやう！」

杖代りに太い桜の枝を一本ぼきんと白井は折つた。雨はいよいよ本降りになつて来そうである。

二

この辺の生業といへば、木樵と炭焼、それに寒天の製造。一時間足らずで電車がネオン輝やく大阪へ着くとは思えない辺りな土地である。白井は全身ずぶぬれの惨めな姿で、足の裏一面の肉刺にびつこを曳きながら、とうとう五里の山道を踏破してき

た。

「おゝ、あれか」
白井はぐつたりと杖にもたれながら深い鵜谷をへだてた向い側の、十数丈の絶壁の中腹に聳える芝木別荘の偉容に眼を瞠つた。雨に洗われた絶壁の深い雑木林の中に、高い石垣を組み、十七世紀頃の英国の古城のようないかめしい洋館がつしりと建つていた。雨がやんで、雲の切れ目から洩れる夕日がくつきりとその古風な建物を浮き出させていた。

蔓草や野茨につまずきながら、やつと辿りついた別荘は妖怪の住んでいそうな無気味さで、しいんと静まり返つていた。玄關の檜の木造りの扉は内部から門を降ろしてあるらしく、押せども突けどもびくとも動

かなかつた。

「芝木さん、芝木さん」

どん／＼と力任せに叩くと、その音が近くの山から、不気味なこだまになつて返ってくる。白井はぞつとするような恐怖を感じた。ひよつとすると芝木氏は不在かも知れない。夕陽は次第に迫り、遠近の山々も次第に夕靄の中へ沈みこんでゆく、雨雲が過ぎ去つたあとの空には、きら／＼と星の光り始めた。

ずぶぬれのシャツやズボンがべつとりと肌へはりつき初夏とはいへ、凍えるように冷たいし、腹も減りきつていた。もし芝木氏が不在なら一体どうすればいいのか。疲れ切つた身体で、野獸のうろつく暗夜の山道を元の駅まで歩いて帰る勇氣もない。白井は泣き出したいような氣持で、どん／＼と扉を叩きつゝけた。

幻覺であらうか。真暗な別荘の中に、ぼうつと橙色の灯が一つともつた。あつ、誰かいる！、白井の心はぼつと喜びにはずんだ。

「どなたですか」

かたりと扉の覗き窓が開いた。その窓からぼつと白井を照し出したのは眩しい懐中電灯の光であつた。

「芝木さんにお会いしに伺いました、私はこういう者です」

上衣のポケットから名刺をさし出すと、白井は訪ねてきた訳をこまかく説明した。「まあぐつしよりお濡れになつていますのね、お氣の毒しましたわ、さあ、どうぞ」

警戒の氣持が薄れたのであろうか、厚い扉ははじめて開かれた。

「自家発電の装置が二三日故障していますのよ、お足許にお氣をつけて下さいまし」

懐中電燈の光の輪が足許に落ちた。女中であらうか、夫人であらうか、たしかに若い女性にちがいないらしい声である。白井を導いてゆく光の輪は、くつきりと床に敷かれた厚い花模様の絨氈を照らし出した。女の足もととき／＼は光の輪の中に入る。はつきりとはわからないが、裾の和服の上に夏羽織でも着ているらしく、スリッパを履いた足は眼に沁む白足袋の白さであつた。

「芝木があいにく二三日前から狩獵の旅に出て居りますので、おもてなしも行きとゞきませんけれど」

導かれた部屋は冷たい応接間ではなく、とろとろ壁爐が美しく焰をあげている快い居間であつた。石油ランプが柔く灯つていた。

「おほゝ、この辺は大阪より五度も氣温が低うございますのよ、心齋橋のフルーツパターではもうアイスクリームが出ていますように、こゝではまだ夜分は爐を焚きますわ」

と云いかけて
「まあ、それよりもその濡れたお召物はお体にいけませんわ、まだ浴室の湯を落して居りませんから、どうぞ」

恐縮する白井を促して夫人は、かいがいしく濡れた上衣やワイシャツを脱がせた。浴室にはふうんと炭酸鉱泉のおいがした。能勢の山脈一帯は良質の炭酸泉が湧くのである。のびのびと真白いタオル張りの湯槽に手足を伸ばすと、雨にうたれて凍えた全身が柔かに揉みほぐされるように氣持がよかつた。鏡の前にはチツクとヘヤーブラシ、櫛髯剃道具一切がきちんと用意されていた。

「おやつ」

濡れたシャツやパンツはぬぐなり、その代りに真新しい肌着類と、ぼりつとした仕立の紺い和服が乱れ箱に入れてあつた。よほど親しい間柄ならいざ知らず、はじめに訪問した初対面の夫人に、しかも、主人の芝木氏が旅行の不在中に、こうしたもてなしを受けてもいゝものだろうか。又、自分の旅行中に訪問してきた見知らぬ男を妻が歓待したと知つたとき、芝木氏の感情を刺戟するような心配はないだろうか。白井は不安を感じた。

「ありがとうございます、たいへんいゝお湯加減で」

「失礼ですけれど、御夕飯はまだでございまして、私はもう先刻いたゞきましたから、ほんとに有り合せのものばかりですの上」

白井は生涯でその夜の飯のうまかつたことを忘れるにはあるまい。疲れ休みにとすゝめられた一二杯のブドウ酒で、食後、壁炉に向くソファに体を埋めると、たちまちたまらない睡氣をさそつた。

このすばらしい邸宅も、美しい若夫人も御馳走も、ひよつとすると、性のわるい能勢の狐か狸に欺かれていた夢かも知れぬ。しかし、翌朝眼をさましたら、ずぶぬれの服の着のみ着のみまゝ、山中の木樵小屋の土間に転つて寝ているという始末であつてもいゝ。とにかく睡くてたまらない。白井はちて行つた……。

三

ケキヨケキヨ、ホウホケキヨ……、夢かしら、たしかに鶯がさかんに鳴いている。

早春に鳴くはずの鶯も、こんな深い山中の冷気ではまだ、初夏の感じがしないのかも知れない。白井は重いまぶたをこすつた。

ケキヨゲキヨ、ホウホケキヨ、どうも一羽だけの鳴声ではない。昨夜うたゝ寝してしまつたまゝのソファアに白井は長々と身体を横たえていた。いつの間に掛けてくれたのか、美しい花を刺繍した軽い純毛の毛布がわりと白井を蔽うていた。

「もう八時近くなつてゐるのか」

枕元の卓において自分の腕時計を顔近く引きよせた白井は、驚いてソファアから身体を起した。

窓の細白なレースカーテンをしぼると、ぼつと眼に迫つたのは、昨日の雨に洗われて眩しいほど鮮やかに輝く新緑の連峰であつた。眼の下は杉や檜がすくすくと伸びてゐる深い谿谷で、耳を澄ますと、ほるか谷底の小川がさらさらと清らかな音を立てゝいた。都会の濁つた朝の空気では全く味わえない雄大な風景である。

白井は、昨夜の美しい夫人が、この別荘のどこかの部屋で、やすらかな寝息を立てゝゐると思つと、ふら／＼と彼女の寢室へ訪れたい誘惑を感じた。けれども、さすがにそんな大胆な勇氣は出ないで、彼は昨夜案内された浴室へ顔を洗いにしかけた。

「おや、夫人はもう起きていたのか」

まるで、さあお使いなさい、とでもいうように真新しい練ハミガキと歯ブラシ、それにタオルが洗面台にちゃんとのせてあり、西洋剃刀と石鹸と髪ブラシ、それにチツクと櫛まで、男の身軀に要るものは一つも缺かきずに用意されてあつたのに、白井は舌を巻いた。

かな氣持で部屋へ歸つてみると、純白のテールクロスを拭けた卓上には、ちやんと朝食の準備がされてあつた。それも、まるで新婚の夫婦の食卓のように、茶碗も皿もコップの箸も二つずつ、仲よく向い合せておいてある。

「お待ちせしました、山の中でなにも御馳走がありませんけれど」

白井は美しい若夫人が、自分の向い側の椅子に掛け、淑やかに給仕の盆をさし出すのにどぎまぎした。

明るい朝の日光がいつぱいさしこむ部屋の中で、真正面から見ると、なんとという若々しく美しい人だろう。年頃は二十をまだ僅かししか出ていないにちがいないが、氣品のあるしかも近代的な感じの溢れた人である。眼の大きな、唇の小さい、そして頬からあごにかけて、ゆたかな肉づきの線が走つてゐる。覆てゐるものは、別に贅沢ではない普通の町の若い主婦と同じワンピースであるが、薄い布地を通してあり／＼描かれる豊満な二つの乳房の隆起が、痛いほど白井の官能に肉薄してくるのである。少しもあくどくない薄化粧が、かえつて自然にそなわつた美しさを輝かしてゐる人なのであつた。

なにもありませんけれど、と断わりながら皿に盛られたのは、みずみずしい若鮎のフライ、それに落のごまあえ。真白い飯の中には柔かい筍が煮こまれてあつた。

「たいてい今日の午前あたり、芝木も狩獵から歸つてまいりますわ、こんな寂しい山中ですから、ときたま、お客様があらますと芝木は子供のようによびますのよ、もう五十をいくつか過ぎたおじいさんですのに、氣持はいつまでも青年ですわ、芝木は

おほ」

と云いながら白井のがつしりした三十代の男の胸のあたりを、舐めるようにちらりと見る夫人の、瞬間だつたが、複雑な眼の色を白井は決して見逃さなかつた。

やつぱりそうか！この若い夫人の女体は三十以上も年上の夫によつては決して満たされてはいないのだ。あぶない、白井は徐々に感情をぐつと押さえた。

「失礼ですが、これど御立派な別荘をお手離しになるのは惜しいですね、ずいぶん御経費がかゝつたでしょう」

「はあ、なんでも、芝木の先代が全盛を極めて居りました大正のはじめ頃ありあまる伯爵家の財産を傾けて建てたのだそうでございますわ」

「そうでしょうね、先代とおつしやるのは有名な政治家だつた芝木次郎伯爵ですね、第一次欧州大戦後の講和会議で、日本側委員として活躍された……」

「よく御存じですわ、けれど、こんどの終戦で華族はなくなりましたし、東京の方にありました本邸やなにかは、戦災で全焼しましたし、故郷の山林や田畑も財産税の物納とかですつかり失つてしまつて、沢山の召使も暇を出し、芝木と私の二人だけが、こゝで暮す他ございせんものよ」

「お氣の毒ですわね、それにしても、奥様は御主人と少しお年がちがうようですが、それはなにか厭が」

「はあ、前の奥様は鮎町の本邸で爆死なさいましたものですから」

白井は黙つて食後の熱いお茶を飲んだ。「芝木さんはずっと前から狩獵がお好きだつたのですか」

「はい、え、それもこゝへ来てから始めたのでございますわ、誰もいない山奥で、獵銃を夢中で射つてゐるときだけ、生きてゆく若惱を忘れるよ、と寂しそくに笑つていますわ」

「だが野猿や猪や野兎のう／＼住んでゐるこの辺ですから、獵物はずいぶん多いでしょう」

「はあ、けれど、芝木はまだ一度も獵物を持つて歸つたことはありません、もと／＼あの人は氣の弱い性質で、とても動物の血を見ることなど出来ないのです」

「では何を射つてらつしやるのですか」

「私はきつと何も無い大空へ弾を射つてゐるのだとおもいます、もしかしたら、あの人はしまいに自分自身の咽喉へ銃口をあてるのではないかしら、というような怖ろしい不安さを感じることさえ度々ですわ」

「寂しいですね、芝木さんは」

「え、私だつて」

「奥様……、判ります、芝木さんがこの別荘からお手離しになろうとする氣持が」

「あとから別荘の中をくわしく見ていたゞけば、私たちが申して居ります値段の三百万円がどんなに安いかはすぐ判つていたゞけると存じます、とにかく、私たちはこのまゝでは底のない苦惱の泥沼へずる／＼落ちこむばかりですもの、白井様、さあ御案内しましょう」

四

美しい夫人と、まるで睦まじい夫婦のよう肩を並べて、贅沢の限りをつくした客間、居間、書斎、舞踏室、食堂とゆつくり点検して歩きながら、白井は胸算用で別荘の値打が、一千万円から二千万円、三千万円……と、終いには、見当もつかない莫大



な金額に昇つてゆくのに果然とした。今日ではどんなに金に糸目をつけなくても、もう二度とこんなすばらしい建築材料は手に入らないのである。先代の伯爵は英國のケンブリッジ大学の出身で、すべてに堅実で古風な英國の邸宅をつくりそのまゝ、こゝに再現してみせたのであつた。一つ一つの家具や調度類にしても、はるゝ英國に注文して、あちらの腕利きの職人に作らせたものにちがいない。

「寝室もお眼にかけましようか」
「いや、それはいくらなんでも」

「かまいませんわ」

意味あり気な微笑を浮かべながら、夫人のしなやかな指はもう寝室の扉のノブにかゝつていた。白井の好奇心がむづがゆく胸の中をはいまわつた。

人間は自分を生んでくれた母親の子宮内へ帰りたい無意識の憧憬から、夜寝る部屋の構造や環境を、柔かく、温かく、暗く、狭く作るのださうである。その中で、背を丸め、腕と足を曲げて睡る姿勢は、子宮内で十ヶ月間成長する胎児の姿の名残りである。

開かれた寝室の中へ一歩踏みこんだ白井は、この寝室を作らせた先代伯爵が、きつと、そうした横微を知りぬいていた人だつたにちがいないと直感した。広さは八畳ばかりの洋室であるが、まるで放送局のスタジオのように、あらゆる音響を吸いとつてしまつたために四方の壁は防音構造になつていたし、眼のさめるような真紅のビロードのカーテンが天井にも壁にもゆつたりと張めぐらされてあつた。そのカーテンの左側をしぼると、柔かい初夏の日光が、乳白色の窓硝子を透してほのゝと部屋の中に流れこんできた。

部屋の真中にはどつしりと重く低い、幅の広いベッドに、厚い敷布団と、羽根を入れた軽い掛布団がおい

てあつた。ふくいくと芳しい香水がまかれてあるためか、闊房特有の甘ずっぱい生臭い臭気は感じられなかつた。二つ並んでい

る枕に、一本の長い髪が脱けているのに、白井はどきつと胸の動悸をはずませた。

「いずれ、買つていたゞけばこの部屋も自由にお使いになれますわ、お氣に召しますかしら、なんでしたら試しにベットにお休みになつてください」

「かまいませんか」

「どうぞ」

白井はためらいながら、そつとベッドに

腹ばつてみた。微妙なスプリング、たまらない快感をそゝる特殊なベッドであつた。「お驚きにならないで、しばらく眼をおつむりください」

含み笑いをした夫人の身体が、そうつと白井によりそつてベッドに横たわると……おゝ、どうした細工が施してあるのか、ベッドの底から、静かに、微かに、リーン、リーンと、玉をころばすような美しい鈴の音色がひゞきはじめた。妖しく官能を昂ぶらせいゆく微妙なその音色。

「奥様！」

白井がさつとおやかな女体を抱こうとすると、

「いけませんの、それは」

と、夫人はベッドからひらりと立ち降りた。たんに鈴の音色もばたりと途絶えた。

「男でも女でも一人寝るときは。絶対に鳴りませんわ」

いたずらそうに笑いながら、夫人がベッドの枕許のボタンを押すと、こんどは、天井と壁を蔽う真紅のカーテンが、するすると片隅に引きよせられてゆく。

「ああつ！」

天井に白井と夫人がくつきりと写る。三方の壁にも写る。一点のくもりもない巨大な鏡がびつしりと張りつめられてあつた。

「これがどんな役目を果たすかは、女の私より男のあなたの方がよくご存じでございませわね！」

夫人がボタンの手を放すと、真紅のカーテンは再び音もなく天井と壁を蔽うてしまつた。白井は愕然とした。大正時代の政界で職無しの典型的紳士として信望の厚かつた先代の芝木伯爵は、あの貞淑な故夫人とこうした闊房で情痴の絵巻をくりひろげ

ていたのか！、そしてその嫡男である今の芝木氏と、この美しい若夫人も……。

「軽蔑なさいますでしやう、きつと」

黙つてゐる白木の顔を、夫人はじつと覗きこんだ。

「いゝえ、身分が高くても低くても、人間の男女のすることは古今東西ちつとも変わりません」

「白井様、申し上げてもよろしうございませうかしら、こんな設備のある寢室で枕を並べながら、芝木は男性としての能力をもう十年も前に失つて居りますのよ、私は名前だけの妻で、ほんとうは結婚のよろこびを一度も味わつては居りませんのよ、二年前の初夜の晩、芝木は涙を流して告白しました」

「奥様」

「あら、いけませんわ、私をお抱きになつたりしては」

「……」

「私、チャタレー夫人の二の舞を演じる勇氣は持つていません、放してください、お手を、いゝえいけませんの、接吻以上は」

夫人は女鹿のようにもだえていた。

五

危険は過ぎた。夫人はとうとう白井には身体を許さなかつた。

「すぐにお歸りになつてくだいませんかしら、決して立腹したり、芝木を怖れてゐるからではありませんの……たゞ、私自身が、あなたがいらつしやると、必死で押さえてゐる情熱を掻きたてられて、何をするか判らない危険を感じまから」

そう云いながら、プレスの行きとどいた

背広を白井に着させてくれる夫人の手は、妻のように暖かい愛情がこもつていた。

「すみません、許してください、奥様」

「いゝえ、私こそお詫びしなければなりませんのよ、……でも」

「なんですか」

「私、この別荘が売れたら、芝木と別れる決心がきまりましたわ、大阪の御堂筋で洋服店を開いてゐるお友達の所で、人生の再出発をするつもりですのよ、私が、私の力で生活できる自信がついたら、きつと私の方から白井様にお逢いしますわ、それまでは、もう二度とこゝへはお訪ねにならないでくだいませぬ」

白井が別荘を辞したのはその日の午後であつた。山一つむこうにある寒天工場のトラックが製品を大阪へ届けるらしいと、夫人が聞いて来たので、白井はそれに便乗させてもらふことにきめた。

「さようなら」

「さようなら」

能勢の連峰はくつきり晴れた、五月の日光の下に延々と続いている。白井は後髪を引かれるようなほろにがい哀愁をこめて、葉桜の山坂を一步一步降つて行つた。

ケキヨケキヨ、ホウホケキヨ、その葉桜を掠めて、ちらりちらりとすばやい夏鷹の姿が見える。白井が立ちどまるとさかんに鳴き、歩き出すと、囀りはびたりととま

る。

芝木別荘は向い側の絶壁にやはり古風な姿でどつしりと建つてゐる。あの中に美しい夫人は老いた夫の帰りを待つてゐるのだ。白井は胸の底から噴きあげてくる切ない慕情をもてあました。寒天工場の前へ着くと、トラックは荷積みを終つて、運転手が

さかんに木炭釜を煽いでいる最中であつた。汗と煤にまみれた顔をあげて、

「助手席に乗つとくはなはれ、すぐ出しますさかいに」

「御迷惑じやないですか」

「なあに、お安い御用だすわ、それよか、山道が大分揺れますさかい、舌を噛まんよりにしとくはなはれや」

なるほど、がた／＼走り出したトラックの振動は白井の背骨にこたえるほどひどかつた。

「どうだす、芝木さんの奥様は、美人だつしやろ、あれで旦那はんがもつと若かつたら、奥様もしあわせやがなあ、えへへ」

「芝木さんはどんな人ですか」

「さあ、どういうたら判るやろなあ、氣の弱い、えゝ人物にはちがいないけど、こんな荒つぽい時代に生きてゆける人やおまへんな、元の華族さんいうたら、みなあないにおつとりしてはるんだつしやろか」

「あの別荘はずいぶん金がかゝつてますね」

「さいな、なんでもこの間も神戸から外国人が来ましてなあ、何千万円かで売つてくれい話がおました位やさかい」

「それで、芝木さんは」

「首を横にふらはりましたんや、芝木さんはあの別荘を勤労者に開放したいと口癖にいうてはります、なんぞ深い考えがおますのやろそれにしても金に慾のない人やいうて村中感心したり呆れたりしてますがな」

運転手はしやべりながら、けわしい山坂をまつしぐらにトラックの速力を加えてゆく。

「旦那はん、噂をすれば影や、ほら、あれが芝木さんだすがな」

道幅のせまい山道である。もう／＼と砂塵をあげて駆け降りてくるトラックを避けて、道端のくさむらに佇んでゐる人影を、目ざとく見つけた運転手はあごをしやくつて白井に教えた。

革のジャンパーに乗馬ズボン、サツクに入れた獵銃を肩にかけた、長身の初老の紳士であつた。さつとトラックがすれちがるとき白井はまぎ／＼と芝木氏の顔を見た。やゝ細面の、鼻の高い、いかにも旧華族らしい貴品の高いその紳士の顔が、先代の大政治家芝木次郎伯爵に生き写しであることに白井の胸ははつと騒がれた。世が世ならばなどとはもう通用しない古い時代への感傷である。生活の場を失ない、若い美夫人に満足にあたえられない苦悩を獵銃によつてまぎらす斜陽貴族の象徴を白井はまぎ／＼と見せつけられた。

別荘が売れたらこの人と別れて、新しい人生へ出発という美しい処女妻。この世の最後の住居と妻を一時に失つて、芝木氏はどうして生きてゆくのであろうか。どうか獵銃の筒口を自分の咽喉へあてるようなことだけはしてくださるな。

「旦那、あんさんはどこへ勤めてはりますのや」

黙りこんでゐる白井へ、運転手はぶつきらばうに話しかけた。

「道修町さ」

「ふうん、葉もぼろおまつしやろ、本町筋は糸へん景氣で湧き返つてゐるし、わしもやつぱり大阪で働かなあかん、こんな寒天工場のトラックを運転してたかて、どぶろくもろくに吞まれへんしなあ」

「他人の花は赤く見えるものです、どこで働いたつて同じようなものですよ」

濃艶小説

月のいたずら

春山 耀子

二号さん

「そらまあ、こんな山道を飛ばしてたら、うるさい交通巡査に叱られる心配もないし、隠しても鬼が喰くらいなもんやさかいに」

たいへんな砂埃がまいあがる。白井はふと上着のポケットに手を入れた。おやつ、自分のハンカチがない、その代りに……。妙におもつて引っぱり出してみると、一枚

のあでやかな婦人用の絹ハンカチであつた。その真中に二枚のバラの花びらのようにくつきりと口紅のあとがついていた。隅に小さくあの人の頭文字らしく、Sの一字

が花文字で刺繍してあつた……。坂田さんになんと報告しようか、白井は腕を組んで考えはじめた。(完)

相川けい子はその日少しばかりくさくさしていた。

旦那の本妻にあはれこまれたのである。お義家も二年ともなればもういさゝか鼻にもつく。

今更はれたはれたもない至極平凡無事な無風状態で、そろ／＼赤ん坊でもうんで家庭的に落ちつきたいという殊勝な心がけを持ち初めていたときだったので、本妻の出現には、いさゝか面くらつた。

きりよう自まんの本妻の鼻息はすこぶる荒かつた。

「わたくし、あなたの事はとうの昔から存じて居りましたわ。未亡人だそうですね。

私の友達も主人を未亡人に寝とられたんですよ、昔とはずいぶん分つたものね、昔は貞女二夫にまみえずといつて、未亡人が間違ひを起すと世間では大さわざしたのに、この頃は未亡人を特権みたい在世間の男を誘惑するんですつてね。おかげで世の中の奥さんは枕を高くして寝ることも出来ないわ」

けい子は、四十を過ぎてもう目尻に皺の出ている奥さんの権高な顔を眺め乍ら、何とはなしに心の中では優越感を味つてい

る。旦那の多吉が、この奥さんにぎゆう／＼いわされている事を思ふとおかしささえこみあげてくる。

「誤解して歎くと困りますわ。私の方からあの人を何したなんてことは絶対にありませんわ、私ずいぶんお断りしたんですけれど、多吉がどうしても世話をするといつてきかないんですもの。それにね、奥様、多吉は子供を欲しがつてますのよ。奥様にはおできにならないんですつてね。で私にどうしても生んでくれつてきかないんですの、でも私それだけは奥様への義理を考えて、わざと出来ないようにしてますのよ」

「まあ、あきれた……」奥さんは赤くなつたり蒼くなつたりした。

之では二号さんにからかわれにきた様なものである。

奥さんは貞女を扉の先にぶらさげている様なひとである。みだらがましい話をきかされると、身体中に毛虫でもついた様にむず／＼する。それなのにこの女は、自分の夫との間房の秘密までさらけ出そうとする

この女は、この群で夫のそれを吸い、このむち／＼した白い手で夫の首つ玉に抱きつき、あらゆる媚態を演じているのだと思

うと、胸の中が煮えかえりそうな気がする。

奥さんは、女の髪の毛を思い切りかきむしつてやりたい衝動を感じたが、辛うじてそれに堪えた。

「お金は私出来るだけの事をします、主人と切れてさえくれ／＼ば、あなたの身の立つ様にしてあげますから、どうかもうあの人とは別れて下さい。」

「私ひとりそう思つてもあの人諦めないうらうと思ひますわ。奥さま、そんなにあの人大切に言ひに聞てもつてつないでお置きになつたらどうですの。ついでから申しですけど、奥さまはあの人に冷たんでいらつしやるんですつてね。男つてもものは、それさえ満足したら、逃げてゆくもんじゃありませんわ」

「まあ何んか、汚らしい事をいうひとでしよう」

とう／＼奥さんはぶん／＼になつて出て行つた。

あまり興奮したので、自分の下駄とけい子の下駄を片々に踏んで帰つて行つた。

けれど、けい子とて、奥さんにあはれこまれたのは決していゝ心地じゃなかつた。

今頃、多吉は奥さんから、ぎゆう／＼の目にあわされている事だろう。

自信はあるものゝ、一方がちゃんと籍の入つた奥さんであるといふことは、この場合少し心細いことであつた。

こんなことになるんだつたら、子供をひとり作つて置いた方がよかつたと今更惜ま

れたが追いつかない。多吉は今夜来るであらうか。

嚴重な、奥さんの監視網をくゞつて来てくれるだけの熱意があれば勝利は絶対だ。

奥さんの出現という突発事は、けい子の情感をかえつてかき立てる。

もう何年も一しよにいる夫婦の様に物珍らしくもなくなつた二人の間に奇妙な興奮剤ともなつたのである。

けい子は鏡の前で、念入りに化粧を初めた。多吉はきつと来る。

彼女の魅惑のとりこになつてゐる五十男が少しばかりの奥さんのやきもちに參つてしまおうとは思はない。

奥さんが大切か、自分が大切か、多吉の今夜の出現に、けい子はすべてを賭けた氣持である。

今夜多吉が来たら、もう多吉の望み通り変な器具なんか使わないで、あらゆる技巧で彼の念願を達してやろう。

今夜のけい子はさういふもろ／＼の思念に支配されているので、輝くばかり美しくみづ／＼しかつた。

彼女は幾度も玄關の外に立つて多吉の来るのを待つた。

しかし多吉はなかく／＼あらわれなかつた。

待ちつかれて部屋の真ん中にどつかと横座りになつたとき、玄關に人の氣配がした。

濡れごと

月が出てゐる。

その月の光を背にして玄關に立つたのは多吉とは似ても似つかぬ、若いしやしやな青年であつた。



けい子は一歩足を退かせた。

「失礼ですが……」

青年はじつとけい子をみつめ乍ら

「相川けい子さんですね。僕三木多吉の甥ですが」

あつとけい子は声をのんだ。

きつとあの奥さんの廻しものであろうと瞬間どきつとなつた。

多吉の甥の勇次は、けい子から客間に通された。

けい子が固くなつていたので、勇次はわざと粹人めかして膝頭をくづし、煙草に火をつけた。

「びつくりなすつたでしょう。叔母が大変だつたそうですね」

それでもまだ諦め味方が判然としないので、けい子はあいまいに、たゞえゝ、と答えると、

「実は叔父が、今夜はどうしても出て来られないので、あなたが心配しているといけ

す。つまりあなたの慰め役にえらばれたというわけで……」と笑つた。

けい子は、それで初めて、なあんだという様な顔をして明るくわらつた。

「まあ、御使い御苦勞様でございます。でも御心配下さらなくても、私何とも思つちやあいないわ、安心した。私あなたが奥様の廻しものかと思つてびく／＼しましたのよ」

さつきも述べた様に、今夜のけい子は特別魅力的だつた。安心したので姿勢も自然媚かしく崩れた。

勇次はなか／＼巧みな話術で、彼が見きゝした叔父夫婦の紛争をユーモアを交えてけい子に話すのだつた。

勇次は、粹人の叔父の殊の他のお氣に入

りだつた。叔父のお伴で叔父のゆくあらゆる弊筋へもお伴したが叔父は何故かけい子の事は今の今までかくしおわせていた。

所が今日、勇次は、叔父に前々から頼ま

れていたある有名な書家の書がみつかつたので、それを知らせに何気なく叔父の家に飛びこむと、まさに戦乱たけなわの最中でたちまち勇次は叔母から叔父の不行跡のてん末を、機關銃の様に浴せかけられたのだつた。

「あなたは叔父さんのお氣に入りだから、きつと叔父さんの味方をするでしょうが、あんなおかめみたいな女をいゝ氣になつて困つてる叔父さんの氣が知れませんか。いゝ若い者がみ苦しいじやありませんか、お年よりの濡れごとを指をくわえてみているなんて……」

勇次は叔母からこういわれると、たじ／＼した。あちこちの弊筋で遊ぶ叔父のお伴をして、口留料をせしめているのを見破れた様な氣がした。

しかしけい子に關する限り、勇次は叔父から何も知らされていないので、むきになつて、べんかいた。

叔母はうたがいはだけは漸く晴らしたが、いつもの様に連れ立つて出ようとする二人の前に立ちかはだかつて、

「あなたは今日は禁足ですッ。勇ちゃん。あんたも叔父さんを連れ出したりしたら絶交だから、そのつもりでいらつしやい」

と、釘をうたれてしまつた。家付娘の妻の前には、絶對頭の上らぬ多吉は、妻がちよつと台所にひつこんだ留守にすばやく勇次にさゝやいた。

「お前、之からちよつと〇〇町まで行つてくれないか。相川けい子というんだ。当分行けないかも知れないが心配するな、と伝えてくれゝばいゝ」

勇次がニヤツとわらつたので、

「いや、お前にかくすつもりじやなかつたが、あの女、ちよつと逸品だね。お前の様なドン・ファンの目にさらしたら危険だから、わざとだまつていたのさ」

叔父にしては、仲々すばやい芸当だとお

それ入つたが、その当のけい子に会つてみて、勇次はせい／＼丹田に力を入れずにはいられなかつた。

ちよつとした逸品どころか大した代ものである。

なる程あの貞淑をもつて自任している叔母が、目頃のたしなみをわすれて騒ぎ立てるのも無理はない。又叔父が彼にかくして置く氣になつたのも無理はないと思ひ、その詳細をけい子に語り乍ら、わざと勇次は叔父のいつた最後の一ことをけずつてしまつた。

しかしけい子は、勇次までが、叔父のお相手をつくつて、やりこめられた話をきくと笑いながらも大いに勇次には同情してしまつた。

「まあ、私の爲に一あなたまで叔母さんの信用を失つてしまつて本当にお氣の毒だわ」

「いゝえ。いいんですよ。どうせ之まで散々叔母さんには罪を作つてきたんですからね、それに――」

と勇次は柄にもなくいゝ淀んだ。……あなたみたいな人と知り合いになれたんですもの、といゝたかつたのだが、それはやめた。

けい子は目の前の、非常に瀟灑な、そして話題の豊富な青年と話しあつていろいろちに屋間の不愉快な事件はすつかりわすれてしまつた。

そればかりか、旦那の多吉とむかいあつてゐる時のような退屈なんか棄にしたくともない、この濃刺とした青年の挙動にけい子は、いつかつよくひきつけられていた。

ねむつていたような彼女の若さが目を覺すと、浮々とした氣持になつて、今はもう多吉の存在なんか、彼女の心には占める場所もない程だつた。

多吉の爲に用意してあつた酒肴が、勇次の前に運ばれた。

月が段々高くなつて、ふたりのいる座敷を
あお白く照した。

「まあ、お月様、きれい」

けい子が縁に立つと、勇次もついて立
った。

けい子は何だか非常に幸福なおもいに支
配された。

「ね、勇次さん。電気消してもいい？ お月
様がこんなに明るいいんですもの……」

「どうぞ……」

白い腕をあげてけい子はスイッチをひね
つた。さつと明るい月光が部屋一面に流れ
てきた。

月の光を浴びて、横座りにすわっている
けい子の姿態に、勇次の官能はそゝられ
た。

われにもなく肩に手をかけると、何の抵
抗もなく、けい子の身体は、心地よい意味
となつて、勇次の胸の中におれかゝつて
きた。

勿論、二人の間にその後どんな事が展開
されたかは、その夜のお月様がよく御存じ
の筈である。

越 権

翌日、

どんな風に奥さんはいゝ丸めたのか、多
吉があたふたとした恰好でけい子の許を訪
づれたとき、けい子は興醒めのした顔で、
この半ば、頭の白くなつた老人を迎えた。

「けい子や、落まなかつたね。うちのばあ
さんがやつてきたそうじゃないか。可愛い
お前を心配させて、私は寿命が三年ばか
りちぎまつた様な気がしたよ。お前宥して
くれるかい——」

けい子が前からねだつていた淡い大島つ
むぎの反物を彼女の前に置いた。

昨日までの彼女だつたら、多吉の首つ玉
に飛びついてところきらず彼が悲鳴をあ
げるまで、キッスの雨を降らせる所だつた

が、今日のけい子は、ちらつと、それに目
をやつただけだつた。

可哀そうな多吉は、けい子の御機嫌が甚
だ斜めなのを、すべて自分の罪に帰した。

おどろくと彼はけい子に今夜泊つてもい
ゝかとたずねた。

けい子は嚴肅な顔をして、

「おとめしたら、又奥さんにあはれこまれ
ます。当分もういらつしちやあいや、もし
私のいう事をきかないでいらつしつたら、
もう絶交よ……」

多吉は不本意な顔をしたが、やがて諦ら
めたのか、とぼろと帰つて行つた。

多吉が家に帰ると、勇次は非常に朗かに
口笛を吹きながら、叔母から頼まれたラヂ
オの修繕をしていた。

「おや、もうお帰りですか、〇〇町へは
寄りにならなかつたんですか」

「寄つたが、御機嫌が悪くつてね。当分来
るな、というんだ。仕方がないさ、身から
出た錆でね、しばらく女房孝行をするより
他あるまい。君すまないが〇〇町へ行つて
あいつを何とか慰めてやつてくれないかけ
れど、越権はするなよ」

叔父らしい威厳で、ちよつとむづかしい
言葉をつかつたが、勇次は軽うけた。

「大丈夫ですよ。第一僕、叔父さんの持物
をあらす程、しけてませんからね——」

最初は時のはずみということがあつても
二度つゞけて同じ事が起る場合、心理学者
はそれを何と解釈するであらうか。

今夜の月は寢室の真つ白なシーツの上に
横たわる熱い二つの肉塊に柔かな光りを注
いでいた。

「夢みたいだわ私……」

「僕だつて——」

とお月様が願まけする様なラブシーンを
演じたあと、

「僕はもう君を叔父にかえすことは出来な
くなつた。僕は結婚するんだ」

「だつて、とてもゆるさないわ、私達がこ
んなになつたことを知つたらあゝ私達殺さ
れるわ——」

「殺されるのこわい？僕は本望だ君と——し
よなら……」

こうなると

もう手がつけ
られない。

けい子が奥さ
んに忠告した

様に、女のあ
の魅力は、大

の男を全く金
縛りにしてし

まうものらし
い。

「そらだ、僕
は叔母さんに

すべてを打ち
あけよう。叔

母はきつとよ
ろこんでゆる

してくれる
よ。叔母から

くどかれたら
叔父だつて、

今までの手前
いやだという

わけにはいか
ないだろう」

その思いつ
きは二人をす

つまり宇頂天にした。

もし二人のむすびつきが、多吉夫婦の家
庭を平和にもどし、誰にも迷惑をかけず、
二人もまた仕合せになれるのだつたらお月
様に加わつた、この演出もまず／＼めでた
しといわなければならないだろう。

おわり



う龍衣

密輸船

女海賊

黒龍丸 龍衣のる



北川春男

松岡敏一

睡しなくうねる夜の海は、どす黒く不気味だ。午前一時を廻っていた。

琉球列島東方海上を北へ北へ一路日本内地へ向う密輸船黒龍丸。

殺風景なうす暗い船室。ゆれるランプのぶい光の下で机によりかかり、火の消えたパイプを口に喰えたまゝうつらうつらし

ていた船長の花田甚吉は、ふと我にかえつて耳をすました。

船長たる自分に何んの連絡もなく、船が急にぐつと速力を落し始めたかと思ふ間もなくびたりととまつたのだ。

この時刻に、こんな所で？機関の故障かな？それとも……もしや海上警官まさか――最後の言葉を無理矢理に打ち消して花田

甚吉は、そのでつぶりと肥満した短軀をぶるつとふるわせた。その拍子に、喰えたバ

青白き月光の下、瀬戸内海に、大平洋に跳梁する密輸船!!それを猛然と襲うは、見よ!!神出鬼没疾風妖艶女海賊群!!血を恐れぬ残虐!!飽なき肉慾にのたうつ凄艶美貌の女團長上海マキ!!敢然と立ち上る快男児高波英次!!海に、陸に入り亂れて描き出す情痴と恐怖戦慄、スリル冒険、ロマンの一大繪図!

イブがぼとりと机上に落ちた。と、甲板を走る靴音。タラップを駆け上る足音。それもほんの少しの間。しーんと静寂がやつて来た。

立ち上ると伝声管に大声で叫んだ。「おい!水夫長、どうしたんだ!おい!」だが返事はない。彼の声はいくらに船室にこだましてそれっきり又静かになった。「おい!」

もう一度どなった。だが相変わらず返事はない。彼は、いらいらと部屋の中をひと廻りしてドアに近づいた。と、その時ドアが外から音もなくすうつと開いて、すらりと人影が立つた。手にコルトが冷めたく光つてゐる。

「き、貴様は、誰だ!」それに答えずその人影は、コルトを構えてゆつくりと部屋の中へ入つた。「そんなに驚かなくつたつていゝじやないか」

葉付きや服装こそ男のものだがまぎれもなく女の声なのだ。そう言えば、ふくれ上つた胸元と云い、ズボンを通して感じられる軟かい腰の線はまさしく女のそれだ。頭には、白い布を無難作にまきつけている。「き、貴様は女だな。こ、この俺に一体何んの用があるつて云うんだ。」

狼狽と怒りに唇をわなわな震わせながらやつとそれだけ口走つた。「フン、勘の悪い男、ちよいと密輸船の船長さん、あたしやね、上海マキつてちよつとは名の知られた女だてらの海賊団長さ走つてる船に飛び移り一仕事する位は朝めし前のさいさいさ。この船に積んだ荷物はもうとつと全部取れたわよ。お前さんの可愛い靴分に手伝つてもらつてね。その靴分遣は、今頃用がすんだから甲板の上で数珠つなぎになつて夕涼みとしやれているよホホホ……」

「ち、畜生!ウーム」ぎりぎり歯ぎしりして、花田甚吉はその女上海マキをにらみつけた。だが、どうにもならなかつた。「ホホホ……口惜しいだらうね、その氣持分るよ。船長のお前さんに何んの挨拶も

なく引き上げるのもなんだからだと思つて、こうしてわざわざ伺つたのよ。光榮と思いなよ。」

上海マキは、小気味よさそうにうすら笑いを浮かべて皮肉まじりに喋り立てた。

「だまれ！だまれ！」

爆発的に花田甚吉は、叫んだ。

「お前さんこそおだまり！このピストルが玩具の水鉄砲に見えるのかい。お前さんの横腹に風穴をあける位何んとも思つてやしないんだよ。」

そう言つたかと思つと、銃口を天井に向けて引金に人差し指をかけた。轟然と音を立てて、ばつときな臭い煙がひろがつた。

「フフフ……さあ甲板へ行こうよ。お前さんの乾分達が待つてゐるよ。」

もう絶体絶命、花田甚吉は背中にコルトの銃口を感じて、先に立つて部屋を出た。闇をすかして見る甲板には、猪熊水夫長以下八名の乗組員が両手両足をしばられてひとかたまりになつてゐた。脇に夫々小型機関銃を抱えている。その一人が、上海マキを認めると、

「団長、荷物引あげ完了、全員しぼり上げました」

これも女だ。

「そうか御苦労、こゝに一人残つてゐる。こいつもしぼれ！」

そう言つて上海マキは、花田甚吉の肩をどんと突いた。

「これでよしつと、お前さん達、命だけは特別のおなだけで勘弁してあげるよ、だがねこうして波の上にたゞよつていれば、警察の旦那に助けられるかそれとも餓え死するか……フフフ……」

上海マキは残忍に突つた。

「さあ、みんな引き上げるとしよるか。ぐづぐづしていたら夜が明けてしまふよ。」

四つの人影は、黒龍丸の船べりにびたりと横づけになつてゐる船に、ひらりひらりと身軽に乗り移つた。

そして、その海賊船はエンジンの音も軽快にだんだんと海の彼方へ消えて行つた。

憎悪心と肉欲

「凄いのなんのつて、そりやもうぞーつとするよな美人さ。だが、そいつにパチンコをつきつけられた時にはさすがの俺も……」

「生きた心持もなかつたつて訳か。そしてその女にしばられて……いくらおめえが女にあまいからつて、そりやあんまりだらしないぜ。おめえが言うようにそんなに美人なら反対にしばり上げ首に綱でもつけて壁につれて来て見ろ、随分楽しめるじやねえか。考えただけでも、俺あなんだかこうからだかむづむづして来たわ。惜しいことをしたな。俺ならそりするが」

「じよ、じよ談じやない。そんなことして見ろ、ズドンと一発そのまゝコロリさ。」

「あゝ、俺もこの世の思ひ出にその美人海賊様の顔を一度だけでも拝みたいもんだ、ハハハ……」

神戸三ノ宮裏通りにある酒場ボン。うす紫色の冷めたいネオンに照らされて、先程からしきりにグラスを傾けながら、話しているのはあの黒龍丸船長花田甚吉ともう一人は、同じ密輸の仕事に関係している男で

あろり、酒の酔いからだけでは無い赤銅色に日やけた精悍な顔に真白な開襟シャツが対照的である。

「手足の自由はまるつきり奪われ、波に流されるまゝに二日二晩、もう餓え死するかとみんな諦めかけていた時も時、有難えじやないか、神は俺達を見捨てなかつた、丁度通りかかつたのがほらあの留兄貴の船さ。」

「ほう、おめえは悪運の強い男だな。それがサツの船だつたら今頃は、暗がり行きだつたのにな。」

「そうは行かねえ。年貢を収めるにはまだ早や過ぎる。だが、につくい奴はあの女海賊共だ。今度合つたらただでは置かねえ」

そう呟いて、花田甚吉は卓上のグラスをとつてぐいつとあふつた。

が、その時、彼は飲み干したグラスを手にしたままはつとしたように眼をみはつた。つい今しがた、筋向いのボックスからすりりと立つて、入口の方へ静かに歩み行く純白の洋装に身を包んだ女。

一際背高く見せてゐるハイヒール・ショールダーバックを片手に持ち、房々としたパーマネントの黒髪が肩のあたりにむらがつてゐる。

「どこかで見たことがある。まじろぎもせず花田甚吉は見つめた。そして、その女が入口から消えた時、——そうだ！上海マキ！

本能的に、花田甚吉は立ち上つた。

「おい、どうしたんだ、一体」

驚いたように口走る開襟シャツの首に答えず、彼はもう女の後を追つて外へ飛び出してゐた。

星あかり一つない闇夜だつた。女は、山手への坂道をこつこつと靴音を鳴らしながら昇つて行く。

人通りは全くなかつた。息をこらし足音をしのばせて、見えがくれに花田甚吉は、女との距離をぐんぐんと縮めて行つた。

後をつけられてゐるのを知つてか知らずか、女は振向こうともしない。女との距離四米。両側に建物は途絶えていた。まさに絶好。パツと土煙りを上げて駆け出したかと思つと、女の前に立ちはだかりピストルの銃口をびたりと女の胸に押しつけた。ほんの一二秒の間だつた。

「間違がつたら御免、いや人違いとは言わせねえ、おめえさんは確か女海賊団長上海マキさん。まさかこの俺を忘れやしまい。江戸のかたきを、おつと、海のかたきを陸でうとうとは思わなかつた。フフフ……」

息をはづませ、早口で低いがするどく囁いた。

「あたしなんのことだかさつぱり、急いでいますからどうかそこをどいて下さい」

「しらばくれない。おい、もういい加減にしつ尾を出したらどうだ。悪党がいくら貴婦人に化けたつてこの俺の眼は逃れないぞ、お前さんのせりふじやないが、このピストルは玩具の水鉄砲じやないんだぜ、おめえの横腹に風穴をあける位何んとも思つてやしないんだ。」

「ホホホ……。えらい権威だこと。お仰せの通りあたしは上海マキ。でもお前さん、よく陸へ帰れたものね。で、このあたしを一体どうなさるおつもり？」

女の口調が、がらり変る。不敵なうすら笑いを浮かべて。

「さすがは上海マキさん、いゝ度胸だ。だが、どうしようも俺の勝手だ。思うぞん分復讐させてもらうぜ。」

こう言つてから花田甚吉は考えた。このまま殺してしまふのが惜しい気がしたのだ。事実、彼はさき程から上海マキの爛熟し切つたむせるような肌の匂い、軟かなからだのくねりにむかむかつと烈しい肉慾の刺激にかき立てられていた。彼女は男を悩殺する一種不可思議な魅力を発散していたのだ。すばやく彼はピストルをズボンのポケットに突込み、その中から銃口を構えて、

「さあ歩くん。言うことをきかんと、ぶつ放すぞ」

「一体どこへ行くの？」

「うるさい！俺と一緒に行くんだ。」

二つの人影は、黙々と殺氣立つた空気をかもし出しながら、今来た道を引き返し始めた。

三

煤ぼけた天井からはこりまみれの裸電球がにぶい光を投げかけ、うす汚れた壁には俗悪な裸体画が一つ。部屋の真中に鉄製の粗末なダブルベッドが所せましとどかんと据えつけてある。

花田甚吉が行きつけの、三文ホテル鈴蘭の一室である。

「入れよ」

吸い込まれるように、上海マキが部屋の中に入ると、花田甚吉はドアを背にしてガチャリと錠を下ろした。

「きたない部屋ねえ、こんな所へ連れて来てどうするつもりなんだい」

上海マキは、ちらりとダブルベッドを眺めて、別に驚いた様子も見せず言つた。

にたりと下品に口を歪め花田甚吉は、その掌の上でピストルを弄びながら、

「喜びなよ上海マキさん、お前さんがあの世へ旅立つのに未練が残らぬように、今から人間の喜びを充分味わせてやるのさ。これがこの俺のせめてものおなさげだ。使えなくなるまで散々なぶりものにして、息の根をとめるのはそれからで充分さ。フフ……」

「有難いわね」

「ほざいたな」

じりつとつめ寄つた。

「さあ、服を脱げ！」

別にさからいもせず上海マキは、おとなしくすつぽりとシミーズ一枚になつた。

「そ、それもとるんだ！」

その声は、もはや理性を失いくらくらと動物的な昂奮にふるえていた。

大胆に最後のもの一枚になつた。

「みんなとるんだ！」

命ぜられるまゝになつた。ぬめ／＼と脂ぎつた肌、一条まとわぬ全裸だつた。ぐつと盛り上つた乳房がかすかに息づいている。「ねえちよいと、いつまでもそんな物騒なものを持つていないで、どつかへ置いたらどう、あぶなくて仕様がなないじゃないの。」

静かに上海マキは口を開いた。あくまで冷静な言い方だつた。

言われるままに、花田甚吉は手にしたピストルを何んの反省もなくテーブルの上に投げ出した。今の彼には、女を抱くことで一杯だつたのだ。萬更初心でもない遊び馴れた彼をかくも麻痺せしめた上海マキの肉

体が如何にすばらしいものであつたか充分わかるであらう。

ちらつと、テーブルに投げ出されたピストルを見て、上海マキはゆつくりとベッドに仰臥した。大輪のバラのように、あざやかであり、凄艶だつた。

「電気消してよ」

「嫌だ！俺はこの眼で、貴様がのたうつ様を見てやるんだ！」

正気とも思えない程その声は荒々しかつた。

「嫌なら仕方がないわ、どうぞ御隨意に」沈黙が流れた。

ごくんと男の喉を通る生唾の音。

ぐつと身軀える男の眼。けだものの眼。次の瞬間、ぱつと男のからだに宙に浮いた。

それと同時に、何たる早業、ひらりと上海マキのからだはベッドをすりぬけていた。

そして、すばやくテーブルに駆け寄り、ピストルをしつかりにぎりしめて、

「ホホ………。覚悟おし。」

はつと我に帰つたように花田甚吉が振り向いたときにはもう後の祭りだつた。

「ち、畜生！又やられたか。」

無念と苦痛と狼狽に、花田甚吉の顔はみにくく歪んだ。

「そうやすやす、このあたしがお前さんみたいな男に自由になると思っているのかい。間抜けな奴、いい気味さ。」

勝ち誇つたように上海マキは満足氣にあざ笑つた。

「又この前のようにしばつてあげるから、さあ手をお出し、ぐづぐづしてると今度は



「本当にぶつ放すわよ。」
手足をしばられた花田甚吉は、あつけないベットの所にころがされた。

「まあ明日の朝までゆつくりこうしているんだね。その中に誰か来てくれるだろうよ。又、御縁があつたら合いましうね。」

すつかり洋服を着終つた上海マキは、すてぜりふを残して悠々とドアを開けて出て行つた。

洋上のボート

青々とすみ切つた海、波一つない。あちこちに浮かぶ大小様々の島。真夏の瀬戸内海は、夢のように美しい。

その島々の間を縫うようにして波を蹴立てて行くスマートな一隻の遊覧船、否、遊覧船ではない、これが夜になると海賊に早変わりする上海マキを団長とする女海賊船むらさき丸だとはどうしても見えなかつた。そう、どう見てもたゞの遊覧船に過ぎなかつた。

その甲板の上に立つてじつと海のある一点を凝視しているのは上海マキである。

「何だろあはれは。ボートのようだけど……たしかにボートに違いない。」

前方百米ばかりの海の上にたゞよつてゐるのは、確かに一隻のボートであつた。

だが、遠くでさだかではないが誰も乗っている気配は見えない。

「政子、双眼鏡持つておいで」

政子と呼ばれた乾分が持つて来た双眼鏡をひつたくるようにしてのぞき込んだ。

それに写つたボートの舟底に何かうごめ

いている。なおも、もどかしく焦点を合わせると、それはお、髪をふり乱し口に布をかまされた半裸の青年が一人、荒縄でしばられて苦しそうにもがいているのだ。

リンチ！多分そうだろう。

「取能一杯！」

むらさき丸の舳が大きく左に廻転した。

二

「縄を解いておやり」

たくましく隆々とした青年の筋肉にめり込んだ荒縄は、わけもなくするすると解けた。だが、その胸に、腕に痛々しいまでに赤くはれ上つた痕跡を残していた。

「どうしたのさ。」

腰をかきめて上海マキは、青年の顔をのぞき込むようにして言つた。秀いでた眉よく通つた鼻筋にどこか知的な匂いをたゞよはせている。

「ひ、ひでえことをしやがる。ち、畜生、おぼえてろ、う、うーむ」

それに答えず青年は、しきりに腕をさすりながら苦しうにうなつた。

「痛むのかい、可哀想に。だが、もつと苦しむがいゝよ。天罰さ。」

「天罰！」

青年は、始めて顔を上げてきつと上海マキをにらみつけた。そして、自分の周りに立つて見下ろしている女達を見渡した。

「さうよ天罰さ。恐つたのかい。面白いな何故かつて？フン、あたしの眼はふし穴じやないんだよ。失礼だけど、こゝろ見た所お前さんはたゞのねづみじやなさそうだ。仲間を裏切つたか、錠を破つて逃亡したかそれで捕つてリンチ……どうだ、図星だらうフ……」

「き、君は一体誰だ！」

「あたし？あたしは女よ。フフ……。そんなに教えてほしければ言つてやろうか海賊だよ。カ、イ、ゾ、ク。驚いたかい。こゝろにいるのはみんなあたしの乾分さ。世間ではあたし達のことを女海賊つて恐れているよ。まあこんなことどうだつていゝよ。だけど、お前さん、その位のリンチはまだ生まやましい方さ。もつと凄いのがあるからね。それはそうとあんた何て名前だい」

「英次つて言うんだ。」

青年は、ぼそりとそう言つてそれつきり首をうなだれてしまつた。

「英次か、いゝ名前だな、」上海マキはひとりで言ひ、うしろをふり返り、

「みんな、この男を空いた部屋に連れて行つておやり。大分疲れ切つてるようだからウイスキーでも飲ませてやれよ。」



女達に抱きかゝえられるようにして、その青年英次が立去つた後、乾分の中でも一番姐さん株の政子が歩み寄つて来た。

「団長、一体あの男をどうするつもりなの。あんな素性の知れない！、なにをしでかすか分つたものじゃないわ。もう一度海へ突き返してやればいゝのに、団長も物好きね。」

「ホホホ……。そうむきにならなかつて、そのことで今みんなに相談しようと思つた所なんだよ。ねえ政子、どうだろうあの男をあたし達の仲間に取り入れては？」

上海マキは、意味ありげに笑つた。

「えゝつ！仲間には？だつてこゝろは男子禁制よ。勿論、機関部の六助爺だけは別だけど今日までこゝろして風紀が乱れず、規律然と仕事に成功を取めて来たのはみんな男と云

うものがいなかつたからよ。男はけだものよ。あたし達の仲間は大抵過去に男にだまされて散々弄ばれ、そしてそのあげく捨てられ、男と云う男を呪つてゐるから大丈夫だと思ふけど、でもそこは人間よ。女よ。どんなことで間違ひが起らないとも限らないわ。そんなことで士氣がにぶるようなことがあつては大変だわ」

「そりやお前以上によく分かるよ。だけれどねえ、これから仕事を續けて行くには、どうしても女ばかりじゃねえ。前々から頼もしい青年を一人ほしいと思つてたのよ。勿論、お前が言うようにそんなことはないと思ふけど、万が一間違ひを起すようなものがあるれば、直ちに懲罰をもつて望むつもりだよ。だから、みんなにお前からこの事を一度よく話しておいておくれ。命令だよ」

「はい、かしこまりました。」

政子は、一礼して立ち去つて行つた。

情慾の戦い

夏も終りに近く、もうすぐそこに秋が来かゝつていた。

英次が、むらさき丸で働くようになってから一ヶ月以上も経つていた。

英次はこまめによく働いた。すぐ上海マキの氣に入りになつた。女達からも好かれた。だが、好かれただけではなかつた。甲斐々々しく半裸で走り廻る英次のたくましい肉体は、あれ程男を絶ち切つて肉慾の敷をかたくとざしてゐた女達の官能を知らず知らずの中にいやが上にもあふり立てるようになつてゐた。

だが、誰もが刑罰を恐れた。そして、暗

黙の中にお互を警戒しつゝ英次をとりまいてゐた。だから、表面だけは以前と少しも交らず皆仕事を遂行し戦つた。士氣も少しもおとろえず、却つて英次と共に働くことに働き甲斐を感じた。風紀も乱れなかつた。この世界では、刑罰が、所謂リンチが秩序の上に立つてゐた。誰もが好き好んでこ

う云う懲罰をしてゐるとはいえ……

英次は、美青年とは云えないが、男性的な好男子であつた。やぐざ言葉も堂に入つてゐた。だが、一人で部屋に閉じ込もつてゐる時には、人がまるきり變つたように熱心に何か書きものをしているのを誰も知らない。

今夜も彼は、机によりかゝりしきりにペンを走らせてゐた。

ユツ、ユツ、ノックの音だ。

「どうぞ、」

そう言つてから、何思つたか彼はウイスキーの瓶をいきなりひひつかんでたてつけに五六杯あふつた。ぼろつと熱氣が顔に昇つた。

「入つてもいいかい」

上海マキだつた。

「何してたんだい。」

「え、何だか頭の中がむしやくしやするもんだから酒を飲んでたんです。」

何気なく彼は言つた。

「そうかい。でも、あんまり飲み過ぎると毒よ。」

「え、大丈夫です。で、団長、何か用で？」

「ふふん、別に用つてないわ。たゞ、ふらつと入つて来たのよ。悪るかつた？」

「と、とんでもない。」

上海マキは、机に腰かけて足をぶらぶらさせながら、其処に散らばつてゐた外国煙

草を一本取つて口に喰へた。すばやく英次は、しゅつとマツチをすつた。ぼろつと立ち込める紫色の煙を見つめながら彼女は、

「ねえ、あたしや此頃妙に昔を思い出して仕様がななんだよ。今までにこんなことはなかつただけだ。」

と、急にしんみりとなつた。

「団長、感傷は禁物、禁物」

「フフ……感傷かな。あたしが上海にいた頃初恋の人に合つて、あの頃はまだ初心だつたよ。所がその人は殺され、それでやけになつて男から男へ……」

「団長は案外寂しい人なんだなあ」

「そう見える？その初恋の人がどこか、英次、お前に似てるんだよ」

その言葉が終るか終らない中に、いきなり上海マキのふくよかな腕が英次の首にまきついて来た。その唇が、わなわなと喘いでゐる。

「駄目ですよ。」

「誰かに見付かつたらどうします」

「いゝのよ。そんなこと。」

「いや、駄目です」

英次はもう部屋の外に出てゐた。階段を昇つて甲板に出た。

快い潮風がさつと頬をなぶつた。手すりにもたれて煙草を喰へた。ズボンのポケットに手を突込んでマツチを手さぐりした

その時、横合でしゅつと音がして火のついたマツチが無言のまゝ差出された。

はつとして見た。マツチの赤い火にぼろつと照らし出されたその顔は、上海マキの

ではなかつた。マユミだつた。この船でも一番年少の十九才で、ぼろつちやりと肉感的な女だつた。につこりとあどけなく笑う右

の頬のえくぼがひどく印象的であつた。彼女は前々から英次に並々ならぬ好意を寄せてゐたのも彼は知つてゐた。

まだ開ききらぬ肉体のつぼみ、そう云つた感じの中にどことなく男を引きつける魅力をそなえてゐた。

「すまねえな」

煙草の火をつけて英次は、言つた。

「何考えてたの？女のこと？」

マユミはそつと英次によりそつてあまえるように小声で囁いた。

「なあに、ちよつと夜風にあたつてみたくなつてね」

「そう」

「マユミはおふくろも親父もないんだつてね。やつぱりこつちう晩は恋しくなるかい」

「ちつとも、誰が恋しいもんか。あたいが生まれるとすぐ野良犬のように捨てた親なんか、唾をはきかけてやりたい位だよ」

「そうか、その氣持分るよ」と言つてから英次は話題をかえた。

「明日は上陸だな」

「うん、海もいゝけど陸もいゝわ」

「それはそうと、団長のすばらしいかくれ家が神戸にあるつて言うじやないか」

「うん、六甲のほら、何とか云うドイツ人の経営する中学があるでしょ。あそこのすぐ下の赤煉瓦のどつかい家よ」

「ほうそんなにごつちい家かい」

「つい最近買つたばかりなのよ。そこには麻薬室だつて、賭博室だつて、いろんな部屋が地下室にあるのよ。そこで一ヶ月か二ヶ月目に一度盛大な会がひらかれるの。勿論、集まつてくるのは有名人か、金のあふ

いている奴ばかりさ。まあよく云うナイト

クラブつて云う奴かな」
「すると今度の上陸は其の為でもある訳だな」
「そうよ。団長は陸へ上れば貴婦人さ」
「俺は又明石のあの家だけがくれ家だとはかり思つてた」
「そうそうあんたは神戸のかくれ家は始めてね」
其処で話が途絶えた。後は波を蹴立てるエンヂンの音のみがひびき渡つた。英次は手にした煙草をぽいと海へ投げこんだ。

と、だしぬけに、
「英ちゃん、あたい——」
思いつめたようにマユミが熱っぽく叫んだかと思つと、どたつと強引にマユミのからだもたれかゝつて来た。その乳房が、英次の胸に押しへしやがれてゴムマリのようにはづんだ。
「あたいを抱いて、ぎゅつと抱いて——」
今にも泣き出しそうな程悲痛であり、真剣味を帯びていた。
「ば、馬鹿！なにするんだ」

あわてて、マユミのからだを無理矢理にふりほどいて突き返した。
「嫌！いや！」
髪をふり乱して、半ば気が狂つたように又マユミはいどみかゝつて行つた。野生の牝豹そのまゝであつた。
「は、はなせつたら」
思わず英次はたじろいて、懸命に遮つた
「英ちゃん、あたいが嫌いな！本当に嫌いな！ねえ、ねえッ」
マユミは泣いていた。男の胸に顔を押しあてて。
その時であつた。
「マユミ！」
闇の中にりんとした声がひびいた。
ぎよつとして、マユミはとびはなれて立ちすくんだ
ゆつくりと近づいてくる足音。それは政子であつた
「マユミ、何してんだい。フン」

政子は鼻先でせゝら笑つた。そして、そこに突立っている英次の方へ歩み寄り
「英ちゃん、お前さんはあ

つちへ行つとつておくれ。あたしやちよつとこの女に話があるんだから」
「俺達はたゞ話してただけなんだぜ」
「なんでもいゝから部屋へ帰つておくれ。お前さんには用がないんだから」
「じゃあ、仕方がねえ。だが、俺達はほんとに何んでもないんだから変な誤解するなよ」

仕方なそりにふらりと、英次は立ち去つた。その後姿が見えなくなるのを見送つてから「マユミ、かくしたつて駄目だよ。あたしは始めからちゃんと見てたんだから。みんなお前が悪いんじゃないか。まるでさかりがついた猫みたいに、いやらしいつたらありやしない」
顔をしかめ、にくにくしげに政子は言つた。マユミは、うなだれたまゝじつと齒を喰いしばつていた。
「何故黙つてるんだい。何とか言つたらどう。錠を破つたものがどんな目に合うか、忘れたんかい！」

政子はいよゝゝ激昂して、いきなりマユミの髪の毛をひつつかんで引き寄せた。何時の間にか、上海マキも来ていた。そして、他の女達もぐるりと周りを取りかこんでいた。嫉妬と憎悪に燃えて。
「お前のような奴は、こうしてくれるわ！おい、みんなほんやり見てないで手伝つておくれ」
「O、K」

どつと女達は、群がりたかつて荒々しくマユミの洋服をはぎとつた。
マユミは、押えつけられながらもからだをくねらしてひいひいと苦しそうな声を上げた。
「ちえつ、いゝからだしてやがる」

誰かが、ねたむように溜息をもらした。
上海マキは、腕を組みうすら笑いを浮べながらじつと乾分達の行動を見守っていた
「何するのよ。はなして！」
「何言つてやがるんだい」

一人が持つて来た長い丈夫な紐の一端でマユミの両の手首をしつかり合わせてぐるぐるにしばりつけた。そしてもう一つの端を船べりの手摺りにしつかり結びつけた。
「さあ、こいつを海の中へほり込むんだ。しばらく海水浴させてやれよ」

マユミは足をばたつかせ、必死になつて抵抗した。だが、一人に多勢、すべてが無駄であつた。マユミのからだは、軽々と胴上げされた。

「勘忍して！勘忍！」

マユミは力の限り泣き叫んだ。

それに構わず、わあつと喚声をあげて女達を船べりの方へ殺到した。

「それッ！投げ込め！」

きりきりつと、マユミの裸身が宙に白く浮かび上つて廻転したかと思ふと、そのまゝ真逆様にすごい勢いで海中へ落ちて行つた。

「きやーッ」

はり裂けるような悲鳴と共に、ぱつと水けむりが上つた。その拍子に、手摺りに結びつけられたロープがびーんと張つた。

進行する船に、マユミのからだはまるで生捕つた魚のように波の上を引きづられて行く。

将に、凄惨と云おうか、冷酷残酷無比と云おうか、これ程恐るべきリンチが又とあるだらうか。

「フン、いい気味だ」

「あの図太い女のことだから、まさかぬ死

つてことはないだらうね」

「死んでしまふ位なら、何もこうしてやる価値はないさ」

「もししばらくこうしておいてやる方があいつの為だよ」

女達は、手摺りに寄りかゝり、めいめいにのしりながら、ひきずられ行くマユミをじつと見守っていた。

五、六分もたつたであらうか。

「みんな、もうこれ位で勘弁しておやりよこれ以上してたら命が危いから」

今まで一言もしやべらず黙つて見ていた上海マキが始めて口を開いた。

陸に近づいたのか、はるか遠くにちらちらとあかりが見え始めていた。

上海マキの恋心

一

その夜は船で夜を明かした。マユミはベツトの上で死んだようにぐたりとなつて動かなかつた。あれから、甲板に引き上げられ、やゝもすればぐんにやりと崩れて行きそうなからだを支えられて、みんなの前でもう今後絶対に風紀を乱し搦を破るようなことは致しませんと誓わされた。

その翌朝、一同は派手に遊覧船の乗客を装つて下船した。それから夫々別々の行動をとつて、今晚九時に一まづ明石のかくれ家に落ち合うことを約束して別れた。人目につかぬよりあくまで用意周到なやり方だつた。

その中には勿論英次もいた

だが、たつた

一人マユミだ

けが顔を見せ

ていなかった

明石郊外、

一見しもたや

風の平屋建て

である。こゝ

には、六十二

になるおかね

婆が一人留守

番していたお

かね婆と云う

のは、英次が

来るまでは海

賊船むらさき

丸のたゞ一人

の男の乗組員

である機関部

の六助爺のお

かみさんであ

る。

「マユミの奴

遅いなあ」

「船を降りた

時あの通り元

気だつたのだ

し」

「まさか、ず

らかつたんで

は」

「まあ、その

中にくるさ」

皆がそろそ



ろ心配し始めた。他の者なら兎も角、昨日リンチに合つたマユミだけに、氣をもむのも無理からぬことだつた。

時計が十時をうつた。

「ちえつ、とうとう来なかつたよあいつ」

マユミは遂に姿を見せなかつた。

「さあ、そんなことより景氣よく飲もうよあの恩知らず、どこも行く所がなくて帰つてくるよ」

仲間を一人失つたので、やはり寂しかったのであろう、政子が自棄的になつた。

「なんだい、しけた顔して」

一座の空氣が妙に落ち着かなかつた。

だが、もう来ないとあきらめたのか、酒がまわると座が一辺にくづれ出した。嬌聲が上り下司つぽい歌が飛んだ。

その時だつた。開け放たれた襖の外に、すうつと音もなく立つた女。

「あつ」

喜びとも驚きともつかぬ声があつた。それもその筈それはマユミだつたのだ。

それよりも、その眼が異様にひきつり、顔が蒼白だつた。思いなしか、額にぼつさり群がった髪の毛が、手足がかすかにふるえけいれんしている。

「まあ、マユミ」

そういつて、政子がふらふらと立ち上りかけたが、あまりの形相に圧倒されて又座り込んでしまつた。

マユミは、ゆつくりと部屋の中へ入つて一同を見下ろした。そして突然

「ワッハッハハハ、。あたいがそんなに悪いのかい。ワッハッハハハ、。、」

と滑稽く笑つた。

一同はごくんとかたずを飲んで声も出なかつた。

「お前さん達、もう長くはないよ。こゝへ来る時警察へ電話しといたよ。ついでに神戸のかくれ家の住所もね。もうすぐ警官隊がくるだろうよ。あまりだしぬけでは可哀想だと思つてこうしてわざわざ来てやつたのさ。ワッハッハッハハハ、。、」

又もや、ヒステリックな笑いと共に氣が狂つたやうにマユミは、どたと畳の上のころけて笑いこけた。そして、その笑いはいつまでもとまらなかつた。

「うゝむ、よくも、マユミ覚悟しろ！」

上海マキは、すつくと立ち上つて拳銃を構えた。

「ま、まつてくれ、団長！」

今まで呆然と見ていた英次が、だしぬけにすばやく飛び込んで、上海マキの拳銃をにぎつた腕を掴んで銃口を上に向けた。

「ええい、お前さんまでがとめる氣かい。そんならなほ更こいつを殺してやらなきやははなしておくれ、はなしてつたらッ」

「団長そんなことしてる場合じゃない。警官にふみ込まれたらどうするんだ。人ひとり殺して罪が重くなるばかりだ。それより早く逃げるんだ。おいみんな、ぐづぐづしてないで早くするんだ！」

英次はもう、上海マキの拳銃を奪つていた。

三

さくさくさくと砂浜を踏んで二つの人影が急ぎ足で歩いていった。上海マキと英次であつた。

半かけの三日月が中天に冴え渡り、どこかで虫が鳴いている。

松林をゆるがせる潮風が、どつと大波をゆるがせるような凄まじい音をたてて、一

しきり又静かになつた。

「英次さん」

ふと、上海マキは立ちどまつた。

「え」

英次は足を停めて振り返つた。

「ねえ、お願い、あたしをどこかへ連れてつて。北海道だつて、無人島だつて、あなたの行く所ならどこへだつて行く。ねえ。こんな稼業さつぱりやめて、いゝわ。今のあたしには、お金もいらぬ、真珠の首かざりもいらぬ、ほしいのはあなただけ」

上海マキは夢みるやうにそう言つた。

「何を言い出すかと思つたらそんな事か、君らしくもない。でも、マキさん、よくそんな氣持になれたね。僕は嬉しいよ。だが……」

何故かしらふだんの英次とは違つた感じだつた。

「だがどうしたの？ねえ、英次さん、あたしが好きな、嫌いな、ねえ、はつきり言つて」

その声は切なげに震えていた。英次の胸に寄り添つてじつと長身の彼を見上げた。

「好きだ。今まで会つた誰よりも好きだ。好き以上だ。だが、今の俺は、君を好きになつちやいけないんだ。好きだからこそ言えないことがあるんだ。俺は弱虫だ、卑怯者だ」

英次は、苦しやうにやたらに髪の毛をかきむしつた。

「ねえ、言つて、どんなことなの。あたしあんたが自首しろつて云うなら今からでもそうするつもりよ」

「マキさん、俺の仕事は感情に負けたんだ」

「それ、どう云うこと？」

「ゆるしてくれ、マキさん、俺は芝居をうつて君達をだましていたんだ」

「と、云うと」

「あの時のボートも、俺のからだにまきつけたロープも、みんな俺がわざとしたんだ実は……」

そういつて、英次はズボンのポケットから一枚のカードを取り出して、上海マキに渡した。月あかりにすかして見ると、

全関西情報社社会部
高波 英次

それを見るなり、上海マキはへとへと

その場にへたばつてしまつた。

「マキさん、すまない、俺は職を引く。自首してくれ、何年だつて君の歸りを待とう」

がくりと英次は首をうなだれた。

やゝあつて、上海マキは思いつめたやうに、英次にむしやぶりついていつた。

「駄目、駄目よ。そんなことしちや。あんたは職の方が大切よ。弱氣起しちや駄目。あたしは喜んで自首するわ。でも、ちつともあんたを憎いとは思わぬ。あたしは嬉しいのよ。あんたのやうな人に逢えて。あんたは、あたしの胸の中に生きる永遠の恋人よ。けど、英次さん、あたしのこと

は忘れて、ね、こんなあはずれの、すれつからしの女——」

そう言いかけたマキのしなやかな身体を英次の逞しい腕がグツと抱きしめていた。

潮風が砂を混えて、二人の身体の上へさツと吹きつけていた。

(了)



淫婦流轉記

夢を追う女

有 藻 亞 郎

今宵七人目の新しい夫を迎えて
新婚初夜の闇に入ろうとする世紀
子も、もとをたゞせば貧乏華族
の罪の子であつた。
男から男へと爛れた戀の行脚を
續ける或る女の愛慾行狀記

一、新婚初夜

世紀子はあたりも憚らず、あ
ーッと咽喉の奥まで覗けそふな行
儀の悪い大きな欠伸をすると、さ
も荷厄介な重荷でもかなぐり捨て
るように、借着の豪華な結婚衣裳
を無造作に床に脱ぎ捨て、壁際に
でんと居踞つて居る派手な羽根蒲
団坊の色彩が妖しい媚情を漂よわ

せて居るベッドに、ごろりと祝杯
にはてつた体を横に転がした。
何と云う不貞腐れたような仕草
だろう。これがたつた今、聖なる
結婚式を終えて披露宴の退屈な乱
痴氣騒ぎをやつと逃れて来た花嫁
の、今宵これから、男女の永遠の
契の爲の神聖な愛の営みが展開さ
れようと云う晴れがましい寝室で
些か常になくぎくしやくとさえし

て、余り板につかない礼装で、ま
だ神妙に控えて居る花婿を前にし
てのしぐさとしてほちよつと破目
を外し過ぎて居るようだ。
「あなた、妻とつても疲勞れちや
つたわ。あの人達、いゝ加減に帰
つて呉れればいゝのに、随分と氣
の利かない野暮つちよばかりなの
ね。他人の結婚式なんか招待さ
れて、どうしてあんなに愉快そう

あら、あなたも、とても退屈そ
うな顔をして居るじやないの。構
わないから、そんな操り人形みた
いな借着のタキシードなんか、さ
つさと脱ぎ捨て、あの陽気な紳
士達と一緒にもう一度騒いで居ら
しつたらどう？
どうやら、あなたにも妻よりあ
の空氣の方が魅力がありそうね。
妻、暫らく一人で休ませて貰いた

いわ。
あーら、あなた、駄目じやない
の。部屋を出て行くんなら、花嫁
に接吻の一つ位してから出て行く
もんだわよ」
肥つた花婿は、嬉しそうな、退
屈そうな、面倒臭そうな複雑怪奇
な表情を窮屈そうな白いカラーの
上に載せて、それでもタキシード
の礼装は崩さずに、ちよつとてれ
臭そりに花嫁の唇の上に顔を伏せ
ると、早速、胸のハンカチで唇を
押さえて、その儘、サロンの愉快
な仲間の中に戻つて行つた。
花嫁の世紀子はよく弾むベッド
のスプリングで体の調子を取りな
がら、枕元の造り込み欄に肌もあ
らわな腕を伸ばして、煙草を一本
喫い附けると、物憂そりに煙の輪
が一ツ二ツゆつくりと纏れ合いな
がら天井に上つて行く。
世紀子は今宵、この美しく祝福
の花束で飾られたベッドに、彼女
にとつては七人目の新しい夫を迎
えようと言ふのに、彼女はもうそ
ろ／＼この結婚に退屈しかかつて
居る。
世紀子にそつてなく追つ払われ
た氣のよい肥つた花婿は、何時し
か陽気な仲間の人を喰つた風流譚
の餌食になりながらも、彼も又結
婚しそりに其の猥褻な雰囲気
を楽しみながら、何時果てるともな
い無責任な時間の浪費に耽溺して
居た。彼等は皆んな、今宵は世紀

子の七番目の結婚披露宴に招待されたことなんかとつきの昔に忘れ果てゝ居るのだ。いや、それはこれ等の陽気な紳士ばかりでなく花婿自身もどうやら、誰の結婚式のなか忘れかゝつて居るのかも知れないのだ。

斯うして、花嫁は独りで花の飾られたよく弾むベッドに物憂く煙草の輪をもてあそび、花婿は玩具箱のように手の付けようもなく乱れた宴席に、他人の幸福や不幸からそつぽを向いた紳士淑女達と、花をちぎつて捨てたようにへべれけになつて、床の上に酔い潰れて居た。

唯、サロンの鳩時計だけがコックと世紀子の七番目の結婚式の夜を刻んで居た。

二、酒場の妖姫

世紀子が街の男の前に初めて姿を現わしたのは、酒場「スバル」の女給としてである。

だから彼女が「スバル」の女給になる時にどんな経歴を持つ女なのか誰も知らない。世紀子に尋ねても笑つて居るだけで答へ様とはしない。強いて執拗に喰いさがる男でもあると「華族様の令嬢よ」と、まるで男の横顔でも叩きつけるように空囁いて白々しく媚笑する。

これは勿論でたらめではある。然し、どこやらこの科白には自嘲

に似たものが感じられた。何から淋しい秘密がこの言葉の裏に纏りついて居るような気がしてならないのだ。

そこで或る物好きで酒場の常連の一人である新聞記者が、商売柄根気のよい探訪才能を駆使して、苦心惨胆の末調べあげて見れば、或る貧乏華族のどら息子に可愛い小間使を追つ掛けて姪ませた罪の子と言ふ訳。世が世なら、華族のおとしだねと言ふ所だろうが、時代の嵐にあえなく吹き飛ばされた特権階級の喪章なんか、今じゃ頭痛のまじないにも効きやしない。

世紀子が「華族の令嬢」なんて空囁くのも、乗り遅れた時代の興への遺憾ない郷愁かも知れない。酒場「スバル」でも、それほどに美貌の女給と言ふ訳でもなく、又、とりたてて魅惑的な肢態を持つた女であつた訳でもないの、初めの間は余り目立ちもせず、噂の標的にもならず居たのだが、それが妙なことに、ものの三月も過ぎない中に急に女の羽振りが良くなつて、酒場でも女王然と振舞うようになつて居た。

場末の酒場なんか、何処からともなく寄り集う夜の男なんでものは、至極たあいのないもので、昨日まで歯牙にもかけなかつた女が、浮かれ男達の輪にとり囲れて、顰笑して居る姿を見ると、我も我

もと意気地なくも女の機嫌をとり結んだり、媚を求めたりする様になるものなのだ。とり残された古参の娼婦女給の一人が、チエツと口を歪めて面白くなさそうに舌打ちした嗤きをききとつて見ると、世紀子と言ふ女、この酒場の支配人の藤代を完全に囲にして仕舞つたと言ふことである。道は近きに在り――世紀子は最も能率的で効果的な近道を、彼女の肉体と媚態を賭けて獲得したのである。

だが、不思議なことには、酒場「スバル」に於ける世紀子の女王のような生活は、その後半年も経たない裡に終止符を打つた。酒場「スバル」は相変わらず白い獵奇の小鬼を追う夜の紳士と、最も効率的な女の幸福を、安売する男の甘言と詐謀の中から拾い出そうと懸命に媚態を晒して居る女で賑わつてゐたが、世紀子の姿は見当りなかつた。勿論、支配人の藤代との仲は完全に断れて居た。

三、肉体女優

酒場「スバル」は、突然、何の前触れもなく姿を消した世紀子の色とりどりの噂話で、暫らく賑つたが、間もなく巷の噂の早耳紳士が、杯の酒の冷えるのも忘れて、手柄顔に披露に及んだ探訪談によれば世紀子の姿を場末の軽演劇劇場パニヨール座の舞台で見たと言ふのだ。そう言えば、世紀子は「スバル」に居た当時にも、何とかして一度舞台であの華やかな五彩のスポットライトを浴びて、踊つて見たいと口癖の様に言つて居たものである。世紀子は自分の夢を一番手つ取り早く実現させる秘訣を知つて居た。

彼女は酒場に彼女の媚を求めて通つて来る獵色家の中から、パニヨール座の振付家の柴折と言ふ男を興ふと、間もなく肉体の饗宴の代償に舞台出演を保証させて仕舞つたのだ。

いくら場末の、ちやちな素人芝居に毛の生えた様な演劇団とは言いながらも、観覧料をとつての常打ち劇場でもあれば、まるで踊りの素養もない酒場女給の世紀子を主役然と舞台に出すには柴折も随分と苦勞をした。

世紀子は柴折が舞台稽古がうまくゆかず、彼女の演舞の下手糞さに匙を投げかけると、世紀子は其の夜の柴折への肉体の饗宴にあらゆる技巧を駆使して男を誘引してやまなかつた。斯くして、漸く、憧憬の舞台に

五彩のフットライトを浴びて世紀子の肉体の花が艶然と咲いたのであつた。

だが、時が経つにつれて彼女の野望はだんだん膨れて行つた。踊りだけでは満足できず何とかして芝居がやつて見たくなつて居た。

これはちよつと六ヶ敷しい。此の野望には流石に柴折も困惑した。舞踊と芝居では勝手が違ふ。才能の乏しい世紀子を無理に舞台に登せて、それで余り観客にぼろを出させない為には仲々に工夫苦勞が要るのである。三年五年と踊つて来た踊子達と一緒に踊らせては一遍に馬脚を現わして仕舞うので、成るだけ無難にすむ様に独舞か、さもなければ動きの少ないシヨ1的な振付を狙つて、世紀子の演舞力の弱体を潤滑して居たのだ。



愛慾 實話

エデンの闇

水流舟二 郎

それはアツという瞬間の出来事である。

S市の誇る近代的建築の粹、十一階建ての丸越ビルディングは中ほどから、針金の如く歪んでしまつた。路面を歩行する人々の群は確かに地上一間は跳ね上つて、そうして思いきり力を籠めて再びアスファルトの上に叩きつけられ、蛙みたいに長くなつた。疾走していた自動車も、アメのように仰むきにひっくりかえつてタイヤを空転させている。家屋がごとごとく倒壊し去つたのはいう迄もない。——かくして、S市一帯を襲つた地震は徹底的に猛威をふるつたのであつた。

丸紅食料品販売社の社員・串田道夫は丁度その時、同じく社員・前畑君江と地下室に藏品調査にありつていた。道夫が調べて読上げるのを、君江が帳簿にチェックしていくのである。

「えーと、牛カンが三百箱に蜜マメが……」
突然道夫は中断した。キヤツと絹を裂く非鳴と共に君江は道夫に

シガミついた。いや、シガミつかされたといつた方がよい。何者かの怪力が、君江のしなやかな柳腰を吊し上げて、イヤという程道夫の背中にへばりつかせたのである。同時に道夫も尻もちをついてしまった。電燈は消える。暗黒になる。地下室は小舟のように右に左に上、下縦横無尽にゆれ廻つた。

「串田さん、コワイッコワイッ」
君江は道夫の背に幼児のようにシガミついたまゝ救いを求めた。

「大丈夫、大丈夫、大丈夫」
とうり言みたいで道夫は繰返していたが、正しくうり言であつた道夫は腰を抜かし、ユレーイの如く真青になつていたのである。幸じて道夫の自尊心が、若い君江に對して騎士めいたうり言を吐かせたに過ぎない。二人は小半時、ヒシと抱きあつたきり暫えていた。

「止んだようよ」
君江がやつと小声でさゝやいた。そして、急にワレにかえつたと見え、周章で道夫の脇の下に廻つて腕をひっこめた。

「地震です、きつと地震です」
道夫は確信をこめて判断した。

まだ声が軋えている。

「串田さん、出ましよう、外へ」

君江は暗黒の地下室に一刻も辛抱出来ぬと見え、道夫をうながした。道夫はヘッペリ腰で四方を手さぐつたが如何せん、出口は部厚い鉄板にふさがれ、押せど叩けどビクとも動かない。

二人は狂気のように力を合わせて押ししてみたが、結果は同じであつた。極度の絶望におちこんだ君江は、オイオイ泣き出した。

「あたし、あたし、どうしましよ、男の方とこんな所にトゾめられてしまふなんて。皆にどういへばよいかしら。お母さんに叱られるわ。困つたわ。困つたわ。若しも……」

「だ、だれがそんなことするもんですか。ボクは男です」

「だから困るつていつてるのよ」
「男だ女だという問題じゃありません。どうやつて外に出られるかが問題じゃありませんかッ」
「ごめんなさい。」

そこで二人は地下室脱出について討論したが、よい考えは浮ばない。戦時中丸紅食料品販売社が莫大な費用を投じて作つたこの地下

が、さて芝居となるとそれは行かない。それに、斯うなるともう一振付師の一存だけでは、いくら小さな演劇団でもそんな勝手が容易と許されるものでもない。ましてや自分の情婦のような形になつて居る女の事である。

煮え切らない柴折の態度から、早くも男の能力の限界を看破した世紀子は、もう牛を馬に乗り替えて居た。世紀子が彼女の野望を突現さすために、彼女の魅惑の檻に捕えた男はこの劇場の持主の塚田と言ひ金儲けと女遊びだけが彼の人生の最大の目標である男であつた。常打ち劇団の死命とも言ふべき劇場の實権を握つて居る男なら自分の新しい情婦の爲に、彼女の主役を約束する三文芝居を座付作者に書かせて、強引に世紀子を舞台に載せることはそんなに困難な事業ではない。但し果してこの芝居が無事に客に受け入れられるかどうか——

流石に金儲けの算盤には敏い男だけに冒險視しない訳ではなかつたが矢張り、世紀子の肉体的魅惑の前に屈した塚田は、遂に張引に彼女の夢の花をそれでも埃りつぽい狭いパニョール座の舞台に咲かせて呉れた。世紀子の夢は仇花ではなかつた。塚田が杞憂した世評も、世紀子を案外な掘り出しものように持て囃した。そうなつて来ると、世紀子は塚田にとつてかけがえのない大切な女になつて来

た。鳳も夜も、舞台以外の時間は塚田は世紀子に附纏つて離れようとしなかつた。舞台への憧憬にのみ男に与えた肉体だけに、その夢が実現し、世間の浮ついた噂が彼女をちやほやし出すと、もう世紀子にとつて塚田は必要のない男となつて居た。塚田が逃がすまいとるさく纏わりつけばつく程、世紀子の心は男から離れて行つた。世紀子は何とかして、執拗な中年男の溺愛から逃れたいと思つたが、それに依つて彼女の芝居に對する憧憬と情熱は毫も冷却されるようなことはなかつた。却つて、この塚田のわずらわしい愛撫から離れて、自由に、もつと情熱的な芝居をはなやかな舞台一杯にぶち撒いて見たい欲望に駆り立てられて、矢も楯も堪らなくなつた。その結果、遂々一座の二枚目俳優の響を誘惑して劇団を飛び出すと、兼ねて目を附けて居た興行師の湯川と云ふ男に秋波を送つて、新しい一座双蝶座を組織した。其の旗上げ興行を東京で薩々しくやりたかつたのではあつたが、湯川も流石に長い年月、この道で苦勞を重ねて来た海千山千の興行師だけに、世紀子の開いた股の魅力の前にぶざまな算盤を弾くような愚だけはやらなかつた。で、止むを得ず得意の妖婦物と流行の家庭悲劇母物をひっつけて地方を打つて廻つた。小雨を降る旅の仮寝の夜の起き伏しも隙間風にそゞろ哀傷

室は、一寸やそつとの力ではこわれないのだ。だから外から救いにくるのを気永に待つてゐるより方法がない。幸せにも食糧倉庫故滅多に餓死はするまいと二人は結論を下した。

道夫は電池の修理にとりかかった。機具は破損していない。間もなく眩しい光が二人の目をくらませた。

二人は眩しそりに顔を見合つた。室内は凡そ三十疊余り。乾パン、牛カン、……総ゆる種類の食糧品が所せましとつめこんである。

「串田さんお腹空かない？」

君江はバツの悪そうに笑つた。

二人は手当り次第にカンづめをひらいて、時ならぬ饗宴をはつた。

お腹がふくらんでくると、若い二人を襲つたのは再び地上に出ることが出来るだらうか、という絶望である。

「まあ、気永く待つことにしようや。そのうちええこともあるやろうし……」

と、道夫は元気づけた。しかしその言葉が君江に或る予感を与えたりしい。君江は急に落着なく、二人のいる場所を仕切ろうといひ出した。そして自分で立つてビー



ル箱や砂糖箱を積み上げ、地下室の真中に国境を作つてしまつた。

道夫はむくれてゴロリとねころんだ。沈黙の数時間が過ぎ去ると不意に電燈が消えた。

充電する迄暗闇で辛抱せねばならない。

君江の狼狽する気配が伝わつてきた。君江には暗黒が最も恐ろしいらしい。

「あーあ、何時出られることやら」道夫はイヤがらせに長く歎息を洩らした。ビール箱の国境ごしに君江のすすりなきが、細々と聞えてきた。

二

何日過ぎ去つたことやら。……地下室の生活は相変らず続いてゐた。君江は毎日通風孔に口を当てて声を限りと叫んだり、出口の鉄

板を叩いたりしたが、反応は少しも現われなかつた。蓄電池は故障した、暗黒が支配した。

（もし、社のものが全部死んだりしてたらおれたちは永久に出られないゾ……）道夫は段々心細くなつてきた。

或日、（或は夜かもしれない）ビール箱の彼方から断末魔の呻り声が伝わつてきた。

「前畑さん！前畑さん！」呼んだが答えない。道夫はビール箱をつきとばして国境に侵入した。闇の中を手さぐりで近づく、君江は脇腹を抑えて身をよじつて苦しんでいる。

道夫は立つたり坐つたり、君江のおナカをオソルオソル撫でてみたり、ウロ／＼した。（どうすればいいんだろ、一体、どうすればいいんだろ、おお、神サマ）

と憂鬱を感じさせる田舎小屋の楽屋泊りもさして辛いとも考えず、愛人と情人を両手に操つての気随氣儘な旅廻りであつたが、所詮は湯室咲きの花にも似て、其の盛りは長くは続かなかつた。

次から次へと新しい玩具を欲しがる駄々っ子のような世紀子の夢と現実との懸隔は、同時に世紀子の男性巡歴の旅路でもあつた。

一座が南紀の或る漁師町で、打ち続く不入りと生憎の長雨にたゞ、られてドヤ代も稼くことが出来ず遂々旅宿を追い拂れて止むななくかび臭い芝居小屋の楽屋部屋で雨露をしのぎつゝ、累んだ失費や滞つた宿料の不払の儘では次の興行地に発つことも出来ず、売込と多少の纏つた金を作る為に次の興行地に先立した湯川からの吉報を首を長くして待つて居たが、何時まで経つても何の音沙汰もなかつた。

算盤に倣い湯川はこの一座の前途に早くも見切をつけて、世紀子への末練も金儲けの前には問題でなく、その儘ずらかつて仕舞つたのであつた。取り残された一座の連中は見るも哀れであつた。積み積つた旅宿の宿賃は勿論払う当もななく、芝居小屋の楽屋部屋に転がり込んでからの毎日の食い繋ぎの苦勞も並大抵でなく、それでも次の興行地からの買いを希望に繋いでどうやらしのいで来たのだが、頼みの湯川に逃げられて仕舞うと一

同、完全に陸に抛りあげられた河童で手を施しようもない。そうなる自然に一応の善後策の責任は女ながらも座頭格を張つて居た世紀子の肩に振りかゝつて来るのは致方がなかつた。誰か適当な座員の一人か二人を、ずらかつた湯川の替りに次の興行地に派して交渉させるにしても先立つものは金、この儘で一座を一先づ解散するにしても金。どちらにしても差し迫つたものは金であつた。

世紀子の気持はもうとづくにこの一座から離れて居た。旅廻り芝居への憧憬の夢が醒め初めて居た。身寄もない旅の空で、女の身で纏つた金を調達するとすれば、その手段は大概極まりきつて居る。身を張つて造つた金で此のうらぶれの一座を幸いて、もう一度あの淋しい旅廻り興行を続けるには余りにも世紀子の舞台への夢が色褪せかけて居たのである。暫く、身を落着けてのんびりした朝夕を送つて見たいと思つた世紀子は、身を以て調達した金で、宿料の滞りや一座の人達の身の廻りの不義理を一応尻拭い済ますと、残つた金を夫々に分ち与えて、あつさり双蝶座を解散した。

一座の人達が夫々の道を求めて土地を散つた後、世紀子は、この土地にもちよつとした顔役であり旅人宿ながら土地でも一二を争う

「舌……し……い……い……」

君江は息も絶え絶えにいう。道夫はサイダーで頭をひやしてやつたり、背をなでたり甲斐々々しく介抱した。が、ふと気がつく、君江は苦し気にうめいているにもかかわらず、少しも熱がない。「オヤ、熱ないのにオカシイなア？」

道夫がつぶやくと、急に君江は黙りこんでしまった。やがてオンオン泣き出した。

「意地悪、串田さんの意地悪」

道夫は狐につままれたようにボカンとしていたが、やがて、

「チーンだ、仮病かア」

「意地悪、意地悪、嘘つきッ」

「どちらがなんだい、ああ、びつくりした。では、又ねぐらへ帰ります」

「いや、いやつたら、居て、ね、お願い」

君江は道夫にとりすがつた。熱い息が道夫の顔にかかった。道夫の胸は爆発しそりにドツキン、ドツキンふくらんだりちじんだり。

「あ……い……い……い……ですか。」

闇の中で道夫の声が漂える。君江も熱っぽく喘ぎながら、

「いいの。いいのよ」

何が……のか、？わからない。夢に見る女体を両腕に抱きしめて初心な道夫は、途方にくれてしまった。

握んだら、なぎが指の間からすり抜けてしまうのに似た焦立たしさを

で、道夫はあせつていた。しかし道夫には女体の急所がつかめない逆上つて無茶苦茶になで廻すと、イキのよいうなぎはくすぐつたいとぬる／＼逃げまわつた。

じれつたそりに思わず叫んだ君江は、流石に真赤になつてしまった。

三

卅分近くあらずつて、この不器用な料理人はやつと、もりを打ちこんだ。一度とらえれば、いくら

うなぎが満ちても逃げられない。暗黒の地下室に新しい生活が来た。

境界線はとりのぞかれた。相不変の闇ではあつたが、しかし二人の心には新しい光明が芽生えている。

夏が近づいたのか、室内はむせかえる。二人は原始時代にかえつて生れ落ちたときの姿で暮した。冬にそなえて皮膚をきたえるためタオルで体をこすりあいもした。ガラスのかけらで鬚を剃つた。レモン水やサイダーで行水を使つた

君江の肌はいよ／＼細やかに、滑かになつてきた。

W・Cも造つて室内の浄化をはかつた。一応整理が出来ると二人は何時、地上から救いがくるだろうと話しあつた。しかし、二人は退屈したり、失望したりしなかつた。神さまは二人の体に天然の玩具をそなえてつけてくれているので

ある。

若い二人は色々と変化に富んだ遊びを工夫した。道夫も次第に、人魚の急所をとらえる技術に習熟した。どんなに人魚が逃げ廻つても、一分間でもりを撃ちこむことが出来た。のみならず、人魚の体を自由に操縦する技も身につけた。何時も人魚に悲鳴を上げさせる迄操縦した。

四

この世界にたつた二人きりのエデンの園の生活であつた。

暗黒の中では視覚はすつかり用をなさなくなつた。蓄電池が破損してからもう幾月になるだろうか原始時代にかえつた二人には、只触覚のみの生活であつた。

豊満なる乳房も、逞ましい胸の隆起も只触れることによつてのみ知ることが出来た。

二人はこの倉庫の中をエデンの園と名づけた。食料品は食べても食べても尽きること知らないの

で、飲み食いするだけが新婚の二人の日常であつた。

闇であるという点を除けば此の世の極楽であつた。秋が来て冬が訪れたのか、気温の低下でそれと知れた。しかし、地下の倉庫は、夏は涼しいかわりに、冬は暖かつた。

潮明館の親爺の二号にのんびりと収まつて居た。然し、何と言つても猫の額のような狭い変化に乏しい鄙村である。どちらを向いても働く事が能い様な荒くれ男や女ばかり、それに日髪化粧の極楽暮しも、やに臭い田舎親爺のやきもちにうんざりさせられて、ものの半年も経たない裡にもう刺戟の多い都会の生活が世紀子を誘惑してやまなかつた。

四、お妾稼業

其処へ救世主のように現われたのが、隣り市で羽振りの良い土建屋大建組の熊谷である。

終戦前までは、軍の下請仕事のその又下請仕事のかすり細々とやつて居た叩き大工のしがたない親方に過ぎなかつたのだが、それが終戦のどさくさに乗じて、軍の備蓄用材を半ば公然と何十車ともなく持出すと、其れ等の建築資材を足場にして、当時の薬をも掴みたい想いの家を失なつた罹災者達の心理を強引に喰ひ歩いて、瞬く間に莫大な財産を築きあげて仕舞つた。そして、此の薄手で栗のようになあぶく錢を湯水のようにばら撒いて、あれよあれよと言う間に市会議員に当選し、何時の間にか市の顔役の一人になつていて仕舞つて居た。今や市の土建界を牛耳る大建組社長であり、縣の土建協会の副会長でもあると言う、裏に

波瀾万丈の昭和の大人のお伽譚でもあるのである。市会に出たつて彼に市政が解るものでもない。其んなものは肩書だけでいいのである。幸い事業も順風帆をはらむの調子とあつてはあり余る精力と閑暇と金を如何せんーと言いたい所。飯より好きだつた小ばくちは昔の叩き大工時代の夢話、社長ともなり市会議員ともなればいくら好きでもこのうすぎたない手遊びには手を出す訳にゆかない。

時勢は移る、案ずるより生むが易いとはよく言つたもので、時代の寵児競馬が彼の小ばくち根性を思ふ存分に満足させて呉れた。今ではれつきとした馬主で、彼の特馬のタツヒカリ、トミノハナは地方競馬界では優秀馬として名も高くなりの優勝を稼いで居た。世紀子が乗り替えた新馬はこの熊谷であつた。熊谷は三年前、丁度彼が荒稼ぎで東奔西走している最中に槽轡の妻をかりそめの病で失つたが、面白い程に金の儲かる時代であつたので、女に不自由をしない儘に定まる後添も貰わず、一号は缺員の儘にあつち二号、こつちに三号と言つた具合に有り余る精力の赴く儘に発展して居たのだが、さて、ひよんな機会から世紀子を獲得して見ると、他の情婦など曉天の星のように急に光りを失なつて魅力が薄れて仕舞つた。この女をれつきとした自分の持馬にして思ふ存分に制御して見たい

になつたのである。

五

S市の復興事業はすゝんだ。占領軍のブルトーザーが出動して連日廢墟を整理した。夏がすぎ、冬も去り、再び春がやつてきた。

そしてブルトーザーは相かわらず廢墟を整理している。

或る日、Q通りの整地にとりかかつたブルトーザーV8号が大きくなコンクリート盤を動かした時、その下に地下室があるのを発見した。図面で調査すると、丸紅食料品販売社の跡である。その辺りは特に被害が多く、丸紅食料品販売会社は全員死亡、行方不明二名を出したのである。当時死体の見出せなかつた二名は、それではこの下に……と一同は暗い顔で地下室を眺めた。失業救済の人夫たちが、入口をふさいでいる鉄板をもちあげた。そのトタン、人たちは異様な顔になつた。

確かに地底から赤ん坊のなき声が聞えてきたように思えたのである。いや、そればかりか、レモンの匂、クリームの匂、ウイスキーの香が、廢墟の地下室の中からユラユラと立ちのぼつてきたのである。一同は息をのんだ。顔を見合わせたとき、誰も中へはいろろとしない。

すると、突然地下室の入口からヒラリと飛出してきた人物がある

ターザンのように腰に布をまといつてゐる。

一歩しりぞいた一同に向つて眩しそくに目を細めてターザンは微笑んだ。

「やア、皆さんよく、串田道夫です。いいですねえ、大地はひろびろとして……やあ、自転車が通つてゐる。犬が歩いてゐる。おお懐しき緑の地平よ！」

四圍をキヨロキヨロ見廻してターザンは大きく手をあげた。それから地下室にむかつて大声で女の名を呼んだ。

すると、女ターザンが現れた。その肌はレモンの香を放ち、雪のように純白であつた。

ターザンたちは抱きあつてポロポロ泣き出した。肝をツブした人夫頭はボリス・ボツクスにかけこんだ。ボリスは串田家に急報し、年老いた道夫の父母と共に現場にかけつけた。

「道夫！」

老人は吾子の無事な姿を見て絶叫した。

「お父さん！お母さん！御心配か



けて申わけありません。ぼくはこの通り無事でした！それから……と道夫は君江をふりかえり、

「ぼくの妻です。君江です」

しとやかにお辞儀する女ターザン君江の姿を見て、老いた父母は目を白黒させた。道夫は更に、君江の腕に抱かれてゐる赤ん坊を指さして「これがぼくたちの子供、つまり、お父さんの孫ですよ！」

天変地異に出喰わした哀れな老父母は腰をヌカして廢墟に尻もちをつき、夢とも現ともわからぬまに嬉し涙にむせび出したのである。

(終)

と語り慾望が猛然と湧き起ると、熊谷は困つて居た他の女に皆相当な手切金を与えて奇麗に精算すると、世紀子に嗜れて結婚式を挙げようと持出した。余程、気に入つたらしい。結婚式なんて仰々しいお祭り騒ぎは世紀子にとつてはどうでもよかつたのであつたが、これではひよつとしたらこの地方の社交界に熊馬夫人なんて異名で案外もてはやされるかも知れない——斯んな空想を描いた世紀子は泣々晴れての結婚式をあげることを同意したのである。

その結婚式の夜……ここで、読者はもう一度、この物語の初めから読み直して貰わねばならないのである。

である。

五、ファイナール

この夜を基点にして初まつた第七番目の世紀子の結婚生活がどんな風に開花して行つたか。世紀子が熊谷にとつて駿馬になつたか、じやじや馬になつたか、世紀子が中味の空っぽな肥つちよの成上り紳士の熊谷を、どのように乗りこなし行つたか、誠に興味深々たるものがあるのだが、それは後日譚に譲ることにする。

さもあらばあれ、世紀子の限りなく夢を追ひ、夢を塗りつぶして行く人生が、何処まで続いて行くか……

(終)

詰將棋新題

大橋虚士出題

持駒、飛金桂歩

4	3	2	1
		歩	将
	王		
歩		角	馬
	王		馬

(図は簡単ですが、中々むづかしい出題です)

【詰手順】

四二歩成、二二玉、三三飛打、一三玉、一二角成、二四玉、三四馬一五玉、二五金、同金、同馬、同玉、三七桂、二四玉、二五金、一三玉、一四歩、二三玉、三四飛成一二玉、一三歩成、同玉、二四金一二玉、一三金、同玉、二五桂、一二玉、一四龍、二二玉、一三龍迄、三十一手詰

愛情のトリック

矢代文世
美濃村晃画



男のことを探
察してほしい
と云う。それ
が高江を啓子
が訪問した理
由なのだ。

「ふーん」
と首をかし
げて、

「あんたが好
きなんじやな
い？」

高江は男が
女を追い廻し
ている場合、
誰でもが一応
は考える月並
な考え方を述
べた。

「冗談じやな
いわ」

啓子は大き
く肩をすくめ
る。

「男を知らな
いお嬢さんじ
やなし……、

そんなんなら
一遍にピン
と感じるわよ

啓子は整った眉をしかめた。まるで囁ん
で吐き出すような口調だ。よほど神経を痛
めつけられているらしい。いら／＼した様
子で団扇を使った。

「いやに暑いわね」

軒端の風鈴も鳴らない。思いきり開け放
してあるのに、部屋中はむつとするような
暑さだつた。

高江は考える。

「あんた、怒まれてやしない？誰かに」

「それなのよ」

げつそりとうなだれて、啓子は溜息をつ
いた。

「あたしもそれを思うの。だから恐いの、
ね、きつと」

「それで、あんたを憎んでるのは、どんな
人」

真面目な顔で聞くと、ウフフと、啓子が
笑つた。

「ほとんど無数にいるわ。だつて、高江さ
ん知つてゐるでしょ？ あたし……」

そう云つて、啓子はさすがに口ごもつた
彼女がキャバレー・カザノヴァのナンバ
ー・ワンなのだ。美貌もさることながら、

男を引きつける別な魅力の素晴らしさで、
一度でも啓子を知つた男はどうしても忘れ
られなくなるという。その自慢話は随分し
ば／＼高江も聞かされたものだつた。良人
に死に別れてから、ぐず／＼とまだ一人で
いる高江には毒な話だつたが、そうと知り
つゝも、つい聞いてしまふ。そうした露骨

な話は誰にでも興味のあるものなのだ。と
ころで、啓子はその数々の実話を提供す
る身であり乍ら、奥はまだ一度も恋愛をし

たことがないと云う。男を好きになつたこ
とがないのだ。キャバレー・カザノヴァの

一

「本当に弱つてゐるのよ。ねえ、お願い、恩
にきるわ」

啓子は横坐りの膝をそろえ、哀れみでも
乞うように高江を見つめた。

「先づ不気味なの。あんな男に二六時中、
後をつけられてると思うだけで腹せちやう
わ。夜もおち／＼眠れないのよ。あたし、
神経衰弱になるわ」
妙な男が、この四五日啓子の背後をつけ
廻しているというのだ。彼女は高江にその

客は要するに商品金を幾で購う純粋な顧客だつた。それは、商品の売買としてなら、金の切れ目が縁の切れ目になるのも当然の話である。

役に立たなくなつた客をボー／＼と捨て去り、新しい買手を物色する啓子の手際は堂に入つたものだつた。

だが肉体の売買は消しゴムや鉛筆を売るときに簡単にはいかない。こちらは心の算でも男の方が承知しないのだ。妖婦だといふ風な噂が立つたし、啓子のために会社の金を使い込んだ若い会計係が自殺をしたこともあつた。そんな啓子だから胸に手を当てて考へてみるまでもなく、怨まれる筋は無数にあるのだ。

「困つた人ね」

と云つて高江はちよつと赤くなつた。

「その人もやつぱりその……、何と云うか……、あなたをそんなことで怨んでるのか知ら？」

「でもあたし、今度の人は全然見当もつかないわ、だつてまだ見たこともない人なのよ。いくらあたしだつて、一度あれした男の顔は覚えてるわ。ねえ、お願い！ あたしを助けると思つてその人のことを調べてよ。一体どんな心算であたしの後をつけてるか、はつきりたしかめてほしいわ。ねえ、高江さん、女学校時代からの無二の親友がこうして頭を下げて頼むのよ。そんなに冷淡に澄ましてないでさ。ねえつたら」

啓子は高江の手を握つて強くゆすぶるのだ。

「でもね」

と高江は未だに迷いながら、

「あたし、そんなことに慣れないんですもの。いつそ、キャバレーのお友達に頼んだらどう？」

「その方が適材適所だと思ふわ」

「駄目々々、そんなことしよりもんなら、わたしの秘密、一遍にみんな暴露しちゃわ。あんたは知らないけれど、ダンサーも色んな権謀術策がいるのよ。人の世は生き難いものね。虚々実々……。平気な顔して踊つてゐるようでも心の中ではお互いにしつぎを削つてゐるの。キャバレーにあんたみたいに何でも打ち開けられるような友だちつて唯の一人もいないのよ」

何時もの啓子に似ず、それはいやにしんみりした調子だつた。そして、云われてみると、高江にもそりしたダンサーたちの内幕が想像出来なくはない。ナンバー・ワンともなれば苦勞も多からう。急に啓子が可哀想に思えて来た。

荷が勝ちすぎると思われる。まるで秘密探偵みたいな仕事で、自分のような無口な女に出来るかどうか、おそろしく疑問だ。しかし彼女は、やつと啓子の求めに應じ、出来るだけのことはやつてみようとするのだつた。

「でも余り当てにしないでね。あたし、とても自信ないのよ」

そんなことを、高江はあわて、附け加えるのである。

二

高江は啓子と一緒に外出することになつた。外へ出て、啓子の背後を尾行する不気味な男のことを探らうと云うのだ。

大急ぎで化粧する。化粧と云つても高江の場合は簡単なものだ。クリームを塗つて口紅をちよつと差せばそれで終る。

「あら、もうおしまいな？」

びつくりしたような声を、啓子が立てた

「もつときれいにしなくつちやあー」

啓子は鏡合に向つてゐる高江の後に廻つた。鏡にこんな顔が写る。成程、啓子はこつてりと造つてゐる。それでいて、けばくしい厚化粧というのではない。

「あたしにまかしといひて頂戴」

啓子は甲斐々々しく、先づ高江の髪の手入れから始めるブラシでなでつけカールを作り、ハンドバックから、高江などはまだ名前も聞いたことのない上等の香油を取り出すのだ。

眉が太すぎると云う。そして剃刀でついでに襟足まで剃つてくれた。

およそ一時間ばかりも経つたらうか。

「あらッ」

鏡合をのぞいて、高江はびつくりしてしまつた。

「これ、あたしなの？」

「そうよ。こういう風にお化粧しなくつちやあ……」

啓子は自分の手で作り上げた人形でも鑑賞するように満足の態である。

細巻の煙草を器用に吹かせるのだつた。

「あたし、やつぱり似合わないわ」

高江は自分が案外にも美しく、若がえつたことが嬉しくはあつたけれど、それと同時に羞らひを感じたのだ。

「何云つてゐるの？ あなたはきれいなものよ」

「でも」

と高江はもう一度鏡の中の自分をあらためたが、

「あんたみたいにきれいな人がお化粧するのはとつても見よいものよ。けれど、あたしなんか、お化粧みたいでしよ？ かえつて変だわ」

「そんなこと云つてゐるから何時までも一人

でいなくちやならないのよ。自分はきれいなんだつて自信を持たなくちや駄目！」

叱りつけるように啓子が云つた。

そして本當を云えば、高江は啓子にそう云つてはしかつたのだ。女である限り、高江とてもきれいに化粧したい思いを持つてゐる。だが、そうした自分の中に、男から関心を示してはしがつてゐる氣持を認めることが、高江には云うに云えないほど嫌なのだ。云わば高江は素直に自分の欲情を表現することの出来ない女だつた。

再婚する氣持がない訳ではない。一生をこのまゝ一人で過して行けると思つてゐるのでもなかつた。死んだ良人に操を守り通そうと誓つてなど、さら／＼いない。それなのに、彼女は再婚の話を持つて来る人があると、つい、ずる／＼と返事をのぼしてしまふのだ。相手は彼女が嫌がつてゐるのだらうと察して遠ざかつて行く。そんなことが度々あつた。そして、心ならずも高江は貞女にされてしまつてゐるのである。

どうして高江がこんな天邪鬼な女になつたのかと云うと、それは数年以前にさかのぼる。

或る日、彼女は、齒に衣釐せぬことで有名な十九世紀フランスの批評家、サント・ブーヴの「我が毒」という本を読んだ。その中に、次のような文章があつたのだ。

××夫人へ、「まだ美しいうちに離れて置きなさい、美しくなくなつても、まだ愛される様に」

高江はカン／＼になつて怒つた。まるで自分自身に向つて云われた言葉みたいと思へた。この本を読んでからは、男は誰も彼も、この同じ言葉を自分に囁きかけ、強迫

しているように錯覚するようになったのである。

「いゝわ。誰が醜いなりなんかするもんですか！ あたし、男は大嫌い！」

彼女は心の中でそり堅く呟いたのだ。だから一人寝の床にもん／＼と身もだえすることとはあつても、男の前に顔を屈し、愛情を求める気にはどうしてもなれなかつた。高江の自尊心が許さなかつたのだ。

一々神経質に自分の気持に聞いてみる。

化粧も高江は嫌になつた。化粧……、それは自分の存在を天下に公表するよりなものだ。魚心あれば水心……。何時でもお求めに応じますよ、男たちに宣伝しているのと同じことになる。そんなことがどうして出来ようか！

まだ三十に間のある身でありながら、高江はことさらに地味な着物を好み、髪を乱して、何とかして自分を醜く見せようと努めている様子なのである。

だが、そんな風に努力してはみても、親友、啓子の云い草によると、

「全身に愁情がブリ／＼とあふれている」

とのことだつたが、

「馬鹿にしないでよオ」

姉さんぶつてたしなめながら、実は啓子にこんなことを云われるのを大好きな高江でもあつたのだが。

ありていに云えば、高江は普通の女より男と寝るのが好きだつたのかも知れない。

大の守銭奴が、自分の守銭奴振りに嫌気が差して世捨て人になる場合がある。臆病者は自分が臆病であることを見破られるのが悲しさに、腕に刺青をしたりするものだ

高江の場合が丁度それだつた。彼女は自分のあり余る情慾を隠すために、無慾をよ

そおつているのだと云えるであらう。

だから、今、無理矢理に美しく化粧させられたことで、表面は怒りながら、実はうつとりと自分の美しさを鏡でたしかめ、

「これなら啓子さんに引け目を感じることもないわ」

などと心の中で喜んだりもしている高江なのである。

三

五時――

だが、外はまだ真昼の感じだ。西に傾いた太陽が商店の日覆いに照りつけて、眼がいやに痛かつた。

「ね、後からつけてくるでしろう。あの男なのよ」

小声で、啓子が囁いた。

始めの内、どうせどこかの不良みたいな男だろうと高江は考えていた。だが啓子の云うその不気味な男は案外な感じである。麻の背広をキチンと着ている。見たところ善良そうにも思えた。しかしそんなのが本当は悪人なのだ。

「上手にやつてね、お願いするわ」

もう一度、啓子はそつと囁くのだつた。

「ええ」

と高江はうなづく。そして二人は次の十字路で別れた。当然不気味な男は啓子の行った方角へ進む。それをたしかめ、高江はハンドバックからネッカチーフを取り出した。手早く頭を包む。それにグリーンのサングラス。手軽な変装が出来た訳だ。

高江は啓子を尾行している若い男を、今度は逆に尾行することになった。

スリルに富んだ仕事だつた。男が全然気附いていないのに、その男の後をつけてい

るのは、まるで映画の場面を美地に行なっているようなものだ。啓子の不安を思えばそんなのんきなことも云つてはいられないのだが、そう心の中で戒めつつも、何かひどくロマンチックな気持に、高江はとらえられるのである。

「この男はスパイかも知れない」

啓子が秘密文書を持つていると仮定するその文書を奪おうと、必死で追跡するスパイ……。

馬鹿々々しい、啓子がそんな女でないことはよく判つている。しかしキャバレー・カザノヴァの客が、啓子も知らない内に啓子にその秘密文書を渡しているという風に



考えることも出来る。

暑さに当つたという所為ではないが、そんなあり得べからざることを高江は空想して一人で喜ぶのである。もしも本当にそんなことがあるとすれば、一躍にして高江の占める位置は女探偵だ。映画なら主役女優ではないか！

高江がいゝ気持になつて尾行している間に啓子は勤め先のキャバレー・カザノヴァに入つた。

男はしばらくの間、電柱の影にかくれて佇んでいる。勿論高江も男に氣附かれないうちに男を監視した。

やがて男は歩き出す。

電車通りのレストランへ入つた。そして

高江は急に空腹感におそわれるのである。

窓際に丁度柱の影になつて、男からは見えないうちに高江はそれに腰を下した。

ライスカレー。

コーヒを飲んでいると男が立ち上つた。急いでまたも後を追う。

「どんな家に住んでいるか、それまでたしかめてね。もし出来たら部屋へしのび込んで何をしている男か調べてもらえると本当に有難いわ」

啓子の言葉を、高江は思い出した。そして何時の間にか、こうして追跡している間に彼女は自分の役目に夢中になつてしまつてゐるのだ。それはもう啓子の依頼ではない。一人の男を追跡しているという、そのことが面白いのだ。まあ考えても見よう、誰一人注視している者なんかいないと思ひふらりと街を歩いている男を何所までも何所までも追いかける興味は、ちよつと類例のないものである。

高江は男が風見荘というアパートに居ることをたしかめた。二階の十六号室だ。名札で阪崎良夫という名前を知つた。

「さて、これからどうしよう？」

しばらくはアパートに友人でもいるような顔をして二階の廊下をうろついていたがその時だ。阪崎良夫はユカタに着かえて部屋から出て来た。手拭いをぶらさげている風呂に行くらしい。部屋に錠をかけないで彼は階段を降りて行つた。

絶好のチャンスだ。少くとも三十分間は帰つて来ないだろう。高江は大きく胸に息を吸い込んだが、

「うん」

とうなづいて、無断で阪崎の部屋のドアを開けた。

まるつきり映画の主役になつた心算の彼女は、敏速に阪崎の部屋を搜索して男の身許や何故啓子を尾行するのか、その秘密を調査してしまふ氣になつたのである。

部屋はことさらに大きくはなかつたが、小じんまりと片附いていた。扉を開けるとさすがに男の匂いが鼻をつく。高江は第一番に机の引き出しを開けた。手紙の束……だが重要そうなものはない。五分経つた。

「早く、早く！」

心の中でせき立て、高江は手当たり次第にそこらを探す。洋服のポケット。額の後ろ紙屑籠の中。ベッドの下。戸棚……

だが、それ等から高江の知つたことは、阪崎良夫が出版会社の編集部長であることと、今時の若い男に似ず女友達が一人もないらしいこと位なもので、要するに彼女があてにしていたような秘密はどこにも隠されてないのだ。

高江はいら／＼して来た。

十分経つた。

「まだ大丈夫。でも氣をつけなくては……」彼女の本箱の前に立つた。本の間に何かはさんであるかも知れないと思つたのだ。そして本に手を伸ばした。

その時だ。

背後でドアがボタンと音を立てた。

「あッ！」

と振り返る。

何時の間に帰つて来たのであろう？そこにはまだのんびりと風呂にしたつてゐるに違ひないと思つた、阪崎良夫、その人が立つてゐるではないか！

阪崎はゆつくりとドアに錠をかけた。

四

翌朝、ベッドで一緒に眠つてゐる男の顔を見て、高江は氣まきり悪そうに寝返りをうつた。

彼女はシュミーズ一枚つけていないのだ早く起きて身じまいしようと思ふ。だが、そう思いつく、もう一度男の身体に触つてみたい誘惑から、彼女はどうしても逃がれることが出来なかつた。寝返つたばかりなのに、またも男の方へ向き直り、そつと胸毛をなでてみる。

数年間、触れない男の手ざわりだつた。

不意に阪崎は眼を開けた。

「やあ」

彼も氣まきりが悪そうにちよつと白い歯を見せたが、すぐさま高江の思惑を見抜いたらしい。

世界の全てが見えなかつた。堅く閉ざした顔の裏に、彼女は美しい虹を見た。七色の虹はくる／＼廻り、深い陶酔の淵に高江

を突き落とす。

この瞬間、彼女は死んでもいいと思つた意外なことからこんな妙な關係に陥つてしまつたが、他のことはもうどうなつてもかまわない。阪崎良夫……この男が昨夜打ち開けた話が全部嘘だつたとしても、この男が本当はひどい悪党だつたとしてもかまわないという氣に高江はなつていた。

昨夜打ち開けた話——

阪崎良夫はドアに錠をかけてから高江に飛びかゝつて来たのだ。

閉め切つた部屋の中で、男と女が争うとすればその結果は火を見るよりも明らかだ高江はこんな場合、女にたつた一つ与えられた武器を使おうとした。大きな声を立てることだ。

「えい、それもいゝでしようね。しかし、そうなると、あなたは即座に警官に引き渡されることになるのですよ。他人の留守に部屋の中に入つてゐる。これはたしかに竊盜の現行犯だから」

落ちついてそう云われると高江は全身がゾツと寒氣立つた。もうどうにも仕様がなかつた。男は湯上りの匂いがしない。風呂へ行つたと思つたのは間違ひだつたのだ。高江の尾行を、とつくに知つていたのであらう。何と巧妙に仕組まれた罠だらう！

彼女は拒む手段を知らなかつた。

男の手が帯にかゝる、帯揚げがバタリと落ちた。

だが、そんな風に無理矢理高江を犯しておきながら、阪崎は彼女を抱きしめて意外なことを云うのだつた。

「あなたのことばかり思つていた」幾月もの間、彼女のことのみを想つていたというのだ。

話の中にこれほど判らない話がまたとあろうか？

阪崎は高江が啓子をその職場にたづねた一週間ばかり前、同じキャバレー・カザノウアで踊っていたと云う。そこで高江を見つけてびつくりしたのだ。数ヶ月前に電車の中で彼女が老婆に席を譲つてやつたのを見た、その時から阪崎の頭の中で、高江が忘れられない女性像として生長していた。その人をキャバレーで見つけた驚きがあつたのだ。

生来が女に対して厚かましい男ではなかつたので自分の方から口をきくことが出来なかつた。しかし、どうしても思い切れないその思いの烈しさに負けて、遂に啓子に全てを告白したというのだ。出来れば求婚したい……。

「そうね」

と云つて啓子は頭をかしげたが、「普通の方法じゃ駄目よ。なにしろあの人つたら男嫌いなんて云つてるんですもの」だが、啓子は一つの巧みな方法を考へてくれた。

「上手におやんなさい」

そう云つて肩を叩くのだ。そして阪崎は啓子をしつこく尾行している不気味な男の役割を受け持った。

阪崎良夫が、完全に高江を自分のものにしてから咄々と語つたような右のような事情だつた。

誰だつて嘘だと思ひに決つてゐる。しかし、いたづら好きの啓子の性格を知つてゐる高江にはその話が本当だということが判るのだ。わざわざ丹念に比喩してくれたり何時もとは雲泥の差とも云うべき派手な着物を選り出した啓子の態度から

も思い合せてみると、うなづけるものがある。

そして高江は、啓子の書いた筋書通りに阪崎と結ばれることになつたのだし、これだけのことを話すにしても変にしどろもどろで、秩序立つた話し方もよろしくない男の態度は純真そのもの、再婚としてならば、これ以上の男を探すことは出来ないだろうと考える。

阪崎の腕の中で、ゆつくりと眠ればいいのだ。しかし、そこが高江の天邪鬼たるゆえんなのだが、彼女はどうしても啓子の仕組んだ芝居が気に入らなかつた。結婚を申し込んでゐる男がいるのならいゝと、そのまゝ素直に話してくれ、ばい、のにと不満を覚える。うま／＼とかつがれた自分を意識することがたまらないのだ。

胸の裏に虹を見ながら、高江は既に心を決めていた。このアパートを出た時、その時が阪崎良夫との別れの時なのだ！

しばしの愛情だつた。だが、自分

も本気でこの瞬間は阪崎を愛してゐるということが、彼女のはかないなくさめになるのである。

五

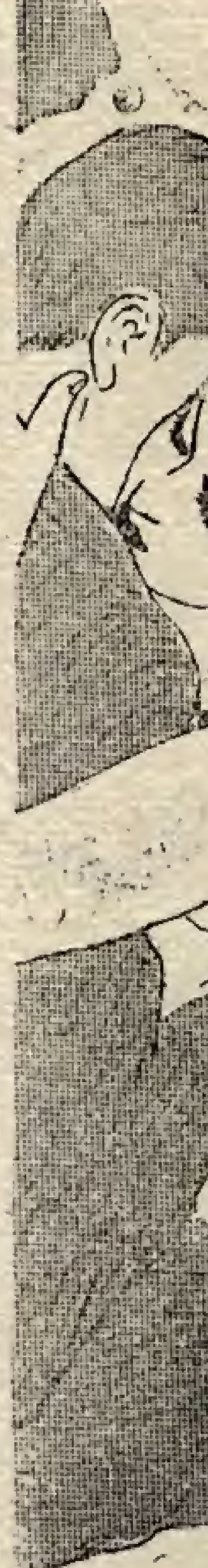
家に帰つて、高

江はぼんやり

と机の前に

坐つた。

啓子



も絶交しよう。他人から哀れみをかけられ憐憫の眼で見られてゐるなどということは高江にとつて耐え難いことだつた。そんな侮辱に耐える位なら死んだ方がどんなにいいか知ればしない。

そう考へて、不意に彼女は死を決意した別れて来た阪崎ともう一生涯会ひもしないで、そのまゝで我慢出来るという自信がなかつたのだ。それでいて屈辱には耐えられない。一層のこと死のう！ その方がどんなにいいか知ればしない。

その時、啓子がたづねて来た。

「どう？」

勝手に上り込むと、高江の顔をのぞき込み、意味あり気に笑うのだ。

「今日は大いに当てられるのを覚悟して出かけて来たのよ。いつもあたしの方が当て

つけるからたまには聞いたげるわ。さあ、何でもおつしやい。どんな際どい話でも、貞女の崩れる瞬間を聞かしても

大丈夫よ。ただし、万一のことを

をおもんばかつて、あたし、

気付け薬を持つて来たの」

まんざら冗談を云つ

てる説でもなさそ

うだ。啓子は

ハンドバツ

クから

薬瓶

を取り出すのである。

啓子は全く陽気な性分だ。この陽気さが災いして真面目に恋愛する気になれないのだらうけれど、どんな陰気な雰囲気もたちまちの内に華やかなものに転換させるこのような性格は、やはり得難い存在であらうだが、今日に限つて、啓子の唇口を聞いても一向楽しくならない高江だつた。それどころか、彼女は泣き出してしまふのだ。

「ひどい！ ひどい！」

落ちついて団扇を使い、自分の書いた喜劇が大当りに当つた様子を聞こうと、耳はじくつてゐるこの女学校時代からの親友が高江はこれほど憎らしく見えたことはなかつた。

彼女は啓子に武者振りつき、

「どうしてあんなひどいこと考へたの？ あの人があたしを好きだつておつしやるのなら、普通にあたしを紹介してくれたらいいじゃないの。大嫌い！ 啓子さん、大嫌い！」

高江はガタ／＼と身をふるわせるのである。

余りにも高江の怒り方がすさまじいので

はつと、さすがに啓子は息を飲んだ。

「あら、あたし、あなたに怒られるとはちつとも思ひなかつたのよ。気にさわつた？ ごめんなさい」

啓子は悪びれずに謝つた。しんみりした口調である。

「あなたのためを思つて考へたの。でも無【い】智慧を無理にしぼるとこんな失敗しちやうのね。うんうん、あなたの怒る気持判るわ。あたしつたら、まあ、何という馬鹿なことしちゃあやつたのか知ら。たゞ一図にあ

あなたがたつた一人で淋しがつてるのを慰めたかつたのよ。

「でも、こんなこと云つても許してはくれないわね。あゝ、どうしよう？ あたし、本当に馬鹿ね！」

啓子は自分の頭を、自分でコッソリと叩いた。そして本気で後悔しているらしい啓子の様子を見ると、熱し切つていた高江も少しは落ちつきを取り戻すのだ。

「あんたがあたしのこと心配してくれた気持は判るのよ。と云うよりも、むしろ有難いわ」

その言葉にはいさゝかの嘘いつわりもなかった。今の今まで憎んでいた。しかしその啓子を持つべきものは友人だという風に思うようになっていた高江なのである。はげしい反省が、彼女の胸を嚙んだ。物事の裏側ばかりを考えるようになっていた自分

「あたし」

としばらく、間をおいてから高江が云つた。

「むしろあたしの方がいけなかつたのね。あたしつたら、わがままで、天邪鬼で、ひとの好意を素直に受けられなくなつてたのだわ」

永い／＼沈黙だつた。

何時か二人の女は手を握り合っている。握り合つた手の上へ、ホロ／＼と高江は涙をこぼした。悲しい時も、嬉しい時も、流れるのは同じ涙だ。だがこの時高江が流した涙は、先刻とはまるであべこべで、啓子が強く握つていてくれる掌の感じ、それが嬉しかつたのだ。

「許してくれる？」

そつと、啓子が聞いた。そして高江は泣

き笑

いする

のである。

「そんなこと

おつしやらない

で！ あたしの方が

悪かつたのよ」

「じゃあ」

と啓子は何時ものいたづら

つぽい眼つきに返つたがたゞみか

けるように、

「阪崎さんと結婚してくれるわね？

人物はあたしが保証するわ。とつてもいい人よ」

くすぐつたい思ひの底に悲しみをたゞめてその悲しみの裏側に歓喜を縫いつけた複雑な表情で高江は思わずコックリとうなづくのだつた。

「さあ、それでいゝのよ。話はきまつた

！ 実はあたし、結婚のお祝いまで用意して来たのよ」

やれ／＼という風に肩を落して、啓子は後においてある紙包みを持ち出すのだ。開くと、それはあつと驚くほど豪華な化粧セツトだつた。

「まあ素敵！」

「どう？ いゝでしょう？ きれいに化粧して、阪崎さんびつくりさしてあげるのよ」

「でもあの人、お化粧してないあたしでも好きだつて云つてくれたわ」



思わ

知らず

ず高江は昨

夜阪崎良夫の

云つた言葉を口に

したのだが、

「あらッ！ 不意打ち

ね？ ウーン、当てられち

やつたわ。早く早く、氣付け薬

……」

芝居だということは判っている。だが、氣絶をよそおつて、ウーン、と啓子は後ろにひっくり返つてしまふのである。

高江には、今朝、阪崎良夫の部屋で起きる前に見た桃色の虹が再び顔の前にちらつく思いがした。

痺れるような甘い思ひ出をホロ／＼と反響していった。

それは譬で、天邪鬼な彼女の浅薄な強がりでは押えつけないことのない強い衝動だつた。

啓子の筋書どおりに運ばれてゆく自分にも、人から哀れみをかけられるというヒガミも今はもう忘れ果てゝいた。それほど今朝の男の引力は強かつたのだ。

数年間、触れたことのなかつた男の肌ざわりだつた。引き緊つた筋肉が強そうで、

何とも言えない程、うつとりと氣持をひきつける魅力であつた。

高江は眠っている男に氣兼ねしながらも全身をべつとりと男の身体にくっつけていつたのだ。

甘美な空想に耽つていゝうちに、啓子はお盆にミルクをかけた苺をのせて持つてきた。

「それにね、あたし、阪崎さんから、これ迄預つてゐるのよ」

高江の機嫌が直つたので、啓子は安心してたように阪崎から頼まれていた結納の事を話すのであつた。

今迄の高江であつたなら、そんな先手廻しなおセツカイには、一も二もなく断るのであつたが、今度こそは、啓子の厚意に甘えて、身を固めようと決心した。

すると、今迄芝居までして、自分の事を考えてくれた親友の思ひやりが嬉しくて思わず嬉し涙が湧いてきた。

「ほんとうに落さないわ」

ホークを苺に突きさしながら、うつむいたまゝで呟いた。

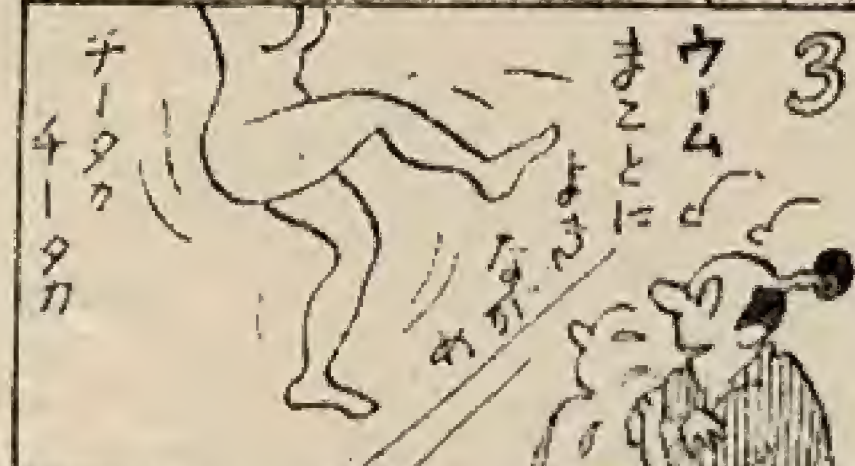
「あんたに、そう言つて貰えて、あたし、やつと肩の荷が下りた氣がするわ」

啓子は団扇をとりあげて言つた。初夏の日差しはカツカと照りつけていた遠くで蟬がみん／＼と鳴く。

そしてもう一度、高江はひそかに涙ぐむのであつた。

(終り)

猿とび
色助
明石三平



艶姿五人女淫雨夜譚

乙宮多己雄
志乃田よしろう画

夜之助好色旅日記

夜之助はやつと一年前に、足かけ八年間も胸の病で臥つていた女房に死なれて、世間並の亭主面が出来るようになった。

何しろ、小学校を出るなり深い山国の故郷を出てからと云うものは、西も東も判らぬ京都へ伯父に連れてこれ、所謂年期奉公という奴で、五条通りの松島屋という古い暖簾の呉服屋へ抛り込まれて以来よくまあ辛抱に辛抱を重ねたなと吾乍ら呆れる位辛抱した。生易しい棒でない心棒の甲斐があり、棒にも年輪が入つて大黒柱に出世した。つまり、ご養子さんになつたのである。

ひと頃は、五十何人という奉公人の居た松島屋も、打続く戦争の長期戦には耐らず、島が崩れて松だけ残り、歌の文句そのまゝに、枯れて落ちた時はお嬢様と二人連れ。頼みにする若い男達は徴用だ、兵隊だと取られてしまい、何の因果か、祇園祭の御輿の下敷きにされた夜之助だけが、僅かながらの跛が幸いしてお店

へ残されたのであつた。

ひとり娘でお妙様と書くと、美しい美人の想像されようが、実をいうとこれが凄惨な醜女。でなきや、とつこの昔に、売るなり買ふなり話もついていた筈である。親の嘆き以上にお嬢様はいたく世を憐れみ給うたが、体重が僅かに九貫匁で、髪はツツペンから高下駄を履いた時の地面迄を測つても四尺三寸もし大家に生れなければ、とつくに何某サーカス団へでも身売りしていたろうと思える逸物であつた。

男子志を立て、郷を出てから何と二十五年間、辛抱の樹にも花が咲き三十九才のご養子様とはなつた。三郎一の花嫁御寮はその時三十才ともあれあまたしい戦雲の裡に式は挙げられ、二人共に着座した儘起たなかつた。起つて歩けば合無しになるのである。お客の帰つた後で、妙様は女中達に抱かれ寝所へ入られた完全にシビレがきれていた為である。

さて、九貫匁の花嫁様は、一ヶ月後には、十貫五百匁にお肥りになつた。その際には、哀れ夜之助の体重が三貫匁も減つていた。夜も風もなく妙様は彼を愛でられ、夜之助は御用多端でしばしばお店へ連れ出では卒倒し、うなぎだ卵だとホルモンを注入して頑張つた。お店の方は、大旦那様が控えて居られたので、夜之助は専ら養子の本分を尽すより他はなく、忽ちの中に眼は落窪み頬はこけ、風吹かば黄泉へとばんかという風情となり、人々の袖を濡しこそしなかつたが、全身、五月雨を浴びたような生活で、心さえ乾く日もなかつた。処が、妙様は、一夜の風邪が因で、不如帰の女主人公と同様に、赤い血を吐く病に患られた。

以来、延々として奥に入ヶ年間、二千九百二十二日という永い朝夕を夜之助を枕頭から離さず、桃色の病床で暮され給うた。しかし遂に、名残りは盡きねど、わてもうあかんワ……と、細いお声を残されて他界なされた。

夜之助が妙様へ献身サービスをしている間に、世の中はノゾキカラタリ的にがらりと変つてしまつた。戦争がすむと、元の番頭や小僧連中が還ましくなつて舞戻り、夜之助などは眼中にない有様で、一夜の裡に、その名も若松織維株式会社と新しい看板が表に出る。店の間が事務所になり、二階が取引所のような市が立つ騒ぎ。呆んやりしている夜之助の前へ、これは今月分の家賃と配当金だと、拾万円という金が置かれた。

こら、え、調子ドスなア——と夜之助は泣いて悦んだ。妙様亡き後の遺産は、家と倉だけだつたが、これが時価で百万円からした。あつさり夜之助は、これを仲間へ売つて重役に納り、財産は目立たぬよう不動産にしてしまつた。

待てば海路の日和あり……石松の台詞なんかちいせえちいせえ、——急に祇園だ、宮川町だと遊び廻つた。女にはもうコリゴリしてますねえ——と云つた言葉も忘れ果て、金があり余るのでせつせと女遊びをした。彼に云わすと、わての反動どすせーが間もなく彼は、白粉臭い女にも、色電燈の婦にも、ハイカラなビイ嬢にも飽いてしまつた。

矢張り齡のせいかも知れないが、ふと、或る日読んだ西鶴の好色一代



男、六十才で女護の島へ旅立つたという世之介の武者振りに、わてもきばらなあかんぞと、大いに志を立て直し、その道の大家からも説を聞き色は迎る程に艶を増すものじや——と教えられ、さればイザ、東山をば越え行かむと、小切手帳を懐に入れ男、夜之助道中日記——の皮切りにと、飄々として……ではなく、びくんと、ひよつくりと不自由な脚をいたわり乍ら、焼けた京都駅のバラック建の改札口から旅立つたのである。折しも、シト、シト、入梅期の空の下何処へという当もなく、分け入らん山路の奥の細道と、独り旅の気まゝさで、とある古びた温泉町へ降り立つた。

さて、物語は、連日降り続く雨に足をとめられた温泉宿に始まる——「よく降りますねえ……今日で四日目。あーあ、お客はこないし、チツブはないし、あてホンマによういわんわ——」言葉からブギに替つて、静子は障子を閉めた。「旦那さんのようにじつと一日坐つてると退屈でしょうね」薄いワンピースが皺にならぬように、くるつと尻の方へ跳ね上げ、桃

第一話 處女航海〔陰氣な女〕

静子が、隣りに坐つていた二十七八才位の沈んだ顔をした女中の膝を

色のシュミーズを見せ、どすると夜之助の前へ横崩しに坐る。

にたツと微笑みながら夜之助は、二十一才の静子を眺めて猪口を口へ運ぶ。十分間に一度、口を濡らす程度しか呑まない。来るなり雨で籠城である。温泉にも倦き、遊びも仕盡し、さりとて次の宿へ飛ぶには雨が邪魔である。

「何か、いゝことないかしら……」仲居でもなし、芸者でもなし、と云つて娼婦でもない静子、その時の気分と相手でどうにでもなる女だつた。鼻を鳴らして夜之助の膝を揺すりだした。

「今日はみんな閑そうだな。ひとつみんなへ贅つたらかな」千円札をそつと懐から拔出して静子の鼻つ先へ。

「どやろう。手のすいてる人に来てもろて、今夜は座談会をやらんかいな。面白い咄なら、賞金を出す気やが……静ちゃん、呼んできてくれんか。序でにお膳つきで一杯呑みながら暢気にやろやないか。どうやね」

「マッ、賞金が出るの？ ご馳走付きで……へえ心ワケワクだわ、いゝわ、直ぐに姐さん達を集めてくる」廊下をもう駆ける静子の慌てよう

をご紹介します」

喜代美は蒼白い面長の顔をやゝ赤くして俯向いた。

「ほう。市村白梅云々と、何やこら歌舞伎役者みたいな名やが、喜代美はんは元役者やつたんか」

「はい。ずつと昔のと申しまして戦争中は慰問劇団の方でやつて参りました。芸なし猿でお恥しう存じます」

「そう固うなつて

もろうて

はいかん

な。軽う

聴こうや

ないか。

それとも

太棹の糸

でも入ら

んと、さ

わりが出

んとでも

いやるか

え」

頼んまつせ——」

夜之助は又懐から千円札を一枚引抜くと、

「これは花々や。賞金は又追加しまつさ。それもさ外題とさわりによつてはなア。さあ、はじまり、はじまアリ」

夜之助の陽気な囁しにつられて、喜代美はニツコリ笑つてから、やがて思いきつた風に口を開いた。





分も旅姿の専太郎さんが、大きく手を振つて迎えて下さいました。

「待テ！ 二人を乗せた舟が岸を離れたかと思ふと、宿の主人が転るように砂浜を駆けつけてきました。必ず追手がかくるとは覚悟しておりまして、果して主人は忽ち人を集めて、数人の漁師達が、懸声も高くわたくし達の舟を追つて参りました。主人は、まさか自分の体がわたくしを連れて逃げていくとは気づかず、声を震



らして舟を急がせております。わたくしはもう気が気ではなく、どうか専太郎さま、このまゝ舟を戻して下さい。わたくしの体はどうなろうとも厭いませぬ。貴方様のお心だけが嬉しくて……このお情の程、一生忘れは致しませぬと、思わず泣いて足に取纏りますと、専太郎さんは、男らしい顔にニヤツと不敵な笑いを泛べられ、何時の間に用意されたのか

出しました。

竿を振上げた男が先づ、うわツと叫んで転りました。揺れる舟の上から、よく専太郎さんのパチンコは命中しておつたようです。追手は、二人が海中に落ち、残る連中は飛道具の正体が掴めぬまゝに、怒鳴り散らす宿の主人の声とは反対に引揚げて行きました。そして、わたくし達の舟は沖に出ました。対岸の港を目指して、専太郎さんは鼻唄まじり先刻の事なぞケロリと忘れた顔でございました。

何と殿御は頼母しい——わたくしの緊張から解放された心は急速に専太郎さんの肌から匂う汗の香の中に触れ、やがて躍動する、温ましい灼熱的な体軀に包まれた感じにございました。海原の向うに、ぼんやりと港が見えてきました時、わたくしは子供の如くに手をうつて悦びの声を上げました。

第二話 處女人形 [暢氣な女]

もう大丈夫だよ——酷い齒を見せる専太郎さんの、背中や腕の汗を拭いている裡に、男の体臭とでも申すのでございまいしうか、何か云いようもない激しいものに、この身が驚かれますように、不意にヒシと専太郎さんの脉へ抱きついて急に泣き始めました。

ふうつと我に還ると、耳の下で、ヒタ、ヒタと船底を叩く波の鳴り声を聴き、果知れぬ空の蒼さが海の碧さと区別がつかなくなりまして、あゝ怖しいと専太郎さんに噛みつき乍ら、ゆら、ゆらと波の間に身を任せ心は白雲の間を縫つて飛んでいる心地がいたしました。――

喜代美は、美しい興奮の色を収めると、又元の蒼白い顔へ戻つて頭を下げた。

さて、そのお次は誰の番かと夜之助は礼を膝の上に置いて喜代美の顔を眺めた。

にやつ、にやつと二人の話を聴いていた女中の市子、夜之助に見据えられると、やつと自分の番と気がついた顔付で、膝を折直して神妙な顔になる。そうやつて澄まして何処からか笑いがこぼれそふな、のんびりした憎めない表情である。

「ねえ旦那さん、この姐さん、とつても暢氣な人ですよ。自分の当番

「ワン」心得えた調子で応えた市子と、



日和あり

「何んやね、その抜いたるか、いうのは——」

「そんなら口下手ですけどご免やつしやあ。手つ取り早うお話しまつさわてが、奉公した先は、旦那はんもご承知ですやろけど、京の綿問屋ではあの頃名の通つた山藤というお店どした。十九の時に下女中、二十になつて中女中、二十一で上女中となんせ小一丁四方もあるようなお家どすさかい、お部屋の手が判るまでが大変どす。わてが上女中になつて間なしに、坊んの雄造はん、この方が独り息子で同志社へ行つてはりました。この雄造はんが

お市、お前をボクの室付女中にしたるわ

と云うて呉れましたんどうす。金ボタンに角帽姿の若旦那はんは、そら、え、男前どしたんどうすえ——

大旦那はんは留守勝ちどすし、奥さんも神経痛で大抵は温泉巡りをしてはりました。自然、お家の方は坊んの思いのまゝどす。わての仕事いらたら、坊ン、雄造はんの衣類の洗濯にお室の掃除位のもんどすよつてまるで、遊んでるみたいなんどうした。雄造はんは画が好きどして、油絵具を布張りへベタベタ塗つては悦んでました。わてにモデルになれ、云わはりましたなあ、ほんまにわてに恥かしうてかなえまへなんどうした。

お前の顔見ると市松人形を思い出すぜ、つて生意気な口を利く癖にケツタイな顔に描かはつて、わてア

ホクそうて……初めのうちは、そのまゝで済んだんどうすけど、そのうち肩先の方をチョット出して呉れ。それがあんだ、次は、片一方だけ出せ云わはりますねえ。わて、なんぼ何でもアカヘン云うたんどすけど、モデル代出すよつてにとか、拝む、この通りや云われると、とうとう根負してオッパイを出さゝれてしもうて……いゝえいな、わては肌脱ぎした

弁財天様みたいな、オヘソまでは脱ぎましたけど、まづばただけは死んでも真ツ平どす。アキマヘン！ちゆうて断りましたんどうす。わてが、ごらんの通りのヘチャどすさかい、若旦那も別にどうする云う気もなかつたんどうすやろ……ほんまどうすえ——シヨウモない、美人やなんて——云わんといはしいわ。

間なしに画の方もおもしろない云わはつて、今度はお友達と玉突遊びに夢中におなりやした。わても、坊ンが家に居てくれはらんと何ちうことなしに寂しおすさかい、玉突つてそんなに面白いもんどすか、云うて訊いてみましたら、

お市、玉突には妙な言葉がある。キンタマ云うの、お前何のことか知つてるか。

わて、恥かしゆうて……アホなこと云わんときや。柄の悪いことどすえ云うと、

知りもせんのに黙つとれ、キンタマ云うたら球が二つ並んでる時の事だ。それやつたら、同じこつちや——

云おうと思つたけどやめましたんや余り坊ンの顔が真剣どしたんでわてどきまぎしてしもうて……。そんならお市、キッスつて知つてるか。

今度は笑つたら叱られる思つてそんな難かしい西洋の言葉は知りませんと云うたら、人間も球も同じ事さ。例えば、ボクが白球でお市が赤球だとするとだ。ボールと撞き出された手玉が、白球に当つてから、すうつと赤球の傍を掠めて通る時、たとえ微かでも赤球に触れ、ばい、んだ。これをキッスと云うのである。

——わては、何のこつちやら判らんけど、掠めて通るとキッスどすかえ——と感心しときましたんや。坊ンは、その時泣き笑いみたいな顔をしてはりましたが……

暫くしてから、わてに、今夜友達が遊びにくる。お前も仲間に入れてやるから、今から風呂へ入つて、此の間買つてやつた洋服を着てお化粧もしとけよ、という命令どす。処が年中着物暮らしの女中風情に、アツパツツバなら兎に角ドレスちゆうことになる、テンでどうしてえ、のか目当もつかん有様どす。だぶだぶのシユミーズの上から、無茶苦茶に着てはみたんどすけど、けつたいたな恰好になつてもうて、わて、どうにもならんよつて、坊ン、何んとかしくくれやす云うて、雄造はんのお部屋へ駆込みました。坊ンが、世話のやける奴やなあ、何を一体、ごつごつと下へ着てるのだ。全部脱ぎなさい

折角の君のすらつとした腰の線がブツこわした。そう云うて、腰の辺りへ出来た皺を叩かれました。

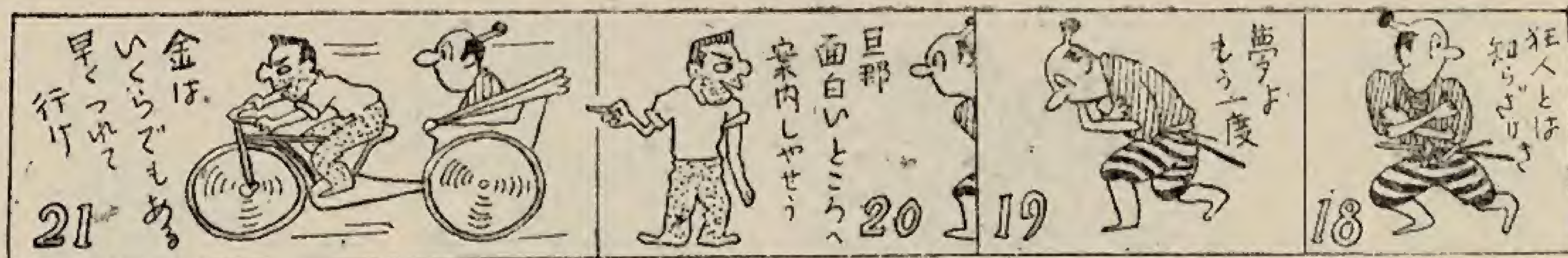
洋服着たら、パンスも脱ぎますのどすか？わて、びつくりして坊ンに問いますと、お前がブルマの薄いのを持つてないから仕方がない、今夜だけは何も身につけるな——て、そそら無茶どすわ、耐り兼ねて抗議しましたんどうす。ほしたら、昔の人はどうだつた……丸裸つて眠じやなしちやんと服を着とればいゝじやないかつて叱られてまいりました。

成程、昔は、別に袋はいたりしてまへなんだもんね。やつと服の方が済むと、おい、お市、キッスつて何か判つたかい。

て、云わはるので、へえ、すうつと傍を掠めて通る時に……云いかけると、馬鹿だなお市、人間のキッスはこうするんだよ。

いきなり——ふらつとしてるわての軀がすうつと吊上げられたかと思ふと、えらい力で抱締められてわて口だけひつつけるもんや、とばかり思つてたら、えらい間違いだした。放してもろうた時には舌の先が痛うて……ボオツとしてしもうて……それが初めての接吻どした。

苺出したり、サイダー運んだりして若旦那はんのお部屋は賑やかどした。何の話からだしたるか——初めは、ハンカチ一枚の手品をお友達の人々が綺麗にやらはりました後で、妙な遊びが始まつたんどうす。ハンカチで手のこゝん所、あの脉



を計る辺りを合した儘、軽う括らはりましてん。それを、腕を上げて頭の上を潜らして、頭の後ろへ廻し、前へ戻す、運動云うんどすかいなあ。それを坊ンと三人の学生はんが、うんうん云うてやつてはりますのどす見てるとその時の顔付の面白いこと云うたら、腹をかゝえて大笑いどすほしたら、

お市、お前も一度試してごらん。と、坊ンに云われましたんや、なんや、そんなもの位、なんぼわてが無器用でも出来ますわいなあと、知らぬが仏ですがな――

サア、そんならやつてみい云うんであんたはん、掌合して括られましてなあ、すうつと頭から潜つたんどす。髪の上は迂るよつてに訳はおまへなんだが、あッ、えらいこつちやしもらたッ！さあ、何の気もなしに後頸まで廻した処が、わては昔風に髪を後ろで束ねてましたもんどすさかい、すつと頸の処へ落ちたが最後、上げようにも、引こうにも、それがあんたはん、束ねた髪が邪魔になつてニツチもサツチもいきまへん

お市、電気消してやるから、首尾よく元へ抜いてごらん。賞品にハイヒールを買つてやるから……頑張れよ

闇の中どす。どんな顔しても笑われる氣遣いはなしと、一生懸命に――ほんまにもう、恥も外聞もあつたもんやおへん。畳の上を転がるようにして腕を振つてみますのやが、

頭でも引抜かん限り、腕が元へ戻る氣配もおまへん。わては根が強情な処がおして、何葉思い乍ら半泣きになり、軀を捻つて頑張つたんどすけど、やつぱり、てんで動きがとれしまへん。学生はんが、ふ、ふ、つて笑うてはるのが癪どした。何とかしてと汗かいてキバツたんどすけど、もうアカンと諦めてまいました。到々わて忍び泣きしてしまいました。

ほしたら、学生はん達が黙つて室から出て行かはつた塩配どす。坊ンの声がしまへんなんだ。わてはもう心細うて、段々泣き声を大きくうしていつたようどす。自分では恥しい思うて慄えてたつもりどした――

おい、抜いたるか――坊ンの声が暗がりの中で、なんや息を詰めたような調子どした。

電気つけたるか――イヤ厭どす飛でもおへんことどす。暗いよつてえ、ようなもの、あんたはん、なんせドレス一枚のわてどすせえ、首の方に氣を取られて脚の方はまるだしどす。あかん、灯けたらあかへんし……わてかて乙女どすもんそれだけは堪忍して――と声を絞つたもんどす。

どうだ、抜いてやろうか――抜いてくれと云つたら



抜いてやるよ。

雄造はんの手が、わての脚を押えて多少喋え声どした。わては何とも考えんと、早う抜いとくれやす。頼みどすさかい抜とくれやす――痛い腕で畳の上を叩いて云うたもんどすともかく何とかしてもらわんと、もろどうにもならしまへん。後先も

考える間がおますかいな。

そうか、ようし。確かに抜いてくれつてお市はボクに頼んだね。おい君達三人、いゝか君達が証人だぞ。いゝなア、ボクは合法的に行動するんだよ。決して暴力じゃない。何の話かいな？えらい難かしいこと云つてはる、抜くの何が大それ

YOSHIDA



な……思ひてたらとたんに、
あッ違つッ、坊ン、若旦那……雄
造はん……そ、そんな、もし、もし
坊ンちゃん——叫んでゐる顔の
上へ、ふわつとドレスの染料の香り
が被さつてきて……
わて、その時のハンカチをまだ持
つてまんねえ——抜いたろか、抜い
てんか……も、えらい間違ひがある
もんどす。それから云うもんは、サ
イダーの絵一つ抜くのも、ふと、思
ひ出してしもうて……えらい、しよ

りもない話して、旦那はん、キッウ
かにんどすせえ」
市子は、口を開けて笑ひ乍ら話を
結んだ。
「あの山藤の今の旦那がああ、さよ
うか、こら仲々えゝ洒落やなあ、随
分可愛がつて貰うたやろうなア、な
あお市つあん」
「それが旦那はん、あきまへんのど
す。お市は人形師の娘だけにまるで
人形や——そないに坊ンに云われま
したんどすえ。今やつたらまさか人

形とも云われしまへんやろけど」
「いや、生娘やつたらそれでえゝの
や。涙の京人形身の上話、今夜は随
分と愉しませてもらうたなあ——」
折から、新しい銚子を配んできた
小女が、そつと静子に耳打ちして出
て行くと、
「ぢみませんけど旦那さん、旦那さ
んはまだおよびになつたことがあり
ませんけど、東京から此の間来られ
た、佐利子さんて姐さん、如何でし
よりか。ダンサーもやつてこられた

そりですし、少しツウンとした方で
すけど、姿違と違つて面白いでしよ
うが……」
「ツウンか、ツンでもシャンでもえ
ゝわいな。別に歌を聴く訳でも踊ら
すのでもあらへん。佐利とは辛いね
——いや、佐利とは結構、招んでや
つてんか。ちよつと顔だけ出してく
れ云うてな」
そう言つて夜之助は盃をとり上げ
た。

第三話 半處女仮装 (勝氣な女)

静子が出てゆくと入れ違ひのよう
に入つてきた女は、二十五六位か。
洋装の大柄な派手な顔立ちのおキヤ
ンな風であつた。
挨拶もそこそこに、豊かな脚をど
たりと投げ出すように横坐りに坐る
と、
「さあ、熱いところを一つ貰いまへよ
か」
立てつづけに何杯もの盃を見事に
乾した。
「大分飲ける口らしいな。しかし、
あんたの云うてる、半處女ちゆうの
は、相当昔にも聞いたような気がする
なア」
「昔のことなんか知らないわ。妾な
んかアブレですもの。これでも銀座
で多少は名の売れた女よ。此処らの
小便芸者と一緒になしないで頂戴。裕

が違ふんだから——」
「誰も、アブレた女やとも、小便臭
いとも云うてまへんがな。そやが、
その長いスカートは何んやねえ。無
茶に長いやないか」
佐利は、クスンと鼻を鳴して、殆
んど脚を包んでいるスカートの端を
持ち上げてから、
「これ位の長さにしとかないと駄目
なのさ。この辺の泥臭いお客ときた
ら、直ぐに捲りたがるんだもの。だ
から妾は着物は着ないのよ。男には
割れ目は禁物さ。これでも銀座のホ
ールじゃ、シルバの佐利と——」
「判つてますがな。齢は二十五で生
れは神田。シルバ踊れば埃が立つ！
……いや、坐つてる男も立つ——やつ
た。処で、なんで又あんたのような
美人がやな、云いよる男も多からう

に、華のお江戸を後に、こんな荒れ
た温泉場へ流れてきたりしなはつた
んやア」
「だから先刻云つたじやないの。妾
は半處女だつてさ。男にまだ軀は汚
されてない女なんだよ。その癖男つ
てもものを知り過ぎてゐるのさ。大体、
男つて何なのよ。自惚ればかり強く
つて何だい。妾はね、男の顔を見る
と笑えるのよ。オタンチンに見える
のさ。だらしがないさ。まだ妾を呻
かせた男つて一人もないんだから果
れるよ。感じさえも出せない男なん
て、フン、全然悲しいじやないの。
妾ね、正直に云うけど、おやじのそ
の関西弁が大嫌いさ。くだくだ、と
ろとろ、何さ、その喋り方……ねえ
呆んやりしてないでウンを酌いで頂
戴。そんな水つぽい日本酒なんてオ
カシクつてふん、何だつて？妾が酔
つてゐるつて？ご冗談でしょう。妾は
ね、シルバのサーリイこと、又の名

のアブサンのサーリイつて云うんだ
よ。アブサン、いゝわよ。あの仄か
な色と、ピリツと舌の上に感ずる鋭
さ。あゝ耐らない。あんな調子で妾
の軀を誘惑して、とろんと溶ける程
に呻かしてくる男、此の世の中に
は居ないのかなア」
「えらいご気遣やが、ちよつとわし
も云わして貰いまつさ。これでもわ
しは男の一人やでえ。そうボロ裏に
云うたもんでもないやろ。どんだ
けの男の数を踏んだか蹴つたかは知
らんけど、察する処、あんたは不感
症と違ひか、いゝえなア、これはよ
うあるこつちやから——。まだ呑む
のか、やめとき云うのに……もう眼
が据つてもたるがな」
佐利は、横座りにすらつとした脚
を投出し、夜之助なぞ眼中にない風
で、ウイスキーをすでに三分の二瓶
位空けてゐる。酔うてゐる——と云
えば酒呑みは、何が酔つてゐるものか



と意地でも飲む。夜之助は、佐利の馬鹿長いスカートを眺め、思い上つたホゲタの数を聞く裡に、ひよいと、この生意気な小娘を苛めてやろうか——久方振りで色事師らしい氣持に誘われ、秘かに一つの計画を抱いた。

「あんた位の女になると、まず出来んことは何もないと思うがどうやらか——」

「妾に出来ないことなんかないわヨ」

「処が、そう一概に云うたもんでもない。現にやなあ、この手拭でこう手を括つて……ちよつとした遊びやが、これが何でもないようで実は難かしいのや。今も皆と、やつてたのやがな。あんたは神田の生れや、やれんことはないと思うけど、いや、やれんかな？」

「妙な云い方はよしてよ。妾にやれないものつてあるもんか。馬鹿にしてるヨ」

「と、さあ、最初は誰でそう云うのやが、さて、やつて見るとチョット難かしい。千円の賞金つけてるのやが、それでも小一万もわしは取られたかいなあ……」

「小一万——ふん、妾だつたら……でも、金に目のくれるような佐利じゃない」

夜之助は、佐利の掌を日本手拭で括つて、市子の話通りのことをさせた。うんとゆるく括つてあるので、胸の長い佐利には厭のないことだつた。



「何だい。厭ないじゃないの。これで千円もやつてたおやじはお芽出たいわヨ。妾はもつと難かしいかと思つた」

夜之助は、佐利の掌の手拭の事を

開いて、それから股の間へ手を延して——

夜之助は、千円札を佐利の拡げた脚の間から、向うの方へ押しやつた。

「云うとくが、脚を曲げたらアカンでえ。手をぐつと延して股の間から札を拾うのや。拾うただけがあんたのもんや」

佐利は眼を輝やかせた。こんな遊びで一万円は掴み取りである。直ぐ脚を大きく拡くと手を延して札を拾おうとした。すると、身を屈けるとたんに長いスカートの裾が邪魔になる。夜の天の橋立の股覗きで、何も向うが見えない。指の先に紙幣が触るが夜之助があらかじめ、掌の上へ手頸から廣く括つてゐる。手拭だけに案外指の根方が締つて手頸の方が緩いので、氣は焦るが指先の自由が利かない。そこへ、肝心の札が佐利には見えないから我慢が出来ない。「ねえ、スカートを何とかして頂戴よ。少し、こら、上げて、呉れないかしら……」

夜之助は、ゆつくりと尻の方の分を持上げる。勿論、それでは何にもならぬ。

「そうじやないのよッ。焦ッたいね妾の眼の前の奴を掴るのさ」

佐利の軀が揺れ始める。素面でやつたつて頭へ充血してくるのに、酒を呑んでるから耐らない。夜之助は背中から軽くそれを支えてやる。忽ち、佐利は掴めたらしく弾んだ声で取れた、取れたと叫んだ。夜之助が「拾うた奴を胸へ押込んで拾うとみんな残らずいけるのや——」

成程、さもありなんと佐利が、慾につられて胸元へ、無理に突込もうとすると、これが又大変な困難極ま



る仕事で、両掌を括られているから
唸つてばかりいる。

頃やよしと夜之助は、ばアツとロ
ング・スカートを、佐利の俯向いた
首の方へくると捲り落した。と、
同時に、其処は永年布地を扱つてき
た手練の早さ、ぐいつとスカートの
端をつまむと絞つて、袋の口でも緊
めるように括つてしまった。

佐利は転ると、足をばたつかせて
唸え立てるが、夜之助の上から押え
た座布団が防音装置。次の間には夜
の用意がしてある。ひよいと暴れる
脚を押えると、自分の腰紐でくるつ
と縛る。後は静かに、海から陸上げ
した大魚のような恰好で、隣りの部
屋へ引曳つて行つた。

さて、あとはどうなつたか、半時
間程して、忍び勝ちな呻き声が洩れ
て来たが、一向に荒れるような気配
はなかつた。

艶姿五人女、淫雨夜譚。長雨のつ
れづれなるまゝに、五人の美女が語
る処女訣別の思い出ばなしも、三人
目の佐利子が酔つぱらつてから、ひ
よんな事で結末になつてしまった。

あとに残つた二人女の夜譚は、ど
んな奇抜な趣向がありますか、これ
は次号のお楽しみとしてお預けにし
ておきましょう。

夜之助旅立つ

「おや、もう旦那さま、お発ちで……」
早起きの三枝がびつくりして夜之

ゴム風船 鈴木義司



奇譚笑話街

風流太郎

◎まあ、失禮な!

男 // 奥様、ラヂオの修繕に参りました。
奥様 // あら、家にはラヂオありませんわ。
男 // でも、お隣りの奥様から、御宅のラヂオの雑
音をついでにお直しするように頼まれましたん
で――

◎ファン氣質

娘 // 先生、この小説の女主人公、来月号ではどう
なりますの?
小説家 // からだが弱くてね、とうとう、死んでしま
いますよ。

娘 // あら、お可哀そうに。私、とつても妹が丈夫
なんだから、何なら替つてあげましょうか。

◎間 接 握 手

A // あなた、どうして片手だけ手袋をはめないの
? //
B // 電車の釣革を握るんですもの。
A // 手袋をはめて居ては何故いけないの?
B // だって、男の人も握まるんですもの。

やつとくれ。女アンマがえ、やろ

こら冗談や――

車窓を叩く雨脚を眺めている裡に
夜之助は何時か睡り始めた。昨夜の
分をゆつくりと寝るのである。目
覚める頃には、又新しい街と、女が
夜之助の前に展開することである。
――(夜之助旅日記より)

わが繪姿を妬む女

土俵股平



誰もいなかった。

× × ×

アパート若草苑の奥まった二室を借り切つて、八畳を画室に、四畳半を寢室兼書斎にしていた。

自動電話のドアの隙から吹込む風に、浴衣の裾をハタ／＼させながら、近江六郎は千代香の「玉言」へかけていた。
「千代香かい、いい構図が出来たから、午後から都合してくれないか？ 今度こそすばらしいものにするつもりだ」
「きつと参りますわ、この前のようにヤツト伺つたら鏡がおろしてあるなんていやよ」

「大丈夫、今日は太鼓判だよ、何にしろもうウズ／＼しているんだ、出来るだけ早くきておくれよ」

「お顔が見えるわ、よほど嬉しいのね、指切げんま、キュッ！」

「よし、キュッ！」

これじや子供の電話だ、近江はボツクスを出るとカッと顔がはてつた、しかし外に

近江はドアの鏡を内からおろすと、サツと仮張りの布をめくつた、それは高さ六尺横十二尺の大作で、木炭による裸女格闘のデッサンが、彼独特の荒いタッチで描出されている。それは単なる女相撲の絵ではない、女闘美画家と自称する近江六郎独特の女闘画である。背景にはまだ一線もふれていないので、如何なる場での乱闘が行われているのかは分明でないが、年の頃二十五六と思われる成熟した二女が、その豊かな肉体を全裸にしての血闘である。
向つて右手の女は、右腕を上げてしつか

と左の女の首を抱き、頤にかけた五指は、次ぎの瞬間には相手の咽喉を締めつけようとしている。又左の女はその相手の指を顔あらばたぐ一噛みに噛切らん意欲を見せ、相手の右腕を防ぐ消極性を蹴飛ばして、わが左腕を相手の股間に伸ばして、王手王手と襲つてゐるし、右手は相手の乳房を掴上げ、いきり立つその乳首に爪をたてて、とどめを刺さん必死の攻勢である。

それに応ずる右の女は、王手と出た相手に抗して、我も王手よと、左手を深く臍下三寸に下して、これ又決死の一本槍とばかりに、王手々々の差合いと出ている。顔はと見れば、電髪は乱髪に三分をうずめ、一方が唇を噛み、片眼をつぶつて痛みをこらえれば、他は叫びをあげて相手を罵り、両眼をカッと思ひらいて憤怒のアクメを表して躍動している。

もし之に適當な彩色がほどこされたあかつきは、見る者は官能の興奮に全身をうちふるわせて、柱でもあればその柱に取つき人あらば其人に抱きついて、しばし心悸のやすまる迄は、何物かによらねばたえがたいであろうと思わせる魔力的迫力がさまざまにばかりに横溢している。

近江六郎は其画前に立ちただかつて、あたかも二女の格闘を行司でもする姿で、手を振り首を動かして、何ごとか独言するよりに見えた。もし寸隙があつて何人かが透見したとすれば、必ず彼が発狂状態にあるものと断じたであらう。

画家とはいへ、彼は展覧会をわが市場と考える会場画家でもなければ、売らんがため職人画家でもなかつた、たゞひたむきに彼自身が求める女闘美の官能表現に、全肉全霊を打込んで猛進する純情無双の作家であつた。恥毛は勿論、場合によつてはクリトリスまで表現して性的官能美を強調することすらある。

近江六郎の描く乳房は、こと／＼く乳首を睨として生れた妖精となつて、左右独立した動きをみせてゐるし、ブエスはクリトリスを女王といただいて、ヴィナスの丘に戦旗をひらめかして、寸地も譲らぬ敢闘力をほのみせるのであつた。殊に十指の不思議なサインの表現は、足のそれと共に、深刻無限の達引に夢中である。

木炭の粉が幾度か飛び散つて、新鮮な曲線が其処此処に伸張をみせ、絵の凄愴感よりも上つて、写真から幻想に歩をうつして繪筆が画家近江の心の指と化した頃、優しくノックする音がドアにきかれた。
夢から覚めたように、近江は木炭を捨ててガチリと内掛けのロックを外した。初夏を過ぎた輝かしい太陽の逆光のもとに、ウル地の単衣をすんなりと着こなした千代香が、うす化粧の香もほのかに微笑んでいた。

「おそくなりまして」
千代香はチラと腕時計に眼をやりながら二足踏み込むと音もさせずにドアをしめた。内鏡のかかる音すらきかれなかつた。千代香の眼は又しても古本箱が下駄箱に格落ちしたのが気毒おかしくて、ニンマリと笑いながら意気な自分のサンダルを片付けて、近江の背を追つて上つてきた。

素足が掃除の悪い畳を踏むと、其たびに足裏が黒ずんでいくのが感じられた、窓から吹込む風に、炭末がどこへも飛散るのであらう。いい訳にすぎない二室の間にたれているレースのカーテンを肩でくぐると、近江の描く女闘画は、画紙から逸脱して、

部屋一パイに浮出していた。いや白紙を背景として、生きた体臭をもつ女として押出されていった。今にも量感的な肉体が大きく息づいて、ハッツと苦しげな悪気を吐きそりである、大熊が双手をあげて組付いてくるようなすさまじさで、千代香の眼の中へ飛込んできた。

画面に見入る千代香の表情の動きを、寸分も見逃すまいと、近江の眼は疲弊から牙返った新鮮さでまたたきもしない、千代香の口もとがすかに動いたようにも見えたが、それは言葉とはならなかった。

一週間はとも前の夜のことだった。近江の求めに応じて、やつとお座敷を外して彼女が駆付けたのは、早十一時もなかば過ぎた夜半に近い頃だった。ボーズの組合せに心身共にやたぶれた絹物のように疲れ切つた近江は、千代香が来たのも知らずに、外套を腰にかけて、ぶつ倒れたような姿で眠っていた、そのために彼女は三十分近くドアの外に立たされたのだつた。他の室は全部消燈して眠っているのを知ると、大きな声もたてられなかつたし、ノックの力にもぶる思いだった。

たとえ泊つても、シングルベッドしかない近江の室では、ろく／＼眠れもしないし彼女自身も、休養が目的で来たのでないことは、たまの逢瀬を楽しむ者としてのエチケットでもあつた。ところが室に入るからぬかに、近江は彼女に一条まとわぬ全裸となることを強要し、短い夏の夜とはいえ電燈の輝きが眼にとまらぬ翌朝の七時近くまで、あゝでもないこうでもない、あられもないボーズに、時には投げられ突飛ばされ、黒髪を引かれるかと思えば、痛いというほど乳房を掴まれ、豊の目が頬につく

ほどねじ伏せられたりもした、涙の出る思いをこらえて反抗一つせず、ただひたむきに愛する近江の意のままになる捨身の我が身がいじらしくさえ感じられたのだつた。

「どう気に入らないかい？」

「あまりかねて近江が口をきいた。」

「アクメの緊迫感がよく出てると思いますわ、でも」

「でも？」

千代香はチラリと眼差しを彼に送つて、
「でもボーズがやや膠着している感じをうけますわ、あまりに性感を追求なさりすぎて、相差しに攻めているためだと思いますけど……」

「同感だね、腕も指も硬化一步手前だとは気づいてはいたが、さて外すとして、それをどうしようかと思つていたところだよ」
「かりに右手の女を右近サン、左手を左近サンとしますと、左近サンの左手が逆関節になつて腕に力がありませんわね」

「それも分る、しかしだね、君の仮称を借りて説明すると、左近は右近のために首を相当強く扼されているだろう、だから其処に狼狽の色が出ているのだよ、攻撃の主力はかえつて右手の乳房攻めに集中していると考えたのだ」

近江の説明をきくと其処にも一理があつた、勿論かかる絵柄は、一般に公開さるべき性質のものでもなければ、近江も亦それを望んで筆を取つた筈もない、しかし千代香の感覚はまだ其処に何となく意にみたないものを感じるものであつた。書物があれば一頁一頁をビリ／＼とさいて行きたい衝動にかられた。

「もう一度ボーズを取りましようか？」
千代香はせつば詰つた思いでいつた。

「……」

「貴郎御自身も御不満なんではしよ、女闘美には余韻は残されても、争いに余裕というものはありませんわね、でも女同志の争闘に、性的な感覚が魅惑的に扱われます場合に、其処には貴郎がよく主張なさる／＼みかえりの性愛が／＼あつていいんじやありませんか？」

「そうだ、たしかにそうだよ、左右の女がお互に性感帯を襲つているとすれば、クライシスのものがなくちやならない、着衣のままでもいいからもう一度つけてくれる？」

「しますわ、脱いでよければ脱ぐわ」

ボーズをつけるといつても、モデルは千代香一人なのだから、其処には独り相撲の姿が濃く、自然相手として近江が攻勢に守勢に脇役をつとめねばならなかつた。しかし女闘美の格闘は互格であつて、その表現には仕手と脇が判然としてはならなかつた部屋には不釣り合いな大姿見に二人のボーズをうつして研究するより仕方がなかつた。

姿見にうつし出される肢体のクローズアップは、二人が男女なる故に、春画の活人画を見るに近い魅惑が強かつた、それは一種の自演的な効果をそそつて、近江と千代香の官能を極度に刺激していつた、鏡面の影像は刻々に深刻化していく。

「ちよつとお離し！」

快心のボーズをみつめた近江が、画面を修正しようとして彼女から手をはなすと、千代香は、

「いやよ！」

無理にも彼の手を握つて、我と我が胸乳におしつけようとする。男の慾情は野性的である反面、一たび仕事にグルリと方向を転ずると、其瞬間に急降下して、とつさに

また仕事の園内へ戻れた。

しかし女性の慾情曲線は、その簡単に降下するものではなかつた。室内の温気が肌の香と混じて、上気した頬を一層紅潮させて、千代香は近江の腰を抱いた手を離さない、近江としては、折角網膜にうつしとつた影像を、狂わせまいとあせればあせるほど、千代香の腕は蛇の如く藤蘿の様にからんで離れないのだつた。其処に男と女の芸術慾即仕事と情慾との闘いが挑まれようとした時、

「わッ！」と叫びをあげて、千代香はくずおれるように、近江の足許に身悶えしながら泣伏した。裾を乱したしどけない姿は緋牡丹の落下を見るようになまめかしく、青白い項がベツトリとおくれ毛を這わせている。近江はその全姿に一瞥をくれた。抱きおこしてなおも焰の愛撫をつづけたい衝動をおさえながらも、一心に画面へ木炭を運ぶのであつた。

やがて千代香は面をあげた。すき通るように肌の白いきめのこまかい彼女のこみかめに青い静脈が怒張し、眉はひきつり、美しい眼は裂けんばかりにひかれ、アクセントの強い下唇のやや反つた肉感的なその口はわな／＼とふるえて、血の気のひいたその美貌は胡粉の下地に淡い白緑をはいた未完の能面を見るような苦惱美がたぎつていた。

「貴郎は男ね、男は女より仕事が大事なのね、憎くらしい、こうしてやる！」

千代香は立ちあがると共に、デスクにあつたバレットナイフを握つて、近江の草稿画に対して投げつけようとした。

「危い！」

咽喉に彼女の手を横に払つたので、ナイ

ッは片隅の画架にあたつて落ちた。

「馬鹿！」

「馬鹿でも何でもいいわ、どうせ私は馬鹿な女ですもの」

「この絵は君自身の写し絵じやないか、絵姿じやないか？」

「貴郎は現実の千代香よりも、絵姿の千代香を愛していらつしやる、小説の千代香を愛していらつしやる」

「違ふ、現実の君があつてこそ、絵も小説も生れるんじゃないのか？」

「違います、違います、現実の千代香には肌をお与えにならない癖に、小説の千代香にはいつも情熱的な愛撫をつづけて、素直に身をおまかせになるのに……」

「……」

「貴郎は千代香を愛してゐるつてウソ／＼うそよ、貴郎つて方は、千代香を京人形にしてなさるの、いえもつとひどい、縫いぐる

君が手に 加茂三千彦

一、君が手に

胸乳許して 寄り添えば

月も朧に 東山

しだれ柳に

夜桜が

妬けて散るらし

池の雨

三、君が手に

胸乳許して 寄り添えば

顔に紅葉を 音羽山

恋に願いの

縁結び

妬けて投げたか

紙つぶて

二、君が手に

胸乳許して 寄り添えば

加茂の流れに 夏の月

鳴海紋りの

袖附が

妬けて火となる

大文字

四、君が手に

胸乳許して 寄り添えば

保津の川瀬の 雪見船

炬燵の

緋鹿子に

妬けて流れる

きれ筏

み人形のように、手足をまんばかりにオモチャにして、あきが来ればボーと畳へほり出して知らぬ顔をなさる」

「泣くのはよせ、今そばへ行くから……」

近江は画面に向つて余念がない。

「いらぬ。千代香はおいとまします」

立上つた彼女はゆるんだ帯をしめ直すと

足早に次ぎの室へ出ようとしてチラッと近

江の方を見返つた。千代香の涙にぬれた眼

に、彼の肩と横顔が、その横顔の頬の上に

輝く射るような光芒、いや人の眼から光が

さす筈もないが、男が、画家が、ひたむき

に画面に取組むその真剣味のかもしだす迫

力に、千代香の足は釘づけにされた。

右近と仮称された右手の女の上半身はむ

ざんに消されて、左近の左手が刻々と描線

をのぼして、右近の頤を奥上げていく、そ

の手の上に苦しげな右近の憤怒美のアクメ

を表す美顔が、眉をつり眼をつぶり唇をキ

ツと噛んでこらえている。

千代香の足はいつしか指の方向をかえて

静かに五六歩近江の背後へ近よつていく、

両腕は自然に体側にたれ、眼は画面と近江

の横顔とに交互に視線を送っている、一刻

前までヒステリックにひきつづけていた彼女

の表情は、すでに其幻影すら消して、下臉

に泪のあとをとどめたまま、愛する人のひ

たむきな精進の姿に、男性のみに見られる

真当な仕事への打込みを、千代香は何かに

魅了されたようなりつつ心で眺めているの

だった。

彼女の胸乳の下に動く血が、その真紅な

血潮が、不自然な波形を描いて、時には程

をぬいたサイダーのように、紅色の泡とな

つてフツ／＼と沸騰するような異様な氣持

を感じた。近江に対する信頼性というか、

頼もしさと

受取るべき

か、いいし

れぬ思い

に、一刻以

前の慾情と

は全々異なる

感覚をもつ

いわば清純

などでもない

うべき慾情

に、許され

るなれば近

江の両肩か

ら腕をまわ

して、愛の

行動を思い

のままにと

りたひ衝動

に指のわな

なくのをお

ぼえた。

「どうだい！これで」やつと木炭を画面か

らはなした。

「……」

千代香は何かいおうとしたが、咽がつま

つて声が出なかつた、答がないので近江は

ふり向いて彼女の顔を見た。

「何だ泣いてたんかい……僕が冷酷石の如

くだからか？」

「いいえ、貴郎が頼母しく見えて……それ

で」

「もう邪魔はしないでいうのだね」

「ええ」

「こちらへおいで」

近江は木炭によこした指を、不精者らし



くアトリエ服の裾でふこうとすると千代香はサツと其右手を取つて、袂から可憐な花刺繡の絹ハンケチを出してぬぐつた、ぶんとペリオトロップの香が近江の鼻をついた

ガラス戸をあけると、早狭庭は日陰を生

じて、暑気はやや衰え、絲瓜のつるには打

水を求める風情がみられた。

縁のソファアは二人を隠わせてきしんだ

「千代香、お前はやさしい娘だ、僕は……」

近江は「お前！」と呼んだことにハッと

して彼女を見た、美しい眉の下に、愛くる

しい千代香の眼が、長い睫をあげて満足を

うな瞳に、愛人近江の顔をうつして動かす

まいとしていた。

(完)

変態情痴小説

秘めたる

炎 絵

花菱 玲子

松井 籟子



男娼殺人事件の顛末

「あら、秀ちゃん、おねがい！」
甲高い声で呼びとめられて、見ると春舟の女中のお君が、袖をつかむばかりに秀一の横にたっていた。
正五九の水天宮様といつて、毎月のお※

「秀ちゃん、一寸ここに立っていてくれな
鐵橋から中の橋へ、親爺橋から浜町へと、
横に走る道筋にも植木の夜店が一樣に出る
賑わいだつた。そんな人の流れに押される
様に、ぼんやり歩いてた秀一はびつくり
した顔で立ち止つた。」

「なんなのいつたい？」
秀一があわてて聞きかえすと
「あら、そうね、かんじんのこと忘れて、
ホホッ」
自分ののみこみ顔に自分からふきだした
が、お君は父急に真顔になつて
「あんた、うちの旦那が来たらね、一寸声
をかけて立ち話でも何でもしててよ、お
茶でもものに誘つてくれたらなおいゝわ。
何でもいいの、今、旦那に来られるとまず
いのよ。引きとめていてくれない、たのむ
わよ。あつちからくるかもしれないんです
もの。うちへくるのに露地の口は二つある
でしよう、どうしたらいいかしらと困つて
いたのよ」
お君は秀一の都合もきかず、あわててか
け出していつてしまつた。
春舟は秀一の母親の小芳をよくよんでく
れる待合だつた。酔うとだらしなくなる小
芳をもてあまして、秀一は夜更けに春舟へ
よばれることがあつた。まだ丈ものびきら
ない少年の秀一がかかえるようにして母親
を家までつれて帰るのを、興業師だといふ
旦那の平川が、きさくに台所下駄をつつか
けて、家までついて来てくれることもある
けれど、だからといってまだ陽のあかる
い表通りで、平川をよびとめていいものか

どうか、秀一、は困つた顔で立ち止つてい
た。そろ／＼と人が歩いてゐる。平川がく
るとしたら、きつと此の露地の角で自動車
をのりすてるのだろうと、通りに面して立
つている肩を、
「おや、お前何してるの？」
露地の方から不意にたたいたのは、母の
小芳だつた。
「お君さんに会わなかつた？」
秀一はほつとする顔で
「むこうの角に立つていふと言つていたん
だけど……」
「そうかい。これかい？」
小芳は早くものみこんで、親指を秀一に
みせたが、ふと秀一の金ボタンの制服に目
がつくと、出した指を間が悪そうにひつこ
めて
「いいよ、いいよ。私が立つていよう。お
君さんも仕様がなね、学生さんをこんな
ことに使つちやあ……いいからお帰えり」
母に言われて秀一は、裏通りから家へ帰
えろ／＼と露地をぬけた。
春舟の横を通る時ふと何気なしに玄関を
みると、猫の額程の植えこみの奥で、男と
女がもつれていた。
「じゃあ、きつとよ」
声一杯に囁をみせてあまえているのは、
春舟のおかみの葛子だつた。
「チュッ」
と、貝が汐をふいたような音がした。
春舟を出て来た男が足早に秀一を追いつ
て行つた。それは平川とは違つてやさ形
の役者の様な男だつた。

「まあ、あやまることなんかないんだよそ

んなことどうでもいゝから、一杯のみなさいよ」

萬子のすすめる盃を前に、秀一が小さく座つていたのはそれから四五日経つた晩だつた。

水天宮の縁日の夜、例によつて酔つた母を迎えに春舟へ行くと、萬子は上機嫌で、小芳をつれて帰えるという彼に

「まあ、もう少し寝かしておけばいいよ」

と、畳の上にだらしなく横になつてゐる小芳をそのまゝに

「秀ちゃんに何かおごろうね」

と、自分で電話をかけて焼そばをとつてくれたりした。

まだ煙草も吸つてみたことのない秀一をあきれる様にわらつて、煙草をすえといひお酒までつけて無理やりのました。

秀一が一二杯で真赤になると

「まあ、何ていい色なんだらう、いつたい体までそんなに赤くなるのかしら？一寸見せてよ」

と、秀一の手を引きよせた。

秀一は思わず立ち上つて

「僕、帰ります」

と、萬子に背を向けた。秀一は萬子の冗談に軽く応ずる術をしらなかつたのだ。

母を起してつれてゆこうとすると、小芳はゆりおとした秀一の胸にぐたつともたれかかつて甘えるしなに

「お母さん」

きびしくよぶと

「ああ、なんだ、お前か……」

あとは口の中でぶつぶつ言いながら、それでも立ち上つてやつと家まで帰つて来た四五日して、珍らしく酒の気のぬけた顔で家へ帰つて来た小芳が、いきなり秀一に

「一寸ここへおすわり」

けわしい声で言つたのだ。

「お前、なにかお萬さんをおこらせてしまつたやうだけれど、何をしたんだい？」

「僕は別に……」

「こんなこと言いたくはないけれど、お前の為にとだけ私が苦勞してゐるかわからないのかい？」

もともと秀一と小芳は母子といつても義理の仲だつた。秀一の父親が手広く商売をやつていた時、小芳を長いこと世話してき

た。芸妓と旦那というだけでは愛情もお互いに持つてゐたのだらう。ひとりつ子の秀一をのこして、不意の災難で夫婦とも

に死んでしまつたあとで、小芳は秀一を自分の子として引きとつた。小芳の生んだ子を今まで夫婦が育ててきたのだともいひ、

いや秀一は本妻の子なのだが小芳が秀一についた財産が欲しかつたのだらうともいつ

た。しかしその財産は、秀一の父親が生きてゐる間の信用貸で保つていたので、おか

しい程のあつけなさで何にも残らなくなつてしまつた。小芳が秀一を引きとつても、

誰も文句のいひようのない状態だつたのだ

「だから僕は中学なんかいかなくてもいいのです。働きます」

「いやだよ、そんなこと。芸者の子だからつて云われたくはないよ。お前は立派に大

学を卒業させてやるよ。だけどね、秀ちゃん、働く気があるんなら、春舟のお萬さんの機嫌をとる位、わけのないことじやないか」

働くといふことは、何も女の機嫌をとるのと一つに論じられることではないと秀一

は思つたが、十才の時から育ててもらつた母親を義理の母と知つていれば、よけいに

口答えは出来なかつた。小芳の苦勞もよくわかつてゐる。

「じやあ、あやまつてきます」

と立上る秀一に

「何といつても春舟は大切なお出先だからね。お萬さんとは幼友達だけれど、こう格

が違つてしまつと、そんなことたてにとつてもいられないし、まあ、あそこを変な風

になると、お母さんは困るんだよ」

その言葉をかみしめて、萬子のさす盃も今日はだまつてうけた。

「本当にきれいだね、秀ちゃん……秀ちゃんのお父さんて人は面くいでね、顔の

きれいな人でなければだめだつたんだよ。小芳さんもきれいだけど。あんたのお母さ

んつて人もきれいな人だつたよ。秀ちゃんに女に生れたらよかつたらうにね」

萬子はそう言つて惚れ惚れと秀一の顔を見ていた。

十六才の少年の肌は、バラの花が陽に當つて花びらの奥の方から光り輝く様に、す

べすべとやわらかく、その上、つゆのしたたりを充分ふくんでゐる様な美しさだつた

「どれ、一寸みせてよ、こんなに手まで真赤じやないの」

萬子は秀一の手をとると、セルの単衣の袖を二の腕までまくつてみた。萬子も大分

酔つてゐるのか目がうるんでゐる。

「ほりもの師はきれいな肌をみるとほりたくなるというけれど、本当だわね、こんな

肌に白粉ぼりをしたらきれいだらうね。ふだんは目立たなくて、お酒に酔つて赤くな

るとばあつと浮き出るほりものがあるんだつて。でも痛いだらうね。どう？こうした

ら痛い？」

萬子は銀のかんざしをぬくと、そのかん

ざしのあしで秀一の腕をつつた。かんざしにおされた所だけ一寸白くなつて、すぐに又、ぼうつとふくらむ様に他の赤さと同じに赤らんでくる。

「若い人の肌つて、こんなにきれいなものかね」

萬子は溜息しながら、なめる様な目で秀一の衿元をみていた。

秀一はのみつけない酒にどきどきと心臓が波打ち出してゐた所を、二の腕をかんざしで突つつかれた痛さをこらえていたので急に胸もとがむうつと息苦しい程になつてきた。

「僕、一寸……」

立上ろうとしたが、足がふらふらする。そのまゝ畳へうつぶせに伏すと、荒い息をついた。

「どうしたのよ。お酒の一杯や二杯で……」

じやあ、一寸休んでいきなさい」

萬子は奥の部屋へ床をとるようにお君に命じた。

「いいえ、僕、帰ります」

秀一は立つて歩こうとするが、まだ息が苦しくて、へたへたと座つてしまつた。

「あんたひとり帰れやしないじやないの。今、人手がなくて送つてもゆけないし

少し寝て、なおつたら帰ればいいのよ。あんまり世話をやかせるものじやないわよ」

秀一は母に云われたことを思い出した。無理に帰れば又萬子の機嫌を悪くするだらう。仕様ことなしに萬子の部屋らしい奥の部屋の、赤い麻の葉模様のちりめんの布団のはしに、そつと座つてうつぶした。

「これのんでみない？少しはよくなるわ」

萬子がお盆に白い錠剤と水をのせて入つ

て来た。

「まだ赤い顔して……。苦しい？」

「いゝえ、もう……」

「帯をといて、らくになつたらいいのよ」

萬子は自分で秀一の帯をとくと、秀一の着物をばつとぬがせた。かたわらに出してある浴衣を着せかけるつもりだつたのだらうが

「あら、体まで桜色して……。怕らしいねこんなきれいな体……」

ビシャツと平手で秀一の背を軽く打つた「まあ、本当に、お水天宮様で売っている切りざんしよりみたいな肌だね。どれ、かじつてやろう」

萬子は冗談の様に秀一の背に唇をつける、歯をたてて、かじるまねをしたが、いきなりチュウツと激しく吸つた。

秀一はおどおどと、萬子のぬがせた着物を自分で着ようとしたが、萬子はその手を押さえて、秀一の着物を部屋すみに放つてしまつた。秀一が仕方なく出されている浴衣に手をのばすと、萬子は前へ廻つて裸体の秀一を、まるで自分の体全体を覆ひにくるよう、しつかり抱きしめて、そのまま布団の上に押し倒した。

男の玩具の様に、可愛がられることだけをしいられて来た萬子の過去の記憶が、逆に秀一にはだらきかけたのかもしれない。

萬子の家で、萬子に玩具にされながら、秀一は声を立てることも出来ない。声をたてれば萬子に恥をかかせることになるだろう。それを秀一は母の為に気づかつた。ただ人形の様に可愛がられ、はては萬子を可愛がることさえ求められた。

「いやだ、いやだ」と思いながら、自分の手をとつて、ああしろ、こうしろという萬

子の云うとおりにすると、萬子はその度に白い獸の様に……。うめくような声をあげる萬子を、ただ浅間しくながめるばかりだつた。女とはこんなに醜いものか！

秀一ははじめて女を知り、そしてただ女を憎悪した。輕蔑した。

三

秀一が奇妙な恋になやむようになったのは、それから間もなくのことだつた。

ある晩、母の用事で春舟へ行くと、台所のわきの茶の間で平川が、退屈そうに顔で手酌で酒をのんでいた。

平川の思いものとあつたことがあつたあとなら氣まづいものがあるはずなのに、何故か秀一は平川に同情の様なものしか感じられなかつた。むしろ、あなたの世話している人は大変な女ですねと云つてみたい程だつた。

「おかみさんは？」

さりげなく聞くと

「客がどうしても家まで送つて来いといつてきかないから行つてくると云つて出て行つた。蘭丸も大変だよ、大森くんだりまで、いくら自動車でもくたびれるからね」

平川は萬子を案じる様に言つた。その平川の人の子さが秀一の胸をきゅつとしめつけた。

何といつて萬子の浮気を平川に告げてやろうかと、秀一の動悸が高くなるのを、平川は知らぬげに

「学校は何年生？」

秀一に聞いた。

「もう学校なんかやめたいんです」

「何故？お母さんが折角苦労していられるのに……」

「僕は女つてものが大嫌になつたのです母に世話になるのも厭なんです」

その秀一の語氣が意外に激しかつたのか

平川は驚いたように

「ハハハハハ。失恋でもしたのかい？」

「やわらかく冗談にまぎらした。」

「いいえ、女くらい醜いものはないと思うのです。女になんか恋するの馬鹿ですよ。」

僕は恋もしない失恋もしません。女なんてけだものですよ」

「大変な鼻息だね」

「そうですよ、女はきれいにお化粧するからきれいにみえるだけなんです。きれいなことありはしない」



「おやおや、萬子がきいたら怒るだろう」
「おかみさんなんか裸になつたら醜いですよ」

「何をいう！」

「そりです、平川さんは何にももしらないんだ。おかみさんは……」

「ばか！」

平川はいきなり秀一の頬を打った。

秀一は打たれた頬を片手で押さえて平川をみつめた。秀一は今まで誰にも打たれた記憶がなかつたのだ。はじめて人に打たれた瞬間に、秀一の胸にこみあげてきたものは、打つた人に対する怒りではなかつた。萬子の悪口を言いかけた彼に、大人げなく手をあげた平川の萬子に対する愛情がうらやましかつた。それと同時に打つてくれた平川に、はじめて親身の人に接したような妙に血の通い合うものを感じた。こみあげてくるものは怒りではなくて、喜びに似た感情の波だつた。彼はその波を消したくなかつた。

「いいえ、そうです。おかみさんは無理やり僕の重責を破つたんです」

わざと毒づく言葉が口に出た。

「なに！」

平川は秀一の袖がみをとつて引き倒した顔を畳にこすりつけられながら、秀一は平川の手の強さを心地よく感じていた。

「ばかもやすみやすみいえ」

「うそじやありません、本当です」

押し伏せられながら、秀一は平川の手の力の加るのを承知しながらもがいてみた。

平川は彼をもう一度なぐつた。

秀一の目から涙が流れて来た。

父親の愛情を知らない秀一は、ふと、男の激しい憤りの中に、今まで知らなかつた

男の愛情の姿をみたように思つたのだ。すると、自分は誰からも、こんな風に愛されなかつたと思つた。そして、涙が出てきたのだ。

秀一が泣き出したので、平川は手をはなした。そして腕ぐみしてじつと考えこんでしまつた。

秀一もそのまゝの姿を少しざり直すと畳から顔をあげず、しばらく泣きつづけていた。

客座敷から聞えてくる三味線の音は賑やかだつたが、その部屋だけしいんとして、女中達も知つてか知らないでか、入つてこようともしなかつた。

しばらくして平川は、腕ぐみした手をほどくと静かに言つた。

「君をなぐつたりしたのは僕が悪かつたかもしれない。どうも、非は君にはなくて萬子にあるらしいように思われてきた。僕はもう何にも云わない。君が何か言うことがあるなら静かに聞こう。何か言いたいことがあるんじゃないか？」

秀一はしばらくだまつていた。それから思いつめたように言つた。

「僕、役者になれないでしょうか？」

「え？」

平川の驚くのも無理はない。あまりに唐突な秀一の言葉だつた。しかし彼はつづけた。

「僕は小さい時に父親が芝居が好きでよくつれていつもいました。今の母の所へくるまで、父の趣味でおどりをならわされもしました。けれどこちらへ来て、母は芸者の子と言われるのを何よりいやがつて、おどりもやめさせて、勉強ばかりしいられきたのです。でも、此の頃になつて、女形

が何故本当の女より美しいか僕にはわかるのです。僕も女形になりたいのです。美しい女になりたい……。本当の女がどんなきれいに装はつたつて、中味はみんなけだものでしょう。それなのに、人形町を歩くと季節季節の色彩で、女の装身具が美しく並んでいます。実に美しいと思います。僕はあれを醜い女の体につけさせるより僕自身がつけてみたいんです。僕は役者になりたい。平川さんはその関係の方だと聞いています。僕を役者にして下さい。お願いです」

平川はだまつて上気した秀一の美しい頬をみていた。

「この世界は門ばつがやかましくて、立派な役者になるのはなかなかむづかしいのだが、いい女形は少い。おどりの地があるのなら今からやつてやれないこともないが……」

「出来るでしょうか？」

「しかし、小芳さんが何というか……」

「平川さんさえ承知して下さるのなら、母が何と言おうと、僕は家出でも何でもします。さつき平川さんに頬を打たれた時、僕嬉しかつたんです。あんな気持になつたのはじめてです。何という気持なのか……」

男が男に惚れる。そんなこともあつていいのではないか。

女形になりたいと思つたのは秀一の悲願ともいうべきだろうが、男の身で男を慕う気持のわいてきたのは、その夜のことだつた。

四

門ばつのやかましい世界だと平川が言つ

たのが、秀一によりやくわかつてくる頃には、秀一はもう男の体で男を満足させることを知つてしまつた。いい役がつかなくとも、収入が少くても、鏡の中で自分の顔がだんだん美しい女になつてゆく喜びは、麻薬の様に秀一を魅了してはなさなかつた。しかし秀一には、死の影がついてまわる星のようなものがあるのが、頼りにしていた平川も思わぬことで死んでしまつた。彼のそうした星が、彼自身の頭においかぶさつて来たのもそんな遠いさきではなかつたが、それはあとのことにしよう。

平川を失つて、秀一は歌舞伎から新派へ新派から喜劇へと、てんととうつていつたが、女形という職業からはなれることは出来なかつた。

秀一が有村源を知つたのは、召集されていつた戦地でだつた。秀一のような男まで、戦争は武器をとらせたが、女のいない戦地で、立派に女のかわりのつとまるということとで彼はわりにらくに終戦を迎えることが出来た。

終戦と同時に有村は故郷にかえつて、前から約束のあつた村の娘の所へ入婿に入つたが、秀一の方では有村を忘れることが出来なかつた。有村は平川をもう一つ若くしたような男で、軍服がよく似合つた。

帰還して半年目に、秀一は有村を彼の故郷である信州までたづねて行つたのは、たまたま甲府まで巡業に出ることが出来たからだ。

「男のなりはしてるだが、あの人は女づらか」

有村の新妻の順子は、秀一に嫉妬した。「ばかだなあ、戦友だつて云つたじやないか」

有村は戦地の習慣を内地にまでもちこむ気持はなかつた。しかしなまじ女学校を出て
いるだけに野良で話させれる下司な話から
も遠のけられ、何にも知らない少女の様な
順子にあきたらないものを感じてはいた。
厭から二里もある道をわざわざたづねて来
てくれたかと思うと、そつけない顔で追いか
えすことは出来ない。

「女づら？」

と、めずらしく目に角たてゝいる順子が
かしくもあつて

「じゃあ、一緒に風呂へ入るから、女かど
うかのぞいてみるよ」

妻をからかつた。

田舎の風呂は焚き口から丸みえに、風呂
へ入る姿がみえる。

順子はおそろおそろ、半分は恥しさもあ
つて、薪を入れるふりをして秀一の裸体を
ぬすみみた。かんじんの所は手拭でかくし
ているが、乳のもりあがりもない平べつた

い胸は、どう嫉妬のやきようもない男の体
だつた。

順子は急に疑つたことを恥しく思つた。

有村の何かわけのあつた人が男装してたず
ねて来たのかと思つて、いゝ顔をしなかつ
たことを秀一に落まなく思つた。そしてそ
れは夫への不信のわびにもなると、秀一の
寝床と、夫の寝床と並べてしいた。

「はるか振だでゆつくりとしやべりながら
寝ておくれ」

順子は秀一に急に笑顔を作つていつた。
有村が客は客だからひとりゆつくり寝て
もらう方がいいと云つてもきかなかつた。

順子は二里の道をたづねて来た人に、い
きなりから女と疑つて、お茶一つ出すにも
白々しい顔をしていたとかえしを何とか
してしたいと思つたのだ。男とわかつてみ
れば、その華奢な体がよけいに気の毒さを
ますばかりだつた。まさかやきもちという



ものは自分と同
じ女にばかりや
くものではない
ということ順
子は気づきよう
もなかつた。
その夜、妻の
嫉妬をどうにか
ことなく押さえ
ることが出来た
有村は、秀一の
嫉妬になやまさ
れなければなら
なかつた。
ふとんを並べ
て寝につくと、
秀一は自分のふ

とんを空にして、有村の横へすべりこんだ
「随分薄情ね」

秀一は有村を責めた。

「客は客だからひとりで寝てもらう方がい
いなんて、どの口ついで言えるのかしら？
私、奥さんによつぽど正直に言つてやろう
かと思つた」

「困るよ、そんなこと云われちゃあ……」

「うゝん、あんたが私を愛してくれれば、
何にも言やしないわ」

「愛せと云つたつて……」

「出来ないというの？もう私を愛してくれ
ないの？こんな田舎までどんな思いでたず
ねて来たか、一寸も察してくれられないの
？」

秀一は泣き出した。

「泣かなくなつていいじゃないか、聞える
よ」

「聞えたつていゝわ」

秀一は泣き声を高まらせる。

「ばかッ」

有村は、女を相手にするうちに、秀一の
顔を胸の中に抱きよせて、泣き声が外へも
れないように抱きしめてやらなければなら
なかつた。

奇妙な時間が過ぎていつた。そして、し
のび泣くような声を、齒の間に押しこらさ
なければならぬのは、有村自身に變つて
いつたのだ。

五

秀一が東京へ帰つてしまつてから、有村
と妻との間がしつくりいなくなつてしま
つた。秀一から女の書くような恋文が度々
来たが、有村はそれを妻にかくしていた。
その一通がある日妻にみつかつたのだ。妻

の順子におぼろ気ながら有村と秀一のおか
しな關係がわかつた時、順子にはどう考え
ても、男同志のそうした行為が理解出来な
かつた。ただ妙に、夫の体が汚れているよ
うな、そして引いては自分の体も汚れてい
るような、厭な吐氣の様な気持だけ残つた
夫婦仲がしつくりゆかなかつたのも無理は
なかつた。

順子が有村から去つたのか、有村が順子
をすてたのか、東京へ行つて自分の将来の
仕事をみつめようと、有村が自分自身に言
厭して上京して来た時、秀一はとび立つ思
いで同性の恋人を迎えた。しかし急には職
のない有村と二人でくらすゑには下積みの
役者の給料では足りなかつた。

秀一は酒場の女給になつたのだ。

病気のせいか酒でつぶれたのか、酒場の
女給には、しやがれた声を出す女がよくあ
つた。秀一の男の声もそれ程耳ざわりでは
なかつたのだらうし、殊更暗くした場末の
酒場の灯の下では、秀一の美しさは本當の
女たちからさえわたまれる程だつた。

軍需も買つた、鏡台も買つた。秀一は有
村と二人の生活を、新世帯の花嫁のやうに
たのしんでいた。しかしそうしていても有
村が、いつか自分から離れてゆくかと不安
に思う日もあつた。

その日もつまらないことで喧嘩した。
「今頃信州は一ト月おくれのお節句で、柏
餅をついているだらう。味噌を煮るのはす
んだかな、味噌玉の匂いというのは妙にあ
まくて、東京風に云やあ官能を刺戟する
ね」

何の気なしに言つた有村の言葉が秀一に
強くひいた。
「田舎が忘れられないんですね？」



きの切符さえ買つてゆけば帰えりは何とかなるあてもあるし、おまけにお土産つきだ。売られた喧嘩をかうよりは、買つたふりで手ぎわよくはづす方がいい位の智慧がわかない有村ではなかつた。

しかし秀一

秀一はとげとげしく言つた。
「あゝ、忘れられないね、誰か故郷を思わざるつて、唄まであるじやないか」
「故郷のある人はいゝですわ、私なんか戦災で焼けて、かえつてさつぱりしたと思うような故郷ですもの。そんなに田舎がよかつたらお帰えりなさいよ」
「帰つた方がいいだろう、お前は又好きな役者になれるからね」
「私がいつその方がいいと云いました？」
「言わなくなつてわかつている」
「わかつているなら勝手にしたらいいですよ」

男同志でも夫婦の様な生活をしていると夫婦の様な痴話喧嘩をするものらしい。
有村はトランク一つさげて出て行つた。
これつきり帰えらないつもりではない。急に思い出したようになつた故郷へ行つて、お米か餅を仕入れてこよう、往

はトランクを持つて出て行つた有村の後姿にうちのめされた。いつもは男の身で男を慕う矛盾をそう深くは考えなくなつてゐるのだが、有村と小さなことでいさかると、急に自分がはじめにみえてくるのだつた。
白粉をつけ、紅をさしても心が浮かなかつた。自分の身がうらめしい。店の裏手の女給達の仕度部屋でぼんやり考えこんでいた。その時、店にいたひとりの女給が入つてくるなり
「カモよ」
片目をつぶつて笑いながら言つたものだつた。

「大ガモ？小ガモ？」
他の女達はバフの手も休めずに云う。
「可愛らしいカモよ、お金もつてゐるらしいからたかろうよ」
「店で使わせるの嬉しいな、私此頃しけるのよ、大切な貞操売つちやおうかな」

「あんたが大切な貞操をとりあげるんだろ、あの子の……」
「あの子の、そんな若い子？」
「十六七だろうね、まだ案外知らないかもしれないよ」

「よし、教えてやろう」
そんな女達の会話を秀一は、同じ様に顔に白粉をたたきながら聞いていたが、すつと立つて店へ出て行つた。

中学生の様な少年が、のどへは通らない煙草の吸い方で、わざと少しでも大人にみせようとするように、赤丸を他の女給達にすすめたりしていた。

秀一は少年の横へ腰をかけると、自分の腰をビタツと相手の腰につけた。

「私にものませてね」

少年は大笑にうなづいた。

秀一はお酒にむせぶふりをして、片手を少年の膝へおき、片手で自分の口をハンカチで押さえた。「コンコンコン」と咳に体を渡打たせながら、少年の膝においた手を静かに動かしてゆく。まるで舞台上で女女形が泣き伏す時の要領で、秀一が少年の膝に顔をつけた時、秀一の手は少年の男であることを手の平で感じていた。

番の女給を注文に立たせて、ひとりを煙草を買いに立たせると、卓は少年と秀一の二人きりだ。

「ねえ、ここでお金を使つても、高いばかりで損よ、いいかげんにきりあげて外へ出て待つていらつしやい。私がいい所へつれていつてあげるわ」

早口の会話はすぐすんだ。誰も気がつかない。

女達はいつたん店へくると、途中で帰えるのはいけないことになつてゐるのだが、

仮病はバーテンへの鼻薬でこしらえあげられる。

そうして秀一は少年を自分のアパートへつれて帰つたのだ。

少年の名は中野二郎と云つた。

「もう少しのみましやうよ」

秀一はまめまめしく朱塗りの茶ぶだいの上にコップや箸をそろえて言つた。

「うん」

「買つてくるわ。お金ちやうだい」

二郎は千円札を出した。

秀一はそれを持つて出て行つたが、ビールを二本買つて来た。

「おつりもらつておいていゝ？」

「ああ」

と答えながら、二郎はどきどきしてきたおつりは七百円ぐらいだろうと素早く計算して、そんな大金を簡単に、もらつておいていゝ？と聞くのはつまりそれで今晩泊めてくれるというわけだろうし、「ああ」と答えたのは淫売を承知したことになるだろう。

「さあ、おのみなさいよ」

秀一は二郎のコップをみたした。

「ねえ、こつちへおいでよ」

二郎は秀一を横によんだ。

「接吻してもいいだろう？」

二郎は秀一を抱きよせた。こんな場合に

どうしたらいいのか、また二郎はそれをすらすらとはこんでいく手順になれていなかった。抱きよせながら、二郎の手は秀一の乳にさわつた。そうするものだとはいふ友から聞いていた。乳当てでふくらましてゐる秀一の乳は、着物の上からではふくよかな手ざわりに二郎の官能をゆすぶるばかりだつた。誰に教わらなくて、そうした官能が

次の手順を覚えてくれる。

しかし、二郎はそこに自分の抱いている女が女の体をもつていないことを発見した時、息がとまる程に驚いた。まるで暗闇で不意に化物が出て来たような驚きだった。それは本能的な恐怖心につながった。二郎の手が自分のポケットの中でナイフを握りしめたのは単に子供っぽい恐怖心からだったのだ。

「ばかね」

秀一は静かに笑って言った。

「何をそんなにびつくりしているの？あんなはね、女に玩具にされるところだったのよ。女の体なんてけだものみたいでいやらしいだけよ。あんなの持つているお金をみんな使わせて、そしていやらしいことするだけなのよ。私、あなたが可哀想だったから、ここへつれて来てあげたのよ」

二郎は秀一の落付きはらつていいる様子がしやくにさわつて来た。しかしそれは自分の取乱し方が大げさすぎたようで、はじめから秀一を男と見破らなかつた自分への腹立ちだったのだ。そもそも酒場へ入る時から、十六才という自分の年一杯に背のびして、肩いからせて大人ぶつていたのだ。それなのに、秀一が女ではないと知つた瞬間の驚愕は、十六才どころか、もつと子供にかえつた驚きようだった。二郎はそれが急に恥しくなつたのだ。女ではない相手の男に、そんな子供っぽい自分を見せてしまつたことも、相手を男とわかつてみればよい恥しい。そうした恥しさは相手への憎悪になつてはねつかえつていくものだった。「何云つてやがるんだ。女のふりしやがつて、金かえせよ」

急に肩いからせて不良少年ぶつてみるの

も、二郎が不良少年になりきつていなかつたからなのだ。

「お金？ああおつりのこと？だつてあんなはあの店であのまゝのんだりくつたりした

ら、すつからかんにされてしまうのよ、ビル二本買つたんだし、こんなお部屋でゆつくりのめるなんて、チップともで千円なら高くはないはずよ、煙草だつて出してあ

傑作新作漫才

男性ストリップ

○ミスター・ラヴ

△ミスター・シーン

○「暑いですね」

△「いや、僕はガタ／＼ぶるいですわ」

○「え？君マラリヤと違るか」

△「有難う、マラリヤの方は卒業しました」

○「じゃ何故寒いんだ」

△「差押えで家屋敷からサル又まで持つてかれて、今製氷会社の倉庫借りてます」

○「それでガタ／＼ぶるいか、いやごもつとも」

△「毎晩水を抱いて寝てますわ」

○「そんなあはな」

△「一度僕んそこへ来給え、花水のかわりに人間水が出来ちやうよ」

○「氷にされてたまるか。時に君はストリップ見たことありますか」

女性をハダカにして、男性の玩弄するストリップ・ショーは

満天下の女性を侮辱するものである。すべからく男女同權の現代に於ては、男性をもハダカにして女性群の展覽に供すべし。

あゝ、世はまさにストリップ時代。

△「え？ストリップ？それ、なんのこと？」

○「ストリップ知らないのか、あきれたね君はそれでも現代人か。」

△「いや、僕は別に、大臣ではありませんん」

○「誰が君は大臣だつと言つた」

△「それでも今、たしかに現大臣かと君は聞き給うた」

○「大臣じゃないよ。今の世の中の空気を吸つてるんかと聞いたんだよ」

△「はあ、それなら別に税金は出してませんが朝夕吸わして貰つています」

○「益々変な男だな。ストリップとは裸踊りなんだよ」

△「あゝそれなら見たことはありませんが、演つたことはありません」

○「ギョッ、君が演つたか？」

△「うん勿論、男子の一言金鉄の如し」

○「いやな所へ力を入れるな。それで何時？何処で？」

△「まあそろり慌て給う、慌てゝニセ札を掴んだ人もある」

○「探検心の旺盛さからだ。許せ」

△「まるで戯れだな。ではそろ／＼とプロローグから始めようか」

○「えらい言葉を知つてゐるな」

△「さる所に全国婦人同盟の總會があつてね」

○「三人寄れば変な女族の……」

△「女賊みたいに言うな、そのスローガンがふるつてゐる」

○「氷屋の倉庫が会場か」

△「ふるうが違ふよ、裸踊りは男子の専

わ

「けち？何がけちだ。詐欺じやないか」
「さぎ？私あんたに女の体もつてるつて云つた？いいえ、私、あんたと寝るつて約束した？なにさ、私が好意でしてやつたことを……。女つてどんなひどいことするか知ってるの？あんた、何もしりやしないじやないの、えらそうなことというもんじやないわよ」
此の言葉は双物の様にぐさつと二郎の心を傷つけた。

「なにを！」

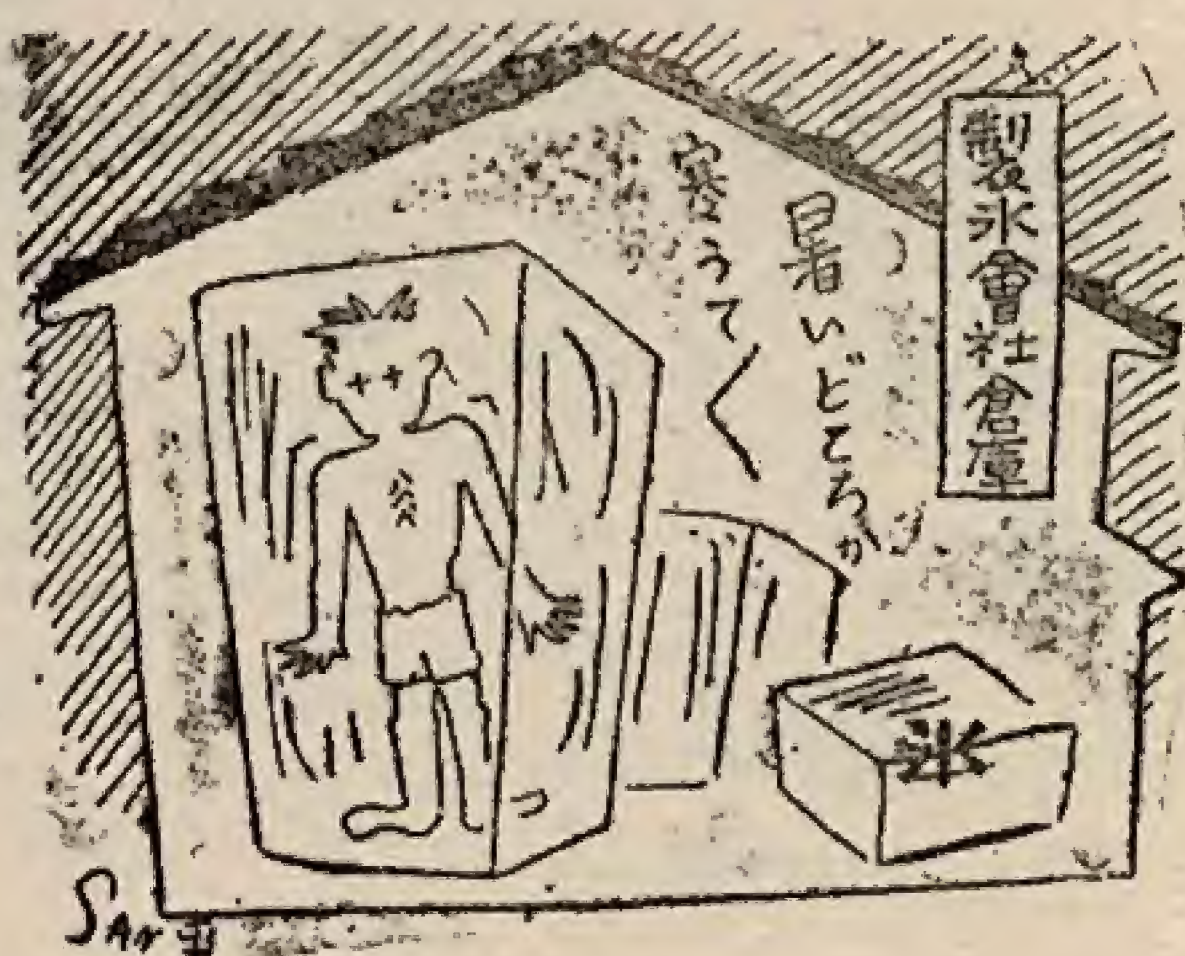
次の瞬間に二郎の手は無意識にポケットからナイフをひき出して、秀一の横腹を思いきりの力でついていた。

「ウワァー！」

という秀一の悲鳴は、二郎の頭を更にとりのぼさせるに役立ただけだった。生れてから今までに聞いたこともないそうした悲鳴は、生れない前からもつていのかもしれない人間の、自分を守ろうとする本能をかきたてるばかりなのだ。ナイフは一とつきでしまわれずに、もう一とつき、もう一とつき、秀一の悲鳴の度に、秀一の血に濡れた。

「有村さん！」

秀一は恋しい男の名を呼んだ。
夫の名をさけぶ妻の声に似ていた。
十六才で女の為に人生をふみあやまつた秀一は、こうして十六才の少年に終止をうたれたのだ。私は秀一を殺した十六才の少年の人生が、再びふみあやまらないように祈っている。（おわり）



用事楽機関にあらず——

○「ひがんでるんだな」

△「すべからく男女同権の世の中、我等女性にも裸踊りを与えよ——アーメン」

○「キリストも助からないね」

△「満場一致で男の裸踊りを観賞することに決定した」

○「それで君が出演したの？」

△「異議なし。とにかく条件の要求が凄いい」

○「色が黒くて黧にらみで、類人猿そっくりな骨体美の……」

△「なぐるぜ、全然反対だ、色が白くて上原謙か長谷川一夫、しかして筋肉隆々たる男性美の極致、といえは僕をおいて他に無い」

○「ウブツ、まあいゝや、それでその時の状態を発表してチョウダイよ」

△「上体は勿論下体まで丸裸——先づ僕が五色のライトを浴びてステージへ現れた」

○「とたんにボックスから、しめやかな楽の音……」

△「ナンマイダ……バカにするな、しめやかなって言うから念仏が出るじやないか」

○「ホットケ（仏）ほつとけ」

△「外に言い方はないか」

○「華かなるブラスバンド、流れるような濡れるような歌声——」

△「ヘチイチイ（乳）ハツバ（木の葉）チイ、ハツバ

ストリップ学校の先生は

お尻をふり／＼チイハツバ……」

○「歌に合わせて踊り乍ら、一枚々々脱いでゆく」

△「脱ぐのは馴れてるから上手いものだけのこと生活だから……」

○「最後は全ストを演じたの？」

△「モツチの論、全身に糸纏わず、なよ／＼とした和らい、花ならば正に散らんとする風情に、満場たゞコーヨツとして……」

○「ソットーしたのも居るだろう」

△「そりや僕の一点だけでも、感傷の極みソットーする価値は充分にある」

○「偉大なる造化の芸術だからね」

△「躍動する筋肉の素晴らしさ」

○「上げる毛ずねのグロツぽさ」

△「ヤンヤンヤの大拍手」

○「てんやわんやの阿鼻叫喚」

△「僕が最後の一枚を脱ぐと客席の女性軍将棋倒しにソットー」

○「大量殺人未遂罪を構成するね」

△「黄色い声、赤い声、桃色の声のソプラノ狂奏曲——」

○「素晴らしい人気だね」

△「中に会長とおぼしき一人の勇敢なる女性がステージの僕の傍へ走り寄つた——」

○「なよ／＼とした花ならば散らん風情に魅せられてコーフンしたんだね」

△「僕の肉体美にどうしても触りたかつたんだよ」

○「変態？」

△「いや、みる目うるわしき未婚の女性で、感極まつて涙ながらに僕の手を執り……」

○「結婚のプロポーズをしたんだね」

△「いや、手錠を嵌めた」

（中村米蔵作）



日本と朝鮮人

続編 日鮮混血児



木之下 白蘭

美濃村 晃 電

第一章 京城の黄昏

一、肉体の饗宴

美しい京城の夕穹だつた。だが映子にはそんな風景に詩情を誘われるような、甘い感傷に耽つている心のゆとりなんてないのだつた。

爆弾事件のため刑罰は受けたものの、その罪は、長い歳月の、刑務所に於ける苦役のうちに充分に洗い淨め、償いは果して帰つてきた筈なのである。それなのに警察当局

局は露程もそれを認めて呉れぬらしいのだ。映子としては遠にかなぐり捨て去つた思想であつたが、警察では映子が何時また共産主義の旗を振りかざし、民族独立の万歳を叫び、爆弾を投げつけるかと、前科を決して帳消しにして呉れないのである。彼女を甲種要視察人に登録し、特高警察は洞々と絶えまなくその周辺を監視警戒し、穿さくし、隣時と雖も安らかな生活の営みを許して呉れそうにもなかつた。身には眼に見えぬ冷たい鉄の鎖につながれているのである。彼女は自分の室に閉じこもつてばかりいてもう店頭にも減多に出ていけなくなつた。

或る日、室に入つてゆくと、彼女は桃色の薄い絹の蚊帳を吊して、真白いワンピースにくるんだ身体を静かに横たえて居た。「どうしたの、メランコリアさん、気分でも悪いの」

私は蚊帳の裾をかき開いて言つた。あわてゝ牀の上に起き上ると、ちよつと髪にさわつて映子は顔を赤らめた。

「爆弾を投げる時の勇気どうしたの？」

私は冗談交りに言つた。そして、何をよくよ沈んでいるのか、元氣を出さなきやア駄目じやないか、負けてはいけない。奮い立つんだ、二人の愛情を結束して負ける

ものは絶対に無いのだ。二人は解放されているのじやないか……と激越な口調で彼女を励ました。

「貴方にご迷惑をお掛けする許りですね」

映子は静かな声で涙ぐみながら言つた。

「何を水臭いことを言うのだ。馬鹿だな、そんなことを考へたりして」

「でももう、映子は何も彼も駄目なような氣がするんですの。私には絶えず警察の眼が光つています。自由も奪われているのです。所詮私は悪い朝鮮人に過ぎないのですわ」

何かに強く抵抗するように、彼女はそんなことを言う。日鮮混血児——それも映子の頭から払拭することの出来ない観念であつた。彼女の悲しい煩悶の一因は矢張りそこにもある風だつた。

「何を言うのだ。立派な日本人じやないか又、かりに君が朝鮮人だとして、一体そんな問題が二人の愛情に何のかゝり合ひがあるというんだ。支那人だろりとギアナの黒ん坊だろりと、僕は君がなくては生きてゆけないのだよ。僕のこの氣持が分らないの」

「それは私だつて……貴方がいて下さらなければ一日だつて生きてゆけませんわ」

「ね、映子は或る作家の言つた——最も美しい石竹の色は確かに、毒の舌の色である——という言葉を知らないかね。私の発見した美しさだつて世間の人の想像できない処にあつた次第さ。君の美しさはあの手製爆弾の炸裂した瞬間にあつた。私はあの時君のほんとうの美しさを発見したのだ。それは僕でなければ世間の平凡な人間達には到底分らないことなんだ。僕は幸福だよ。ほ

んとうの美しさをもつ人間なんてものは、
そうさらに転がっているものではないから
」

「そう言つて下さるのは玻玖さん一人です
嘘でもうれしいわ」

涙の溜つた眼がしらに、巧みな彫物み
いな白い指を当てた。私はそんな映子を見
ると、おだやかならぬ昂奮を覚えた。ワン
ピースからむき出ししている素裸の腕を捉え
瞬間身を引こうとする映子を、強い力で両
腕の中に抱き寄せた。

薄い地の布がはり裂けはしないかと思わ
れる程の突起を持つた胸が砂囊のような重
量感を持つている。鼻を襲う、何か一種の
美しい、鬱みみたいなむせかおる体臭があつ
た。

美しい果物をもぎとるように、ふつくら
と肉の厚いおとがいに一方の掌を当て静か
に仰向けに持ち上げると、切なく身をよじ
らせる映子の、僅に開いて皓い歯を覗かせ
ている煽情的な唇へ、静かに強く、私は唇
を重ねて押しつけた。可成り長い間、私は
その唇を放さなかつた。だが、一旦放した
かと思ふと、私はその赤い虫みみたいな唇に
二度も三度もくいちぎるような、激しい火
の接吻を荒々しく繰り返した。私の情炎は
その度毎に、尙おのゝく如く身をよじらせ
る初らしい姿に、愈々煽られ何時迄も消え
そうになかつた。

春情を孕んだ絹蚊帳の薄い地を透す桃色
の空気が、ほのかに色めいて揺れた。激し
い衝撃であつたらしい。

とり乱した映子は、情感を喪つた人形の
ように、私の膝に突つ伏したまゝまいつま
でも放れなかつた――。

処が、この夢のような生活は物の二十日

も続かなかつた。

日本の敗戦の日が訪れたのだ。

内地では敵を九州近海に誘き寄せ、一挙
に之を殲滅する作戦をとつて……と、
いつた断末魔にあつたらしいが、京城には
まだ内地の都市みたいな空襲はなかつた。
B29の爆音が京城の空を脅かしたのは僅
かに二回だけに過ぎなかつた。銀製の蜻蛉
みたいに翼を輝かせながら空の果を過ぎた
B29と、暗い夜空を轟々とかすめ去つた
B29……私達の知つてゐるのはそれだけ
だつた。焼夷弾も、爆弾も落ちてはこなか
つたのだ。

私達は敗戦を想像したことが無かつた。
隣保班長から十四日の黄昏、明日の昼には
天皇陛下の重大放送があるから……とふれ
てきた。私は天皇の声を聞くためにラヂオ
の前に坐つたのであつた。それが敗戦の放
送であつた。最初は仲々信じられなかつた
だが、日本敗戦の報はまぎれなく、その
電波は世界民族の耳朵を叩いたのだ。ポ
ツダム冷戦なる宣言は、朝鮮を長年に亘
る桎梏の生活から解放した。

軍国主義の大きな崩壊だ。憲兵の弾壓政
治――それに代つた一視同仁の警察政治――
共に破滅した。朝鮮は独立する。植民地
化していた韓国に主権の回復ができる。圧
政よりの解放だ。万歳々々々々。出征兵士
達へ送つた万歳のどよめきは1944年8
月15日……一瞬にして独立朝鮮を穿く狂
喜乱舞の怒号叫喚に一変したのだ。

「貴方、街は万歳騒ぎで大変なんですつて
……」

洗濯をしていた映子が、手を前掲けで拭
きながら、裏二階から暗然と街を眺めてい
る私のもとへ、心配そうにかけ登つてきた

昂奮した人々は、街を走る電車の上で万
歳々々と絶叫し、日本人達はその電車に乗
ることができなかつた。今や京城は昂奮の
ルツボであつた。

警察署の書類を焼却する火が夜を徹し、
空を赤く焦した。映子は私の手をぐつと握
つたまんま、二階の窓からじつとその煙の
空を覗めて涙を放さなかつた。

「君の名も載つていた要親察人名簿もあの
中で燃えているのだよ。共産主義者の烙印
も、爆弾の刻印も煙になつちまうんだね。
何も彼も解放だ……」

「……」

「おや、何を考えているの？」

「だつて私分らないんです。ね、貴郎教え
て頂戴。お父さまの国が敗れて、お母さま
の国に夜明けが訪れてくるなんて……悲劇
だら……ね、そんな時、その子供は一体ど
うしたら宜いんですの……？そんな可哀想
な子供つて、私を置いて外にあるのか知ら
し――」

街の昂奮も、独立万歳の叫びも混血児の
映子にとつて歡喜の対象ではなかつたらし
い。

京城には日本の兵隊達がいて、田舎の噂
程治安は乱れてはいなかつた。

八月の下旬にはもう中道政治の代表者で
ある呂運亨を中心として臨時政府が組織さ
れた。占領の米軍が進駐してきた。それと
同時に真偽不明の種々のデマが伝わつてき
た。

財産没収の話、一人千円だけしか持つて
帰れない話、朝鮮脱出の話、焼打ちの話、
虐殺された話、暴行された話……何れもが
日本人達の胸を暗くすることばかりであつ
た。

素英母娘が家財を処理して日本に行く気
なら、万難を排してでもそれを遂行せねば
ならぬ。だが、素英は死んでも京城の街を
放れたくないと言つてゐるし、映子だけを
連れて帰ることも不可能な事柄であつた。
とすれば、私が踏み留まるしか無いのであ
る。京城で講和を待つ――私の決意とは凡
そ、そんなものであつたのだ。

帰つてみると、店舗には素英も、映子の
姿も見えなかつた。不用心に……何をして
いるのだらう……と襖を開くと、金銀の鏝
をびかびか光らしている朝鮮軍需を二俵並
べた素英の室に、母娘は何か知らず、異様な
空気を孕ませて黙然と声なく坐つていた。
私を振り向いた眼の色がどうも変であつた
「どうかしたの？顔色が悪いじゃないか」

（日鮮混血児・前篇梗概）

京城の仏花女学生素映子は、日本人春
田事務官と妓生だつた母素英との間に生
れた美貌の日鮮混血児だつた。

母を捨て去つた父に対する反感から共
産党の反戦運動に加わつて、警察の門前
で手製の爆弾を投じた程の彼女であつた
が、はからずも反戦ビラを撒こうとして
逮捕された日本人警官玻玖の職務を授け
らつた愛情によつて、再起の念を強くす
るのであつた。一方玻玖の下宿する豪商
岡家の令嬢紅貴はひそかに愛する日本人
玻玖が爆弾女学生の映子を愛しているこ
とを知つて失望のあまり自殺しようとし
る。

四年の刑期を早い目に映子が出獄した
頃は、すでに大東亜戦争も終りに近づい
ていた。母素英の経営する化粧品店で映
子を迎えた玻玖。動乱朝鮮を舞台とした
国際愛と民族への郷愁に悩む、宿命の日
鮮混血児――。

不安になつて、水のように澄んだ顔をして、映子に声をかけた。ふだん雪の白さを持つてゐる点と、珊瑚のような柔かい光を放つ眼と、幾らか厚くふくらんだ唇を持つてゐる点とで、知識的表情を喪つてゐる映子の鋭利な感情に乏しいすぐれた美貌が今は白磁の陶器の如く硬ばつてゐる。黙つてゐた。

「変だなア。お母さん一体どうしたんです」

微笑しながら傍に坐ると、映子の瞳に青光石のかけらみたい、妖しい光がほとぼしり、烈しい呼吸に肩が波をうつた。

「貴郎は私を捨て、日本へお帰りになるのでしよう！」

私は思いがけない言葉と、異常な映子の興奮にびつくりし、思わず、

「馬鹿！何を言うんだ。日本へ帰る時は皆一緒だと言つてゐるじゃないか」

すると横から注意深く見透すように覗めていた素英が、

「でも先刻お隣の奥さんが見えた時、そんなことを言つてゐたんですよ。機帆船で脱出するんだが、玻玖さんが団長になるんだつて」

「冗談じゃありませんよ。僕は何も知らなかつたんですよ。今相談を受けて初めてそんな計画があることを知つた位じゃありませんか。隣のマダムの言葉なんか信じないで下さいよ」

「それであなたはどろ、ご返事なすつたの？」

「誰が加担するもんですか。第一貴方達を捨て、帰るなんて！死んだつてできるもんですか。映子までがそう思うなんて情ないね」

涙もろい映子はもう眼頭に指先を当て、涙を押えてゐた。然しこんなことで映子の不安が雲散霧消した訳ではなかつた。私の確固不動の信念にかゝわらず、周囲の空気に、種々の流言浮説が絶えず、彼女を脅かしてゐる風であつた。

雨にそば濡れてゐる百合合のようにつまましい映子のどこにひそんでゐるのか、激しい情熱を見せて、彼女はいつ時も私を放そうとはしなかつた。

「どんなことがあつても捨てないと誓つて……ね、誓つて頂戴」

酔いしれたように、ひと晩のうちに二度も三度もそんなことを繰り返して、私を寝させなかつた。

ところが、こうしてやつと心の平静を取り戻した私を、驚かしたものがあつた。それは思いがけない紅貴からの電話だつた。

二、肉魔の囁やき

「玻玖さん、お電話ですよ。お名前仰らないですけど女のかたですよ」

素英に、店の方から声をかけられて、女つて誰だろかと不審しく思いながら、化粧品の一ぱい並んだ陳列棚の横にある電話の受話機をとつた。もしもし……と声をかけると、

「あ、玻玖さんですか。私紅貴」
思いがけない紅貴の声に私は愕然とつた。

「突然でお驚きになつたでしょう。お元気なんですつてね」

「うむ、まアね」

「でも大変な事になつちまつたんですのね随分ご心配なすつたでしょう。実はもつと

早くお電話する筈だつたのですけれど、私の方も終戦の頃からずつと父が悪くて、ひと月程前倒々駄目になつちまつたんですのよ。それで葬式やら何やらでお電話できなかったんですの。……お別れしてからもう随分たつてゐるでしょう。私……お会いしたくつて……種々とお話したいことがあ

るんです。ですから今晚の八時頃、黄金町のサロン・ユリーカへ来て頂けませんか知ら……」

る風であつた。時々穿鑿的なその眼が私を照らす如く、さつと撫でるのだ。

「何つ、お父様が亡くなられたんだつて……？ほう、それはどうも……兎角行く」

「鐘路通りの関家の紅貴からでした。関光植さんが死んだんだそうです」

と、弁解するように、私は聞かれもしないのにそう素英に教えた。

高い三階の上に、研ぎ澄した円盤みたいな澄明な秋の月が登つてゐた。サロン・ユリーカは黄金町の中心地帯にあるその三階の隣りにあつた。賑やかな電車通りから薄暗い露路に折れると、じき、白々と浮いた化粧煉瓦張りの建物があり「ユリーカ」と、金色にローマ字で書いた結晶硝子が、内側



の仄青い灯影を映し、青光石をちりばめたように光っている。

艶かしい建物だ。扉を押すと、淡青の灯影が霧のように天井の円蓋から降つて、広間は湖底のように闇んでいる。その中にむせている女達の体臭と、煙草、果物、酒との合成した匂は鼻感で、寒素英の化粧品店の店頭匂と交りなかつた。

朝鮮の青年達が二三人、隅の客席で女達と戯れ合つていた。奥から煙草を横啜えにした、草色のイヴニング・ドレスの女給が出て来。朝鮮語で、

「いらつしやい」

と、言つたが、端々みたいな顔に、柘榴の葩に似た唇をくつつけている。彫刻のように彫の深い印象的な顔の持主であつた。

「関紅貴つて女来てないか知ら」

「あ、ご令嬢ね。見えてるわ。御存じ？」

「あゝ。知り合ひだよ。一寸呼んで貰えないかね」

私は百合樹の葉蔭に空いた席に腰を下ろしながら、そう頼んだ。

「O・K」

割合に人のよさそうなその女が立去つたかと思ふと、奥から間もなく純白の洋装の紅貴が出てきた。乳房の間の深い凹みを僅かに覗かしているむき出しの素裸の胸を、幾月ぶりかと私は眼も眩む思いで見た。

私は、紅貴に伴われて更に奥の室には入つて行つた。その室には大理石の卓子が、鉄砲百合のように天井に開いた華電燈の放つ灯を、冷たくはじき返していた。町のベシヤ屋が書いたらしい、色調の馬鹿に悪い壁紙が、折角の室を下品なものにしてゐる。

貸切室らしかつた。

「どうしてだしぬけに電話なんかしたの。店には絶対に電話しないつて約束だつたんじゃないか」

「だつて玻玖さんは一べんだつて私の家には来て下さらなかつたわ。時々来るつて仰つたのは誰でしたか知ら……あ煙草をどうぞ……」

気づいたように卓子の煙草をすゝめ、ばつと、ライターを握つて呉れた。

「随分氣にしていたんですけど父の事でごたごたしてたでしよう。やつと父の葬式が終つてはつとしてみると、急に貴方が内地にお引揚げになつたんじゃないかと、氣が氣でなかつたんですの。それに急にね、是非ご相談したい問題が発生したもんですから、お電話したんですわ」

「問題の発生？」

「問題より、玻玖さんはこれからどうなさるおつもり？それを真先に聞かして頂戴」

先刻の女給が、銀盆の上にキュラソウとペペミントの罐に、小さなグラスを載せて運んできた。世情が世情だけに、私はこの豪華な洋酒を見ると、不思議な魔術を見る氣持だつた。紅貴は私に黄金色のキュラソウを、そして自分のグラスには濃緑色のペペミントを注いだ。

「如何？玻玖さんのお好きなキュラソウ。内の倉庫にまだ五六本眠つてゐるのよ。黙つて持つてきちゃつた……」

あゝと、私は彼女の倉庫に、関光植の経営する丸信百貨店の商品が山積されていることを思い出したが、それを眠つていたという紅貴の表現に、思わず微笑んでしまつた。

「ね、玻玖さん。教えて頂戴。玻玖さんは



いわば京城の二世だから、内地へお帰りになること無いと考へてゐるんですけれどね、どうなさるおつもり？」

「帰國の問題はまだはつきりしてないんだよ。どうするか……」

「映子が泣くよ……つて仰らないの」

「馬鹿、何を言うんだ！だが僕の帰國と、その問題の発生と何かの関わり合ひでもあるというの？」

「えゝ大有りですのよ。父は大変玻玖さんの事を氣にしていゐて、危篤に陥入ると母や兄に頻りに貴方のことを言つて、面倒を見て上げて呉れつて遺言した位ですわ。それでねえ、お母さんがいつそのユリーカを経営して貰つたらどうだろうかと言つて……兄もすつかり賛成してゐるんですの」

植氏が、刎頸の間柄であつたとはいえ、裏町に住む貧乏な町医者に過ぎなかつた玻玖作次郎の遺児に対し、尙寄せて呉れる真情に胸がぐつと熱くなるのを覺えた。

私の父の開業していたのは鐘路の裏町で、一帯はどぶの匂のする曲りくねつた汚らしい通りの細民街であつた。長屋が凸凹に押し合ひ、水のはけが悪く、夏は伝染病の巢窟となつた。父はこの貧民窟の貧乏人達を相手に、医は仁術なりーの金言を具現して過したのであつた。その父の業を陰に陽に激励し庇護し、援助し感謝して呉れたのが関光植氏なのである。

だが、私はこのサロン・ユリーカまで関光植氏の経営だとは全く初耳であり、意外でもあつた。この話は悪い話ではなかつた第一、この先、映子の家で化粧品商の手伝

い位で過すことは、私には重税に喘ぐような苦痛であらうと懸念していたからでもあった。それにこの節日本人として京城での就職は不可能でもあった。私は承諾をしようとし心ひそかに決意した。

「それが又ね、お眺え向きに今までいて貰った女支配人さんから、今朝になつて突然再婚することになつたからやめさして欲しいって電話なんですよ」

紅貴は円らかな顎を上にあげ咽喉を反らして、緑色の酒を満したグラスを赤い唇に傾けて、ぐつと呷つた。肉感的な太い咽喉だつた。少しばかりにじり寄つてきたかと思ふと、深い弾力をもつ身体が静かに私の方にもたれてきた。

卓子の角にのせていた、袖から滑り出た豊満な半裸の腕が、白い蛇のように私の腕にからみついていた。

三、善魔と悪魔

間もなく私はサロン・ユリーカを経営することになった。

喫茶店の名目であつたが経営の内容は、薬酒から焼酎——麦酒洋酒まで提供して、いわゆるカフェーと何等異なるところはなかつた。店には五人の女給がいて、春花まさきけんらんを競う如く、世代の動きを尻目に脂粉と泥酔とに明け暮しているのである。

紅貴はそんな女達を憚つてついぞ一べんだつて店へ私を訪れてきた事はなかつた。然し、しばしば私は店の用事にかこつけて閑家に呼びつけられ、裏二階の紅貴の室で不倫を繰り返すようになった。

私はもう、紅貴の肉体を振り払う力を完

全に喪失して、痴呆の如く彼女の愛慾に溺れ果てゐた。

ユリーカへ出掛けるのは何時も遅過ぎから、南山町の映子のもとへ帰るのは、大抵夜中の零時前後であつた。何かの都合で一時間二時間となる場合もあつたが、それが重なつてくると段々映子は機嫌を悪くするようになった。たいがい床には入らないで、刺繡か縫物をして待つていた。

その映子が、或る晩、深夜の一時頃帰つてみると、彌福園を眼深くかぶつて、死んだように微動もしないので寝ていた。

「只今、寝たのかい！」

枕元に坐つて、夜具の上から肩のあたりを軽く揺つてみた。すると柔かいその肉体が石の如く固く凍つて縮こまつてゐる。熱を帯びてゐるのでなく、何かこう、一種抵抗に身を固めてゐるような氣配を、私は感じとつた。その觀察は間違つてはいなかつた。私が寝巻に着換え、体温に蒸れた、熱い空氣に温まつてゐる夜具の中に、静かに滑りこもるとした時、果然、映子は夜具を跳ねるときちんと坐つて私を驚かした。

痺れる程、固く頬の肉をひきしめ、憤怒の眼差しで刺し貫くように見たが、その牙々と凍つた顔の中に、暗い處に小さく囁まれている唇が、更に冷氣を増して驚く可き美貌が、私に容易ならぬものを感じさせた泣いていたらしい。も早や涙は乾いていたが、それらの容貌が泣いた揚句の決意を示していた。烈しい呼吸に胸が大きく膨らんだり縮んだりする。

「変じやないか。どうしたの？」

不審しそくに私は尋ねた。映子はじつとうつむいて答へなかつた。何時もの桃色のタオル地の寝巻を着て、その豊満な膝の上

に両手を置いて、焦々しげにしきりに指先を揉み合せてゐる。私はその片方の掌をぐつと握つた。映子はその手を引くようにしたが、私は尙更力をこめて放さなかつた。熱い掌だつた。

「ね、言つてごらんよ」

「お願いですから紅貴の店をお止めんなつて頂きたいの」

唇が小さくわなわなと顫えた。だが内容が分ると私は反対に心が落着いてきた。紅貴との秘密が外部に漏れる懸念は絶対に無いといつた安心感と、現在の環境から考えて想像し勝なゆゆる通有的な嫉妬に違いない——との樂觀的な氣持が、図々しく私の氣を軽くした訳である。

「君がいけないと言ふならやめてもいいのだが、何かそんな理由があるの」

「えゝあります。紅貴は私から貴方を奪い取ろうとしてゐるのです」

「奪うんだつて！ば、馬鹿な……」

「否え」

と、強く叫んで、

「貴方は私が何も知らないとお考へになつていらつしやるようですけど、紅貴の室で密かに会つていらつしやる事実をちやんと知つてゐます。お店の用件なら電話でも足りりますし、電話で駄目でしたら堂々とお店へいらして、済ませるべきだと思ひますわ。紅貴は十五六の頃から貴方を好きになつて、昔から貴方を愛してゐたというじやありませんか」

私は一旦はふてぶてしく、父親達の親交関係、その関係で六年間も紅貴と同じ二階で暮した事などをならべ弁明しようかと考へたが、映子の哀々たる愛情の前にそんな横着な強調をする氣にはなれなかつた。

「私は貴方に、貴方を奪われた私がどうなるか考へて見て頂きたいんですよ。一分間だつて生きてゆけるかどうかを……」

映子は不意に低い悲しみに満ちた調子で言つた。きびしい眼の色は忽ちおとろえ、あれ程激しかつた氣勢は急に萎縮していつた。

「私は劣等な人間かも知れませんが、けれども貴方を好きなことでも愛することでも誰にも負けません。又その為にくそ宿命的な悲しみにも耐えてきました」

「僕だつて君のその愛情を忘れるようなことはない。僕を信じて呉れ」

深い悔にうたれて私はそう言つた映子は伏せていた頭をあげたが又静かに伏せた。その眼に涙がきらきら光つていた。

私はその翌朝、ユリーカから、電話で早速その事を紅貴に話して、店の事以外では会わない方が宜いと告げた。すると、

「嫌ッ嫌々ッ！」

と激しい口調が受話機に叩き返してきた。受話機をがちやんと置いた風であつた。もしも私と、私は電話機にかじりつくようにして叫んだが、鼓膜に伝わつてくるのはジ

ーという電流の音ばかりであつた。

ところが、それから二日程して、紅貴がひよつこりユリーカへやつて来た。豊かな肉体を黒いドルマンスリーブの服にくるんで、露草の靴を穿いていた。真珠の首飾りが美しい調和を見せてゐる。

「ごめんなさい。先だつてのお電話……」

「さア許せますかね。随分失礼だつたからね。驚いたサ」

「だつてお別れできないことちやんと知つていらつしやるのに、急にあんなこと仰るんですもの。何度も言通り映子は映子、

不感性の女が辿つた愛慾の半生

この病氣の名は言えない

大西三枝子

由美は京都の生れで、母は芸者だつたので、子供の時から色街で育てられ、普通世間の女より早熟だつた。

小学校六年生の頃だから十三の時であつた。母が留守をして彼女が芸妓達の菓子を買いにやらされた時である。

夕暮れの薄暗い露地のところまでくると、一對の男女が人目を忍ぶ急がしい接吻をかわしていた。女は、ガツクリと男の肩に仰向けた顔をもたせかけ、両眼を瞑つて男の接吻を受けていた。男は、板壁に身を支え、女をしつかり抱き締めて夢中で唇を吸つている。

彼女は、ハツとして立止り、拔足さし足、泥鰌猫のような恰好で、そつと二人の傍を抜けたが、そのとき、二人の抱き合つている頭上に、門燈がぼんやりとぼつていて、洋装の女の、白い下股がくつきり写し出されて

いた。

女の白い下股が、どうして見えていたのかと帰つてからぼんやり考えていると、彼女はだん／＼胸騒ぎがしてきて、全身が熱く燃えてくるのを覚えた。

色街では、男女の戯れは常々みせつけられるけれど、こういつた真剣な愛慾場面に出会したのは始めてだつた。

その年に初潮があつた。

自分も、いよいよ女になつたと思うと、驚かしさのうちに嬉しさもまざり合つて、なんだか悲しいような空しいような気がしたものである。

初めてみた真剣な男女の接吻の情景が、まさ／＼と思ひ出されてきた。

「あたしも、恋をしてみたい——」

思つていろいろうちに、十五の春ふとした事から、お菓子屋の貞之介と恋に落ちてしまつた。

よく買いに行く度びに、少しおまけをくれたり、時々家へも菓子を運んでくることがある。「ねえ、ふさちゃん、僕、はや／＼君の夫になりたいね」いつも、くりくりした可愛い眼を赤く上気させていつた。「まあ——夫?——」

彼女は、夢みるように、呟いた。

裏の物置の中であつた。貞之介は、ちよつと周囲を窺つてから、物馴れた様子で、素早く彼女の腰へ両手を巻きつけ

て引き寄せた。薄暗い露地でみたときと同じように、貞之介の唇が彼女の唇を齧ぎ、よろよろと、もつれながら壁際までよめいた。

男というものはじめて知つた彼女は、それから貞之介がくるたびに物置へ誘つた。

しかし、その事が主家に知れて、貞之介は間もなく追出されてしまつた。

初恋に心狂つた彼女は、幾日泣き明かしたことだろう。初めて肌を許した男と、そんなにも

私は私よ。元々たゞせば映子こそ私から貴方を盗みとつたようなもんよ。お別れするなんて私死んだつてできないから……映子にもそうお伝えになつて頂きたいわ」

映子は善魔であるが、紅貴は麗女であつた。彼女の吐きかける熱い吐息は妖術の如く私の決断力を鈍らせる。そのあえかなる眼の放射線は私の善心に浸透し忽ち癡癡させるのだ。あゝと、私は嘆息せざるを得なかつた。その私へ紅貴は、急に声を細めて言うのだつた。

映子がこちらの逢曳を知つた原因は、この店に働いている女給の崔明珠が密告したからである。崔明珠は、紅貴の家に下婢として働いている李氏の子供であるが、よく調べてみると、何と映子とは仏花女学校時代の同窓なのであつた。だから彼女母娘がきつと間隙したのに違いない……と断定するのであつた。

「私も注意しますけど、破戒さんも警戒して頂戴」

紅貴は私に念を押し、珍らしくその日は接吻もねだらないで、さつさと帰つて行つた。

第二章 南への憧れ

一、淫賣窟の女

敗戦の年も、どうやら過ぎて、翌年の二月になると、最後の日本人産も引揚げの篇に釜山に向け南下して行つた。これら人々は、家族に病人がいたり、又は種々の事情でこれまで京城をたつことができずにとり残されていた組で、どの人産も殆んど、う



あつけなく別れさせられ、彼女は怒りと悲しみに自暴自棄になつてしまつた。酔いしれて、知らぬ男の腕に身を投げ出す夜が続いた。

それは、家を飛び出して、大阪のある酒場に勤めていた頃だつた。

高木という会社員にすつかりのぼせ上り、彼の下宿へ押しつけていつて、夫婦にしてくれと酔つたからだを投げ出した。

高木は、まだ二十一二の、こんな美しい女が、どうして自分のような安サラリーマンの所へ押しかけてきたのか、不審に思つた。

しかし、処女の香りのまださめやらぬ、豊かな肉体に触れると、彼は、大きな宝が飛びこんできたように喜んだ。

彼女は高木に惚れたのではなかつた。どこか初恋の男に似た面影を感じたからである。それから、二人の気狂いじみた愛慾生活が始まつた。

彼女は、いつの間にか、高木に魅きつけられてゐる自分を見出し、益々激しく愛撫を求めるようになった。

しかし半年もすると、高木の態度がだん／＼冷めたくなつていつた。

「おまえのような、執拗い女は

知らない、いつたいどうすればいいのだ」

「どうつて?——」

「ちつとも調子に乗つてこないじゃないか」

彼女は、ハツとした。いままで、二三度そんなことをいわれたのを思い出したからである。

初恋に破れてから、何人の男に肌を許したろう?——しかもいちどだつて、貞之介のような激しい、身も魂も癡きつくすような欲びを与えてはくれなかつた。

しかし、高木に対しては、貞之介に対すると同じような深い愛情で、積極的に進んでゐるのに、どうして氣持が高潮しないのだらう?——

彼女は蒼白になつた。

「君のような女と一生を共にするなんて、俺はご免だよ」

憎々しげにいつて、高木は、その日から姿をくらましてしまつた。

彼女は絶望のどん底に突き落された。再びふしだらな生活に肉体を虐めはじめた。

そして、最後に得たのが、中華料理店の主人古川二郎であつた。

彼女は既に二十八才になつてゐた。最初から古川は好ましい男に思われ、ひたむきに彼女は愛情を捧げた。

遂に彼女の不感症を古川が知るようになった。彼女は、悲痛な声で訴えた。

「見捨てないで下さい、見捨てないで下さい。あたしは、こんな女ですけれど、あなたを思ふ心は誰にも負けないつもりでございます。こういう牀になつたのはあたしの罪なのです。でもあたしはどうすればいいのです。もう生きてゆく甲斐がございませぬ。あたしは、自分のふしだらを、あなたの愛によつて打ちきろうと思つておりました」

実際、彼女は真剣だつた。

「しかし、おまえを妻として愛していけない、どうしても、俺の所へきたいのなら、家で働いてみるか?俺は独身だ。身の廻りの世話さえしてくれればいい。しかし妻には御免だよ、俺は女に不自由してなんかいないんだから、でも、時々君を可愛がつてやろう。それでどうだ」

なんと厚かましい男だらう。と誰しも思う古川の言葉だつたが、いまの彼女にとっては薬にもする一念で、応じたのであつた。

現在、由美は心斎橋通りの中華料理店の女将におさまつてゐる。

色気ざかりの熟れきつた豊満な肉体を客席の間にあらわしてこぼれるような愛嬌をふりまいてゐるので、常連の口軽男が言い寄つていても

「もう、お婆さんですのよ。」

とむつちりした手で唇を掩つてしまふ。

花の蕾を開かせたいと焦つた小娘時代も、爛れた恋の味もまんざら知らないわけでもない由美だつたが、この肉体の病氣の名だけは、誰にも公開することの出来ない秘密であつた。

らぶれ果てゝ乞食のように漂落し、どこの荒野をさまよつてきた人達だらうかと思わせる程だつた。

引揚は敗戦早々の九月の初めに京城釜山間の鉄道も運行秩序も回復されるのを待つて開始されたのであつた。引揚日本人達は釜山での乗船の際は身廻品と一人当り千円宛の金しか持てなかつたから、不動産や家財道具を朝鮮人達に二東三文の安値で売り払い、京城を出発するまでには、その殆んどを飲み食いして費してから南下するものが多かつた。中にはこれを目当に、ぜんざい屋や寿司屋を開店する慾深い日本人もいたが、然し釜山港に於ける進駐軍の身体検査や物品検査は厳格を極めた。女達は女の検査官にモンペまで脱がせられズロースのままで探られるというきびしさであつた。ズロースの中や、足袋底、リュツクの紐の中から、隠されてゐた百円紙幣の束を没収せられる状態が屢々展開された話を聞いて、これらの慾深組も、最後まで踏みとゞまらうと決意した人々も、もう希望を喪つて、一切を喰ひ潰した挙句帰国を決意するといつた風であつた。

二月を過ぎると、もう京城の町には日本人の姿は滅多に見掛けられなかつた。幼ない頃から京城の裏町で育つた私ではあつたが、それは確かに堪え難い淋しさであつた。真実に変らないのはこのなつかしい空だけなんだ。地球はぐるりと廻転してゐる。東側に眺めた月が南側の空にある……そう言つた感じであつた。

韓国内の情勢は民主政府の樹立に、平和と治安の回復に慌しかつた。日韓併合以来これを不満として米國や重慶に亡命し、獨立運動を続けていた民族主義者の政客が、



(終)

米亡命派の巨頭——李承晩を初め続々と、韓国再建のため馳せ戻ってきた。

然し諸勢力を背景とする、国内派閥の流血は相續き、物情は騒然と尽きなかつた。

更に三十八度線を経て、ソ連と結ぶ社会主義建設に直進している北鮮政府の樹立によつて、同族相闘う民族の悲劇が初まつた。

こんなあらゆる要素のために、心のどこかに大きな空白があるような気がしてならない私は、この空白を紅貴との痴情によりて埋め尽してしまおうとでもする如く、場所を選び方法をかえて、私は紅貴との逢曳を重ねてゆくのであつた。

私は紅貴と一緒だと、彼女の持つ要素に冒され、全く智識を喪つた人間みたいになり果て、しまふのである。これは全く不思議なことであつた。可憐な映子の映像は一刻と雖も脳裡から消ゆることがないのに、紅貴に傾倒してゆく心を押えきれないのである。愛情は映子の上に、慾情は紅貴と共にあるという風であつた。

その夜もそうであつた。

若草町の裏通りにある、瀟洒な小さい洋館で、私は落ち合つて夜の更けるまで過した。この建物は丸信百貨店の常務用の社宅なのであるが、今は空屋になつていて、永年閑家に下婢として働いていた金氏老夫婦が、留守番として仮住居しているのである。彼らは、紅貴を、お嬢様と呼んでいた。

「電車で飯の？」

私はネクタイを結びながら、薄いグレイの地のツーピースの釦をかけている紅貴に声をかけた。紅貴は雪のような素足にまだ赤い爪革のスリッパを穿いていた。低気圧のために、室内はいかにも春雨の夜らしく

ぽつぽつと、濕気で蒸れていた。私はもう飯の仕度をしていたのである。

「まだ降つてるか知ら？」

釦をかけ終ると紅貴は窓際に歩き寄つて窓帷を繰ると、裏庭に面した硝子窓を押して開いて見た。裏庭にはまだ残雪があるのに低く雲の垂れこめた夜空から雨が降つていた。その裏庭は低い黒煉瓦塀を越して小さい露路に接している。紅貴が窓を開けた時その露路に何か齧めく黒いものがあつた。

「誰？」

鋭く叫んだが、不意の激しい足音に、ぎよつとしたような身振りと一緒に紅貴は私を振り返つた。駆け去る人の足音は私の耳にもはつきり聞えた。

「映子だわ！」

薄気味悪くなつたのか、紅貴の顔はすつと血を退いて青かつた。

「まさか、崔明珠だよ、きつと」

私は何気なくそう断言したが、心は穩かならぬ不安にかき乱されて行つた。椅子に腰を掛けながら、ふくら腰を斜めにして、靴下を穿きながら

「いくら騒いでも高が知れてるわ」

不貞腐れたように朝鮮語で言つた。果してそれが映子だつたのが、崔明珠だつたのか私には判断がつかなかつた。

私は、黄金町の電車停場で鐵路通に飯を紅貴と別れると、程近いユリカへ返つて行つたが、崔明珠は店の贅席で、酔いしれた青年達と賑かに、打鈴の唄を歌つていた。それでは矢張り映子だつたのかも知れぬと

映子は電燈の下で頻りに私の靴下を編んでいた。

「あら、お飯りなさい」

と、振り仰いだ眼付が何時もと異なる処が無かつた。私は猜疑の眼で探るように寝巻を出して呉れたり、お茶を注いで呉れたりするその挙措を見守つたが、平生通りしとやかで落着いて何らの疑義を狭む余地がなかつた。もしかすると素英であつたかも知れぬ。電光のようにその閃くものがあつたが、私の心から、その夜の足音の主に対する穿さく心は、間もなく朝霧のように消えうせて行つた。

朝鮮の人々の夢は、南北統一された主權の回復であつた、だが占領政策として設定された三十八度線は、今では冷酷な国境となり果て、統一の夢は儼なく破れ去つてしまつていた。今や北鮮には民主人民共和国の真赤な旗がへんぼんと翻えつてゐる。

その旗の下には共産主義仕込みの朝鮮人部隊が日を遂うて編成増強されていつた。南北統合を夢見る韓国側の軍隊の瓦解を企む北鮮政府は、ゲリラ部隊を南鮮各地に差向け、南鮮側はこの蠢動に対する討伐で軍日なき情勢にあつた。

私はそんな情勢には案外無関心であつたところが妙なことに、その頃から急に映子が元氣を喪つてきた。

幼ない頃母親を喪つた私は、女の生理などには何ら細い智識を持つていなかった。私はきつと映子は懐胎したのに違いないと考へた。丁度そんな頃の或る黄昏であつた私が、女給達の室の改修を思い立つて、北米倉町の土建会社に行つて用務を果して飯り道のことである。

曲りくねつた裏通りを、鮮銀前広場の方へ歩いてゐた私は、意外なものを見てしまつたのだ。と、いうのは外でもない。

妻の映子が、平常街の人々に淫売窟と

噂されている「春燕閣」という酒場から、ひよつこり出てきて、後から追うように現われた可成りの年輩らしい紳士と肩をならべて、私の二十間位前方を黙々と寄り添いながら歩いて行くのであつた。

私は後方から二人を見守りながら歩いてゐたが、頭腦はひと月前の黄昏、矢張り斯うした光景を目撃したことではばいであつた。

その時も、もう街には灯が点いていた。殖産銀行近くの交差点を人群に交つて横ぎつた時である。

「あ」と、私は声低く叫んで身体を凝固させてしまつた。そして薄暗い街燈の灯影を浴びながら立ち止まっていたが、私の眼の前を横ぎつて向う側の停留場の方に歩いてゆく、黒い洋装の女の後ろ姿に射つけられていた。女には男の連が あつた。二人は赤い電燈の下で安全地帯まで行くと靜かに佇んで、遠くから揺れてくる電車を待つてゐる様子である。

私は女の裾から一時程スリッパのように覗いているスカイブルウのベティコートとブリーツにも見覚えがあつた。映子の好みの服装：確かに映子だそう思うと、私は俄かに勇敢になつた。信号を見ると赤だ。然し今向う側の安全地帯まで行かなければ、彼女達は何処かに行つてしまふ。或は他人の空似で人違いなのかも知れない。然し、あの後姿がワンピースの下から覗くスカイブルウの裾が男は一体何者なのだろうか？ 私は燈色の信号を待つて靴音を鳴らして駆けで行つた。然し私がその安全地帯に着かない前に電車はごとりと動き出して、二間位の距離まで近寄つた時、鈴鳴りをした車掌台が、嘲けるように眼の前を過ぎて行

つた。

私は遠ざかつてゆく電車をじつと見送つた。紺色の夕焼の幽かに残つた空を背景にした、遠い鐘路通の十字路で夢のように美しく入り乱れて交錯している電車を眺めていると、流石に黄昏らしい感傷も手伝つて、私は自分のことは忘れて、只映子に裏ざられてしまったという何ともだとえ難い寂寥と憤ろしさで一ぱいになり、畜生奴と呟やくのであつた。

然し段々冷静になつて考えると、薄暗い街頭のことではあるし、それが確かに映子であつたかどうか、何も確認できる証拠はなかつた。殊に紅貴との不倫を考えると映子ながみが責め立てる訳にはゆかなかつた。そんな訳でその事柄はそれなりに預られてしまつていたのだ。だが今また斯うして、その時と寸分違わないような光景を眼のあたりに見せている女が、はつきり映子だと分つて見ると、こいつはあの時の女も映子だつたに違いないと断定づけられ、私の胸は嫉妬のために燃え上つてゆくのであつた。彼女が近頃俄かに憂鬱になつたのは懐胎どころか、こんなことからくる煩悶のためなのだ。と、私は初めて気付いて判断するのであつた。

二、映子の秘密

二人は私には気づかないで鮮銀前広場に出ると、直ぐ軽く会釈して別れた。男は折から停車した南大門行の電車に乗つた。だが映子は灯影を浴びたまゝ、何か深く考え込む風でしょんぼりと遠ざかつて行く電車を眺めていた。

静かに歩き寄つた私は、突然その背後から謎かな口調で呼びかけたが、その声は研ぎ澄まされて鋭どかつた。だが、私の声の冷たさや鋭どきなんかよりも、この場合私の出現程彼女を驚ろかしたものはなかつた。弾丸に撃たれたように立ち慄んで青ざめてしまつた映子は、唇を何かこり壊れた花びらが言葉にはならなかつた。何か言おうとしたが言葉にはならなかつた。

「変な家なんかに入入りしているんだね」
私は詰るように言つた。

「落みません」

消え入るように声を震わせながら、思わず双方の眼がしらに涙をにじませてしまふのだつた。

「あんな露窟で一体何をしていたんだ？」
「貴方、お願い！ そんな大きな声をなさないで！ 私販つて何もかも申し上げますわ」

映子はもう膝のあたりが砕けたみたい両手で顔を掩うと、打頼れてそこにしやがんでしまつた。

私には映子の素行に対して、とや角干渉する資格は毛頭無かつた。だが、今日のうちに映子の貞操に疑を抱いたり、彼女の愛情に不安を感じたりする事態に直面しようなどとは、それこそ夢露想像しなかつたところなのである。

畜生、こんな奴だつたのか！ と思うと、今更破れた紅絹の裾裏でも覗かせられたような浅間しさを感ずるのだが、それでいて矢張り紅絹は紅絹としての赤さで眼にしみつく思ひであつた。

初夏も程近い黄昏のうすら冷たさが身体をくるんできて、広場の向うに白々と浮いた建物は、もう灯に明るい窓を幾層にも並べて鑑賞だつた。打ちのめされたような気持でその方へ私が歩き初めると、後から映子も黙つてついてきた。

私はその夜初めて映子をユリイカの裏門から支配人室に連れて行つた。母親の素英の居る家の中では、到底話し合える事柄ではないと思つたからである。客室の方は電番の裏でるジャズが奏しまし

陽気な談笑がその間に入り乱れていた。廊下を曲る時、獨立の蔭から客席を縫う女給達の、慌だしそりな姿が見えたが、映子は振り向くともしなかつた。

欄からキエラソウの壺をとり出し、グラスで一ぱいぐつとやけに嘖ると映子にも注いでやつたが、彼女は手をつけようとしなかつた。蒼白な緊張に顔をひきしめて、じつとうつむいている。

「誰も来やしないよ。話してごらん」
「あの人ね！」
映子はちよつと私を見て、口籠つた。

「うむ、何かねあの男？」



「何もかも申し上げます。あの人が仏花女子校時代朝鮮共産党の移動秘密指令部にいた人らしいのです。最初私はそんなこと知らなかつたのですが、私の煙弾事件の際一緒に連坐して入獄した韓銀珍に欺されて面会し知り合いになりました。韓銀珍は、春燕閣の女給をしているんですけど、それは表面のカモフラージュで実際は北朝鮮側の手先になつて人民々々々義の宣伝拡張に躍りつていゝ人だそうですが、私には是非韓銀珍と一緒になつて共産主義のために闘つて呉れつてきかないんです。今夜だつて、もう

「べん是非会つてほしいつて銀珍がきかないもんですから」

映子の言葉はこれはまた私にとつて驚く可き事柄であつた。男のような猛烈な闘志をもつた韓銀珍：私は煉然と寒気を覚えて身の毛がよだつた。無関心でおられるどころか、南北の冷たい戦の火の粉は私の足下に降りかゝつていたのであつた。

「そして：お前どうなんだ？」

「どうなんだつてまだ私の気持お分りになつて頂けませんの。情ないわ」

「車修万には何と言つたんだ？」

「私には主義の異つてゐる良人がいます。私は今ではその良人のものです：そう言いましたわ。でも執こいつたらないんですの

もうべん考えてみろつて：韓銀珍の話だと、あの春燕閣はあの人達の連絡所なんですつて：恐いわ」

「民主主義の根本精神は人權の尊重に尽きるんだ。あんなお前、或る一部の上層で勝手気儘に抑圧したり羅束したりする一方的強制主義なんて、今時脈に呉れつちまわなぐちやならないさ」

鬱積してゐた私の感情は、映子の話を聞いてゐるうちに、俄かにほぐれ明るくなつた。然し、この事件はこれだけでは終らなかつた。それから二三日して、映子が彼ら一味から強引に拉し去られるという、最悪の事態を惹き起してしまつたのである。

私は、けたまふし素英の電話で、飛んで飯つた訳だが、彼女の話によると、韓銀珍が訪れてきて、一寸話があるからといつて戸外に連れ出したらしく、二言三言低声で話したかと思うと、もう映子は二人の男に囲まれていた。

薄暗がりのこととてしかと見届けた訳で

はないが、いやがる映子の背中を拳で突きその儘真暗な坂下の方へ拉し去つたというのである。素英は泣き喚きながら、

「映子が又あの韓銀珍なんかと交際をするようにの、みんな紅貴のせいなんですよ紅貴が映子から玻玖さんを奪つたからやけになつちまつたんだわ。貴方も悪いが紅貴が一番悪者よ」

「心配しないで下さい。映子は私が連れて飯ります」

私は靴の底に隠してゐたブローニングをづぼんのポケットに突つ込むと外に出た。焦々とした気持で街を急ぎながら、映子のことが気になつた。

韓銀珍の方では爆弾まで投げる位の女だから：と、ついうつかり気をゆるして、事情を打ち明け協力を依頼したの、案外に映子の転向意志は強固であつた。然し、或る程度の秘密を漏してしまつた以上断わられたからといつて、はいそうですかととは引つ込めない筈であつた。とすれば映子にとつてとるべき道は二つしかない。彼ら一味に加担して北朝鮮の手先となるか、私刑の銃弾にたおれるか：だ。

私は韓銀珍前から薄暗い横通へ曲つた。赤い煉瓦建の、春燕閣の前には薄暗く軒燈が点つてゐた。騒々しく電音が喚いでいたが粗末な客席はがらんとして、客はまだ一人もきてゐなかつた。天井からぶら下つた丸い吊燈から照し出される灯影をにじませた土壁の横で、女給達が三人卓子によりかゝつて何か雑誌を見ていた。が私を認めると雑誌を置いて一人の女給が立上つてきた。

赤みがゝつた上衣に、腰には白い裳を巻いてゐる。妓生風のつくりである。

「今晩は。いらつしやい」

「うん」私は室内をぐるりとひと渡り見廻して見た。女はちよつと探ぐるような眼をした。

「何よ、悪い顔して：あんた警察？」

「先刻韓銀珍と一緒に来た女、まだいるだろう？」

「あゝ、あの人ね。あの人なら奥にいるけど一体あなたのなアに：あの人？」

「要なんだよ。急用ができたんで迎いに来たんだ。ちよつと案内して呉れ」

この女には警戒の色がない。何も知らして無いらしい。とすれば何も私が懸念した程のことも無さそうであつた。然し、私はその女給に案内された扉の前に立つと、軽くノックし、間髪を容れずばツと扉を引いた。内部から鍵をかけられてはいけない：と、念頭に閃めくものを感じたからだ。

室には薄黄色の灯が点つていて、しみのついた土壁に尊氣味悪くにじみ込んでいた地下室みたいにじめじめと穢臭い空氣が濃んでむつと鼻を叩く。

灯影を冷たくはじく粗末な卓子を取り巻いて、純白な上衣に薄鼠色の筒裳をはいた韓銀珍と、人相の悪い三人の男達が何かこそそそ詰合つており、窓際に全身に怒を漲らした映子が、一人かけ放れて立つてゐた。

韓銀珍は色は白いが、逞ましい男みtainな両腕を卓子の上に置き、その指先で、葉酒らしい苺色の液体の揺れるコップを弄んでゐた。あゝと、映子が叫ぶのと一緒に、韓銀珍たちは一様に、愕然とこの不意の闖入者に対して険しい眼を振り向けた。

「貴方はどなたですか！」

憤然として韓銀珍が叫んだ。探る色と警戒とをこめた眼が、春宵の電光みたいに薄

青い光を放つて私を射つけた。男達は黙つて立上ると、落着いた横柄な態度で私を取り囲むような態勢をとり、その内の一人は裏のようにな身構え、何時でも飛びかゝるぞ：といった氣勢を見せた。

「僕は玻玖だ。妻を返して貰おうと思つて来た」

私は走り寄つてとりすがつて来た映子を背後に引寄せ庇いながら、口調は穏かに言つた。

「あら！では貴方が：そお、お名前は昔から伺つていたけど初めて拝見したのね。私韓銀珍：ご存知のはずね。見知つておいて頂戴。お掛けになつたら：どう！」

険を含んだその口調には、油断を許さぬ氣配があつた。

「母の素英が大変心配してゐるんでね。急ぐ？はゝゝゝ勝手なことを言わないでよ」

豹変し、白い歯を見せて笑つたが、肉のかたそうな頬がびくびくけいれんした。恐るべき度胸を持つてゐる女：と私はみてとつた。

「何つ！」

「ふん、何つて何サ。そんな言葉書なら兎も角、ご時世の変つたこの頃の世代では、そんな台詞はやらないのよ。映子は帰せませんよ！」

「何故帰せない。それを言い給え」

「私への友情を裏切つたからだわ。こちらが昔の友情を信じて何もかもぶちまけて協力を頼んでるのに、馬耳東風、空吹く風じやないの。でもね、一旦こちらの正体を知られた以上、そう簡単にバイバイする訳にゆかないのよ。だけど一緒に刑務所まで落

ち込んできた仲なんですもの。別にとつて食おうというんじゃないから安心して帰つて頂戴。こちらは只ね、昔の友情を回復して貰い度いだけだわ。だから映子にその氣持が蘇るまで、ここで静かに考えて貰おうと思つてゐるの」

「昔は昔、今は今だ。イズムが異つてきてゐるんだ。仕方ないじゃないか」

「映子のイズムを墮落させ」たのは貴方だわ」

「墮落：冗談だろう」

私は軽く嗤笑して、

「おい映子。問答無益だ。失敬しよう」

振り返つて映子を眼で促した。すると、



さつと韓銀珍の顔に凄まじい殺氣が迸り、その顔の皮膚が石みたいになつて硬ばつた。何だつて？問答無益：ふん、何サ、黙つておれば先刻から生意氣な口ばかりきいて：一体ここをどこだと考へてるの、韓国の京城だということを銘記すべきよ。さ、分つたら映子を置いてさつさと飯つて頂戴。序いでに玄海灘まで渡つちやうと宜いわよ」

「畜生！ 鷹の驕丸奴」

私は思わずそう呻つた。かつゝとなつた韓銀珍はコップを掴んではつしと私の顔をめがけて投げつけた。が手許が狂つていたと見え、コップは向うの壁に當つて碎けて

飛んだ。それが合図であつた。男達が一斉に敏捷な猛獸みたいに飛びかゝつてきた。だが、私の持つ柔道という力学の前には敵ではなかつた。二人を振り飛ばした私は、残つた奴を跳腰で、裂帛の氣合と共に激しく床板に叩きつけた。打ちどころが悪かつたかその男は完全に伸びて死んだみたいになつた。一人の男は先刻のように墓みたいになつたが、飛びかゝつて来なかつた。

反動的に韓銀珍も立ち上つたが、その氣色ばんだ青い顔には仄かな微笑が凍りついてゐた。

「騒ぐと撃つよ！」

彼女の真白い手にコルト拳銃が、氣味悪く黒光りしてゐた。こんな場面に直面するのは警察在職時代に二度、これでもう三度目であつた。

「成る程……」

と、私は落ちついてせゝら笑つた。と、

突然、

「待つて！」

映子が、ぐいと私を押退け逆に私を背後に庇つて、韓銀珍の銃口の前に昂然と立つた。

「韓銀珍！ 撃つというのね。宜いわ、撃つて頂戴：私を撃つて頂戴！」

銃先の前で映子はそう叫んだ。その悲壮な決意に凍つた顔は、あの、爆弾を投げようとした時の顔と異なるところがなかつた。

「映子、心配せんでも宜い。撃つ時は一緒だッ！」

私は映子の腋の下の後から挿し込んだ手を、恰度乳房の突起している横のあたりへぬつと突き出した。私の手先には精巧なブローニング拳銃が握られてゐた。

「どいつも動くな、動くと撃放すぞ！」

私は続けて叫んだ。明かに狼狽の色が韓銀珍の顔をよぎつた。それを認めると、私は映子を再び左後方にかき抱くようにし、じりじりとじり退りに、入口から廊下へ、その儘の姿で後ずさつて行つた。廊下から客室の方へもう一步という時、ぱつと電燈が消えた。突然暗黒になつた瞬間、韓銀珍の放つたコルトが奥の闇の中で、かつゝと真赤な火を噴き、だゞーん！と、周囲の壁に射して建物を揺つた。その時、私達は無事裏通へ駆け出してゐた。街には灯が明るく人が群れてゐた。

三、二つの惨事

私達が春燕閣で争つてゐる頃、寒素英は鐘路通の十字街で電車を降りた。

今彼女の胸を去来するものは、自分が愛人の春田理事官に弊腹の如く捨て去られた時、絶望の果、死を決意した時のことだつた。その死を鈍らせたのは懐胎してゐた映子であつた。その映子が又自分の踏んだような悲運の道をたどろうとしてゐるのである。思えばそれも皆紅貴のためなのである。映子から光明と幸福とを奪い去つたのは紅貴なのだ。韓銀珍に欺されかゝつたのも皆そうした悲嘆の果の失望から、自暴自棄になつてゐたからである。畜生！と、素英は憎悪と憤怒の奥歯を噛んだ。支那絹緋の上衣を着て、腰に巻いた紋パレスの裳から白い足袋をちらちら覗かして、なまめいた姿だが、つかれたように青い顔をし、人波の中をわき目もふらず歩いて行く。彼女の眼ざす関家は、丸信百貨店の隣であつた。まだ店員達の働いてゐる店舗の前を通り

過ぎると、裏の本邸に通ずる石畳の道があった。玄関に立つとじき下婢らしい女が出て来た。

「あのウ紅貴さんいらつしやるでしよつかいらつしやいましたら先刻程電話でお願ひして置きました寒素英が来たとお伝え願ひませんか知らし」

と、丁寧な態度で言つた。

「あゝ寒素英さんでしたらお嬢様は先刻からお待ちになつておられます。どうぞ、お上り下さいまし」

素英は靴をぬぐと下婢に案内されて廊下を幾つか曲つて裏二階の階段を登つて行つた。

紅貴の室の入口は、東大門方面の街の火の海に見える廊下に面している。軽く叩いて、

「お嬢様、寒素英さんがお見えになりました」

下婢が声をかけた。直き扉が開いてそのかけから、純白の鮮装をした、目を奪うばかりの清麗な紅貴が姿を見せた。

「お待ちしていましたわ。どうぞ」

色は白に初まり白に終る。白は常に色の王座をしめる妖精であるというのが、紅貴のもつ白衣族の衣裳哲学であつた。が、今夜の紅貴は正に白の妖精の如くであつた。

彼女の最も好きな純白の薄羅の上衣に、真珠色の羽二重の裳をまとつていた。右の胸高く結んで長く垂らした真紅の紐が印象的で、新鮮な感覚を生み出している。

素英は軽く会釈してその紅貴の後から扉の隣に姿を消した。が、そう長くはいなかつた。十四五分もすると、もう扉を開いて静かに出てきた。ちよつと、赤く焦げた東大門の方の夜空を見たが、その儘扉を蹴つ

て玄関の方へ歩いて行つた。

「ちよつとも存じませんで」

と、小走りに出てきた人のよさそうな下婢に軽く礼をすると、落着いた足どりで賑やかな通の方へ出て行つた。

ところが素英が帰つて半時間位たつた頃突然裏二階の方から絹を突ん裂くような下婢の悲鳴が聞えてきて、下階の室にいた人々を驚かせた。温突にいた沈氏が、

「春日の声のようだよ。どうしたんだらう誰か行つてごらん」

顔を見合せている下婢達を促した。直ぐ象のように遅しい許氏が座を立つて廊下へ出て行つた。だが、暫くすると許氏はどたどた廊下を踏み鳴らしながら走つて帰つてきた。血の氣をすつかり喪つて真青だつた

「嬢様が……お嬢様が……」

と、吃るばかりだつたが、紅貴にきつと何か異変があつたのだらうと、家人達はどやどやと裏の二階の方に走つた。

階段のところまで来ると、階段の上のところで悲鳴をあげた下婢の春日がべたりと坐つたまゝまだがたがた震えていた。紅貴の室を頻りに指さしながら何か言おうとするのだが、がくがくと唇がわななくばかりで言葉にならなかつた。

一同が怯る怯る扉を開いて見ると、その扉近くの真赤な絨緞の上に、空から落ちてきて死んでいる白鳥みたいな、紅貴が仰向けにたおれていて。心臓のあたりを双物か何かで突かれたものと見え、乳房の上あたりに噴き出した鮮血が上衣に地図のようににじみ拡がつていて、その胸に折り曲げられていて手の指先が軽く握りしめられていた。がつくりと右に傾いた顔が、眠れるのかと思ふ様の安らかさであつたが、もう蠟

のように青ざめていて、既に呼吸はとぎれていた。

「哀号・紅貴！」

悲痛な声で大きく呼ぶと、紅貴の身体にわつ……と、母親の沈氏が泣き崩れた。

だが、この頃、更にもう一つの悲劇が、この関家から程近い鐘路通りの、雑踏している環視の中で発生していた。

後から後からと続く電車の一台が、どうしたのか、突然ぐーッと異様な軋りをあげて急停車したのである。電車はその前段で、横合から舞い込むように、ふらふらと軌道に飛び込んできた妓生らしい女を、激しい勢で跳ね飛ばしたのであつた。

跳ねられた女は大きく眼をむいて鮎のよるに口を開いて何か叫ぶと、ぽんと飛び上るようにした後で、軌道の路面に転倒し電車の下に轢き込まれてしまつた。女の腰にまとつていた薄い空色の美しい裳の布が、車輪の下から覗けているむき出しの真白いふくら脛にからみついて、怪奇な美しさで人々の眼を射た。何かの花を刺繍した白い靴が舗道の近くに片方飛んでいた。人々は電車の下に轢き込まれている女の身体がまだ蠢めいているのを見て、わーッと叫んだ

「まだ生きてるじやないか」

「何だ何だ」

「電車に女が轢かれたんだ」

「車輪の下から足が出ている。女だ女だ」

「妓生だ」

群衆はその女が半時間程も、傍の街路樹の下で喪心してしまつて、真青な顔で震え戦っていたのには氣がつかなくなつたが、その女はまぎれもなく寒素英であつた。電車の下から身体を取り出すまで一時間半もかゝつた。彼女は腰部をぐちゃぐちゃに轢き

碎かれて死んでいた。

四、南下する群

一殖民地から大韓国への蠟脱は世紀的な大変革であつた。そのようにこの事は、京城の片隅に生きている一人に過ぎぬ私や映子の人生にとつても劃期的な影響を与えていた。然し紅貴の悲惨な横死、素英の自殺……程私と映子に衝撃を与えたものはなかつた。

私達は一カ月ばかりを殆んど放心状態で暮した。私はユリカカの経営も、もう断る外無いと考へていた。が、一切を水に流してユリカカを飽くまで経営させようとする恩讐を越えての沈氏の深い愛情に感激し、寒化粧品店を閉じることにした私達はユリカカの一室に住み込むことにした。

これは私が、韓銀珍一派の復讐を惧れたことにも一因があつた。ユリカカに移つてみると、私は今こそ本当の希望に満ちた生活の朝を迎えることができたのだ……との感慨で胸が一ぱいだつた。素英に死なれてみると映子は、これでやつと日本人になれた氣持がする……と言つたりしたが矢張り淋しそうであつたから、私は賑やかなユリカカ的生活の中に映子を連れてくることを一つも逡巡しなかつたのだつた。だが、酒場の生活は映子にはこれまで全く未知の世界であつただけに、暫くはその生活に落着を喪つてしまつた風であつた。然し段々とこんな生活に彼女は嫌氣がさしてくるらしかつた「ほんとに日本に行ける目つて……あるのか知らし」

映子は何度も繰り返して私に言つた。だが日本の生活の基礎を持たない私には差当

つて、このユリーカが唯一の生活安定の城なのであつた。

さて、その頃から、三十八度線を突破侵入するゲリラ部隊による、政治不安の誘発は段々激化してゆく傾向にあつた。南鮮各地には血闘といふ殺戮事件が惹起した。春燕閣にいた韓銀珍が慶尙南道の或る部落でゲリラ討伐の韓国警察隊に射殺されたことを私達は新聞で知つて驚いた。その驚きの裏に、何か知ら私達は安堵を覚えて顔を見合せた。

「よかつたわ」

映子はほつとした風で言つた。

そうかと思ふと、順天で韓国軍隊の反乱事件が発生して、人々の不安と恐怖を喚び立てた。それでもまだユリーカの生活にひかれて、映子のように「日本に還る」燃え上るような意思が湧いてこなかつた。

然し、私が好むと好まざるとにかかわらず、その翌年になると南北の統一は強く叫ばれ、五月には大韓国の総選挙が施行された。

北鮮側は南北統一の連合政府の樹立を企図し、八月に三十八度線を撤去した総選挙の舉行を要求するに至つた。その要求書は開城北方の国境で北鮮代表から国連委員のゲラード氏に手渡された。

だがこんな事態の下で、ユリーカの客席はこれらの事とは全く無関心に見える客でいつも満員つゞきであつた。映子はいつも暗紅色の半円の胴体に洋銀のキーレバーを冷たく光らしている、金銀計算機の前を放れることができなかった位だ。

映子は不思議な靈感みたいな予感を持つていた。

「こんな嵐ではきつと戦争よ。ね、対島の

見える釜山まで早く行きましようよ。汽船だつてきてるんですもの。貴方はきつと連れて還るつてお約束なすつたじゃありませんか。ねえ、あのお約束どうなすつたの？」

夜具の中で映子は子供のようにそう言つてせがむのであつたが、この映子の言葉は全く適中した。

昭和二十五年六月二十五日、冷たい戦いの一線を画していた三十八度線は、遂に全面的に火を噴いた。北鮮は韓国に対し宣戦を布告し、十一個所に互つて三十八度線を突破し、全面総攻撃を開始するに至つたのである。

だが、まだ京城の市民は動揺しなかつた。政府は軍隊に対し戦備準備の布告を出したが、市民は静かな生活を送つていて、街の国立劇場では、まだ中国劇の「雷雨」が上演されていた。

しかし形勢は次第に不利を伝えてきた。そうなる前は京城に踏みとどまる訳にはゆかなくなつた。それは北鮮の人々に捕えられたが最後「前職愚賢者」として烙印を押される惧れがあるからであつた。

國家に電話をかけてその事を話すと驚いたことには、國家でも南鮮への避難準備でこつた返しているというのであつた。豪商の國家にも今大きな没落が訪れようとしているのであつた。

六月二十八日。悠々京城脱出の日が来たそれは私にとつてユリーカ放棄の日でもあつた。女達には前以つて閉業の事を予告し、避難の身仕度を命じてあつた。彼女達はそれぞれ自分の家庭に帰つてから、南下するかどうかを決定するのらしく、私達と同行するものは一人もいなかった。

それでも帰宅の身仕度で、がやがやと二階は朝から騒々しかつた。

「玻玖さん。マスター、マスター」

二階から叫ぶ声が壁をつきぬけてきた。扉を開いて廊下に出ると階段のまん中ごろに崔明珠が手欄に掴まへて立つていた。

「何かね」

見上げると花のように開いた裳の中に、奥のズーロスから突き出た真白い太股が眼を塞ぐような眼近かさにあつた。

「爆音よ。敵機だわ！」

「大丈夫だよ。電車がまだ通つてゐる。早く準備し給え」

女達は何よりも戦車と、飛行機と爆弾を恐がつた。街では北鮮側が何百台という戦車を先頭に空入してくるらしいという臆測が行われていた。

映子は色もの、輕装に、衣類をつめたりユツクを背負い、更紗模様のネツカチーフできりゝつと髪を包んでいた。そわそわと修学旅行に出かける女学生みたいに、心をはづませてゐる風であつた。

遠雷の如く戦政府方面から砲音が聞えてきた。京城から南に通ずる街路に出ると、道は避難民の群で一ぱいであつた。既に橋は破壊されていたので、漢江の堤防には渡船を待つ避難民がこつた返していた。漢江の南岸に渡り水原まで南下すれば汽車に乗れる筈であつた。私と映子は水原から発車する避難列車に乗るために、駅前の広場で夜を明した。

その広場にはもはや完全な市民らしい姿をしてゐる者は一人もいなかった。彼らは故國の停車場の広場に今ぼろ屑のように捨て去られてゐるのであつた。笑う者も一人もない。誰も暇わない。誰もが不安な絶

望的な眼をし、眼の分らない昂奮に駆り立てられ、じつと嚙み付けたように絶望的に光る眼を閉じるのであつた。

幾時間たつてやつと乗車の時間がきた。広場は俄かに騒めき立ち慌しい足音に掻き乱されていつた。砂塵が舞い上り、避難民達はその中をのろのろと陰気臭そうに、乗車場まで騒めいて行つた。

歩廊には無盡の貨物列車が横たわつてゐた。それを見ると今までのろのろと露いていた避難民達は俄かに殺氣立つた暴徒の如く、わつと喊声をあげて猛烈な勢いで貨車に殺到し始めたのだ。そこにはもう會つての隣人もなければ、友情も、礼儀もない厭世の囁み合いみたいな怒声と罵声、叫喚悲鳴、靴の音、肉体と肉体とがぶつつかる音、何か壊れる音、裂ける音あらゆる音のみの世界が現出された。二三輦の有蓋貨車の屋根の上に這い上る者を制止するために駅員達は声を枯らして叫んだ。

「危い、屋根はいかん。屋根は危い！」

「何言つてやがる。危ないも蓋もあるか」と、屋根から叩き返す声がしてゐる。「ここなら展望車みたいなもんさ」機関車の先端に腰を降した私は得意そうに言つたが、ここもやがては満員となり、迂闊に手を放したら跳ね落されそうであつた。汽車が動き出すと、猛烈な颱風の中を突き進むように、激しく風が熱膜を襲し、扉は開けそうになかつた。それでも皆は駅前の広場にいた時とは打つて變つたように大声で話を始め、笑い合うものもあつた。列車は加速度的に真夏も近い緑の大地を切り拓きながら地平線へ向つて蒸進していつた。

(終)

原稿募集

1. 短篇小説 (枚数 十枚—二十枚)
取材は自由、ありふれたものでなく、上品なエロチシズムとユーモアを盛つた時局な作品
 2. 暴露小説 (枚数 十五枚—三十枚)
あらゆる方面の世に知られざる事実を盛り込んだ興味深い奇想天外な作品
 3. 實話小説 (枚数 二十枚—四十枚)
現代人情、犯罪、スボーツ、映画、演劇、時代小説、女をめぐり、裏面、捕物、探偵、戦時、海外、探訪、紹介、探検、発見談
 4. 中間讀物 (枚数 十枚—二十枚)
小説、人情、物語、これらは面白、珍談、奇聞、笑見談、伝説、怪談、戦時、探訪、紹介、探検、発見談
 5. コント (枚数 二枚—五枚)
ありきたりな小説ではなく、機智と洒落に富んだほのかに楽しく明るい希冀的なもの
 6. 漫画、挿繪、寫眞、口繪、その他
 7. 中篇小説 (枚数 五十枚—一百枚)
出来ればシリーズとして分載可能の形態を具え一回分五十枚を越えざることを
 8. 元談奇譚新聞用コント (枚数 自由)
世相時局を諷刺した、数派名文句を期待
- 締切は毎月十五日、次号に掲載します。
著者は、原稿内、寄稿者名を記載。
掲載第四種便にて御送り下さい。
採用決定しました分は、折返しし御返事の上發表後相当稿料差上げます。原稿は御返戻申し上げません。

雑誌界の寵姫奇譚クラブの豪華旬爛たる次号豫告!!

グラビヤ・ヌード・アラベスク

森の精の裸女 水の精の裸女

國際女奴 船 早乙女 見

艶笑博物館 エロニヤ 人生同人

お馴染の悦ちゃんがあつた大脱線

爆弾娘 湯の町騒動 加茂川清子

靴ミガキの未亡人に注ぎ込んだ熱情

つかんだ女 兵庫一平

若い娘を友だちに持った大學教授

刺のある毒花 青山耀子

どぶろくの宿 美戸部進

西瓜 八瀬田音兒

真夜中なやまし奇譚 久松研二

情熱は炎の如くに 小島伸二

一人の男を愛する 或る喜劇 笹田豊

不良少女マリア 愛山久

飛切尻をさもす女 天宮將吉

奇抜裸女像の自壊 莖阿久津

短篇猫を冠つた源氏の君 赤壁元

チンギス・ハーンの死 中澤公平

淫魔に弄れる媚態 矢代文世

指の秘 武山武彦

ヌード寫眞分譲

豊満妖美な肉体的美人をよりすぐつて鮮やかなカメラ眼によつて、一糸纏わぬ全裸婦をキャッチした垂涎方丈の藝術的作品。印刷によらず印刷紙に焼付けたキットお気に召すヌード寫眞を特に本誌愛読者に限り興費にて分譲す。
見本 一組 送料共 二百円
手札型 三枚一組 送料共 二百円
キヤビ 五枚一組 送料共 五百円
振替又は小爲替にて御送金下されば、早速目録同封御送付申上げます。
代理部

直接購讀者募集

半年分 六冊(送料共) 五〇〇円
右御支拂込の愛読者の方々に特別景品として裸婦寫眞三枚一組無代進呈。
◎振替又は小爲替にて御送金下さい
◎本号を七・八月合併号といたしましたので次号(七月中旬発売)は九月号といたします。従つて実際上は休刊は致しません故、御承知おき下さい。

奇譚クラブ

第五卷第七号 定價九拾円
七・八月合併号 毎月一回発行
昭和二十六年六月三十日印刷
昭和二十六年七月一日発行

發行所

大阪府堺区内菅原通四丁三〇
電話 堺一七四六番
振替口座大阪第三四九五六番
東京營業所 電話 東京東区浅草駒形一ノ六番
電話 浅草(84)〇一五五番